

博士論文

海を渡った物語

—ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性—

2016年3月

宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程

国際学研究科

124603Y

三成 清香

海を渡った物語  
—ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性—

目 次

序章 ラフカディオ・ハーンと女性、そして日本	1
1. なぜ再話なのか、なぜ「女性もの」なのか	1
1-1. ラフカディオ・ハーンと再話	1
1-2. 「女性もの」に見る傾向	5
2. ジャポニスム文学の受容と影響	7
2-1. ジャポニスムの興隆—「淫らな淑女」としての日本女性	9
2-2. ジャポニスムの文学	12
2-3. ハーンのエキゾチシズム	14
2-4. 想定された読者層と西洋での反響	20
3. 喪失の幼青年期—母ローザへの追慕と女性たち—	26
3-1. 母の喪失	26
3-2. アメリカ時代のハーンと女性たち	30
4. 永遠の女性、小泉セツ	34
4-1. サムライの娘セツと小泉家	34
4-2. 母なるセツ	38
4-3. 献身的な語り部—再話活動の深化—	41
5. 本論文の目的と構成	46
第I部 ジャポニスム文学への挑戦	50
はじめに	50
第一章 国のための自害、<男子>—異国趣味の投影—	52
第一節 ジャポニスムの中の物語	52
第二節 烈女、畠山男子	53
第三節 <男子>に込められた「異質性」—「男子—ひとつの追憶—」— (1895)	56
3-1. 得体の知れないサムライの娘<男子>	56

3-2. なぜ自殺したか—失われた新女性、畠山勇子—	57
第四節 エキゾチックなく男子>像にみるハーンの姿	63
<b>第二章 鉄道での心中—&lt;およし&gt;と&lt;太郎&gt;の初恋—</b>	<b>68</b>
第一節 新聞記事からの着想—「赤い婚礼」	68
第二節 <およし>に込めた理想像	73
2-1. 「永遠の女性」としての<およし>	73
2-2. <およし>の二面性	77
第三節 <おたま>の二面性	82
3-1. 明治に生きる女<おたま>	82
3-2. 封建社会に従う<おたま>	85
第四節 未消化に終わった女性像	86
<b>第三章 ジャポニスム文学への挑戦—遊女&lt;君子&gt;の物語—</b>	<b>88</b>
第一節 「きみ子」(1896)とジャポニスム	88
第二節 ピエール・ロティとハーン	90
2-1. ロティへの憧れと批判	90
2-2. ジャポニスム文学の本流『お菊さん』(1887)	94
第三節 廓の華、遊女<君子>—人形としての<お菊さん>との対比から—	98
3-1. 人形<お菊さん>とサムライの娘<君子>	98
3-2. 完璧な Geisha たる<君子>	102
第四節 現地妻<お菊さん>と身を引く遊女<君子>	107
第五節 ハーンの示した遊女<君子>	113
おわりに	114
<b>第II部 新しい女性像の発信</b>	<b>116</b>
はじめに	116
<b>第四章 娘と孝—「蠅のはなし」(1902)、「雉子のはなし」(1902)—</b>	<b>119</b>
第一節 松江時代と学生たち、そしてセツ	119
1-1. 日本との出会い	119
1-2. セツの手足と「孝」	120
1-3. 孝と男女の愛—男子学生に見た日本の思想—	121

第二節 孝への執念—「蠅のはなし」—	125
2-1. 飛び回る「蠅」というモチーフ	126
2-2. しとやかさの加筆	128
2-3. <伯母>の不在	130
2-4. <家内の者とも>の不在	133
第三節 孝の実践—「雉子のはなし」(1902)—	136
3-1. 孝への勇氣	136
3-2. 自分勝手なく夫>と、セツの初婚	138
第四節 日本女性と描かれた「孝」	141
<b>第五章 貞淑な妻、慈悲深い母としての女性</b>	
—「葬られたる秘密」(1904)「紫雲たな引密夫の玉章」—	143
第一節 反面教師としての<お園>、その変容—失われた江戸の色彩—	143
第二節 「玉章」へのこだわりが示すもの	148
2-1. 貞淑なくお園>に見るセツの影	148
2-2. <お園>に付加された母性愛	153
第三節 妻として、母としての女性	155
<b>第六章 静かなる抹殺と転生—「お貞のはなし」(1904)、「怨魂借体」—</b>	158
第一節 <長尾>と手紙—「裏切り」の加筆—	158
第二節 再会のための準備	163
2-1. 失われた四つの命	163
2-2. ターニングポイントとしての「伊香保」	166
第三節 <お貞>と<阿貞>、その変容	168
3-1. <長尾>の欲望を満たす存在—従順なく阿貞>—	168
3-2. <長尾>の人生を操る存在—魔力的<お貞>—	170
<b>第七章 男の裏切りへの復讐—「和解」(1900)の裏面にあるもの—</b>	172
第一節 男の柔和化の意義	172
1-1. <先妻>の放棄と思慕	173
1-2. <夫>の懺悔と<先妻>の対応	179
第二節 <先妻>の幽霊、その意味—「和解した」という見方—	182
第三節 真なる「和解」の可能性—読者へ与えた二重の解釈—	189

3-1. 「愛卿伝」と「李生窺牆傳」—男の裏切りの有無—	189
3-2. ハーンと女性—ローサ、マティ、そしてセツ—	193
3-3. 東アジア共通の設定と西洋の読者への意識	194
<b>第八章 武家社会にうずまく嫉妬</b>	198
<b>第一節 女性と嫉妬</b>	198
1-1. 「三従」と「七去」にしばられた女性たち	198
1-2. 女性と出産—「腹は借り物」—	199
<b>第二節 愛情ゆえの「約束」、そして嫉妬へ—「破られた約束」(1901)</b>	201
<b>第三節 約束は誰が破ったか—&lt;後妻&gt;と&lt;夫&gt;の行為</b>	203
<b>第四節 生きながらえる&lt;夫&gt;—&lt;先妻&gt;の愛—</b>	206
<b>第五節 上流武家社会における嫉妬—「因果話」(1899)—</b>	209
5-1. 一夫多妻制の武士階級—「奥」の座を狙う側室たち—	210
5-2. 武士社会における女性の出世	212
<b>第六節 &lt;奥方&gt;の怨念—二つの嫉妬—</b>	213
6-1. <お雪>への憧れと恨み—桜に込められた肉体的魅力—	214
6-2. <後妻>への羨みと無念—母親の象徴としての胸—	217
おわりに	221
<b>終章 西洋へ示された日本女性</b>	224
<b>参考文献</b>	228
1. 書籍	
2. 論文及び学術誌	
3. 新聞・雑誌、インターネット資料	
<b>初出一覧</b>	236
<b>付録</b>	
1. 再話作品英語原文	<1>
2. ラフカディオ・ハーン年譜	<22>

謝辞

## 凡例

- ・書名・作品名・新聞は『 』、雑誌・論文は「 」で表した。
- ・年号は原則として西暦を用いた。
- ・引用文は原則としてそのまま引用したが、適宜旧漢字を新漢字に改めた。
- ・頻繁に引用される著書については、最初の引用にのみ註釈をつけ、以降は頁数のみを本文に記載した。

## 序章 ラフカディオ・ハーンと女性、そして日本

### 1. なぜ再話なのか、なぜ「女性もの」なのか

#### 1-1. ラフカディオ・ハーンと再話

ラフカディオ・ハーンは多くの側面を持つ人物である。アメリカ時代、彼は翻訳者であり新聞記者であった。来日後は英語教師として尋常中学校や東京帝国大学で教鞭をとった。彼の日本における著作といえば『知られぬ日本の面影』*Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894) から始まり、『怪談』*Kwaidan* (1904)、『日本一つの解明』*Japan: An Attempt at Interpretation* (1904) などがよく知られたところである。これらには、教育者として、エッセイストとして、あるいは文学者として日本を見つめ続けたハーンの顔を垣間見ることができる。

本研究では、彼の様々な側面の中から再話活動に注目する。日本の古い物語を題材にして描きなおすという、いわゆる再話活動は他の外国人がなし得なかった業績であり、日本語能力が決して高くはなかったハーンが「聞くこと」、すなわち妻の語りにより物語を構築していった独特な手法も含め現在でも注目されている。再話作品の中には、自然の中で勤勉につつましやかに生きる日本人、子どもを慈しむ親と、親に孝を尽くす子どもなど、19世紀以降の日本の近代化の過程において既に忘れ去られた日本の姿が見て取れる。そしてこれらのうち戦前の国語教育において、「稲村の火」が『文部省尋常科小学校国語読本 巻十』に掲載され、それ以前にも「生神」、「達磨の話」、「梅津忠兵衛の話」、「おしどり」、「耳なし芳一」などが国語の教科書に掲載されるなど、ハーンの再話は日本の子どもたちに極身近なものとして学ばれ、親しまれた<sup>1</sup>。日本学者でもなく、日本語もままならないハーンが描き出した物語が、日本国民に必須なものとして長年取り上げられ、現在でも「耳なし芳一」、「雪女」などを始め、原話を凌ぐ形で受容され続けているのである<sup>2</sup>。

「日本の物語」を再話の形で表現し続けたハーンの日本観について、それがいかに独特なものであったか、これまでに多くの指摘がなされてきている。平川祐弘氏はハーンを エグゾット *exote* であるとして以下のように述べている。

<sup>1</sup> 遠田勝『〈転生〉する物語—小泉八雲「怪談」の世界』（新曜社、2011）80-82頁。

<sup>2</sup> 牧野陽子『ラフカディオ・ハーン—異文化体験の果てに』（中央公論社、1992）171頁。

異国趣味と訳される英語の exoticism エグゾティシズムやフランス語の exotisme エグゾティスムとは、西洋などの主流文化の眼で異国を眺める際に生まれる態度である。自分が境界を越えて向こう側の世界に入り込んでしまうことはしない。ところがその一線をあえて越えたために「ハーンは土人となった」Hearn went native と生前も東京・横浜・神戸などの西洋人租界では陰口をきかれ、西洋優越主義者の軽侮を浴びた。(中略)ところがそのような境界線をあえて越えたがゆえに、フランスの一部の文学史家によってハーンは「異国に入り込んだ人」「異国の価値観で物事を見たり感じたりすることのできる人」すなわち exote として近年逆に再評価されるにいたったのである。このような例外的な少数者は、西洋中心文化の霸権的な一元的な見方が支配的になるうとしているこのグローバル・ソサイアティーにおいて、逆にいよいよ貴重な存在となるのではあるまいか<sup>3</sup>。

ハーンは 1890 年の来日後、一度も帰国することなく 14 年間で日本を過ごした。そして最後は日本人小泉八雲としてその生涯を終えたのである。そして、彼の著作には西洋優越主義的な視点から日本を見下したような描写は一切なく、奇異なるもの、不思議なものに関しても共感しようとする態度が読み取れる。平川祐弘氏は、ハーンのこうした日本へのまなざしに加え、あえて小泉セツと法的に結婚したことを含む—この結婚は当時の多くの西洋人には白眼視されていた—ハーンのこうした姿勢が、現在ハーンが評価される基本的要素であることを指摘している。「異国の価値観で物事を見たり感じたりできる」ハーンは、日本人よりも日本を愛し、深く理解し、近代化に取り残されてしまった日本の風景や日本人の気質を拾い集め西洋に発信し続けたと見なされているのである。

築島謙三は、『小泉八雲と松江時代』(2004)の中で、「氏がいかに皮相的でない日本文化の理解を目指したかということは認めないわけにはいかない<sup>4</sup>」と述べているし、池野誠氏は「日本理解と日本解釈という観点から見て、同情と愛のスタンスをとったハーンが批判と科学のスタンスをとったチェンバレンよりもはるかに優れていたことは確かであろう<sup>5</sup>」としている。こうしたハーン解釈は多くの研究者が指摘するところである<sup>6</sup>。

<sup>3</sup> 平川祐弘、牧野陽子『講座 小泉八雲〈1〉ハーンの人と周辺』(新曜社、2009) 3-4 頁。

<sup>4</sup> 築島謙三『ラフカディオ・ハーンの世界観増補版』(勁草書房、1984) 13 頁。

<sup>5</sup> 池野誠『小泉八雲と松江時代』(沖積舎、2004) 282 頁。

<sup>6</sup> この点については、「文化を見るのに、その文化を背負いまたつくる人間の側に注目することを怠らない

しかし、その一方で、ハーンの描いた「日本」は日本を極東のエキゾチックな国として捉えようとする 19 世紀ヨーロッパの風潮に合わせるように、特異性、異質さが強調されているという指摘もある。太田雄三は『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像』において、ハーンには「人種主義的傾向」があるとし、次のように述べている。

人種主義的なハーンの態度と関連していると思われるのは、彼がほとんどつねに日本人と我々（西洋人）はいかに違うかということの問題にしたことである。（中略）しかし書簡と違って、日本関係の著書では日本について批判的に書くことが少なかったから、ハーンの日本紹介者としての仕事において目立ったのは、日本人の長所に関連させての彼我の違いの強調であった。（中略）日本文化のユニークさについての思い込みを強めるような言葉は、確かにハーンの著作のいたる所に見つかるのである。（中略）

このようにみえてくると、日本紹介者としてのハーンの正しい理解と評価のためには、彼の日本体験や彼の日本関係の著作を、彼の欠点をも直視する態度で検討することが必要だと思われる<sup>7</sup>。

この指摘にもあるように、ハーンは一概に、「異国の価値観で物事を見たり感じたりすることのできる」「異国に入り込んだ人」とは見なせない側面もある。19 世紀の西洋人読者の期待に添うように、非常に奇怪な、理解不能な、エキゾチックな日本の姿は、それが西洋至上主義的な視点から見下す形で書かれているわけではないにせよ、確かに存在しているのである。それは、見聞記や旅行記などにとどまらず、日本の物語の再話作品にも共通した傾向である。そして、ハーンの再話の中に存在する日本を明治期前後の日本の姿として捉えようとする<sup>8</sup>と、そこには郷愁ノスタルジーといったものよりもむしろ、不自然さや驚きといったものが感じられることが少なくない。長谷川公司は、ハーンの見た日本が「或ひとつの幻想的な性格をもったもの」であり、そこにはハーンが日本に関して十分に理解していなかったことと、限りない希望を抱いていたことが原因として存在していると述べている<sup>8</sup>。そし

---

というのは、やはりかれ流の文化観なのである。」築島謙三、前掲（註 4）、138 頁。「ハーンは日本人だったら見落とすであろうさまざまな日本人の美質を拾い出してくれた作家である。ハーンの日本および日本人へのアプローチの仕方は、エキゾチシズム 異国趣味の域を出ないという批判もある。しかし日本文化に対し、共感的にあるときは救済的に関わることでできたハーンのような柔らかな眼差しを持った人格は、私たちにとって必要だと思う。」池田雅之『ラフカディオ・ハーンの世界』（角川学芸出版、2009）8 頁。など、多くの指摘がある。

<sup>7</sup> 太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像』（岩波書店、1994）13-18 頁。

<sup>8</sup> 長谷川公司「ラフカディオ・ハーンの世界趣味」『へるん 第 6 号』（八雲会、1968）1 頁。

て、ハーンが日本を「楽園として見、その文学の上に幻想せねばならなかった<sup>9</sup>」理由として、彼が日本を正確に理解しようとしたものの、それができず「神秘的な国」と呼ぶことにとどまってしまったこと<sup>10</sup>を挙げている。さらに、そしてそうして書かれた彼の著作には、「私たち日本人に与える或る不明瞭な読後感」が存在していることを以下のように指摘している。

彼が真に愛していたものはやはり、他国である日本よりも西欧であった。愛するが故の逃避、愛するが故の激しい西欧非難、これらが日本に関する彼の諸作品の本質である。このことに意を払えば私たちが彼の作品中にしばしば感ずるあの不明瞭な誇張された日本、冷静さを失ったあの感激の依って来たる根拠も理解し得るであろう<sup>11</sup>。

(下線は筆者)

ここで指摘されているように、また、遠田勝氏が「ハーンの再話の優れた文学性を認めながらも、その結末には、なにか腑に落ちない違和感のようなものを感じていた<sup>12</sup>」とするように、ハーンのエキゾチシズムによって描かれた作品には、先の日本に対する不十分な理解や、日本に対する希望、そして西洋諸国読者への思いなどが相まって、過度にステレオタイプ化された日本、現実の日本とは相容れない日本が存在している。

<sup>9</sup> 長谷川公司、前掲（註8）、3頁。

<sup>10</sup> 「だが、この国を『神秘的な国』と呼ぶことは多分にひとつの諦め、つまりその人の理解の限界を告白することに過ぎない。しかし、私たち日本人は否応なく、この詠嘆と驚きの言葉を誠意ある多くの西欧人から聞かされてきた。そして、それには常に、不可解な、且つ少なからぬ失望と意味のない馬鹿げた、あの劣等感めいた気持ちを秘めて、哀れな微笑をもって応えてきたのである。だが、果たしてこの国のどこに神秘と形容するにふさわしいものが存在するのであろう。私たちには事実、何も思いつくことが出来ない。事実、それらは私たちの現実世界に於いては何一つとして存在しないのである。故にそれは、単に感覚の相違がもたらす西欧人にしてひとつの違和感に過ぎない。だが、私たち自身が彼らのそうした言葉を信じることは決してないだろう。が、もしもあるとしたら、それは後で述べるように、自らその未来を捨てるという誠に危険なものだ。感覚の問題は大きく横たわっている。この国を十分に、且つ正確に理解するためには、先ず、この相違を乗り越えねばならない。ラフカディオ・ハーンはそうなさざるを得ない理由をもってにせよ、そのために努力した数少ない西欧人の一人として認めることができよう。」長谷川公司、同上、2頁。

<sup>11</sup> 長谷川公司、同上、1頁。

<sup>12</sup> 遠田勝氏は次のようにハーン作品に存在する違和感を指摘する。「以前、ある女子大学のゼミの授業で、ハーンの「おしどり」を取り上げたことがある。『古今著聞集』に載る原話と比較しながら、ハーンの再話が短編小説としていかに優れているかを説明した後、ふと不安になって、学生たちに率直にいて原話と再話のどちらが好きかと尋ねてみた。十人ほどいた学生たちは、気まずそうに微笑みながら全員がそろって原話の方に手を挙げた。わたしはかなり落胆もしたけれど、反面、やはりなど妙に納得する気持ちもあった。というのも私自身、ハーンの再話の優れた文学性を認めながらも、その結末には、なにか腑に落ちない違和感のようなものを感じていたからである。」遠田勝、前掲（註1）176頁。

## 1-2. 「女性もの」に見る傾向

ハーンの残した再話作品は、親に殺された子どもが生まれ変わって親の前へ姿を現すもの、怠け者を叱咤する神々、鬼の人質となってしまう老婆など、登場人物からストーリー展開まで様々である。そこには、彼が幼い頃から抱いていた東洋世界への憧れ、幽霊を始めとする死後の世界や未知なる存在などへの強い関心などを読み取ることができる。こうした再話作品の中から、本研究では女性が物語の中核をなす、いわゆる「女性もの」を手がかりとして考えてみたい。

【表1】ラフカディオ・ハーンの再話作品<sup>13</sup>

1	小豆磨ぎ橋	19	衝立の乙女	37	蠅のはなし	55	安芸之助の夢
2	水飴を買う女	20	屍に乗る人	38	雉子のはなし	56	力ばか
3	切り倒された桜	21	辨天の同情	39	忠五郎のはなし	57	断片
4	鳥取の布団の話	22	鮫人の感謝	40	耳なし芳一	58	振袖
5	子供を6人殺した親	23	約束	41	をしどり	59	香
6	絵描きと貧しい女性	24	破られた約束	42	お貞のはなし	60	占いの話
7	怠け者と美保関の神	25	閻魔の廳にて	43	姥櫻	61	蠶
8	腕を食べる女	26	果心居士	44	術数	62	悪因縁
9	生き返った女	27	梅津忠兵衛	45	鏡と鐘	63	仏足石
10	浦島太郎	28	僧興義	46	食人鬼	64	吠
11	化け蜘蛛	29	幽霊瀧の伝説	47	貉	65	小さな詩
12	猫を書いた子ども	30	茶碗の中	48	ろくろ首	66	日本の諺
13	団子を失くした老婆	31	常識	49	葬られたる秘密	67	暗示
14	ちんちんこばかま	32	生霊	50	雪女	68	因果話
15	和解	33	死霊	51	青柳のはなし	69	天狗の話
16	普賢菩薩の物語	34	おかめのはなし	52	十六日櫻	70	焼津にて
17	赤い婚礼	35	あみだ寺の比丘尼	53	勇子	71	お春
18	伊藤則資の話	36	鏡の少女	54	宿世の恋	72	きみ子

それは、ハーンが自らを「女性崇拜者<sup>14</sup>」であるとし、アメリカ時代から女性についての文章を書き続けた<sup>15</sup>こと、そして来日後も「女性」が一つの大きな関心であり続けた、言うなれば、彼の中でそれが一貫したテーマであり続けたと言えるからである。ハーンの再話作品（全72作品）の作品のうち36、すなわち半数が「女性もの」であることもまた、彼が

<sup>13</sup> 小泉八雲、田部隆次他訳『小泉八雲全集（第1-17巻）』（第一書房、1926）を参考に筆者作成。尚、下線は女性が物語で非常に重要な役割を担う物語である。

<sup>14</sup> 坂東浩司『詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝』（英潮社、1998）80頁。

<sup>15</sup> 彼がアメリカ時代に書いた記事の中から、女性がタイトルに出ているものを挙げてみよう。「あの修道女」、「女性の好奇心」、「女の眼」、「浅黒い美人」、「妻と愛人」、「薄絹を脱ぎし美女」（いずれも『インクワイアラー』紙）、「シンシナティの二人の淑女」（『コマーシャル』）、「未熟な娘たち」、「婦人投票権」、「自立する妻」、「女性について」、「女性虐待の防止」、「魔女」、「洗濯女」、「女性の影響」、「クレオールの中」、「女と馬」、「鳥と少女」、「女性は喫煙するだろうか」（いずれも『アイテム』紙）、「インドの女流詩人たち」、「女刺客」（いずれも『タイムズ・デモクラット』）等枚挙にいとまがない。その他、売春、貞節などがタイトルになっているものもある。

女性への関心を少なからず抱いていたことが窺える。【表1】参照）。

ハーンによって描かれた女性たちには、いくつかの傾向がある。まず、前期に書かれた『東の国から』、『心』などに収録されている作品には、典型的エキゾチック・ジャパンの傾向が強い。例えば、「勇子一ひとつの追憶」の主人公<勇子>は、資産家の娘であったのがサムライの娘と変更され、彼女が自殺する場面もサムライのハラキリを連想させるものとなっている<sup>16</sup>。前期に書かれた作品の、こうした傾向には、日本に心酔しきっていた松江時代と、その面影を追慕していた頃に書かれたものであること、そして、明確な出典のない比較的創作性の高い物語であったという題材の問題も影響していると考えられる。

晩年には、『新撰百物語』や『新著聞集』などを原話とした再話を行うようになる。現在、富山大学のヘルン文庫には、ハーンの書齋にあった2300冊余りの書籍が所蔵され、そのうち364冊が和漢書である。当然、それらをハーンが直接読むことはできなかったため、再話活動に妻セツがいかに寄与したかが浮き彫りになってくる。長谷川洋二氏が

ハーンが没してセツが読むことをやめた時には、四百数十冊に上っていたと推定される。そのほとんど全部が、説話・読本・浮世草子の類であり、セツが主に古本屋を渉猟して買い求め、そのうちから語る話を選び出した本である。それらの本の中には、著しく不規則だが、丸印・点・傍線、さらには読みや意味を示す書き込みがあって、セツの労を偲ぶことができる<sup>17</sup>。

と述べているように、再話は「セツとの共同作業的性格」を強めていくことになる。もちろん愛弟子であった雨森信成、大谷正信、三成重敬などからもサポートを得るには得ていたが、セツの貢献は比にならない程度であった。セツの献身が、ハーンを近世の物語へと没頭させ得たのである。こうして、前期の作品に見られた日本のエキゾチックさの誇張は影を潜め、封建社会に従順に従い生きた日本女性たちが新たに姿を現すようになる。例え

<sup>16</sup> これについては第一章で詳しく述べるが、太田雄三氏はこの作品を次のように酷評している。「フェミニズム的な考えを持った女性であったことなどは、勇子理解のために重要である。（中略）自由民権運動などを見聞きして育った世代の一人としての勇子の政治好きな一面も、ハーンの視野からは全く欠落しているけれども、それも勇子理解のために重要だ。実は、勇子を明治という時代に影響されながらも、同時に個性的でもある一人の人間として浮かび上がらせる事実をほとんど全部無視したハーンは、彼のいう『大きな事実』の解釈においても決して勇子を正しく理解しているとは言えないのである。（中略）日本人と西洋人の本質的な違いを強調しながら、西洋人には決して本当に分かるはずがないと自らも考えている一日本女性の内面について、独断的に長々と書いているところは全くハーン的だ。」太田雄三、前掲（註7）160-163頁。

<sup>17</sup> 長谷川洋二『八雲の妻—小泉セツの生涯』（今井書店、2014）217頁。

ば、「蠅のはなし」の〈おたま〉や、「雉子のはなし」の〈妻〉は、孝道に命を懸ける女性たちであり、「破られた約束」や「和解」の〈先妻〉たちもまた、封建社会に従うがゆえに嫉妬に苦しむ。

そして、初期に書かれたものと晩年に書かれたものに共通するのは、前述の違和感や不自然さといったものが、とりわけ「女性もの」に関して、強く感じられるということである。書き換えの過程でハーンの示したい日本女性像とストーリー展開との整合性が失われたり、不自然なまでに自己を犠牲にし、封建社会に従おうとする日本女性たちの言動が、物語の意図を不明瞭なものとしてしまっている。これらの問題について考えるとき、再話作品にとどまらず、原話にまで踏み込み比較すると、後者の執筆意図とストーリー展開が極めて単純であるのに対し、前者はストーリー全体をまとう美しい日本の描写を認めつつも、当時の日本の姿とは一定の距離を保った、ハーンの内面的世界が映し出されていることに気が付くのである。

## 2. ジャポニスム文学の受容と影響

これについて当時の日本の文学作品に目を向ければ、ロマン主義文学が興った時期である。森鷗外『舞姫』(1890)、樋口一葉『たけくらべ』(1895)、『にごりえ』(1895)などが広く愛読されていたという文学的時代背景を踏まえ、改めて同時期に書かれたハーンの再話に目を向けると、殊更それらが、明治期の日本社会とは全く異なった日本の姿であることが分かってくる。明治期の日本人が、『舞姫』に哀れなドイツ人女性〈エリス〉を見、一葉によって描かれた「女性の悲しみ」や「女性の中にある打算や欲望や、日常性にがんじがらめにされた卑俗な部分」を見ていた<sup>18</sup>とき、西洋の読者は、ハーンの著作にサムライをイメージするエキゾチックな日本女性、あるいは封建社会に忠実に生きる日本女性を見ていたことになる。

ハーンは、来日後、松江において思い描いていた「あるべき日本」を発見し、それに心酔した。しかし、熊本時代、近代化に邁進する日本に絶望し、その後、神戸、東京時代を経て、彼の日本観は確実に深化した。それは、遺作『日本一ひとつの解明一』も示しているところである。しかしながら、殊、女性に関しては最後まで、ハーンが思い描く理想と

<sup>18</sup> 塚本章子「樋口一葉における母と娘：『にごりえ』、『お力』と『お初』の間に横たわる葛藤」『甲南大学紀要 文学編 162』(甲南大学文学部、2012) 1頁。

いう枠に一貫して閉じ込め続けてしまっていると言えるのである。

日本に生きる一作家としてのハーンが、女性の社会的地位がめまぐるしく変化する西洋社会へ向け、変わる事のない女性像を含む「女性もの」を以て何を伝えようとしたのか、そして、典型的な女性像に終始してしまったハーンの姿の裏には何があるのかを考える必要があるだろう。

ハーンの再話作品に生きる女性たちの傾向として、太田雄三氏は、以下のように述べている。

原話と、ハーンによる再話を比較してみて、気が付くのは、ハーンには、(一) 再話を欧米の読者の世界とはまるで違うめずらしい世界の出来事についての話にするため、なるべく原話の持つ異国的なものを保ち、時には原話にはない要素によってさらにそれを強めて提示する傾向と、(二) 話が欧米の読者に受け入れられるために、必要な場合には欧米の平均的読者の価値観に近づけるように原話を変える傾向、という二つの傾向が見られることだ<sup>19</sup>。

すなわち、ハーンの再話は、過度にエキゾチックさが付加されているか、現実の日本社会の規範とは相容れない西洋的な価値観に合わせられているというのである。前者に関しては、物語の女性の身分がサムライに変更されていること（「勇子—ひとつの追憶」(1895)、「赤い婚礼」(1895)、「きみ子」(1896)等)、後者に関しては、結婚が「イエ」同士の結びつきであると考えられていた封建社会において、男女間の恋愛感情が全面に出されていること（「お貞の話」(1904)等）が物語から容易に読み取れるところである。後期から晩年に書かれたいくつかの作品（「蠅のはなし」(1902)、「雉子のはなし」(1902)、「因果話」(1899)等）には、封建社会に従う様々な女性の生き方や葛藤が描かれるようになるが、これも、西洋とは完全に異なった社会制度、社会道徳に生きる人々をエキゾチックに描こうとする、前者の傾向に分類できるかもしれない。

明治23年に来日したハーンが見たものはサムライの生きる日本ではなく、既に近代化の基盤を整え、日清戦争(1894)にも勝利した日本の姿であった。にもかかわらず、明治期の日本社会とは全く異なった日本の姿—封建社会に生きる日本女性の姿—を発信し続けた背景にはどのような要因が考えられるだろうか。

---

<sup>19</sup> 太田雄三、前掲（註7）172頁。

この問題について、平井呈一はハーンを「時代の子」とし、「八雲の作品を読み、八雲の感性に同感し、八雲の思想を理解しようとおもえば、八雲が十九世紀人であること、また過渡期の人であること、これは当然忘れてはならないことであります<sup>20</sup>」としている。すなわち、ハーンが19世紀という激動の過渡期を生きた人物であることを考慮しながら作品を読み解くべきだというのである。1975年のこの指摘について、現在のハーン研究においてもなお、十分に議論されていないと言わざるを得ない。つまり、これまではハーンによって美しく描かれた日本の中に、西洋化と対峙する彼の姿を見ようとする見方に片寄り、19世紀を生き、その流れに乗じる形で日本を描き出していた可能性については、未だ十分に示されてきていない。

### 2-1. ジャポニスム<sup>21</sup>の興隆—「淫らな淑女」としての日本女性

ハーンを「時代の子」、「十九世紀人」あるいは「過渡期の人」であることに留意するのであれば、1870年代頃から興ったジャポニスムとの関係を考慮することから始めなければならないだろう。

ジャポニスムという用語について、馬淵明子氏は以下のように定義している。

- 折衷主義のレパートリーの中に、日本のモチーフを導入すること。これは他の時代や他の国の装飾的モチーフを排除せずに加わったものである。
- 日本のエキゾチックで自然主義的なモチーフを好んで模倣したもの。自然主義的モチーフは特に急速に消化された。
- 日本の洗練された技法の模倣。
- 日本の美術に見られる原理と方法の分析とその応用<sup>22</sup>。

また、「シノワズリー（中国趣味）」に対する「ジャポネズリー（日本趣味）」との違いについては、「ジャポネズリーは日本的なモチーフを作品に取り込むが、それが文物

<sup>20</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳『東の国から・心』（恒文社、1975）712頁。

<sup>21</sup> ヘレン・バーナム氏は、「ジャポニスム」について1872年、フランスの知識人フィリップ・ビュルティが「西洋諸国において高まりつつあった日本への関心、日本の物品の収集、そして西洋美術における日本的な題材や様式の探求」を表す言葉として「ジャポニスム」を初めて使ったと述べている。ヘレン・バーナム編『ボストン美術館 華麗なるジャポニスム展—印象派を魅了した日本の美—』（NHK、2014）35頁。

<sup>22</sup> 馬淵明子『ジャポニスム—幻想の日本』（ブリュッケ、2004）10-11頁。

風俗へのエキゾチックな関心にとどまっているのに対し、ジャポニスムは、日本美術からヒントを得て、造形のさまざまなレベルにおいて、新しい視覚表現を追究したものである<sup>23</sup>」と説明している。

ジャポニスムは日本の開国と共に爆発的に興ったわけではなく、開国後まもなく来日した外交官のうち、美術好きな人々が日本の美術品を持ち帰り、書物の中で熱心に日本美術、世界観を紹介したことから、徐々にスタートしていく。さらに、1862年のロンドン万国博覧会から、パリ、ウィーン、そして1876年のフィラデルフィア万国博覧会などで、日本は工業的なものではなく、外国人が求めるあまりにも「日本的な」ものを輸出し続けた<sup>24</sup>が、中でも1867年のパリ万国博覧会はジャポニスムのパリにおける盛行を促した大きな動因であったとみなされている<sup>25</sup>。ジャポニスムは、マネ、モネ、ルノワール、ゴッホと言った多くの画家たちをはじめ、それらを嗜好する西洋人に熱狂的に受け入れられていくのである。ハーンに関して言えば、1884年ニューオーリンズで開かれた万国工業兼綿花百年記念博覧会にて、彼が日本的な工芸品に心ひかれたことがよく知られている。

ジャポニスムの特徴は、そこに占める「女性」の割合が極めて高いということである。ジャポニスムにおける日本女性のイメージについて、川本皓嗣氏の指摘が注目に値する。

旅行記や訪問記事、小説などで、日本の女性のすばらしさ—マナーの上品さ、しとやかさ、洗練された趣味、技芸への熟達ぶり（音楽、生け花など）が大いに喧伝された。一八五〇年ごろ、寄せ集めの資料で『日本論』を著わしたチャールズ・マクファーレン（Charles MacFarlane）は、『一国の女性の品性は、その文明の高さをはかる究極の、そしてもっとも容易な評価基準』であるが、世界中の教養ある淑女たちを知り尽くしているあの友人が、日本の女性こそは『私が世界各国で出会ったなかでも、もっとも魅力的で優雅なご婦人たちだ』と語った（中略）

だがその反面、ゲイシャや遊女に代表されるように、日本の女は道德観念が薄く、性的にふしだらであるという印象も強かった。ことに混浴や、裸で『背中を流す』習

<sup>23</sup> 馬淵明子、前掲（註22）、10頁。

<sup>24</sup> 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』（彩流社、2005）26頁。

<sup>25</sup> 大島清次氏は、これについて次のように述べている。「とくに一八六七年のパリ万国博への日本の参加は、それがはじめての日本の参加であったこと、それにちょうど大政奉還直前の江戸幕府最後の年でもあったこと、そしてそれがはじめての参加にしては、かなりの規模の参加であり、しかも珍奇でありながらきわめて質の高い出品物であったことなどから、さまざまな意味で影響するところが大きかった」大島清次『ジャポニスム—印象派と浮世絵の周辺』（講談社、1992）55頁。

慣、どこでも平気で裸になることは、ヨーロッパからの訪問者を驚かせた。マイナーによれば、初期の旅行者たちが出会ったのが、主として接客業の女たちだったこともあって、彼女たちが『遊び女』であると同時に教養ある『淑女』でもあるという、欧米では考えられないような矛盾の共存が、多くの男性に嬉しい衝撃を与えたのである<sup>26</sup>。

このように、西洋へ送り出された日本画に描かれた女性の多くが、きらびやかな衣装を身にまとった遊女であり、こうした日本女性の存在があまりにも誇張された<sup>27</sup>ことで、フランスでは「日本の女たちは拒むすべをしらない<sup>28</sup>」という見方が生まれたり、欧米では日本女性がフェミニズムをしらないこと、キリスト教的道徳観に縛られない上、儒教的な親孝行の教えに従うため、身を売る女性がいるのだとみなされるようになった<sup>29</sup>。

同時に、女性と子どもの親密な関係については、

また浮世絵にあらわされた家庭内の女性同士の、また母と子の親密な空間は、近代生活の生活感情をそのままあらわすものとして、印象派、ポスト印象主義の画家たちにとっては共感をもって眺められるものであった。印象派のベルト・モリゾ、メアリー・カサットが自分たちにも共通する主題として、母と子の愛情あふれるしぐさを浮世絵の中に見出し、それを自作へと引用したのは当然のことと言える。アメリカ人のヘレン・ハイド (cat. no. 43) の場合、来日して狩野友信に日本画を学び、フェノロサの勧めもあって木版画をはやり来日して制作していたプラハ出身の版画家エミール・オルリクに習うが、彼女が得意としたのも、やはり母親と子どもたちの世界である<sup>30</sup>。

(下線は筆者)

とあるように、ヴィクトリア朝のいわゆる「家庭の天使像」に関連づけて受け入れられた。

<sup>26</sup> 川本皓嗣「ムスメに魅せられた人々—英詩のジャポニスム」川本皓嗣、松村昌家『ヴィクトリア朝英国と東アジア』（思文閣出版、2006）8頁。

<sup>27</sup> これについては、「日本から流れ込んだ大量の図像の多くが、<sup>ごうしゃ</sup>豪華に着飾った華やかな遊女たちを扱ったものであったことから、日本はともすればそうした女性に満ち溢れた男性天国であるという幻想が生まれる。日本へ旅行した西洋人たちが体験した賓客接待のありさまに関する情報もそれをさらに増強したかもしれない。」との指摘もある。ヘレン・バーナム編、前掲（註21）20-21頁。

<sup>28</sup> 塩川浩子「その頃ムスメは……—ロチのお菊さんとその姉妹たち—」『共同研究日本の近代化と女性』（共立女子大学総合文化研究所、1998）78頁。

<sup>29</sup> 塩川浩子、同上、79頁。

<sup>30</sup> ヘレン・バーナム編、前掲（註21）20-21頁。

イギリスの中産階級に広く広まったこの考え方は、家事一切を使用人に、育児を乳母に、子女教育をカヴァネスに任せ、多くの暇を持て余し、使用人たちを取り締まることと、金銭的に男性に依存しながら優雅な生活を楽しむことを良しとした<sup>31</sup>。こうした女性たちが日本の母子愛の描かれた浮世絵を共感を持って消費したのである。

## 2-2. ジャポニズム小説

絵画から始まったジャポニズムの流行はそれだけにとどまらず、文学や戯曲などにも見られるようになる<sup>32</sup>。文学上のジャポニズムについて、羽田美也子氏は以下のように述べている。

文学上のジャポニズムはいくつかの違ったタイプを示している。(中略) ジャポニズムを利用し、その作品内容にアクセントをつけるために、日本を比喩的に用いたり、引き合いに出している作品、ジャポニズムに刺激されることによって、新しい日本理解に基づいた文学の方向性を生み出した作品、そして、最初から最後まで主題そのものが日本という作品等である<sup>33</sup>。

芸者や高級娼婦といった存在に溢れた世界<sup>34</sup>として日本を捉えようとするピエール・ロテイ『お菊さん』*Madame Chrysanthème* (1887) やジョン・ルーサー・ロング「蝶々夫人」*Madame Butterfly* (1898) 等はあまりにも知られたところであるが、それら以外にも数えきれない作品が次々と書かれていった。

川本皓嗣氏は、サー・エドウィン・アーノルド『ムスメ』*The Musmee* (1892)、W・E・ヘンリー『豊国の錦絵のバラード』*Ballade of a Toyokuni Colour-Print* (1888)、マーガレット・ヴェリー『日本の扇』*A Japanese Fan* (1876)、キプリング『鎌倉の大仏』*Buddha at Kamakura* (1892) 等を分析し、そこには、ロテイの影響を受け、何もかもが小さく

<sup>31</sup> 青木健「<家庭の天使>像と<ニュー・ウーマン>の狭間で：ヴィクトリア朝の女子教育論」『Seijo English monographs (36)』(Seijo University, 2003) 374頁。

<sup>32</sup> 戯曲としては、レオン・ド・ロニーの戯曲「緑龍の尼寺」(1871年パリ初演)、サン＝サーンスのオペラ・コミック「黄色い皇女」(1872年パリ初演)、エミール・ジョナスのオペレッタ「日本娘」(1873年ウィーン初演)をはじめとして、1870年代から日本を取り上げた演目が、パリのオペラ座、ロンドンのサヴォイ劇場といった大劇場から大衆的なカフェ・キャバレーのレビューにいたるまで数多くみられた。ヘレン・バーナム編、前掲(註21) 87頁。

<sup>33</sup> 羽田美也子、前掲(註24)、49頁。

<sup>34</sup> ヘレン・バーナム編、前掲(註21) 65頁。

(petitesse) 描かれ、日本女性は、かわいく (pretty) 、おとなしく (demure) 、やわらかく (soft) 、白い (white) と形容され、日本のテーマとして君臨していること、そして時に、どこか軽蔑的な視線が存在していることを指摘している。

また、羽田美也子氏は『ジャポニスム小説の世界』の中で、多くの作品を挙げ、それらには、「西洋の男性」、「日本ムスメ」、「かりそめの結婚」、「混血児の誕生」、「一方的遺棄」といった展開<sup>35</sup>がいわば物語の定型として存在していたことを指摘している。例えば、ロング「蝶々夫人」は言うまでもなくこの全てを含んでいるが、それ以外にも、例えば『紫色の目』*purple eyes* も混血の女を西洋の男が捨てるものである。また、オノト・ワタンナ『日本のヌメさん』*Miss Nume of Japan* (1899) は西洋人男性が日本女性と結ばれる物語で、『日本の鶯』*A Japanese Nightingale* (1901) は身売りした日本女性と西洋人男性との結婚の物語である。メアリー・フェノロサ『神々の息吹』*The Breath of the Gods* (1905)、フランス・リトル『「勲章の貴婦人」とサダさん』*The Lady and Sada San* (1912) も西洋人男性と日本女性、または混血女性の恋愛である。こうしてみると、紋切り型のストーリーが飽きることなく描かれ、受容され続けていたということになる。馬淵明子氏が「ジャポネズリーは日本的なモチーフを作品に取り込むが、それが文物風俗へのエキゾチックな関心にとどまっているのに対し、ジャポニスムは、日本美術からヒントを得て、造形のさまざまなレベルにおいて、新しい視覚表現を追究したものである<sup>36</sup>」と述べていることは前述の通りだが、ジャポニスムがジャポネズリーを包含する形で捉えられるようになった現在、再びそれらを区別してみれば、こうした小説は、「ジャポニスム小説」ならぬ「ジャポネズリー小説」とでも呼んでおく方が適しているかもしれない。

1863年から1890年までの間、イギリスとアメリカにいたハーンも(1887年頃の2年弱はマルティニーク島にいたのだが)やはり、このような「固定された日本女性像」を抱いていたのではないだろうかと考えられる。先に述べたフィラデルフィア万国博覧会の後も、ハーンはピエール・ロティ『お菊さん』*Madame Chrysanthème* (1887)、パーシヴァル・ローエル『極東の魂』*The Soul of the Far East* (1888)なども精読していたことも知られている。つまり、こういった西洋における日本像は、ハーンの中に一つの女性のイメージをも植えていたと考えられる。

ハーンが描き出す日本の風景、素朴な日本人の姿、信仰心、礼儀作法等からは、これま

<sup>35</sup> 羽田美也子、前掲(註24)204頁。

<sup>36</sup> 馬淵明子『ジャポニスム—幻想の日本』(ブリュッケ、2004)10頁。

で多く指摘されてきているように、西洋至上主義にとらわれない彼の姿が浮かび上がってくる<sup>37</sup>。こうした姿勢は、多く「『共感』、『同情』あるいは『同感』を持ち合わせていたハーン」といったように形容され<sup>38</sup>、それこそが、彼の著作を他の外国人のものと異たらしめるものであるとされてきた。しかしながら、殊「女性」に関する描写に関しては、まさに、「過渡期の人」ハーンの姿を如実に見て取れることも忘れてはなるまい。

### 2-3. ハーンのエキゾチシズム

これまでのハーン研究において、ジャポニスム文学の流れの中で彼の作品を位置づけることは未だ少ない。しかし、一方で、ジャポニスムあるいはオリエンタリズムに関する研究において、ハーンの名前は少なからず登場し、彼がジャポニスムの影響を受けていたことが指摘されてきている。たとえば、児玉実英氏はハーンの再話作品を1890年から1910年にかけて多く読まれた日本を題材にした小説のひとつと位置付けている<sup>39</sup>し、小川さくえ氏は「ロティの『お菊さん』は、すでに述べたように、欧米諸国で好評を博し、ラフカディオ・ハーンをはじめ、多くの文学者に影響を与えた<sup>40</sup>」と述べている。そしてここで注目しておきたいのは、児玉実英氏が

<sup>37</sup> この点について、これまで多く指摘されてきているが、その一部を引用する。平川祐弘氏はハーンをバジル・ホール・チェンバレンと対比し、彼が「日本へ帰化したほどの人だから西洋至上主義者ではない」とし、次のように指摘している。「筆の職人であるハーンは、西洋的価値観を日本へ広めるとか、キリスト教的文明の優位やその信仰を説く、といった宣教上の使命感は皆無であった。ただ単に皆無どころか、その種の宣教的使命感こそ日本理解を妨げるものとして斥け、さらには宣教師そのものを嫌悪した。」平川祐弘「異文化を生きた人々」『異文化を生きた人々 叢書比較文学比較文化2』（中央公論社、1993）また築島謙三は著書『ラフカディオ・ハーンの日本観—その正しい理解への試み—』のなかで「怪奇趣味と文明ざらい」、「西洋ざらい」といった節を設け次のように述べている。「ハーンの文学に見る怪奇趣味と表裏をなしている文明ざらいについてふれておこう。それは異国趣味・怪奇趣味とともにハーンの日本文化感を支える重要要因と考えられるものである。ハーンは日本にきてから西洋をきびしく非難した。（中略）そして早くから東洋趣味にしたがい東洋に関する本をよく読んでいたハーンは、西洋キリスト教との対比において東洋思想を称揚する。（39頁。）」「西洋社会の一環であるアメリカでは反感は内に潜んでいたであろう。それが遠く日本にきてとつぜんエキゾチックな日本社会との対照においてどっとわき出したのであろう。（267頁。）」「ハーンは西洋に対し相当な反感があつて軽々しい日本礼讃になったのだという意味のことばがあるが、逆に、日本礼讃はただちに西洋非難をひきおこしたという面があつたと考えられ、来日当初はかれにはこのような相互依存の関係にある二つの心の動きがあつたといわなければならない（268頁。）」築島謙三『ラフカディオ・ハーンの日本観 増補版』（勁草書房、1977）。

<sup>38</sup> 例え、島田謹二は、「未知なものの考え方や生き方をただしく直観し、ふかく理解し、あたたかく同情する、何といおうか——まずは「詩人の魂」とでも名づくべきものが必要らしい。ところが世の多くの「学者」たちは、不思議と詩魂を欠いている。かれらはみんな貴族である。悲哀と諦念とに生きているあわれな民衆——「人間」の心を知らない。「苦しんでいる人間」にかかわって訴える「同情」がとぼしい。ハーンはこの点無類の詩人であった。（中略）かれの日本研究がただの専門学ではなく、いきいきとして今なおわれわれを動かすゆえんである」と述べている。島田謹二『日本における外国文学 上巻』（朝日新聞社、1975）108頁。

<sup>39</sup> 児玉実英『アメリカのジャポニスム美術・工芸を超えた日本志向』（中央公論社、1995）96頁。

<sup>40</sup> 小川さくえ『オリエンタリズムとジェンダー—「蝶々夫人」の系譜』（法政大学出版局、2007）15頁。

一八九〇年代から一九一〇年代にかけて、アメリカでは日本を題材にした小説がたくさん読まれていた。現在よく知られているのは、ラフカディオ・ハーンの再話類と『蝶々夫人』くらいのものであるが、当時は数えきれないほどの作品が出版され、読まれていた。実際、どんな作品がどれくらい書かれていたのかだれも知らないのではないかと思われる。(中略)しかし、当時のダイム・ノーヴェル(三文小説)や西部小説など、一般大衆小説については研究が進んでいるにも関わらず、残念なことに、それらジャポニスム文学についてはまだまとまった研究が何もないのである<sup>41</sup>。

(下線は筆者)

と述べているように、数えきれぬほど描かれ、投げ売りされた数あるジャポニスム小説の中で、なぜハーンの再話作品は、ジョン・ルーサー・ロング *Madama Butterfly* 『蝶々夫人』と並んでいまだに「よく知られている」ものとして受容され続けているのかということである。さらに言うならば、『蝶々夫人』がロングのものから、プッチーニのオペラ作品、レーヴェンの小説、さらにはデイヴィッド・ヘンリー・ウォンのパロディまで、その内容が時代と共に形を変え続けている<sup>42</sup>のに対し、ハーンの再話作品は主に、オリジナルのものが、しかも一つの作品に限らず読み続けられているといった点に意義を見いだすことができるだろう<sup>43</sup>。

ロングの『蝶々夫人』がピエール・ロティの *Madame Chrysenthème* 『お菊さん』(1887)を意図的に、時にそのまま引用しているとも言えるほど模倣したものであることは、既に

<sup>41</sup> 児玉実英、前掲(註39)96-97頁。

<sup>42</sup> 小川さくえ氏は『オリエンタリズムとジェンダー—「蝶々夫人」の系譜』の中でピエール・ロティの『お菊さん』とそれを受けてのロングの『蝶々夫人』(1898)、そしてそれらを基にしたデイヴィッド・ベラスコ『蝶々夫人』(1900)から、ジャコモ・プッチーニ『蝶々夫人』(1904)、パウル・レーヴェン『バタフライ』(1998)、デイヴィッド・ヘンリー・ウォン『M・バタフライ』(1998)までその変容について言及している。小川さくえ、前掲(註40)57頁。

<sup>43</sup> 例えば、遠田勝氏は、牧野洋子氏の「私たちが古くから伝わる日本の物語だと思っている『雪女』が、実はハーンによって再話された物語である」という論を支持し、以下のように述べている。「白馬岳の雪女伝説は、まちがいなく、ハーンの『雪女』に由来し、(中略)雪女の口碑伝説は、その大部分が、ハーンから出たものであろうと、ほぼ確実に立証できたのである。ただ、その経路は(中略)一人のジャーナリストの剽窃、捏造といってもいいような詐欺的行為だった。わたしを含めて、ハーン研究者の多くは、このつまらない悪戯の、意想外に大きな余波にだまされていたのである。」遠田勝、前掲(註1)22頁。このように、現在、ハーンの再話作品はそれが日本の原話を凌ぐ形で自然に受け入れられている。代表的なものと言えば、「雪女」、「浦島太郎」、「耳なし芳一」、「子育て幽霊」、「ふとんの話」、「ちんちんこぼかま」などで主人公は女性、僧侶、幽霊、樵、幼い兄弟など多岐にわたりその作品数も70を超える。

指摘されているところである<sup>44</sup>。もちろん、ハーンも『お菊さん』を始めとするロティの著作に強い影響を受けていたことはよく知られたところである。E・L・ティンカーはアメリカ時代のハーンにとって、ロティがいかなる存在だったのかについて、以下のように述べている。

ピエール・ロティに彼はすっかり夢中だった。ロティの熱帯地方の女たちとのなまめかしい冒険はハーンが望んでやまぬものだったし、彼の洗練された文体の美は努力の目標だった。ロティのいくつもの本が出るに従って、ハーンはその物語を何度か『タイムズ・デモクラット』紙に載せた。そして、ロティに手紙を出し、なにか東洋のスケッチを寄稿するよう頼んだ。(中略)

ハーンはロティとの文通を続けた。すると、恐らくハーンがいくつも書いたロティ称賛の論説への感謝の気持ちからか、未発表の東洋生活の記録数編が遂に送られてきた。ハーンがどれほど細心に、情熱をこめてこれらを訳したことか！一八八四年十二月二八日、『タイムズ・デモクラット』紙上に、一面全部を使って、「ピエール・ロティのノート・ブック」が鳴り物入りで掲載された時、ハーンは胸の内の誇りではち切れんばかりだった<sup>45</sup>。

このように、ハーンはアメリカ時代からかなりロティに傾倒していたことが分かる。ハーンにとってロティがフランス語で書く物語を英語に翻訳する仕事は、この上ない誇りで喜びであったことは想像に難くない。憧れの人物ロティの『お菊さん』も、したがって、ハーンにとっての重要な書物であるとみなすことができる。これについて、平井呈一もまた、以下のように推察している。

わたくしはもう一つここに、ハーンにとって最も重大な「文献」があったと思うのであります。おそらくこれは、その比重からいったら、当時のハーンのニューオリンズの下宿の書棚にあった、日本関係の書物をぜんぶ束にした重さよりも、ハーンにとっては、まだ重いのではないかと思われるくらい、重要な作品でした。それは、ピエール・ロティの「お菊さん」であります。(中略) ロティ文学に対するハーンの尊敬

<sup>44</sup> 小川さくえ、前掲（註40）57頁。

<sup>45</sup> エドワード・ラロク ティンカー著、木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』（ミネルヴァ書房、2004）147頁。

と傾倒、これはハーンの生涯を通じて持続したほど深いもので、(中略) それほどまでに傾倒し、お互いに文通までしあって理解と信頼を深め、書き上げたまま未だ発表しない作品の翻訳まで許す(「わが日録の断片」一八八四年十二月二十八日「タイムズ・デモクラット」掲載)ほどの親しかったロツティの、日本を題材にした作品に、ハーンがどれほど胸を躍らしたかは、想像するに余りあります<sup>46</sup>。

ここにあるように、アメリカ時代にハーンが触れた多くの文献の中でも、ロツティのそれは極めて重要で、それがハーンの文学にも終始影響を与え続けていたと指摘している。このように考えれば、ハーンの再話作品もまた、ジャポニズムの流れの中に位置づけることができると考えられる。

そしてハーンがジャポニズムの流れに乗っていただけでなく、彼の著作もまたその一部となってその後、多くの人々に影響を与えたということもまた留意しておく必要があるだろう。例えば、オノト・ワタンナの悲恋物語『藤姫の恋』(1902)の冒頭部分がハーンの「駅にて」(『心』(1896))に酷似していること<sup>47</sup>や、文中に見られる穢多についての説明もハーンの「社会組織」(*Japan: An Attempt at Interpretation*『日本——一つの解明』(1904年))に同様の説明があること<sup>48</sup>が指摘されている。また、羽田美也子氏はメアリー・フェノロサが非常にハーンに傾倒していたことに言及し、「今後の生活を執筆中心にしたいとフェノロサに思わせたのも、またメアリーに小説を書いてはどうかとすすめたのも、ハーンの影響が少なからずあったものと推測される<sup>49</sup>」としている。このように考えると、ハーンは決して他の外国人に対峙する形ではなく、ジャポニズムという大きな流れの中に確かに存在していたということになるだろう。

ただし、ハーンがこれまでジャポニズムの系譜の常連となっていない要因として、彼自身がそれまでの書物といかに異なったものを書くべきか当初から強く意識し、それらとは極めて異なった題材で物語を書き続けたのだということもまた忘れてはなるまい。これについて、以下の文章は友人パットンへ宛てた書簡である。これはハーンが来日前に綿密な計画を立てていたことを窺わせるものとして注目に値する。

<sup>46</sup> 平井呈一「八雲と日本」小泉八雲著、平井呈一訳『日本瞥見記(下)』(恒文社、2009)450頁。

<sup>47</sup> 羽田美也子、前掲(註24)128頁。

<sup>48</sup> 安藤義郎「オノト・ワタンナの作品—“The Wooing of Wistaria”について—2」『経済集志42』(日本大学経済学研究会、1972)19-20頁。

<sup>49</sup> 羽田美也子、前掲(註24)155頁。

親愛なるパットン氏へ

日本ほど人がよく歩いて調べた国について本を書こうと考えると、まるきり新しいことを発見することは望めません——慎重に考えても同じだと思います。できるかぎり全く新しい方法で物事を考えてみるができるだけでしょう。私はこれまでの本に、能力の許すかぎり「いのちと味わい」を注ぎ込むのです。旅行家であれ学者であれ、その作者たちの報告や説明よりもっと生き生きした印象を与えるのです。こういう本は、以上の理由から、本質的に大半が短いスケッチ——それぞれが生活の独特の側面を映した——を集めたものになるでしょう。その地に足を置くまでは、仕事の決まったプランを並べることは不可能でしょう。けれども、こういう本の一部になると思われる主題のリストを試験的に作ってみました。(中略)

各章の実際の表題は、およそロマンティックなものとし——おそらくは日本語にします。エッセイ形式のものは本当に全く考えていません。主題はもっぱらそれに関係した個人的体験に基づいて考えることにし、平凡な物語に類したものは注意深く避けます。狙いを考え抜き、読者の心に日本で「生活している」生き生きした印象を与えるのです。——単なる観察者ではなく、普通の人々の日常生活に参加し、「彼らの考え方で考える」感じをもってほしいのです。可能なときには、短編小説のように面白い物語にしたいのです。

また滞在の後期に、日本人の感情を描写した中編小説も用意したいと考えています。

以上が、本のプランについて、現在、最善を尽くして述べ得るところです。敬具<sup>50</sup>

(下線は筆者)

ここから分かるのは、ハーンが来日前から極めて入念に執筆活動について計画を立てていたことであろう。そしてここに挙がっている主題は、14年の日本滞在中で彼の著作に網羅されていくことになる。そして注目したいのは、ハーンの日本への対し方である。それまでの外国人が、日本を「未開の地」と見做していたのに対し、ハーンにとっての日本はすでに多くの外国人によって「踏み均された場所」であり、後発者としての意義は、全く新しい方法で、日本という、ある意味ありふれた題材と向き合うということであった。そして、面白い短編小説や中編小説で、それまでの本に描かれきれなかった「いのち」と

<sup>50</sup> エドワード・ラロク ティンカー著、前掲(註45)、294頁。

「味わい」を表そうとしていたのである。

さらに、これに関連して付け加えるならば、来日前にロティに夢中になり、彼の美しい文体によって描かれた日本という世界に憧憬を抱いていたのは前述の通りであるが、来日後のハーンのロティへの評価が変わってしまったというのが、以下の指摘である。

「私にとって一時期、ロティは自然の赫奕と燃えあがる魂のすべてを覗き見た人のように思われました」

ハーンはチェンバレンへ宛てた一八九三年（明治二十六年）二月十八日付の手紙で、自分のかつてのロティへの傾倒をそのように表現した。『お菊さん』（一八八七年）を読み、その官能的生活に誘われて来日したと思われる節のないでもないハーンは、しかし奇妙なことに、松江へ行き、小泉節子と生活を共にするに及んで、自分とロティとの違いをまざまざ自覚させられてしまったのである。かつてロティを読んで空想した日本と、自分の眼で見、肌で触れた実際の日本と、その差のあまりの甚しさにハーンは驚いた。日本はロティの文章を通して思い描いたよりもずっと心美しい国だった。すると憑きが落ちたように、ロティがにわかにならぬ光も色も褪せて、

「小さなつまらぬ、病的で、鼻持ちならない、近代的フランス人となってしまった」

ハーンはその翌明治二十七年二月には、再びチェンバレンに向けてはっきりと書いた。

「ロティは日本の女に対して公平を欠いています」

その不満の表明は、東洋の港町へ到着して次の船出まで「結婚」するような、女の人格を無視した白人植民者流儀は自分の生き方とは相容れぬ、というハーンの意志表明でもあったろう。ロティをあらためて読み返すと、彼は人生に倦み疲れ、情に感ずる心を失った blasé（無神経）な生き方をしている。自分はそうした生き方は是認できない<sup>51</sup>。

（下線は筆者）

こうしたロティへの冷やかな<sup>けいげん</sup>慧眼には、平川祐弘氏の指摘にもあるように、ハーンの松江での経験が大いに影響していると考えられる。もちろん、前述の通り、ハーンはロティの文体や官能的で美しい文章に影響を受け続けたことも確かであるが、殊日本（『お菊さ

<sup>51</sup> 平川祐弘『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解』（新潮社、1987）36頁。

ん』に描かれた日本) に関しては、距離を置くようになったのである。

そしてこのロティへの感情に加え、前述の「これまでの本」とは異なったもの、それに「いのち」と「味わい」を付加するというこの明確な目的が、それまでのジャポニスム文学—例えば、「西洋の男性」、「日本ムスメ」、「かりそめの結婚」、「混血児の誕生」、「一方的遺棄」といった展開<sup>52</sup>—とは全く異なる、多様な登場人物とテーマの物語を書き続けることを可能にしたと言える<sup>53</sup>。彼は、西洋人を主人公とする物語を一切書かなかったばかりか、日本人（男性、女性、子ども）、動物、妖怪、幽霊といったものを登場させ、「日本にある、本当の、日本の物語」を描くことで「本当の日本」を発信しようとしたのである。

すなわちハーンはジャポニスム文学に日本を学び、その著作は後のジャポニスム文学に影響を与えもしたけれども、しかしながら、彼の作品は自身の明確な意図により、それらとは一線を画すものと見なすことができるのである。

#### 2-4. 想定された読者層と西洋での反響

ここで留意しておきたいのは、ハーンが「日本」という、ある種既にありふれた題材に対し、「いのち」と「味わい」を付加し、発信していこうとしたとき、そこには当然、想定された読者が存在していたということである。ハーンがどれだけ美しく日本を表したといっても、それが日本の読者へ取り入ろうとしたからなどではないことは言うまでもなく、一切の書物を英語で書き続けた彼にとって、そもそも日本人は読者として想定されてすら

<sup>52</sup> 羽田美也子、前掲（註24）204頁。

<sup>53</sup> ジョージ・ヒューズ氏は、ハーンが西洋では未だ異常な心理を持った変質者だと見なされていると述べ、ハーンとロティについて次のように述べている。「ハーンが試みたことと、ピエール・ロティがエキゾチックな東洋文化のなかで次々に行った「結婚」との間には明らかな類似が見られる。ハーンはロティの文体を心から称賛し、彼を新しい土地での生活感覚を本当に伝えられる作家として重要視した。しかしハーンはロティを超え、彼自身の価値観を真剣に再評価しようとした。ある視点から見れば、このようなパフォーマンス全体が世紀末芸術家の特徴と言える。しかし別の視点から見れば、それが非常に危険であることがわかる。ハーンは結局のところ日本人ではない——すくなくとも彼が通りですれ違うほとんどの人にとっては、彼はキモノを着た西洋人なのだ。彼が自分のパフォーマンスについて書いたものでさえ、英語で書かれている。彼はロティにはない真摯さで自分のパフォーマンスに取り組んではいるものの、二つの世界の狭間に自意識的に陥っている。このような人物はどちらの世界からも受け入れられることはない。（中略）彼は文化的にはどっちつかずで、真の西洋人でも真の日本人でもない。彼は、因習的な『国民』というアイデンティティを侮辱する、危険な存在である。日本についての学問的議論においてさえ、彼は曖昧な人物であって、まさにその立場の不安定さによって、ナショナリズムという概念がさまざまな政治的力がぶつかりあう場であることを露呈させるのである。彼は私たちが不変のものと考えがちな重力の中心をかき乱し、そうすることによって今日の文化を豊かにしてくれる。」と述べている。すなわち、ハーンは真摯な姿勢でロティを超えようとしたけれども、最終的に彼は自分の立場を西洋人としても、日本人としても定めることができなかったというのである。そしてそれが西洋における大きな批判の要因のひとつであると同時に、彼のそうした立場自体が「作家としてのハーンの功績の中でも大きい」ものだとしている。ジョージ・ヒューズ「ラフカディオ・ハーン—世紀末のパフォーマー」平川祐弘編『異文化を生きた人々 叢書比較文学比較文化2』（中央公論社、1993）432-433頁。

いなかった。

多くの文章は、それがまとまって本となる前に、次々と雑誌や新聞に掲載された。例えば、『知られぬ日本の面影』（1894）に収録された「英語教師の日記から」は、その4年前1890年11月15日、『ジャパン・ウィークリー・メール』紙（14巻20号）掲載の「島根便り」の内容である。また、同書に収録された「神々の国の首都」の内容は、その3年前、1891年11月の『<sup>アトランティック・マンズリー</sup>大西洋評論』誌<sup>54</sup>（第68巻）に掲載されている。『東の国から』（1895）収録の「永遠に女性的なるもの」もまた、その2年前の1893年12月に、同誌（第72巻）に掲載されたものである。

ハーンが日本からアメリカに向け、次々と著作を送り続けたのは、「その時」、「その場所」に読み手を想定していたからに違いない。この問題については、中川智視氏の「ある『西洋の』保守主義者：ラフカディオ・ハーンと一九世紀のアメリカ」に詳しい。氏は、ハーンが初期に作品を掲載していた『<sup>アトランティック・マンズリー</sup>大西洋評論』誌が、「少数の知的に有能な人物が大多数の人物を導くという、エリート主義的な発想」に基づいて創刊されたものであり<sup>55</sup>、ハーン自身も、読者として白人中産階級層、言い換えれば「アメリカの知的エリート層<sup>56</sup>」を想定していたとし、以下のように述べている。

「抑制」、「道徳」、「無私」、「公共精神」、そして「義務」など、ハーンの日本時代の作品を読んだことがある読者なら、以上のことばにごく近似する語彙を作中に見出したことがあるだろう。この問題意識が彼の日本での生活で喚起されたことは确实だが、その語源は西洋、とりわけ十九世紀のアメリカのハイ・カルチャーの価値規範にある

<sup>54</sup> 1857年アメリカのボストンで知識人たちによって、知識人の間に文学、芸術、政治の雑誌として（J.R. ローエル編）で創刊された月刊誌。当初は命名者O・W・ホームズ、編集長J・R・ローウェルを中心に、エマソン、ロングフェロー、ホイットィアなど東部の<sup>そうそう</sup>錚々たる文学者が寄稿家に名を連ね、ニュー・イングランド文化の機関誌的な色彩が強かった。1871年にオハイオ州出身のW・D・ハウエルズが編集長になってからは、西部出身のマーク・トゥエーンや、南部の作家たちにも幅広く紙面を提供し、全国的な雑誌となった。Cullen Murphy, *A History of The Atlantic Monthly*、<http://www.theatlantic.com/past/docs/about/atlhistf.htm>（2015年8月18日閲覧）

<sup>55</sup> この雑誌の出版意義について、中川智視氏は次のように述べている。「彼の作品に通底する価値規範は、「ハイカルチャー」に、その一つの源流を求めることができるだろう。そしてこのような価値規範を守る一つの重要な砦の役割を果たしていたのが、ハーンが初期作品を寄せた雑誌『アトランティック・マンズリー』である。（中略）『アトランティック』誌の創刊に関わったボストンの知識人たちは、「美だけでなくアメリカの道徳的な価値と理想を創出し伝え」ること、そしてそれが広く影響力を及ぼすために先導役や牽引役を担うことを責務として認識していた。したがって理想主義はいうまでもなく、彼らの根底には少数の知的に有能な人物が大多数の人物を導くという、エリート主義的な発想も内包されている。」中川智視「ある『西洋の』保守主義者：ラフカディオ・ハーンと一九世紀のアメリカ」『言語社会2』（一橋大学、2008）341頁。

<sup>56</sup> 中川智視、同上、350頁。

といえる。それは、自制を旨とし、反資本主義的で、またエリートによる先導を容認する。(中略)

ハーンはこのように、読者に道徳を喚起させようとする顕著な傾向がある。そしてその傾向は、一九世紀後半のアメリカで起きていた変容と無縁であるとは考えにくい。

(中略)

ハーンは道徳観を中心とした価値規範の変容に対し伝統的な人間像や社会像を掲げ、旧来の価値規範を擁護する側に立ったと言えるだろう。(中略)

ハーンはおそらく『心』に掲載される一連の著作を執筆するに至って、日本に身を置く西洋の文筆家としての使命を認識したと思われる。それは、日本の優れた道徳性を西洋に語り伝えることで、その読み手に、それまでの自制を軸とした道徳的社会的意識を再認識させる試みであったといえる<sup>57</sup>。

(下線は筆者)

ここにあるように、ハーンは『大西洋評論』<sup>アトランティック・マンスリー</sup>誌の読者層に向け、旧来の道徳観を提示しようとしたのだと言える。そして、再話に関して言えば、その舞台は、明治期半ばを過ぎ、近代化の基盤を整え、日清戦争(1894)にも勝利した日本ではなく、サムライの生きる古き日本であり、物語を構成するのはそこに生きる人々(男性、女性、子ども)、動物、妖怪、幽霊たちであった。ハーンは「日本の物語」を、再話という手段で描き直しながら、言わんとするところを物語の中に込めたのである。

彼は、著名な新聞、雑誌にも寄稿している。例えば、「島根便り」を送り続けた『ジャパン・ウィークリー・メール』紙 *The Japan Weekly Mail* は、1870年1月に横浜の Japan Mail 社にて発行が開始された新聞で、政治、商業情報だけでなく、日本文化、芸術など多彩な記事が掲載されたものである。設立直後の日本アジア協会の学会誌的な役割を果たし、協会で積極的に発表していたサトウ、アストン、チェンバレン、フェノロサなど第一級のジャパノロジストが日本文化研究やエッセイそして日本関連書の書評を掲載した。他にも、『ハーパーズ・マンスリー』誌 *Harper's New Monthly Magazine*、『ジャパン・メール』紙 *The Japan Mail*、『タイムズ・デモクラット』紙 *The Times and Democrat* 等がある。

『知られぬ日本の面影』について、チェンバレンに対し「この本の人気は上々です。出版社はすでに第三版を予告し、書評も褒めています——アメリカでは熱狂的な評判です。

<sup>57</sup> 中川智視、前掲(註55)、343-347頁。

『アセニウム』誌は熱烈に賞賛しました。しかし二、三のイギリスの新聞が酷評しています。非難と賞賛の混声は、一般的には文学的成功を意味しています<sup>58</sup>」と書き送ったことは、あらゆる書き手がそうであるように、ハーンもまた、自著の評判を意識していたことを窺わせる。

来日前、新聞記者として名をあげ、著作『チタ』、『仏領西インド諸島の二年間』『ユーマ』については、純益で402ドル6セントにのぼる<sup>59</sup>ほど、作家としても成功を収めていたハーンが、日本で発信し続けた作品が、どのように受容されたのか。これについては、ポール・マレイ『ファンタスティック・ジャーニー—ラフカディオ・ハーンの生涯と作品』に詳しい。以下、関係する部分を引用してみよう。

『知られぬ日本の面影』が実際に出版されたとき、まき起こった反響にハーンは喜びを隠せなかった。五十ばかりの寸評を受取り、全体としてそれが肯定的であると判断した。(中略) 一八九五年一月には第三版が刷られており、しづしづながら彼もこの本でいくらか潤うだろうと認めている。バジル・ホール・チェンバレンもこの本を喜んでくれた。(中略) たしかに『知られぬ日本の面影』の成功は、文句のつけようのないものではあった<sup>60</sup>。

一八九五年六月号の「アトランティック・マンスリー」には、『知られぬ日本の面影』『東の国から』をまとめた書評が出る。評者は匿名だったが、ハーンの考えでは、これは間違いなくアーネスト・フェノロサであった。肯定的な評ではあったが、そのやり方は、まさにラフカディオがもっとも憤慨するようなもので<sup>61</sup>、(後略)

この時期に日本時代の第一作、第二作と二つの著作が刊行されたのは、偶然であったとはいえ、絶妙のタイミングというほかないだろう。これに給料を合わせると、かなりの額の収入が確保され、セツの名義で貯金ができるほどだった<sup>62</sup>。(中略)

翌月一九〇四年六月になると、『怪談』の書評が出はじめた。「上品、機知に富み、美しい……」というのが「アトランティック・マンスリー」のこの本に対する評だっ

<sup>58</sup> ラフカディオ ハーン著、斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集 第15巻』(恒文社、1988) 231頁。

<sup>59</sup> ポール・マレイ、村井文夫訳『ファンタスティック・ジャーニー—ラフカディオ・ハーンの生涯と作品』(恒文社、2000) 250頁。

<sup>60</sup> ポール・マレイ、同上、280-281頁。

<sup>61</sup> ポール・マレイ、同上、331頁。

<sup>62</sup> ポール・マレイ、同上、335頁。

た<sup>63</sup>。

このように、『知られぬ日本の面影』が大きな反響を巻き起こしたことで、それに次いで出版された『東の国から』もまた多くの人に注目され、肯定的な書評も相次いでいたことが分かる。養うべき多くの人々に囲まれて生活していたハーンは、熊本時代から神戸時代にかけて、収入が不安定な時期を過ごす中、それでも「かなりの額の収入が確保され、セツの名義で貯金ができるほど」であったことは、出版物が成功していたことを示している。晩年に出された『怪談』も、その例にもれず、ヨネ・ノグチは、以下のように評したという。

彼の著作は約三分の一が日本のもの、三分の二がハーンのものだ。幸いなことに、その三分の二のハーンという人物も、じつは日本人である。少なくとも『怪談』においては、文章も題材の扱いにおいても、彼は徹頭徹尾ジャップなのだ。この本には、外国のものは何もない。彼の作品は最良の日本芸術であり、それ以外ではない<sup>64</sup>。

全著作の三分の一が日本のもので、残りの三分の二も「日本人である」ハーンによって書かれた「最良の日本芸術」であるというこの書評は、誇張された部分はあるにせよ、決して完全に的外れな受け止められ方であったとは言えない。日本に一度も足を踏み入れたことのない者ですら、日本を題材にした作品を多く出していた当時、長年にわたり日本に滞在しながら、精力的に執筆活動を行ったハーンは、西洋の読者にとっては最早限りなく日本人に近い存在であったに違いない。ハーン自身、「真の日本について、自分以上に傑出し、信用に値する書き手などいないと、自信を深めていた<sup>65</sup>」というが、それはこうした評価によるものであったと言える。

東大を突然解雇され、日本から離れたいという思いが日に日に強まっていたハーンが、アメリカでの仕事を探していたとき、破格な待遇でコーネル大学に迎え入れられる話が浮上していたが、これもまた、ハーンの高い評価を裏付けるものであろう。

教授（コーネル大学学長シャーマン教授）は、まず第一にハーンのあげうる成果に

---

<sup>63</sup> ポール・マレイ、前掲（註59）、524頁。

<sup>64</sup> ポール・マレイ、同上、524頁。

<sup>65</sup> ポール・マレイ、同上、338頁。

ついて高く評価してくれていた。「貴殿の著作から小生が知りえたところからして、御講義によって学生の視野がいちだんと拡がり、共感を呼び起こし、日本の社会と文明に関する新たな関心を引き出すことになるのは間違いありません」。二十回の講義——数週間の仕事——に対して一千ドルが提示された。これだけでも相当な額であるが、他の大学でも講義を行えば金額はもっと増やすこともできると示唆してくれ、それについての手配は当方で行なうとまでいっている<sup>66</sup>。

( ) 内は筆者

実際にこの話が実現することはなかったが、コーネル大学がこれほどまでの厚遇でハーンを受け入れようとしていたことは、彼の著作が「日本の社会と文明に関する新たな関心を引き出す」ものとして非常に高く評価されていたことを示している。

ハーンが没した際も、多くの新聞社がハーンについて取り上げた。ワシントンの『スター』紙は、

その死によって英語の名文家のもっとも輝かしい才能の一つがこの世から消え去った。残された空隙はあまりに深く、容易に埋まりはしないだろう。数年来、ハーン氏は日本文学の研究に打ち込んでおり、さまざまな民話、伝説、詩的散文説話を英語の読者のもとに送り届けてくれていたが、それらは現代の最良の文学作品と肩を並べるほどの高い評価を得ている。日本精神を把握することにおいて、日本人以外で彼に匹敵する人はほとんどいない<sup>67</sup>。

と彼の死を報じた。彼の著作は、日本の精神を把握できるものとして受け入れられ続け、中でも再話作品は、「最良の文学作品と肩を並べ」得るものと捉えられていた。この絶大なインパクトから、彼の著作は他のジャポニズム文学や日本に関する書物の追随を許さない程のものであったと言っても過言ではないだろう。

<sup>66</sup> ポール・マレイ、前掲（註59）、510頁。

<sup>67</sup> ポール・マレイ、同上、532頁。

### 3. 喪失の幼青年期—母ローザへの追慕と女性たち—

それではハーンが描いた日本女性が、それまでロティを始めとするジャポニスム文学によって歪曲された日本女性像を覆す形で、現実存在した女性たちを作品の中に込めて発信したのかと問えば、それはやはり肯定できるものではない。

前述の通り、初期の作品では明治中期に実際におきた事件を基に作品を書いたにもかかわらず、サムライ、ハラキリといったような西洋人がいかにも想像しそうな日本のエキゾチックな雰囲気を取り入れていたし、晩年に取り組んだ再話は、近世の物語を原典とし、そこに描かれる多様な女性を、従順で淑やかな女性、強い信念を持って周囲を教化していく女性、あるいは封建社会に従うがゆえに嫉妬心に苛まれる女性といった、ある種ステレオタイプ的な女性像へ意図的に変更していた。

そこには、先に述べたジャポニスムの影響もあるだろうし、前述の通り、中川智視氏が指摘するように、彼が読者として、ジャポニスム一般の主たる消費者でもあった白人中産階級を意識し、「抑制」、「無私」、「義務」などといった道徳的価値を込め西洋に発信し続けた<sup>68</sup>という文筆家ハーンの姿も見て取れる。

しかしこれらよりもまず、ハーンの根幹の部分—すなわち、彼の女性観がどのようなもので、それがどのように構築されたのかといった部分—を見ておく必要があるだろう。

#### 3-1. 母の喪失

ハーン的女性観について考えるとき、彼に多大な影響を与えた母ローザの存在は看過できない。アイルランド人の父チャールズ・ブッシュ・ハーンと、ギリシャ人の母ローザ・アントニヤ・カシマチの間に第二子として生まれたハーンであるが、幼少期に祖国と母を失うことになる。

チャールズはローザがハーンを身ごもっていたときにイギリスへ召還され、帰国。ハーンが2歳になり、ローザと共にチャールズの生家<sup>せいけ</sup>へ身を寄せるまでの間に長男が亡くなり、母子二人の時間を過ごすことになる。ダブリンでの生活を始めたローザは、新しい環境に適応できず精神的に追いやられていき、チャールズと溝も深まるばかりであった。ローザは精神の錯乱を起こし、激しい発作にも見舞われるようになる。1854年には3人目の子供を宿していたローザが単身ギリシャへ帰国し、わずか4歳であったハーンは、彼女に再び

<sup>68</sup> 中川智視、前掲（註55）341頁。

会うことはなかった。ここで、『東の国から』 *Out of the East* (1895) の冒頭に収められた作品「夏の日の夢」の一部を見てみよう。

そういうわたくしに、ある場所と、ある不思議な時の記憶がある。そこでは、太陽も、月も、今よりもっと形が大きく、もっと光りが明るかった。(中略)

いまでもよく憶えているが、そのころは、いちにちの長さすらが、いまよりもずっと長くて、まいにちまいにちが、わたくしにとって新しい驚異であり、よろこびだったものだ。しかも、その「小さな王国」と「時間」とは、わたくしのことを楽しく仕合せにしてやろうと、そのことばかりを考えてくれた人たちによって、和やかに支配されていたのである。

日が暮れて、月がまだ空へのぼらないまえ、月しろの静けさがあたりにしっとり降りると、やさしいその人は、わたくしを頭の前から足の先まで嬉しさでぞくぞく疼かせるような、いろんな話をして聞かせてくれたものだ。あれからこっち、わたくしはあこのころの半分も美しい話をすら聞いたことがない。わたくしの嬉しがりようがはなはだしくなると、やさしいその人はきまって、なにかこの世のものとは思われないような、ふしぎな歌をうたってくれたものだ。わたくしはその歌をききながら、いつとはなしに、うとうと眠りにおちてしまうのだった。そのうちに、やがてとうとう別れる日がやってきた。やさしいその人は、泣いて、わたくしに一枚のお守り札をくれた。お前ね、このお守り札はけっして失くしてはいけないよ。このお守りを身につけていさえすれば、お前はいつまでたっても年をとらないで、若いまんまでいられるし、また、いつなんどきでも帰ってこられる力を授けていただけるからね。……そういて、その人は、こんこんとわたくしにいいきかせてくれた。けれども、わたくしは、それぎりとうとう帰らなかった。歳月は過ぎた。ある日、わたくしは、ふとそのお守り札を、いつのまにやらどこかへ失くしてしまっていることに気が付いた。それ以来、わたくしは、われながらおかしいくらい、きゅうにめつきり年をとってしまったのである<sup>69</sup>。

(下線は筆者)

<sup>69</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）、26-27頁。

『浦島<sup>70</sup>』の再話ともいえるハーンの「夏の日々の夢」に書かれたこの文章から受けるのは、彼が〈浦島〉を自らに重ね合わせて読んでいたことであり、自分に樂園を見せてくれ、物語を語り聞かせてくれ、最終的に別れなければならなかった〈乙姫〉はローザであるということである。この点についてはこれまでも多くの指摘がなされてきている。例えば、仙北谷晃一は「あんなに悲しい別れ方をした彼の母、ローザ・カシマチであることは断るまでもない<sup>71</sup>」としているし、西成彦氏もハーンが自身を「浦島的存在」と感じ続けていたとし、〈乙姫〉は「母ローザ以外には考えられない」とし<sup>72</sup>、さらにこの別れの場面は、ハーンが「母性原理としての原郷願望を語った寓話として『浦島』を読んだ証拠である<sup>73</sup>」と述べている。

このように母ローザとの別れは、ハーンに母性的なものを求めさせるようになる決定的な出来事であった。「女性」がハーンに関心事の一つであったことは前述の通りだが、幼くして母を失ったという寂しさの記憶がそこに存在していることは言うまでもないだろう。

ケナードによれば、彼女は

彼女は綺麗な目をした美しい人ではあったが、怒りやすく自制心というものがないので、ときには暴力さえふるった。音楽の才能はあったが、物臭でそれを磨こうとはしない。賢い人だったが、教育はまったくなかった。いかにもオリエントの女性らしく、終日、安楽椅子にもたれて自分の境遇の退屈さ、アイルランドの天気悪さ、英語が難しく覚えられない、等々愚痴ばかりこぼして毎日を過ごしていた。自分の子供に対しては気まぐれで残酷だった<sup>74</sup>。

---

<sup>70</sup> ハーンは物語の前置きとして、次のように述べている。「英語の読者諸君にいちばん愛誦される形とおもわれるのは、おなじくチェンバレンが児童のために書いた、『日本おとぎばなし集』のなかにある翻訳だろう。あの翻訳が、なぜ英語の読者によるこぼれるかといえば、あの本の中には、日本の画家たちがそれぞれ腕をふるって描いた、美しい色刷りのさし絵がはいっているからである。わたくしはいま、その小さな本を前において、もういちどその伝説をわたくしのことばに直して、諸君にお話ししてみることにしよう。」小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）、8頁。尚、ここで挙げられているのは長谷川書店発行のシリーズ本で、しゃれたちりめん装丁と珍しい異国情緒のある挿絵のため、外国人旅行者の土産品として人気があったもので、チェンバレンは『浦島』（1886）、『八頭の大蛇』（1886）、『海月』（1887）、『俵藤太』（1887）の4冊を出版していた。坂東浩司、前掲（註14）490頁。

<sup>71</sup> 仙北谷晃一「ラフカディオ・ハーンと浦島伝説--「夏の日々の夢」の幻」『比較文學研究（30）』（恒文社、1976）59-60頁。

<sup>72</sup> 西成彦『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』（紀伊國屋書店、2004）67頁。

<sup>73</sup> 西成彦「西洋から来た浦島」熊本大学小泉八雲研究会編『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から』（恒文社、1993）25頁。

<sup>74</sup> Nina H. Kennard. (2009). *Lafcadio Hearn*. In: Junko Umemoto. *Early Biographical Sources on Lafcadio Hearn*, 26: Edition Synapse. (坂東浩司、前掲（註14）14頁を参考に拙訳。)

とあるように、決してハーンの思い描いていた通りの女性ではなかったことが分かる。これはわずか4歳のハーンをアイルランドに置き去りにしてギリシャへ帰国してしまったこと、そしてジョン・カバリーニとの再婚を機に、ギリシャで産んだ三男ジェイムスを乳母と共にアイルランドへ送り返してしまったことから、自己を犠牲にしても子どもを慈しむといった理想的な母親とはいいい難い女性であったことは言うまでもない。しかし、こうした母の姿をほとんど見ることなく青年期を過ごしたハーンの中に構築されたのは、父に捨てられた憐れむべき美しい母ローザであった。

ハーンが自身を<浦島>と、ローザを<乙姫>と重ね合わせたのと同じように、1882年『タイムズ・デモクラット』に載せた「死せる妻」からも母親の存在を渴望するハーンの様子が浮かび上がる。これは、中国の物語がフランス語に翻訳されたものを、ハーンが英語に重訳したもので、妻を失った夫の孤独感が月を追って描かれている。妻が死ぬのは1月で、2月から4月までは妻への狂おしいほどの愛情と寂しさが語られる。しかし5月からは妻という存在ではなく、母という存在への思いが綴られるようになる。

あの子供達には、胸にぎゅっと自分を抱きしめてくれる母親がいるのだ。無心な子供等よ、あちらに行け、お前たちの楽しい遊びは私の心を引き裂くばかりだ。(中略) 私の子供達の母親は何処に居るのか。(中略) 私の目は、再び涙でいっぱいになり、わが身の悲運を嘆いてこぶしを握りしめ、肉の落ちた胸を叩く。二人の子供らも私に連れそい悲しげに私の膝を抱く。二人は私の腕を片方ずつとり、泣きじゃくりながら私を呼ぶ。涙をいっぱいためて、小さな身振りで泣きながら母の居る所を問う<sup>75</sup>。

ここにあるのは、妻を失った夫の、そして母を失った子どもの悲しみである。「死せる妻」には絶対的に自分を守り育ててくれるはずであった母親という存在を突然失った子どもの孤独感が、最愛の妻を失った夫のそれを上回るほどに強い印象を与えている。この作品から推察できるのは、ハーンはこの中国の物語に自身の母親への思慕を投影させていたことである。つまり、「胸にぎゅっと自分を抱きしめてくれる母親」がいないこと、「母の居る所」を知ることができないことは、そのままハーンの生い立ちに直結する。ハーンのような母性への渴望は、彼の理想的女性像の構築に深く根を下し、日本における再話活動(初

<sup>75</sup> ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘他訳『ラフカディオ・ハーン著作集(第1巻)』(恒文社、1989) 252-253頁。

期のものから晩年のものまで) に変わることなく存在していくことになる。

### 3-2. アメリカ時代のハーンと女性たち

幼少期に祖国と母を失い、思春期に左目まで失ったハーンであるが、その女性観について、スティーヴンスンは以下のように指摘している。

醜い片目は彼の心中のわだかまりの唯一ではなくとも、最も大きな原因であった。家族への信頼を完全に失い、天涯孤独の身となり、青年時代を貧乏に苦しめられたことが、彼を過敏で内気で気難しい不機嫌な人物にしてしまった。そして、醜い片目という思い込みは、彼の絶望を決定的なものにした。彼の異性関係、特に彼が気に入られたいと狂おしいまでに願っていた自分と対等同種の異性との関係は、かならずしも正常とはいえないものだった。自分は気に入られないと信じ込んでいたから、臆病な蟹のように身を引くか、道化じみたほど恭しくしてみせるのが常であった。自分は女性の意にかなわぬ男であるという思い込みは、文化的人種的にまったく異なる女性と対した時だけ忘れることができた<sup>76</sup>。

(下線は筆者)

ハーンのアメリカ時代は1869年から1890年までの21年間で、19歳から40歳をアメリカに過ごした。その間に「自分と対等同種の異性との関係」もなかったわけではない。例えば、初婚の相手マティと正式に破局を迎える前、医師の妻エレン・R・フリーマンと親密な関係が半年間続いた。フリーマン夫人が情熱的であったのに対し、ハーンはマティの存在もあつてか、或いは彼女が「対等同種の異性」であったためか、既婚者であったためか、愛を告白したものの深い関係に踏み込めない印象が拭えない。

そして「永遠の恋人」と称されることもあるエリザベス・ビスラントもまた「対等同種の異性」の一人である。ビスラントは『タイムズ・デモクラット』紙に載ったハーンの「死せる妻」の翻訳に感動し、ハーンを賞賛した。そしてナッチェスからニューオーリンズに出て、同紙にポストを得ることになる<sup>77</sup>。ハーンは彼女について「彼女はBLRディンという筆名をもち、詩作に非凡な才能を有する女流作家で、背が高く、色白の肌と大きな黒い目

<sup>76</sup> スティーヴンスン 遠田勝『評伝ラフカディオ・ハーン』(恒文社、1984) 49頁。

<sup>77</sup> 坂東浩司、前掲(註14) 163頁。

と黒髪をした魅力的な女性であるが、わがままで、冷淡で、過酷で、狡猾で、執念深い面があり、自分は優美な鷹を連想する<sup>78</sup>と酷評していたが、次第に彼女に惹かれていく。1887年には「さなぎの殻から抜け出したように精神的にも肉体的にもすばらしい女性に成長した<sup>79</sup>」と友人マラスへ書き、1889年には世界一周旅行にでたビスラントに、「ビスラントの客間で過ごした楽しかった安らぎの時間が忘れられないこと、ビスラントが世界に羽ばたく女性に日々変貌してゆくことに感服も羨望もしている<sup>80</sup>」と書き、愛情も告白している。

彼らの書簡に目をやれば、ハーンが必ずしも「自分は気に入られないと信じ込んでいた」とか「臆病な蟹のように身を引」いたり「道化じみたほど恭しくしてみせ」ていたわけではないことが分かる。女性に認められ、愛され、また彼女らを愛した遍歴は外見を感じさせないほどであると言っても良い。ただし、これらの恋愛は不倫であったり、片思いであったりして、成就したというわけではない。

ここで注目したいのは、混血で片目、低身長青年ハーンを最初に惹きつけたのが「文化的人種的にまったく異なる女性」、混血女性マティ<sup>81</sup>であり、その恋は2年の交際を経て州法を犯す形での結婚へと結びついていくことである。ハーンは彼女について「奇妙な体験—ある娘の回想—」の中で以下のように描写している。

健康で、体格の良い田舎娘である。いかにも丈夫そうで、血色も良く、下宿屋の台所で働いて暮らしを立てている身でありながら、どんなにあら探しの好きな人でも器量よしと認めざるを得ない様子をしている。大きな目には、奇妙に物思いに沈んだ表情があり、娘以外の誰の眼にも見えず、影を持たない何者かの挙動をずっと見守ってきたかのようなようであった。降神術者達は、娘を強靱な「霊媒」とみなすのが常だったが、彼女はそう呼ばれるのをことに嫌った。読み書きを習ったことは一度もなかったが、語るに際しての素晴らしく豊かな描写力、普通以上に優れた記憶力、そしてイタリアの即興詩人をも魅了するであろう座談の才などに生来恵まれていた。これらの天資を我々が知ったのは、台所口の階段で娘と三十分ほど過ごした折のことである<sup>82</sup>。

<sup>78</sup> 坂東浩司、前掲（註14）、202頁。

<sup>79</sup> 坂東浩司、同上、234頁。

<sup>80</sup> 坂東浩司、同上、275頁。

<sup>81</sup> マティは本名アルシア・フォーリー（Althea Foley、1854-1913）で、アイルランド人の農場主と黒人奴隷との間に生まれた混血の私生児であった。農場主の娘が嫁に行くときに、結婚祝いとして贈られ、下働きをしていた。ハーンと出会う前にスコットランド人との間に私生児を生んだが、貧困に陥り、ハーンが下宿をしていた場所で料理人として働いていた際に二人は出会った。

<sup>82</sup> ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘他訳『ラフカディオ・ハーン著作集（第1巻）』（恒文社、1989）66

この記事自体が、マティの名前こそ伏せてあるものの、彼女が幽霊を見た体験談を聞き語りの記事にまとめたものであること<sup>83</sup>から、ハーンが混血のマティの霊的な魅力とともに彼女の「語り」に強く惹かれたとことが分かる。さらに、結婚後間もなく、ハーンが終生「Old Dad（私の老いた父）」と呼んだヘンリー・ワトキンへ、マティの写真を送り、彼女の肉体美と聡明さを情熱的に語って、新婚の喜びを伝えている<sup>84</sup>。

しかし、彼女との結婚はすぐに幕を閉じる。以下は間もなく彼女との結婚生活が破たんし、離婚へ向け協力してほしいとワトキンへ頼む苦悩の手紙である。

マティのことでは、あなたにはご想像がつかないほど私は苦しんでまいりました。  
(中略) 悪いのは自分なのだ、そもそも結婚したのが間違いだった、救ってやるつもりが以前よりも墮落させただけじゃないか、そう思えるのです。結婚さえしなければ、地獄へ落ちるにせよ、彼女の苦しみはずっと少なかったはずです。最近、彼女は大変よくないことをしています。(中略)

手をこまねいて彼女が身を滅ぼす様子を眺めているのはあまりにも卑怯です。残酷すぎます。あの子は可哀そうなくらい無力なのです。(中略)

小さな悲しい思い出が、次から次へと心の中に浮かんでいきます。可愛い歌を教えてくれたこと。打ちひしがれた私を何度も励ましてくれた。(中略)

マティは田舎へ帰り、じっとしていること、そうすれば私の生きているかぎり毎週五ドル送ることを約束する、ただし私の意志に逆らって町にとどまるかぎり、私からいかなる援助も認知も期待してはならぬ。彼女がこの町に居つづけても、わが身を滅ぼし、私をみじめにするばかりです<sup>85</sup>。

マティが混血であり、彼女の恵まれない境遇に同情すること、彼女を悲惨な状況から救い出してやりたいという思いから芽生えた愛情は、情熱的な恋愛に発展した。そして、ハーンは社会からの偏見や、自らを解雇した会社からの圧力に屈することなく、この愛を貫こうとした。しかし、結局マティは彼に物語を語り聞かせ続け、変わることなく寄り添っ

---

頁。

<sup>83</sup> 坂東浩司、前掲（註14）72頁。

<sup>84</sup> 坂東浩司、同上、61頁。

<sup>85</sup> ラフカディオ・ハーン、前掲（註58）401-402頁。

てくれるような献身的な女性ではなかった。彼女は身を持ち崩し、金をせびり、散財するようになる。そして最終的にハーンは苦しみながら彼女の元から去り、そしてニューオーリンズへと旅立っていくのである。この結婚の後、ハーンが書いた「たらいの中で恋をすれば、底が抜ける」からは、彼の結婚観を如実に読みとることができる。

情熱的な愛情が幸福な結婚生活を送るための欠かせない前提である、というのは真実ではない。結婚が情熱より、むしろ双方の理性に基づいて行われた場合にこそ、きわめて幸福な結婚生活を送れることが多いのである。（中略）

彼らは愛情より友情によって結婚するが、これは、お互いに相手の存在が自分にとって欠くことのできないものになるような愛情、決して冷めることなく、それどころか、時の経過とともにますます強固になるような愛情へと友情を深めていくような結合である。情熱という愛情は、麦わらと同じようにたちまち燃えつきてしまう。友情という愛情は燃えるのが遅く、進展するのにも時間がかかる。しかし、果実が最も豊かで美味な成熟を遂げるためには、時間も長くかかるのである<sup>86</sup>。

情熱的な愛情で幸福な結婚生活を夢見、結果的に苦汁を嘗めることとなったハーンが、その4年後に書いた文章であることを考えると、この上ない説得力が感じられよう。遠田勝氏がこの結婚について、「老人（ワトキン）の眼から見れば、これは畢竟、愛情に飢えきっていた、同情心の強い、偏見を知らぬ一人の青年が、若く美しい女の魅力に抗しきれなかったという、ただそれだけのことだった<sup>87</sup>」と推察しているように、幼くして母を失った青年ハーンが出会った、憐れむべき美しい女性マティは、わずかな時間自らの劣等感を忘れさせてくれ、自尊心を維持することができる存在であった。しかしながら、この情熱的な恋愛がもたらした結婚は、ハーンに永遠の女性を与えず、むしろそうした一過性の感情への冷静な視線を培わせた。

---

<sup>86</sup> ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘他訳『ラフカディオ・ハーン著作集（第2巻）』（恒文社、1989）34-36頁。

<sup>87</sup> 遠田勝「『大鴉の手紙』解説」ラフカディオ・ハーン、前掲（註58）413頁。

#### 4. 永遠の女性、小泉セツ

そして、来日までに、母親、祖国、左目、そして妻をも失ったハーンが日本で出会い、生涯を共にするのが小泉セツである。ハーンの著作の中で日本に関するものは、再話作品に限らず、直接的あるいは間接的に、妻セツが与えた影響が非常に大きいことは周知の事実である。梶谷泰之は「今日、セツの功績をたたえる人は少ないが、よく夫を扶けた典型的出雲婦人としてセツはもっと称揚されねばならぬ<sup>88</sup>」とし、ハーンがセツと結婚したことは、日本での14年の輝かしい業績に結び付くものだと指摘している。

セツがいかにハーンのアシスタント的役割を果たしたかについては、後程詳しく見ていくが、ハーンの著作の中で、多くの再話作品はもとより、日本に関するあらゆるものにセツが与えた影響は計り知れない。これは研究者のみならず、ハーン自身も認めている明白な事実である。ハーンにとってのセツとは、単にハウスキーパーとしての役割を担う妻ではなく、彼にとって、失われた左目とも言えるほど、彼の視野と可能性を広げた存在だと言えるのである。さらに言うならば、セツ自身は想像もしていなかったことであろうが、ハーンの理想的な日本女性像を彼の最も身近で体現した女性であったとも言えよう。日本に関する著作において、この意味で、セツを無視して語ることはできない。彼女はハーンにとって文字通り「永遠の女性」だったのである。

##### 4-1. サムライの娘セツと小泉家

ハーンとセツとの結婚には諸説あり、例えば二人の正式な結婚の時期や、二人にとっての西田千太郎の役割などについては、長谷川洋二『小泉八雲の妻』(1990)や池橋達雄氏「ハーンとセツの結婚」(2009)などにおいて、論じられてきている。これらの中で、ハーンとセツの出会いは、1891年1月下旬から2月上旬であったとされている。この頃、流行性感冒にかかり、長期間苦しんでいたハーンは、身体のみならず精神的にも追い込まれ、強度のノイローゼになっていた。それまで食事を始めとする全て世話を任せていた富田旅館にも不信感を募らせ、新たに彼の身の回りの世話をするため、富田旅館を介さない形で雇われたのがセツだったのである。そして、ハーンが抱いたセツの第一印象について、興味深い証言がある。それは以下の通りである。

<sup>88</sup> 梶谷泰之「文学者・作家・評論家 小泉八雲」島根県教育委員会編『明治百年島根の百傑』（島根県教育委員会、1968）379頁。

節子様の手足が華奢でなく、これは士族のお嬢様ではないと先生は大不機嫌で、私に向かってセツは百姓の娘だ、手足が太い、おツネさんは自分を欺す、士族でないと、度々の小言がありましたので、これには私も閉口致しまして種々弁解しましても、先生はなかなか聞き入れませんでした。しかし士族の名家のお嬢さんに間違いありませんので、間もなく万事目出度く納まりました<sup>89</sup>。

ハーンは、女中として「サムライの家の娘」を紹介されたのだが、手も足も太く、農家の娘にしか見えないセツを前に、自分は騙されているのではないかと感じたのである。ハーンが思い描いていた士族の娘—サムライの由緒ある家の出身で、大切に育てられた美しい女性—とは、かけ離れた女性を前に、「士族ナイ」「私ダマス」「ノー」と抗議した<sup>90</sup>という。だが、もちろんセツが士族の娘であることは偽りではない。彼女は1868年2月4日、小泉家の次女として生まれ、父親小泉湊は、かつて松江藩の三百石御番頭であった<sup>91</sup>。この小泉家において、家長小泉湊は、精気盛んな侍で、妻チエは14歳の時に嫁ぐまで30人もの奉公人に傅かれて育った<sup>92</sup>。まさに典型的な上級士族だったのである。また、セツの親戚を見れば、血縁的に多くの侍たちとつながっていたというのが以下のように指摘されている。

親戚と言えば、セツは事実上、出雲における高位の侍たちのすべてと、なんらかの血の繋がりがあったと言える。というのも、小泉の祖父岩苔は、幕末に中老に進んだ乙部堪解由家から、小泉家に贅養子に入ったものであり、この乙部家の本家である乙部九郎兵衛家こそ、出雲の、いわゆる代々家老七家の中でも、大橋家と並んで最も有力な家であった。(中略)

その上、セツの母の実家である塩見家も時に家老、時に中老を務める、いわゆる「不定家老」の家柄ではあったが、江戸中期の宝暦年間から幕末に至るまで、松江城三の丸御殿の前に、乙部本家に劣らぬ広大な屋敷を構えた有力な家で、セツの祖父に当たる塩見増右衛門こそ、その壮烈な諫死で出雲の歴史を飾った名家老であった<sup>93</sup>。

<sup>89</sup> 桑原羊次郎『松江に於ける八雲の私生活』(島根新聞社、1950) 66頁。

<sup>90</sup> 長谷川洋二『小泉八雲の妻』(松江今井書店、1990) 66頁。

<sup>91</sup> 梶谷泰之、前掲(註88) 379頁。

<sup>92</sup> 長谷川洋二、前掲(註90) 4頁。

<sup>93</sup> 長谷川洋二、前掲(註17) 45頁。

このように、セツは平凡な士族の娘ではなく、サムライの中のサムライの血を受け継ぐ女性であったことは明白な事実なのである。それでは、なぜ小泉家の次女セツの手足が太くならざるを得なかったのか。それはこれまでも指摘されてきているように、武士階級の没落に大きな原因がある。江戸期から明治期へと時代が変わり、その大きな社会の変動に、松江の士族たちは適応できなくなっていったのである。これについて、田部隆次の言及を見てみよう。

維新後、出雲には奮発家と云ふ新熟語が永く流行した。發奮して事業を起す人の事であつた。夫人の父も奮発家の一人となつて織物の工場を起したが、士族の商法が多く陥るべき運命に陥つて失敗した。名家の零落は悲惨である<sup>94</sup>。

このように、新しい時代の中で必死に適応しようとした小泉湊であったが、それは空しくも失敗に終わってしまったのである。このような流れを受け、セツの手足は太くなっていった。言い換えれば、彼女のそれは、貧しさを極めた家族への「孝」の気持ちを示すものであったのである。ここでいう「孝」とは、行為として当然示すべき思想である。つまり、武士が朱子学に基づき忠と共に重要視した「孝」の概念は、名家小泉家に生まれ、士族稲垣家で育ったセツにとって、ごく自然なものとして受け入れられていたと考えられる。たとえ没落し、その栄華はもはや見る影もなく、生きることに奔走しなければならない状況であったにせよ、まさに士族の血としてセツの中に流れていた感情であったに違いない。

そして、彼女の孝が向けられた対象は、3人の親と祖父である。というのは、上士小泉家に生を受けたセツは、生前から稲垣家に養子に出されるのが決まっており、生後間もなく稲垣家へもらわれたからである。いずれも士族ではあるが、両家とも、明治に入っては没落、零落の道を辿っていた。何事にも努力を惜しまず、気の強いセツは、学校を下ろされた後、学びたい気持ちを嘔み殺しながら<sup>95</sup>、稲垣家の家計を機織で支えた。こうして、彼女の腕や足は、否応なく太くなっていったのである。

<sup>94</sup> 田部隆次『小泉八雲全集 別冊』（第一書房、1929）235頁。

<sup>95</sup> セツが学校を下ろされた時のことについて、次のように記されている。「十一歳のセツには、貧乏の何たるかを真に理解することが出来なかった。彼女は泣きに泣いた。一週間も泣き続けたのである。女の子に学問は要らない。かえって害になると言って、セツを宥めようとした大人に、彼女は、紫式部や清少納言の例を引いて言い返し、悔しがるのであった。」桑原羊次郎、前掲（註70）42頁。

さらに、セツの初婚の相手である為二は、その貧窮に耐え切れず、大阪へ出奔してしまった。それを期に、婚姻関係の解消と小泉家への復籍手続きを申請した。そして稲垣家の両親の扶養の他に、息絶え絶えの小泉家の家系を繋ぐという孝の荷をも背負わなければならなかった<sup>96</sup>のである。

だが、別の見方をすれば、この「貧しさ」こそ、彼らを結びつける一つの要素となったと言える。

又たヘルン氏の妾は南田町稲垣某の養女にて、其実家は小泉某なるが、小泉方は追々打ちつぶれて母親は乞食とまでに至りしが、此の妾といふは至って孝心にて養父方へは勿論、実母へも己れの欲をそいで与ふる等の心体を賞して、ヘルン氏より一五円の金を与へ、殿町に家を借り受け道具等をも与へ爾来は米をも与ふることとなせりといふ<sup>97</sup>。

この文面からも分かるように、セツの実母を始め彼女を囲むすべての人々は困窮を極めていた。そして、セツを唯一の頼りとしていたのである。ここまで貧しかったからこそ、「洋妾<sup>ランヤメン</sup>」と後ろ指を指されることもいとわず、言葉も通じない西洋人の住込み女中になったのである。

そして、ハーンは女中として懸命に働くセツの姿に、かなり早い段階で特別な感情を抱くことになった。同僚西田千太郎から聞かされた小泉チエの困窮ぶりに、ハーンが救済の手を差し伸べるのは当然の成り行きであった。この記事が書かれた6月中旬頃には、セツと同居をしながらも別の女中を雇い入れていたことから、ハーンにとってのセツはもはや女中ではなく、「妻」だったのである。ここで、彼らの結婚について梶谷泰之氏の指摘を参照したい。

ハーンはセツが初婚に失敗した不幸な士族の孝行娘であることを西田千太郎教頭から紹介され、自分の生母ローザのあわれな場合も思い合わせて同情し、実の弟のごとく信頼していた西田教頭の推薦を信じて結婚したというのが実情であると解したい<sup>98</sup>。

<sup>96</sup> 長谷川洋二、前掲（註90）53頁。

<sup>97</sup> 坂東浩司、前掲（註14）325頁。

<sup>98</sup> 梶谷泰之、前掲（註88）379頁。

このように、サムライの娘セツが農家の娘のような外見をしていることは、近代化の犠牲者とも言える彼女の身の上からくるものであることを知ったハーンは、セツの手足を以て日本の「孝」を理解した。さらに言えば、単に作られた日本女性のイメージからではなく、現実を何とか生き抜こうとするセツの健気さから、彼は幸運にも日本女性の本当の美しさに出会うことができたのである。

事実、ハーンは彼女の手足の太さを後々まで、セツの親孝行の証拠としてあげるようになった。そして、決して細身ではない若かりし頃のセツに向かって「私マイリットルファットヘンの小さい肥った雌鶏」「小餅のママ<sup>99</sup>」などと呼び、小さく弱く、愛おしいものとして熱愛するようになるのである。

#### 4-2. 母なるセツ

ハーンと意思疎通を図るため、当初セツはハーンから英語を学ぼうとした。「トマール（明日）」、「トーナエタ（今晚）」、「シペーキ（言）」、「シレーペー（ねむた江）」、「ワエン（酒）」など、セツの『英語覚え書帳』には出雲訛のカタカナが羅列されている<sup>100</sup>。中でも、仲睦まじい様子が伺えるのは、ハーンがセツに、「ユオ・アーラ・デー・スエテータ・レトル・オメン・エン・デー・ホーラ・ワラーダ（You are the sweetest little woman in the whole world. あなたは全世界で一番かわいい女です）」と書きとらせたことであろう。ところが結局、この試みは中断され、「この特別な日本語は、日本人の友人たちのどんなに上手な英語よりも、ヘルンにとって分かりやすいということになりまして、私の日本語をいつも喜んでくれました<sup>101</sup>」とセツが振り返っているように、いわゆる「ヘルンさん言葉」によるコミュニケーションへと移行する。しかしいずれにせよ、セツの極めて献身的な態度は、ハーンの心を打ち「日本女性は何という優しさでしょう！一善性に対する日本民族の持てるあらゆる可能性は、女性に凝集しているように思われます<sup>102</sup>」とチェンバレンに書き送ったハーンの理想的女性像へつながっていく。

そして、彼女との結婚生活はチェンバレンに以下のように伝えられる。

午前六時——小さな目覚まし時計が鳴る。妻が起きて、昔の侍の時代のような礼儀

<sup>99</sup> 小泉一雄「父『八雲』を憶う」小泉節子、小泉一雄『小泉八雲』（恒文社、1989）299頁。

<sup>100</sup> 長谷川洋二、前掲（註17）vi-xxxvi頁。

<sup>101</sup> 長谷川洋二、同上、162-163頁。

<sup>102</sup> ラフカディオ・ハーン、斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集第14巻』（恒文社、1992）413頁。

正しい挨拶をして私を起こす。(中略) 他の部屋では、小さな灯明が先祖の位牌と仏様(神道の神々ではない)の前にもともされていて、お勤めが始められ、先祖へお供えをする。(中略)

午前七時——朝食。(中略) 妻が給仕をする。私はいつも妻と一緒に食べるように言うが、あとで家族一同の朝食にも出なければならぬと言って、少ししか食べない。(中略) 私は洋服を着始める。はじめのうちは、妻が着る物をひとつずつ順序よく渡し、ポケットにも気を配るといった日本風の習慣がいやでした。これでは怠惰になってしまうと思ったのです。しかし、それに反対しようとしたら、妻の感情を害し、楽しみを損ねていることに気づきました。それで古い習慣におとなしく従っています。(中略)

午後八時——(中略) 皆が私が寝る時間の合図をするのを待っている。(中略) 女中たちは畳に手をついておやすみなさいの挨拶をする。それからまったく静かになる。

眠りにつくまで時々読書をする。(中略) いつも妻は昔の習慣に従って、「失礼して先に休ませて頂きます」と言う。そんな言い方は控え目すぎると思って、一度は止めさせようと思いました。しかし、結局は、そういった習慣は美しく、また、魂の中にしみ込んでいるので、止めさせることはできませんでした<sup>103</sup>。

(下線は筆者)

このような結婚生活は、それまで一人で世界を放浪していたハーンにとって非常に不思議で、かつ喜ばしい幸せなものであったことは想像に難くない。古い風習に従う小泉家という小世界に身を置き、その家長として敬われたハーンは、それまでに感じたことのない安心感を抱くことになる。

そして、1893年の長男一雄の誕生は、ハーンにそれまでにない責任感を与え、新たな生命を生み出したセツへの畏敬の念を抱いた。「よい眼をもってこの世に来てください」と心配し続けたハーンは、長男誕生の喜びようは尋常でなく、ヘンドリック宛の手紙に「自分の子供を産んでくれた女性に対して残酷な態度をとる男もいるのだということを考えると驚くほかになく、しばらくの間、世の中が真っ暗に思えました<sup>104</sup>」と記し、自らが帰化し法的

<sup>103</sup> ラフカディオ・ハーン、斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集第16巻』(恒文社、1992) 45-48頁。

<sup>104</sup> ハーンはヘンドリック宛の手紙に次のように書いている。「実は昨夜私の児が生まれた訳です。(中略) 私はこの経験を通して児を生むといふことは如何に神聖なことであり、又如何に恐ろしいことであるかを学んだのみならず、如何なる宗教の力をもってするも十分にこれを加護し得るもので無いという事実を知ったのであります。次に私は男子が女子に対して一彼らの児を生んでくれるところのその女子に対

に婚姻することを決意する。

この後も、セツは合計 3 人の息子（一雄、巖、清）と、娘（寿々子）を産み育てる。母親の存在を知らずして育ったハーンは、ここで初めて母の姿を見るのである。しかし、ここで注目に値するのは、長谷川洋二氏の以下の指摘である。

結婚生活の初めの段階では『献身的な妻』も『奉公』の性格を帯び、体が衰え気弱になりがちなハーンの晩年には、強い母性愛を夫に注ぐ妻であった。結婚生活全体を通じて、養母に子供の身の世話まで委ね得たこともあって、朝目を覚ましてから夜眠りに落ちるまで、小さな子供を持つ女と同じ程度に、ハーンのことを頭から離れなかったというべきであろう<sup>105</sup>。

（下線は筆者）

この指摘のように、セツの母性愛というものは、一雄をはじめとする子どもたちに向けられただけでなく、むしろハーンの方へより強く注がれたとみなすこともできる。小泉一雄が「あれほど父に献身的であった母」、「献身的であった母」と繰り返す<sup>106</sup>のも、セツの意識がハーンに向けられていたことを示している。ここには、英語のレッスンを受けるわずか 10 歳の一雄に、「いやな顔志て、たいぎなふうしては、いけませぬよ、（中略）父上の御気にさわらぬよふに、何事も気を付て下されよ」と手紙を書き送ったセツの姿が見取れる。

従って、ハーンは子どもたちの世話を実質的に担っていたセツの養母トミからも母性愛を感じるようになる。例えば一雄を背負ったトミが神社の石段で躓き、一雄を守るために自身の顔を犠牲にしたのである。生涯残る右頬の大きな傷に、ハーンは深く感動し、「おばあさんの話」に「この上なく愛情深く、利己心の欠片もなく、お構いなしになられる自己犠牲への見返りなどを、頭の片隅にもおかない……古い日本の典型的な女性」として書き記されることになる<sup>107</sup>。

このように、トミが子どもたちに目を配ったお蔭で、セツは夫に献身することができた。

---

して一どうしても残忍であり得るのかと自ら呆れたのであります。私はこの時世界が全然闇黒であるかの如く考えました。」小泉八雲著、田部隆次編『小泉八雲全集第 11 巻』（第一書房、1926）86 頁。

<sup>105</sup> 長谷川洋二、前掲（註 17）209 頁。

<sup>106</sup> 小泉一雄は『父「八雲」を憶ふ』（警醒社、1931）や『父小泉八雲』（小山書店、1950）の中で、度々母セツのことをこのように形容している。

<sup>107</sup> 長谷川洋二、前掲（註 17）172 頁。

特に、晩年のハーンに対してはセツが非常に神経を使ったことが知られている。長谷川洋二氏はこれについて、「三五歳であったセツが、いかに強い母性愛で衰えゆく夫を包んだかは、ハーンがしばしば幼児心理に陥った事実からも窺われる」とし、セツの語った以下の文章を引用している。

亡くなる前の一、二年、ハーンは、心細さの圧迫にほとんど耐え得ぬようでした。ものの半日も私から離れていなければならないというだけで、すぐに心に生じます幾分のすねた気持ちを、一生懸命に隠そうと努めているのが、私にはいつも分かりました。しばらくの間私が外出しております時も、私を求めて、待ち望み待ち焦がれ（中略）私の下駄の音を聞きつけるとすぐに「ママさんですか。なんぼ喜ぶ」と言って、急いで玄関に迎えに出たものでございます<sup>108</sup>。

これらのことから分かるのは、セツは、子どもたちにとっての母であっただけでなく、夫ハーンを精神的に支えるため、母性愛を彼に向け慈しみ続けたということである。それは、彼の著作全体に現れる理想的な女性像に強く反映されていることはいままでもあるまい。以下からは、語り部としてのセツの貢献に注目するが、それ以前に、セツは自身を以てハーンにひとつの女性像を示し続けたということ、ここで確認しておきたい。

#### 4-3. 献身的な語り部—再話活動の深化—

日本語を体系的に学ぶ機会を得なかったハーンと、小学校を途中で下げられ、英語を全く知らないセツとの間で交わされた特別な日本語は「へるんさん言葉<sup>109</sup>」と呼ばれる。彼らの子どもたちですら、「内のパパとママとは、だれにも解らない不思議な言葉でだれにも解

<sup>108</sup> 長谷川洋二、前掲（註17）、246-247頁。

<sup>109</sup> 日本語能力の決して高くないハーンと、妻セツとの間で交わされた日本語、いわゆる「へるんさん言葉」については金沢朱美「『へるんさん言葉』再考—その特質とピジン性の検証』『日本語と日本文学 36』（筑波大学国語国文学会、2003）、『へるんさん言葉』における小泉セツの調整日本語—書簡におけるフォリナー・ライティングならびに口述筆記録に残るフォリナー・トーク』『小出記念日本語教育研究会論文集 14』（小出記念日本語教育研究会、2006）などの研究がある。なお、セツは「思い出の記」の中でハーンとの会話を記している。ここに、その一部を示す。「『面白いのお寺。ママさん、私この寺にすわる、むつかしいでせうか。』『あなた、坊さんでないですから、むつかしいですね。』『私坊さん、なんぼ、仕合せですね。坊さんになるさへもよきです。』『あなた、坊さんになる、面白い坊さんでせう。眼の大きい、鼻の高い、よい坊さんです。』『同じ時、あなた比丘尼となりませう。一雄小さい坊主です。如何に可愛いでせう。毎日経読むと墓を弔ひするで、よろこぶの生きるです。』」小泉節子「思い出の記」『小泉八雲』（恒文社、1989）16-17頁。

らない神秘のことを話している<sup>110</sup>」と言うように、最終的に二人はこの「へるんさん言葉」で非常に複雑なレベルまで意思疎通ができていた。そしてこれこそが、ハーンの再話活動の最も重要なツールとなった。それは再話作品の多くが、セツによって収集され「へるんさん言葉」によってハーンに伝えられ、二人の間で綿密に議論され、描き出されたものだからである。

セツがハーンに語り聞かせた最初の物語は、「鳥取の布団の話」だという説がある。そして最終的には「耳なし芳一」、「雪女」といった大作まで、いくつもの作品を「へるんさん言葉」で紡ぎあげていったのである。もちろん、それは決して容易な作業ではなかった。セツ自身、「英語どころか日本語さえ正しく話せなかった若い頃の事だもん、何を話したらえ、やら判らんで、真に困った事もあったがね<sup>111</sup>」と長男一雄に話したという。これは、息子に聞かせた母の本音であっただろう。セツは幼い頃から話好きであったと言われているが<sup>112</sup>、覚えている話を伝えようにも、話す相手と意思疎通がまともにできないことは、セツを非常に苦勞させたと思像できる。しかし、妻は夫の要求に応えつづけた。以下は、セツがハーンとの再話活動を振り返っている文章である。

怪談は大層好きでありまして、「怪談の書物は私の宝です」といっていました。私は古本屋をそれからそれへと大分探しました。淋しそうな夜、ランプの心を下げて怪談をいたしました。(中略) 聞いている風がまた如何にも恐ろしくてならぬ様子ですから、自然と私の話にも力がこもるのです。その頃は私の家は化物屋敷のようでした。私が昔話をへルンにいたします時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと、「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」と申します故、自分の

<sup>110</sup> 萩原朔太郎「小泉八雲の家庭生活」『ちくま日本文学全典 18 萩原朔太郎』(筑摩書房、1991) 337 頁。

<sup>111</sup> 小泉一雄『父小泉八雲』(小山書店、1950) 118 頁。

<sup>112</sup> セツは元来物語好きであったため、よく周囲の人々に「お話してごすなさい」とせがんだ。そして、彼女を満足させたのは養母トミ、養祖父万右衛門、それから波乱に満ちた人生を送った小泉家の人々であった。トミは出雲大社の社家で、代々上級神官を務めて来た高浜家で育ったこともあり、さまざまな話をセツに語って聞かせた。それは出雲の古い神々、霊、生きた人間の魂、祈祷、神楽囃など、後にハーンが知りたがるような多くの話であった。また万右衛門は幕末に生きた松江の侍として、当時の様子や政府の動向などをセツに語って聞かせた。さらに、実祖父が主君を諫めるためハラキリをし、その悲壮な死は芝居にもなったこと、また、実母チエが高位の侍の家に嫁ぐはずが、初夜に結婚相手が恋人と庭で心中をしたことなど、家族の壮絶な出来事は彼女の中に刻み込まれることとなった。これらのことは、セツという女性が松江藩の士族、小泉家の娘であったからこそ培われたものであると断言してもいいだろう。小泉一雄、同上、117-118 頁。

物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。

(中略)「アラッ、血が」あれを何度も何度もくりかえさせました。

どんな風をしていったでしょう。その声はどんなでしょう。履物の音は何とあなたに響きますか。その夜はどんなでしたろう。私はこう思います、あなたはどうぞ、などと本に全くないことまで、いろいろと相談いたします。二人の様子を外から見ましたら、全く発狂者のようでしたらうと思われませう<sup>113</sup>。

この様子から、セツはハーンにとって単なるストーリーテラーではなかったといえよう。セツは夫を援けるため、彼が求める物語を探し続けた。それを10年以上も続けたセツは、ハーンを理解するように、彼の求める「日本」も理解していったに違いない。つまり、ハーンが求めた「永遠の日本」の第一発見者の役割を担っていたと言える。

さらに、本を見ながら語ることを禁じ、セツに物語の筋を暗記させ、「へるんさん言葉」で語らせたハーンの意図は、原話の中で、そのどの部分がセツの心に残るものなのかを重要視していたと見ることができる。セツの中に描かれた世界が、文字を追うことではなく、音として伝えられることに、ハーンは意義を感じていた。例えば、『怪談』*KWAIDAN* (1904) に収められている「耳なし芳一」を創作する際、武士が呼ぶ「門を開け」というセリフを、最終的に「開門」と修正し耳に響く凄みを増したことはよく知られたことである。これについて池田雅之氏は、ハーンの目の悪さと日本語能力の低さが皮肉にも創作活動には幸いしたとして、次のように述べている。

八雲の文学は、口承文芸の伝統を受け継ぐ「耳の文芸」であるともいわれている。八雲の文学は、どちらかという目と訴えかける視覚的な活字の文芸（近代文学）というより、昔ながらの聴く者の耳に訴えかける聴覚的な声と耳の文芸なのである。口承文芸とは、語り手の口と聴き手の耳との共振・共鳴作用によってはじめて成り立つ言語空間といってよいから、八雲はその意味において、近代における口承文芸の正当な嫡子といってよかろう<sup>114</sup>。

暗闇に薄明かりを灯し物語について議論する二人は、まさに「不思議な言葉」で「神秘

<sup>113</sup> 小泉節子、前掲（註109）、21-22頁。

<sup>114</sup> ラフカディオ・ハーン著、池田雅之編『妖怪・妖精譚』（ちくま文庫、2009）539頁。

のことを話」しているように映ったことだろう。「天の河」を再話する際には、ヘルンもセツも、「泣いて話し泣いて聞いて、書いた<sup>115</sup>」のであるから、時には「発狂者」のようであったことは想像に難くない。

さらに、セツは単に物語を語ることだけではなく、細かな気遣いで彼を物語の世界へと導いていく。

この『耳なし芳一』を書いています時のことでした。日が暮れてもランプをつけていません。私はふすまを開けないで次の間から、小さい声で、芳一芳一と呼んで見ました。「はい、私は盲目です、あなたはどなたでございますか」と内からいって、それで黙っているのでございます。(中略) またこの時分私は外出したおみやげに、盲法師の琵琶を弾じている博多人形を買って帰りまして、そっと知らぬ顔で、机の上に置きますと、ヘルンはそれを見るとすぐ「やあ、芳一」といって、待っている人にでも遇ったという風で大喜びでございました<sup>116</sup>。

彼女は、夫が執筆活動に入ると、全く周りが見えなくなることや、子供のように物語の世界に入り込んでしまうことを面白く感じ、小さいいたづらをしたつもりであったかもしれない。だが、この何気ない行動は、ハーンに新たな言い回しや表現の方法を思い浮かばせ、短い物語を再話という形で生き生きと甦らせることに貢献したのだと考えられる。

ハーンの晩年の再話の傑作への助走としての意義を持つ<sup>117</sup>初期の「小豆磨ぎ橋」、「水飴を買う女<sup>118</sup>」から、『怪談』、『骨董』などに収められる大作を概観すると、時間の経過と共に作品自体も深みを増していくことが分かる。そしてそれは、二人の関係の深まりを意味するものであるとも言えよう。

このように、セツはハーンにひとつの女性像を提示し続けただけではなく、実質的なアシスタント、すなわち語り部として彼に貢献していくことになる。これに関連して、ハーンとセツの会話について、小泉一雄は以下のように振り返っている。

---

<sup>115</sup> 小泉節子、前掲（註109）24頁。

<sup>116</sup> 小泉節子、同上、23頁。

<sup>117</sup> 池田雅之『ラフカディオ・ハーンの世界』（角川芸術出版、2009）56頁。

<sup>118</sup> これらの作品は、1891年5月26日に普門院の住職から聞いた話だとされている。梶谷泰之『へるん先生生活記』（恒文社、1998）70頁。

「妾が、女子大学でも卒業した学問のある女だったら、もっともってお役に立つでしょうのに……」と母が申すと、父はいつも母の手を執って戸棚の傍へ連れて行き、その襖を開けました。戸棚の中にはガラス張りの本箱が一つあってこれには父の著書が金文字の背をツラリと並べているのでした。これを指して「斯、誰のお陰で生まれましたの本ですか？学問ある女ならば、幽霊の話、お化の話、前世の話、皆馬鹿らしいものといって嘲笑うでしょう」と申して、母が面映がるほどに父はその場で母の労を賞揚するのです。傍にいる私に向ってまでも「この本皆あなたの良きママさんのおかげで生まれましたの本です。なんぼうよきママさん。世界で一番良きママさんです」などと申して、真剣に褒めそやすのでした<sup>119</sup>。

ここから分かるのは、再話におけるセツの貢献を最も痛感していたのがハーン自身であるということである。ハーンにとってのセツとは、単なる妻にとどまらず、日本理解に多くの示唆を与え続けた女性であり、執筆活動において事実上欠くことのできない存在であったことが分かる。

ここまで見てきたように、サムライの娘でありながら、それに相応しくないセツの外見に、ハーンは日本女性の孝の精神を見いだした。そして家長を敬う従順な姿と、母性的な愛情でハーンを包もうと努めるセツの姿は、いうまでもなく、彼の理想的な日本女性像に深く影響を与えたと言える。

---

<sup>119</sup> 小泉一雄、前掲（註 111）166 頁。

## 5. 本論文の目的と構成

ラフカディオ・ハーンの日本における著作といえば『知られぬ日本の面影』 *Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894) から始まり、『怪談』 *Kwaidan* (1904)、『日本——一つの解明』 *Japan: An Attempt at Interpretation* (1904) などがよく知られたところである。中でも、著作の中に点在する「再話作品」は他の外国人がなしえなかった業績であり、今日ハーンの再話が原話を凌ぐ形で受け入れられていることは周知の事実である。

これまで述べてきたように、ハーンが古い日本の物語を現在でも広く受容される形で書き残すことができたのは、彼が「旧日本への愛」とグローバルな視点を持ち合わせていたからだとされ、日本を深く愛し、理解し、共感のまなざしを忘れなかったからだと言われてきた。その一方で、ハーンは最後まで日本人を「理解不能な存在」と見なし、そのユニークな側面を強調し続けたこと、言い換えれば、ハーンによって描かれた「日本」とは、日本を極東のエキゾチックな国として捉えようとする 19 世紀ヨーロッパの風潮に合わせるような特異性、異質さが存在しているとも指摘されてきている。

ハーンを「日本の理解者」とするか、「自らの中にある理想郷としての日本を描いた者」とするかといったこの論争は、平川祐弘氏、太田雄三氏のそれを始め今なお続いているものであるが、ここで問題となるのは、ハーンをどういった視点から見るといことであろう。池野誠氏は、ハーンの評価が二極化していることについて、「彼を単に文学者と見るか、あるいは日本学者と見るかではその評価に大きな相違が出る<sup>120)</sup>」とし、「ハーンを中心の業績が文学作品であって、日本を解釈する日本研究はその副産物にすぎない(中略)ハーンは骨の髄まで文学者であったが、必ずしも正統的な日本学者ではなかった<sup>121)</sup>」と結論づけている。ハーンのように多くの異なった業績を残した人物について考えるとき、そのどの側面を語るのかという問題は極めて重要な前提である。しかしこの論を難しくしているのは、西洋人ハーンが書いたものが「日本の」古い物語であり、それが当時の、そして現在の読者に「日本の」物語として受け入れられているという現実である。すなわち、彼の著作の中で日本に関する客観的な考察を、正統的な日本学者とは認められないとするのは容易であるが、こと再話作品となると、それが文学的要素が極めて強いものであるがゆえに、物語が優れていればいるほど、日本学者としての側面へも否応なく関心がいつてしま

<sup>120)</sup> 池野誠『小泉八雲と松江時代』(沖積舎、2004) 264 頁。

<sup>121)</sup> 池野誠、同上、273-274 頁。

うのである。いうなれば「日本の物語」である再話作品を取り扱うとき、これらの二つの側面は区別できるものではない。それは日本を理解しその姿を西洋に発信しようとするハーンの誠実な態度が、再話の中に反映されているからである。文学者ハーンについて、その日本学者への試みを無視して考えるのではなく、その両側面を考慮しながら一つ一つの再話を読み直す作業こそ、必要なのである。

彼は、近代化・西洋化の基盤を整えた明治中期の日本に生き、物語の題材をセツが幼い頃に聞いた話から、新聞、そして晩年には既に光を失いかけた近世の物語に求めた。それらの再話作品は、当然原話とは異なっており、その描き直しの過程にハーンの思想が強く反映されていることは言うまでもない。したがって、再話作品は日本学者にはなれなかった文学者ハーンが、自らの理想や道徳観を表現し、西洋へと発信し続けていった場であるとみなすことができるのである。

また、この問題について考えるとき、彼が19世紀を生き、その時代の西洋人読者へ向け著作を発信し続けていたという事実を蔑ろにしてはならない。前述の通り、19世紀とはジャポニズムが興り、それが隆盛を極めた時期である。1854年に日本が開国すると、多くの西洋人が極東の地日本に関心を寄せた。1867年のパリ万博には江戸幕府、薩摩藩、鍋島藩が参加し、日本の出展品は熱狂的に迎えられ、1872年にはサン＝サーンスが日本を題材にしたコミック・オペラ『黄色い皇女』を上演、以後日本を題材にした音楽劇が大流行するに至った。1875年にはモネが白人女性モデルに着物を着せたジャポニズムの典型ともいえる「ラ・ジャポネーズ」を制作し、1887年すなわちハーン来日3年前には、ロティが『お菊さん』を出版した。すなわち、あらゆる分野で「日本」が一つのテーマとして扱われていた時代だったと言えるのである。また、ジャポニズムにおいて「日本女性」の占める割合が高かったことについても既に述べてきた通りであるが、ハーンの再話もその例にもれず、女性が物語の中核をなす作品が少なくない。これは、それは、ハーンが自らを「女性崇拜者<sup>122</sup>」であるとし、アメリカ時代から女性についての文章を書き続けた<sup>123</sup>こと、そして来日後も「女性」が一つの大きな関心であり続けた、いうなれば、彼の中でそれが一貫し

<sup>122</sup> 坂東浩司、前掲（註14）、80頁。

<sup>123</sup> 彼がアメリカ時代に書いた記事の中から、女性がタイトルに出ているものを挙げてみよう。「あの修道女」、「女性の好奇心」、「女の眼」、「浅黒い美人」、「妻と愛人」、「薄絹を脱ぎし美女」（いずれも『インクワイアラー』紙）、「シンシナティの二人の淑女」（『コマーシャル』）「未熟な娘たち」、「婦人投票権」、「自立する妻」、「女性について」、「女性虐待の防止」、「魔女」、「洗濯女」、「女性の影響」、「クレオールの中」、「女と馬」、「鳥と少女」、「女性は喫煙するだろうか」（いずれも『アイテム』紙）、「インドの女流詩人たち」、「女刺客」（いずれも『タイムズ・デモクラット』）等枚挙にいとまがない。その他、売春、貞節などがタイトルになっているものもある。

たテーマであり続けたことに加え、ジャポニズムという時代の流れに乗じる形で、意図的に女性を組み込んでいたと見ることができる。そして、再話作品とその原話を、それが描かれた時代を考慮しながら比較していくと、現実の日本社会への理解が不十分であった、あるいは現実の日本社会をありのままに描き出すことができなかつたというハーンの限界を見てとることができる。とりわけ、美しき日本の姿が女性の中に描かれる際、そのあまりの美化と物語の成り行きに、意外性を感じてしまうことは否めない事実である。そしてそれらは、あくまでもハーン個人の中に存在した理想像なのではないかという疑問が浮かび上がってくるのである。

しかし、当時三文文学として投げ売りされ、忘れ去られてしまった多くのジャポニズム文学とは一線を画す形で、現在でも広く受け入れられている彼の作品には、それらとは異なる意義を見出すことができるだろう。ここで想定できるのは、「描き直し」の過程で強められた典型的日本女性のイメージが、単なるハーンの個人的な理想的女性像の反映ではなく、それまでのジャポニズムの流れによって構築された日本女性像への挑戦であったのではないか、ということである。

そこで本研究では、文学者ハーンが、また過渡期の人ハーンが、日本の物語をいかに再話したのか、そこに登場する女性たちにどのような任務をどういった理由から担わせ、19世紀の読者へと送り出していったのかを追究する。そして、これまで多く注目されてこなかった作品を含む10作品を読み解いていく<sup>124</sup>。第I部では、『東の国から』*Out of the East* (1985) 『心』*Kokoro* (1986) に収められた3作品を、そして第II部では、『影』*Shadowings* 1900 『日本雑録』*A Japanese Miscellany* (1901)、『骨董』*Kotto* (1902)、『怪談』*Kwaidan* (1904) に収録された7作品を取り扱う。

第I部で取り上げる比較的初期に書かれたものは、新聞記事を題材にした作品で、第II

<sup>124</sup> 例えば、「雪女」はハーンの「女性もの」の代表作の一つであるといえる。これまで、人間離れた美しさを持つ「お雪」像に関して、また、穏やかな安らぎの空間で過ごす「巳の吉」と「お雪」そして子どもたちの姿について、多く注目されてきた。牧野陽子「ラフカディオ・ハーン『雪女』について」『成城大学経済研究 (105)』(成城大学、1989)、北川八十四「Lafcadio Hearnの美学と『雪女』:その心性の在処」『サピエンチア:英知大学論叢 32』(聖トマス大学、1998)、平川祐弘「小泉八雲の民話『雪女』と西川満の民話『蛭の女』の里帰りーグローバル化とクレオリゼーションのはざまから」『比較文学 44』(日本比較文学会、2001)、大澤隆幸「雪女はどこから来たか」『国際関係・比較文化研究 4(1)』(静岡県立大学、2005)、遠田勝「辺見じゅん『十六人谷』伝説と『雪女』-『人に息を吹きかけ殺す』モチーフと民話の語りにおける伝統の創出(その一)」『近代 107』(神戸大学、2012)、牧野陽子『『雪女』の“伝承”をめぐって:口碑と文学作品』『成城大学経済研究 201』(成城大学、2013)など枚挙にいとまがない。「雪女」の「お雪」には、ハーンの理想的女性像が反映されていることは言うまでもなく、例えば、「お雪」が最後に子どもたちを見下ろすシーンは、ハーンが幼い頃の記憶として挙げている「自分を見下ろす母ローザ」の姿に重なる。本研究では、ある種、語り古された作品ではなく、これまであまり注目されてこなかった作品に、どういった女性像を見ることができるのかを追究したい。

部のものは再話活動が本格化した晩年に近い時期に書かれたもので、近世の物語を原話とし、その作風や描かれる女性像も次第に変化を見せていく。これらの作品について、原話と再話を比較し、当時の日本社会、風俗などを踏まえ論じることによって、再話の中に描きなおされた女性たちの持つ意義に迫る。そして来日前ジャポニスム文学に強く影響を受けたハーンが、来日後、心酔、絶望、覚醒といった実体験を経ることにより、いかに、それらと対峙する形で、新たな日本女性のイメージを提示し続けたかを浮き彫りにする。

## 第Ⅰ部 ジャポニスム文学への挑戦

### はじめに

第一部では、『東の国から』（1895）及び『心』（1896）に収録されている作品の中から、「勇子—一つの追憶—」、「赤い婚礼」、「きみ子」の三作品を取りあげる。これらは物語の題材が、第Ⅱ部で扱うような日本の近世の物語ではなく、実際に起きた事件、すなわち新聞記事等から着想を得たもので、物語の舞台も明治期日本にある。

1854年の開国から始まった日本の近代化は、それまでの日本社会を大きく揺るがしていた。明治時代はまさに、激動の時代だったといえる。それは女性を取り巻く環境も例外ではなく、明治維新の変革により彼女たちの生活も大きな変化を見せた。1872年に発された「学制」は、女性にも学ぶ機会を与え、教育を受けた女性たちは徐々に行動範囲を広げ、伝統的な生活習慣や意識を変えていくこととなった。富裕層に属する女子であれば、教育を受けることで新しい生き方を選択し得る機会となったし、当初は働き手である女子に教育を受けさせることを渋った農村の人々も、次第に娘たちを教育の場へ送り出すことになっていった<sup>125</sup>。「マリア・ルーズ号」事件を契機として起った廃娼運動もまた、明治の一大事件であった。この運動が公娼制度の廃止へ直結し、即座に女性たちが解放されたというわけではなく、その後の長い闘いへとつながっていったに過ぎないものではあるが、それでもその口火を切ったという意味で、大きな一歩であったと言える。こうした流れの中で、新たな女性の生き方が出てくる。樋口一葉「にぎりえ」（1850）や「たけくらべ」（1896）、与謝野晶子『みだれ髪』（1901）など、文学作品にもさまざまな女性の姿が、また、女性の手によって描かれる時代となった。

こうした明治時代にある日本社会を背景にして書かれたのがここで扱う三作である。これら比較的前期の作品には、ジャポニスムの流れに乗じる形でエキゾチックな国としての「日本」、不可解な存在としての日本人描写が描かれていく。そこには、日本語能力が決して高くなかったハーンが日本社会を把握できていなかったこと、そして、限られた情報網の中での執筆活動が、時に物語の成り行きを不自然なものとしてしまっていることが読み取れる。さらに、来日前、日本に関する多くの書物や、ジャポニスム文学に触れてきたハーンの東洋への憧れ、異国趣味といったものが浮かび上がってくるのである。しかしなが

<sup>125</sup> 女性史総合研究会編『日本女性生活史第4巻』（東京大学出版会、1990）67頁。

ら、「勇子」の主人公<勇子>や、「赤い婚礼」の主人公<およし>が近代的な教育を受けた女性であること、そして<およし>が選んだのが鉄道自殺であったことなど、明治期の日本の風景が読み取れることも見逃してはならない。

ハーンの本格的な再話活動の前段階であると位置づけることもできるこれらの作品は、しかしながら、それまでのジャポニスム文学への挑戦であると見ることができる。ジャポニスム文学の代表としては、ピエール・ロティの『お菊さん』や、ジョン・ルーサー・ロング『蝶々夫人』などがある。これらは西洋へ送り出された日本画に描かれた遊女たちが日本の典型的な女性像として定着していったのと同じ効果を与え続けていた。それは日本女性を芸者や高級娼婦と関連付け、男性を拒むことができない存在として、言い換えれば男性が自由に扱える存在として描きだすことであった。

明治中頃に来日したハーンは、これらの作品とは一線を画すものを描きたい—彼のことを借りるなら、それまでの作品に「いのち」と「味わい」を付加したい—と考えていた。この明確な目的は、これら前期の再話作品からも十分に感じることができる。

前述の通り、ハーンの中にある異国趣味が時に過度に強調され（これは単にハーンの自己満足のためではなく、西洋人読者の固定された日本認識像へ合わせる形で行われた部分も大いにあるだろうが）、物語のつじつまが合わなかったり、不自然なものとなっていることも否めない。しかしながら、これらの物語はそれと同時に、「西洋の男性」、「日本ムスメ」、「かりそめの結婚」、「混血児の誕生」、「一方的遺棄」といった、いわばジャポニスム文学の定型からの脱却を図ろうとするハーンの試みを読み取ることができるのである。その結果、男性に従う女性ではなく、自らの意志で決断し、行動する女性たちが描かれることとなった。これについて、第I部では、国のために自殺する<勇子>、初恋の相手と鉄道自殺を図る<およし>、また愛する男性のために身を引く<君子>が描かれた三作品に注目する。

日本に心酔していた松江時代から、近代化に邁進する日本に絶望した熊本時代にかけて描かれたこれらの作品に注目し、ハーンの中にある異国趣味やある種の限界にも目をむけつつ、これらの作品に込められた意義を浮き彫りにする。

## 第一章 国のための自害、〈勇子〉—異国趣味の投影—

### 第一節 ジャポニズムの中の物語

「勇子—一つの追憶—」 *Yuko: A Reminiscence* は『東の国から』 *Out of the East* (1895) に収められた作品で、1891年5月11日に滋賀県滋賀郡大津町（現大津市）で起きた傷害事件いわゆる「大津事件」を背景に描かれた作品である。日露関係を揺るがしかねないこの事件に心を痛めた天皇陛下のため、〈勇子〉という一人の女性が命を絶つという物語で、この女性もまた、畠山勇子という実在の人物がモデルとなっている。

大津事件と畠山勇子へ強い関心を持ったハーンが、これらについて記したのはこの作品だけではなく、後に『仏の畠の落穂集』 *Gleanings in Buddha-Fields* (1897) の「京都紀行」 *Notes of a Trip to Kyoto* においてもまた、数年後の見解を示している。

本章では大津事件と畠山勇子、そしてハーンによる「勇子—一つの追憶—」に描かれた〈勇子〉を比較し、史実と再話の違いから、そこに存在するハーンの描き出した女性像に注目してみたい。この作品は、事件に関する日本社会全体の描写、〈勇子〉の心理描写と行為、そしてそれに関する報道についての言及という三つの部分に分けられる。ここでは特に、〈勇子〉に関する部分に注目していく。

まず、該当部分のあらすじを見てみよう。〈勇子〉はサムライの血を引く娘である。大津事件により、「陛下が御心配あそばされているという公表<sup>126</sup> (only the announcement that the Emperor sorrows<sup>127</sup>)」に心を痛めている〈勇子〉は、何かを献上したいという思いに駆られる。しかし奉公中の身である彼女には献上できるものは何もなく、悶々とする。そして夜になると、彼女は亡くなった先祖の霊と話をする。「天子様の御心配を休め奉るには、わたしは、何をさしあげたら、よろしいでしょうか？」と聞くと、その先祖は「おまえの一身をささげろ。おまえが一家の犠牲になれ。君に一命をささげる。これこそ、至高の忠義だぞ。」と彼女に答える。その「声なき声 (voices without sound<sup>128</sup>)」に導かれ、彼女は自殺を決意する。彼女は自分の死後、黄泉の国で「おぬし、よくぞやったのう。——それでこそ、サムライの娘じゃ」と迎えられることを期待していた。そして、京都に着くと、

<sup>126</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）343頁。

<sup>127</sup> Hearn, Lafcadio. (1895) *Out of the East; reveries and studies in New Japan*, Boston, New York, Houghton, Mifflin Company. 332.

<sup>128</sup> Hearn, Lafcadio, 同上、336.

美しく身なりを整え、訴願状をしたため、自殺へと向かう。彼女はサムライの娘として一切乱れることなく、見苦しい死にならぬよう細心の注意を払い、喉をかき切って亡くなった。

以上が〈男子〉に関する記述である。本章ではハーンの初期の作品であるこの「男子—ひとつの追憶—」に注目し、この作品に描かれた女性像が19世紀の読者に向け、どのように提示されているかを見てみたい。『お菊さん』のピエール・ロティや『蝶々夫人』のジョン・ルーサー・ロングといった人物をはじめとする、ジャポニズムという奔流の中で、ハーンがいかに関心の日本を発信しようとしたか、そしてそれは現実の日本とどれだけ距離を置いたものだったのかという点について考察していく。

## 第二節 烈女、畠山男子

「男子—ひとつの追憶—」について論じる前にこの物語のモデルとなった畠山男子について触れておく必要があるだろう。ここで彼女の生い立ちから性格、死に至るまでの経緯を、尾佐竹猛『大津事件—ロシア皇太子大津遭難』、沼波武夫『大津事件の烈女畠山男子』を基に、ここで一旦まとめておくこととする。

まず、畠山男子は1865年、千葉県で畠山治兵衛の長女として生まれた。10歳で小学校に入り、17歳で若松吉蔵と結婚したが、23歳で離婚。その後は再婚する意志もなく、東京に出て、万里小路家の婢となり、また横浜の原六郎の婢となり、1890年には東京の魚商白鳥武平方の婢となった。彼女は当時の女性の中では珍しく、政治小説や新聞を好んで読み、歴史にも関心を抱いていたため周囲からは変わり者と見られていた。そしていつも「学資があれば少しでも人間らしい学問をすることができたのに、このように歳月を過ごしたのは口惜しい」と言っていたという。

大津事件が起きると、新聞を読んでは嘆いていたが、主人も友人も「また例の癖が始まった」と言って相手にするものはいなかった。しかし17日に、ニコライが日本旅行の予定を切り上げ帰国すると聞き、いてもたってもいられなくなった彼女は、主人に帰郷しなければならぬと言って休暇を取り、最も尊敬する叔父、榎本六兵衛<sup>129</sup>を訪ね、自分がどれほど遺憾に思い、天皇陛下を心配しているかを熱弁した。六兵衛は、「それは最もな話ではあ

<sup>129</sup> 沼波武夫は著書の中で、「畠山男子が烈女たり得たのは、両親や師の薫育にもよつたであらうが、その最大原因は伯父榎本六兵衛の感化であらうと思ふ。男子はこの伯父の純公無私の人格を最崇拜して居た。」と述べている。沼波武夫『大津事件の烈女畠山男子』（斯文書院、1926）69頁。

るが、女の身分で政治をとやかく語るべきではない」と説得し、その夜は宿泊させ、翌日主人方へ帰らせることにした。翌朝、彼女は六兵衛宅を出ると、持っていた剃刀を床屋で研がせ、京都へ向かった。人力車で東西本願寺、三十三間堂、清水寺に詣で、同志社の女学校を見たり、二条城を眺めたりした後、京都府庁門前で一通の書を渡そうとした。

しかし受け付けられなかったため、人がいなくなるのを見計らって、白い布を敷き、帯を解いて、白布の上に座り、持っていた剃刀で喉を貫いた。門番や巡査が来て、「発狂したのか」と聞くと、彼女は首を左右に振り、ただ天を指すのみであった。それから医師が来たが、後に倒れて息絶えた。携帯品の中に左の数通の遺書があった。

彼女のこの一連の行為について、当時の新聞は以下のように報じている。

去る二十日午後七時過ぎ、京都府庁の門外にて婦人が咽喉を突きて自殺せしその詳細なることを聞くに、同日午後六時頃、二十七、八ばかりの容貌醜くからぬ束髪いんこうの婦人が、同府庁の門前を人待ち顔に徘徊しおりたりしが、午後七時過ぎ、千葉県畠山勇子より露国大臣宛ての一通と日本政府御旦那様と記したる二通の書面を、門番所に投じて去りたる人力車夫あり。門番はこの書面を直ちに警察部に差し出したるに、訝いぶかしき文意なれば、その差出人を吟味せんとする折柄おりがら、門外に婦人の自殺しおることを急報する者あり。早速上京警察署に報じ、その筋の人々出張して検視せしに、剃刀にて咽喉と胸部を深く切り、死後見苦しからぬよう両足を手拭にて括りおりたるが、未だ死せずしてしきりに苦痛し、天を指して苦し苦しと大声に叫びおりたるをもって、

医師は治療をなしたるも、深手なれば効なく、ついに絶命したるをもって、区役所に引き渡し仮埋葬をなしたり。同人の衣服は絹二子線筋の袷に、博多と縺子しゅうすの合わせ帯を締め、絹繭きぬまゆの羽織を着て白縮緬しろちりめんの裾除けをなし白足袋を穿き、所持品は一円兌換券五枚、読売新聞一葉いちよう、鉛筆と剃刀、風呂敷、手拭と旅中の日記、その外に母弟等へ宛てたる遺書及び書類の草稿もあり<sup>130</sup>。

この史実から浮かび上がってくる畠山勇子像は、「新女性」として生きたいと熱望し、またその素質があるにも関わらず、それが果たせなかった女性である。そして、彼女が死を以てそれを示すまで、周囲は彼女を「変りもの」として白眼視することしかできなかった。そうした社会に生きた畠山勇子は、自分の思いと現実の社会との狭間で苦しみ、尽きぬ日

<sup>130</sup> 『東京日日新聞』(1891年5月24日付)

本への憂慮から自殺という行為へと進んで行ってしまうのである。こうして、国を憂い、その思いを勇気ある態度で示した彼女は、死後によく「烈女」と称えられるようになった<sup>131</sup>。

ここで注目したいのは、前述した5月16日付 *Japan Weekly Mail* において彼女に関する記事が掲載されていないということである。西洋の新聞記者たちにとって、一日本女性の死は、報ずるに値しない無意味なものにすぎなかった。当時の新聞の関心事は「大津事件」の首謀者津田三蔵<sup>132</sup>であり、日本とロシアの国家間関係であった。巨大な軍艦を持つロシア帝国の皇太子が、未だ弱国であった日本に来遊し、それを国を挙げて手厚く迎えるはずであったことが、一変、一巡査によって重傷を負わされるという惨事になったことは、とりもなおさず国家間の危機的状況の襲来を意味した<sup>133</sup>。開国以来欧米を追随しながら近代化を進めてきた日本は、東アジアの中で最初の文明国として認められつつあったにもかかわらず、この事件により、再びその評価は地に落ちてしまう可能性をはらんでいたのである。こうした大々的な報道をハーンが目にしていたことは想像に難くないが、それでも彼が物語の主人公としたのは、津田三蔵ではなく、報道もされない畠山勇子であった。そして、

<sup>131</sup> なお、畠山勇子の追悼については、「勇子の事新聞紙に報ぜらるゝや、いつの代にもあるかしこぶり屋は彼女を狂人と見なしたが、一方には末慶寺へ向け、詩歌を寄せ、悼文を寄する者夥しく、又墓参して香華を手向くる者引きも切らず、其為初め勇子の墓所は、本堂裏に、本堂と同じく東面して居たのであるが、そこは墓前が狭くて、参詣者が込合為その向つて右即ち北方の奥に南面の地位に改葬した程であった。」と、畠山勇子を弔おうとする人が絶えなかったことが分かっている。また、彼女の50日忌辰としての追悼会には、親族の他に京都府知事北垣國道の代理として書記官、詩人小野湖山や谷鐵臣、吉田嘿、榊原長敏などの著名人が集まった。沼波武夫、前掲（註129）100頁。

<sup>132</sup> 津田三蔵の動機については、様々な憶測が飛び交い、当時の新聞には西南戦争で既に死んでいた西郷隆盛が関与しているなどということも書きたてられた。しかし、新井勉氏の以下の指摘が最も示唆に富むものではないだろうか。「日本の新聞が犯人は狂人であることじつけているが、『むしろ外国人に対する狂信的な敵意こそが凶行の真の動機であったと見る方が本当であろう。以前から日本では、このような狂信的な犯行によって多くの外国人が殺されてきた』として、大津の遭難事件を攘夷の動機によるものであると見た。犯人がサムライの生れであって、昔攘夷を行った武士身分に属することに注目した。（中略）大津におきた事件は、大国ロシアの皇太子を警備の一巡査が襲って負傷させたということの外に、明治国家が維新以来全力をあげて推進してきた欧米追随政策の成果を覆しかねない恐れを孕んでいた。津田三蔵は、皇太子一行の来遊を日本侵略の下調べだと誤信して敵愾心から犯行を犯したという。」

<sup>133</sup> 尾佐竹猛氏は、この事件のために日本全体がいかに狼狽していたかを記している。それによると、皇太子へ医者呼び寄せるため在来線が全て運休となり、早急に明治天皇出御、御前会議が開かれ、国を挙げておびたしい数の見舞が行われたことなどが分かる。（尾佐竹猛『大津事件—ロシア皇太子大津遭難』（岩波書店、1991）54-65頁。）また、新井勉氏も当時の状況について次のように述べている。「天皇も政府も皇太子に最大級の誠意を尽くして、事件に対するロシア反応を固唾をのんでまちうけた。果してロシアが何を要求してくるか。大津事件における外交上最大の核心であり、要求の内容次第では、その後の日露関係や明治の歴史が少しかきかえられたかもしれない。（中略）五月一六日の昼前、神戸において、シェーヴィッチ公使はよびよせた青木外相に、五月一三日付のギールス外相の訓令の写しを手交した。『皇帝陛下ニハ、毫モ賠償ヲ要求スル御意志ガナイ』という最上のものである。ロシア側としては、皇太子遭難以来日本側がみせた誠意に報い、求償を行わないという訓令をみせ、その上でその日の夕方、三日後の皇太子出港を天皇にしらせたという次第である。」新井勉『大津事件の再構成』（御茶の水書房、1994）38頁。

それは上述の史実を基にしながらも、いくつかの変更が加えられ、フィクション化されていく。それでは、大津事件と畠山勇子を、ハーンはどのように「勇子—ひとつの追憶—」として描き出したのかについて、次節から詳しく見ていくこととする。

### 第三節 <勇子>に込められた「異質性」—「勇子—ひとつの追憶—」— (1895)

大津事件に際し自殺した畠山勇子と、「勇子—ひとつの追憶—」の主人公<勇子>は異なった点が多い。彼女の身の上から死に至る過程まで、あらゆる部分に変更されているといっても過言ではない。ここでは畠山勇子と<勇子>との差異を考察してみたい。

#### 3-1. 得体の知れないサムライの娘<勇子>

まず、畠山勇子の特徴としては、資産家の娘であったこと、小学校で学んだこと、17歳で結婚し、23歳で離婚したこと、そして婢となりながらも、政治小説や新聞を好んで読み、終生学問をしたいと願っていた女性だということである。しかし、ハーンが描き出した<勇子>には、こういったことが全て削除されている。<勇子>は資産家の娘でなく「サムライの娘」であり、結婚・離婚歴も削除され、学びの機会が与えられたことも、また学問を志していた「新女性予備軍」としての側面も完全になくなっている。以下が<勇子>の描写が始まる部分である。

遠く神奈川のさる物持ちの家に、ひとりの若い小間使いがいた。名を勇子という。勇子とは「雄々しい」という意味をあらわした、むかしの武家風の名である。(中略)それは西洋の人間には、じゅうぶんに理解されまい。勇子の生身は、ある感情と刺激とに支配されているのである。その感情と刺激の性質は、せいぜい漠然とした形でしか、われわれ西洋人にはわからない。(中略) 仏教の方の象徴でいうと、白蓮の花の浄らかさだ。寒梅の花にふりつる初雪のような、凜としたすがすがしさもある。また、嫋嫋たる琴の音にも似た、おっとりとしたしとやかさのかげには、むかしのサムライの血がつたわりつたわって、死を鷲毛のごとくに恐れぬ心も、かくれひそんでいる<sup>134</sup>。

<sup>134</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）345頁。以下、「勇子—ひとつの追憶—」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

(下線は筆者、345 頁、原文[1])

この部分から読み取れるのは、元々農民であった資産家の父を持つ畠山勇子が、サムライの娘<勇子>として生まれ変わっていることである。さらに、そのサムライの娘<勇子>の内面は、「白蓮の花の浄らかさ」、「寒梅の花にふりつもる初雪」と形容され極めて純粋であると同時に、読み手である西洋人には理解できない神秘的な存在であることが強調される。

ここには太田雄三氏のいう、ハーンの「人種主義的傾向<sup>135</sup>」が窺える。これは、ハーンの根底にあって、最後まで変わることをなかつた、日本人を異質な者としてみなし、そのように描き出す傾向のことである。そして主人公が「得体の知れない、神秘的な娘」であることで、彼女を取り巻く社会も、彼女の行為も、読者の理解を越えた極東の地日本の姿ということになっていくのである。

### 3-2. なぜ自殺したか—失われた新女性、畠山勇子—

畠山勇子が自殺した足取りについても、おおよそ明らかになっている。前述の通り、畠山勇子は歴史や政治に関心があり、よく新聞を読み、内心学問を志している女性であった。小学校を出、学びを通じて社会と関わりたいと切望していたのである。その彼女が「大津事件」のために自らの命を捨てることを決意するのは、もちろん衝動的な部分が全くなかつたわけではないだろうが、それよりも冷静に、かつ社会への影響を見据えてとつた行動であると考えられる。以下は、『大津事件の烈女畠山勇子』からの引用である。

頼み切つた六兵衛に斯う云はれて、もう勇子には、世界にこの大事を相談すべき人間は一人も無くなつた。この自分だけ、自分だけでしょう。身分の低い者が大事を動かすには、死より無い。死んでもだめかも知れぬが、或はだめでも無いかも知れぬ。その結果の如何は神慮に任せて、わたしはこの命を捨てよう。かやうに覚悟をきめて、勇子はこの伯父の家でひそかに露国官吏、我國政府、内外国民、その他身うちにあてた、書置をしたゝめた。そして京都へ行って、この書置を並べて自殺しようと決した。

志をかうして書置に書いて死んだら誰人かゞ動かされる、とどうしても勇子には信ぜられた。「動かされた其人の手で、御引きとめが出来たらう。あはよくば、露国皇

<sup>135</sup> 太田雄三、前掲（註7）33頁。

太子の御心を動かし得るかも知れぬ。(中略)決して害意を抱いてる者のみで無い、と云ふ事を、露国に通じて御國の後の禍を拂ふことは確に出来る。又一つには我國のこの度の失態をつぐなふべく、一人の日本人が命を棄てる、と云ふ贖罪の意味にもなる。それはたゞ露国に對しての贖罪のみならず、又實に御心勞の極におはす我が陛下に對し奉って、國民としての贖罪になる。まことにこの際一人の贖罪者が出て然るべきである<sup>136</sup>。」

これは畠山勇子が亡くなった後に近親者により語られたものが基になっていて、必ずしも完全な事実とは言い切れない。ただ、彼女が、自分の思いを聞いてくれる唯一の存在であった叔父を訪ねたこと、そして彼になだめられてしまったことで自殺を固く決意することとなったのは事実であろう。彼女は身分の低い自分の死であっても、ないよりはいいのではないかと考えた。そして自分の死が社会に最大の効果を発するために、周到な準備をするのである。それが、現存する露国官吏、我國政府、国民、身内へ宛てた遺書である。彼女は自分の最後の思いをそこに残し、彼女の死に心を動かされる人へと委ねた。彼女の死の目的は、即座に帰国しようとするニコライ皇太子を引き留めること、日本国民は友好的であるのだということを改めて知らせること、そうすることでその後の国家間関係の亀裂を最小限に防ぐことであった。この事件は日本国民が犯した失態ではあるが、同様に日本人が命を捨てて償うことで、ロシアに対してだけではなく、迷惑をかけた天皇陛下への贖罪にもなるのだと考えた。この考え方の是非はさておき、彼女が自ら考え、下した決断であったことが分かる。

しかし、「勇子」ではこういった部分が全て変更されてしまっている。彼女が死に至る場面でもなお、彼女は執拗にサムライの娘であることが強調され続けているのである。ここで、<勇子>が自殺を決意し、決行するまでの流れを見てみよう。

そこで、夜になると考え込む。そして、自分の胸にいろいろ問うてみる。すると、亡くなった先祖の霊が、勇子に答えるのである。「天子様の御心配を休め奉るには、わたしは、何をさしあげたら、よろしいでしょう?」「おまえの一身をささげろ」と声なき声が答える。「でも、わたしに、それができますでしょうか?」と勇子はおどろき訝かりながら尋ねる。「おまえには、存命中の親がない」と声が答える。「とって、献

<sup>136</sup> 沼波武夫、前掲（註 129）43-44 頁。

上をするような物を、おまえは持ってはいない。おまえが一家の犠牲になれ。君に一命をささげる。これこそ、至高の忠義だぞ。このうえのよろこびはないぞ。」「して、どこでそれを？」と勇子はたずねる。「西京じゃ」と声なき声が答える。「昔の型どおり、閻魔の庁」でじゃ。(中略)

そのかわり、自分が死んで、黄泉の国の家の広座敷で彼女の来るのを待っている身内のものに逢えば、まっさきに、こういわれるだろう。——「おぬし、よくぞやったのう。——それでこそ、サムライの娘じゃ。さあ、上がれ！こよいは、そなたのために、神神もわれわれとごいっしょに御会食下さるぞ！」

(下線は筆者、347-349 頁、原文[2])

このように、<勇子>には確固たる意志が全くなく、ただ先祖（サムライ）の「声なき声」に突き動かされ、自殺を決意する。言い換えれば、畠山勇子にあった強い意志が、<勇子>から削除され、サムライの血に導かれるがまま命を捨てることになってしまっているのである。しかも、ここでハーンが言う「サムライ」とは当然、近代化以前の日本に生きた人のことを指しているのであるが、だとすると、そのサムライが<勇子>に「天皇のために死ぬ」とは決して言うはずがないということに留意しなければならない。武士階級が統治する近代化以前の日本では、天皇の存在はほぼ忘れ去れているに等しい。これについて太田雄三氏は以下のように述べている。

神前結婚式が大昔からあったように錯覚しがちな我々に似て、ハーンも明治になってから生まれたものを大昔から日本にあるように思い込むことがあった。これはチェンバレンやベルツなどのように明治初期から明治後半まで一貫して観察することができた外国人に比べると、ハーンは彼の観察した明治後期の社会や文化の特徴のうち、どれが本当に昔からの伝統的な特徴であり、どれがたとえ伝統的なよそおいをまもっていても、明治になって新たに生まれた特徴であるかを見分ける目をもたなかったためなのである。例えば、松江中学の彼の教え子の多くが「天皇陛下のために死ぬこと」を最大の願いとして挙げたことに強い印象を受けたハーンは、そのような天皇に対する熱烈な献身の気持ちを、彼らの「血の中にあるもの」、すなわち祖先から遺伝によって代々伝わってきた生得のものと解釈した（『知られざる日本の瞥見』第十七章）。ハーンはそれを「培われる必要のないもの」（Letters from Shimane and Kyushu, Kyoto,

1934, p. 8) とも形容している。

しかし、このような解釈は明治十年以前から日本にいたベルツやチェンバレンにとって、とうてい受け入れることの出来ない解釈だったろう。それは彼らが自分の目で、明治初期の日本人の多数が、いかに天皇に無関心であるかを見てきたからだ<sup>137</sup>。

(下線は筆者)

ここには明治初期から日本が日清戦争や日露戦争に向け、天皇制を軸とした国家を早急に作り固めなければならなかったという政治的背景が大いに関与している。姜尚中氏が、吉田茂(1878-1967)を日清戦争以後の「天皇中心の国家主義と強硬な帝国主義的膨張政策とを計画的に吹き込まれた世代に属していた<sup>138</sup>」と述べ、白鳥庫吉(1865-1942)にとって、天皇制(国体)とは「絶えず変化しながら変化しない『国民的本性』(national essence)<sup>139</sup>」であり、「歴史的であると同時に超歴史的」なもので「日本の『進歩』の究極の源泉」であったと指摘しているが、実はこのように天皇制が宗教的意義を含め日本社会に組み込まれていったのは、明治期以降のことであった。この点を考慮すれば、「サムライ」が天皇への忠誠を至極の喜びとするこの流れ自体がハーンの誤解であることは言うまでもない。武家社会と天皇制とは、本当は相容れない異なった社会システムであるからだ。

しかしながらハーンは一個人が、その先祖一人一人の経験や感情を遺伝的に受け継ぐと固く信じていた<sup>140</sup>。それは、以下の文章からもよく分かる。

まだそのうえに、そうした気概や感情のもうひとつ上に、それを高く束ねている情操がひとつあるのだが、これは、西洋のことばでは、ちょっと言いあらわすことがむずかしい。——“loyalty”「忠義」なぞと訳してしまったのでは、ぜんぜん、その感じを殺いでしまう。それは、どちらかといえば、われわれの国の方でいう、神秘的な精神発揚に近い感情であって、つまり、「天子様」に対する、絶対の尊崇と献身の存念である。ところで、この存念は、個人的感情を超えたものなのだ。けっきょく、それをたどって行くと、その末は、自分の身から離れて、遠く忘れられた過去のぬばたまの闇まで遡り、祖先の諸霊の不朽不死の道念と意志、そこへ行きつくのである。であ

<sup>137</sup> 太田雄三、前掲(註7) 82-83頁。

<sup>138</sup> 姜尚中「東洋の発見とオリエンタリズム」(『現代思想』vol. 23-03、青土社、1995) 163頁。

<sup>139</sup> 姜尚中、同上、167頁。

<sup>140</sup> 太田雄三、前掲(註7) 38頁。

るから、彼女の生ま身は、われわれ西洋人とはまるで違った生活方法で、一団となつて生き、感じ、考えてきた、そういう過去が纏綿とつきまとっている、一個のたましいの住家にすぎないのだ。」

(下線は筆者、345-346 頁、原文[3])

すなわち、<勇子>を始めとする日本女性(サムライの娘)は、個々人の感情の上に「高く束ねている情操」を持っていて、その過去からつながる「忠義」とも言える個人的感情を超えたものに身を委ねているのだと見ているのである。「彼女の生ま身は、過去が纏綿とつきまとう一個のたましいの住家」であるというのはすなわち、一人の人間が、その肉体の特徴を先祖から受け継ぐのと同様に、そこにある倫理観や道德観といったものまでも全てが精神面に遺伝されているというのである。だからこそ、<勇子>は自分の祖先と実際に会話できているのである。これは空想の世界の話といったことではなく、ハーンが実際に深く信じていた遺伝説の反映である。

このように、なぜか天皇制を支持するサムライの祖先に突き動かされ、それによって死んだ<勇子>は、理解不能な(あるいは神秘的な)女性であり、学びを渴望していた「新女性予備軍」ともいえる畠山勇子の影は失われてしまった。

この現実離れした雰囲気と人間離れした<勇子>の描写は、以下、彼女が死ぬ場面でも明らかである。

それから、古式のとおり、丈夫で、しなやかな絹の腰紐をほどくと、着物のうえからぎゅっとそれでからだを結わえて、ちょうど両膝の上のところで結び目をためた。それは、かりにもサムライの娘ともあろうものが、自分には無意識な苦悶の刹那に、たとえどんなことが起ろうとも、手足をとりみだした、見苦しい死にざまを見せてはならないためであった。支度がすむと、勇子は心を澄まし、手もと狂わず、ひと突きに、吭笛をかき切った。切り口からは、血がどくどくと脈を打って噴きでた。サムライの娘は、こういうことに、けっして手もとをあやまるようなことはない。動脈と静脈のありかを、ちゃんとこころえているからである。

(下線は筆者、350-351 頁、原文[4])

これらの部分から分かるのは、彼女がサムライの血を引く者として生き、彼女の死は天

皇陛下のためだけではなく、一家の誇りであると信じ、名誉としての死に全く迷いのない様子であり、サムライの娘としていかに死ぬべきかという、いわば美しい死にざまへの余念がない。死に悶える様子は一切なく、静かに美しく亡くなっている。

もちろん、言うまでもなく実際の畠山勇子の死に際はそのようなものではなかった。「剃刀にて咽喉と胸部を深く切り、死後見苦しからぬよう両足を手拭にて括りおりたるが、未だ死せずしてしきりに苦痛し、天を指して苦し苦しと大声に叫びおりたる<sup>141</sup>」様子であったというが、そういった部分は描かれていない。

この「日本女性が命を絶つ」場面について、関連して思い浮かぶのは『蝶々夫人』の<蝶々さん>の自決のシーンではないだろうか。<ピンカートン>に捨てられたことを知った彼女は彼の金を全て返し、自暴自棄の高笑いをし自決する。こうした日本女性の死の描写は、ジャポニスム小説の中で重要なものであるとして、小川さくえ氏は以下のように分析する。

しかしエキゾチックな物語の読者というものは、未知のもの、神秘的なもの、珍奇なもの、野蛮なもの、残酷なものを、鶺鴒の目鷹の目で探してはいないだろうか。だとすれば蝶々さんの自決という結末<sup>142</sup>は、西洋の読者には大きな衝撃であると同時に、彼らのその願望に見事に応えるものだったといえる。(中略)したがって蝶々さんの自決も、東洋が繰り広げる奇矯な見世物として享樂の対象とされたことは十分に考えられる。そして享樂の対象とされた瞬間に、蝶々さんが垣間見せた「東洋的凶暴性」は順化され、これまたジャポニスムの総体の中に再分配されていくのである。

たとえ欧米の読者の多くが、遠い異国の女性の悲劇に胸を打たれ、同情し、涙を流したとしても、結局彼らは、超然たる「観察者」として、蝶々さんが「日本人」に戻ったことに満足する。彼らが想像する「日本人」のイメージが守られ、維持されるからである。この「日本人」は、むしろ現実の日本人と同一視されうるものではない<sup>143</sup>。

この指摘を『蝶々夫人』のものとしてではなく、この「勇子一ひとつの追憶一」に向け

<sup>141</sup> 「東京日日」(明治24年5月24日付) 鈴木孝一『ニュースで追う明治日本発掘〈4〉憲法発布・大津事件・壮士と決闘の時代』(河出書房新社、1994) 264頁。

<sup>142</sup> ただし、羽田美也子氏も指摘しているように、ロングの作品で<蝶々さん>は最終的に死んではいない。ロングの原作からベラスコ、プッチーニのオペラの脚本が作り出される課程で<蝶々さん>が死んでしまったという流れの方が一般的となっている。羽田美也子、前掲(註24) 204頁。

<sup>143</sup> 小川さくえ、前掲(註40) 83-84頁。

られたものだとして読んでも、違和感はないだろう。すなわち、ハーンもロングも、エキゾチックな物語の読者に衝撃を与えつつ、奇異なるものへの願望を満足させようとしていたと言えるのである。しかし、ロティとは異なり、ここでハーンが<勇子>に「奇矯な見世物」的な要素を含ませなかったという点に注目すべきであろう。ハーンはあくまでも、彼女の最期を潔く、極めて美しいものとして描き出した。悲しみと絶望と狂気に身を任せたく蝶々さん>とは、こうした点が完全に異なっている。<蝶々さん>の死が読者に「東洋的凶暴性」を見せているとするならば、<勇子>の死は「勇気と忠誠心」示している。そしてこうした結末に込められた意義の違いが、ハーン作品をそれまでのジャポニスムとは異なるものにしてしまうと考えられる。

#### 第四節 エキゾチックな<勇子>像にみるハーンの姿

ここまで見てきたように、<勇子>は畠山勇子をモデルとしながらも、その実像を完全に失わされたばかりか、普通では考えられない自己のなさ、超人的に美しい死を与えられている。ここには、ハーンの中にあるエキゾチックな日本が色濃く反映されていると言ってよい。

そして、この作品からはハーンのひとつの限界も読み取ることができる。前述のように、当時の新聞は「大津事件」を日露間の危機として捉え、犯人津田三蔵と関連付け、彼が士族階級の間人であることも強調され、挙って報じられた。そして新聞に載ることのなかった畠山勇子の存在は、ハーンの「勇子——一つの追憶」に描かれ、読者は<勇子>にもう一つの「大津事件」を見ることになるのである。

この、美しく潔い、と同時に得体の知れない<勇子>の姿に、西洋の読者たちは極東日本と日本女性の姿を重ね合わせたことは想像に難くない。まして、ハーンはこれをフィクションであると明記していないことから、更なる信憑性を孕んでしまっているのである。これについて太田雄三氏は以下のように批判している。

日本人と西洋人の本質的な違いを強調しながら、西洋人には決して本当に分かるはずがないと自ら考えている一日本人女性の内面について、独断的に長々と書いているところは全くハーン的だ。(中略) 周知の歴史上のエピソードに取材した「勇子、一つの追憶」もまた、ハーンの一見ノンフィクションと見える作品中に描かれた日本や日

本人が、多くの場合、非現実的な虚構の存在であることの例証となりうる作品だと思われる<sup>144</sup>。

このように、この作品が「ハーンが描いた日本が虚構であること」を示すものであるとしている。これはこれまで見てきたように、史実と再話の差異があまりにも大きいことや、ハーンがジャポニスム小説の影響を強く受け、エキゾチックな極東日本のイメージを強く抱いていたことから容易に分かることである。ただし、この点について、ハーン自身も辛うじて弁明しようとしていることについても触れておく必要があるだろう。

彼はこの作品を執筆してからおよそ2年後の1896年4月に、京都を旅行し、畠山勇子の墓を訪れている。松江時代、熊本時代、そして神戸時代を経て、東京帝国大学着任直前のハーンが、改めて畠山勇子に向き合った様子が、以下の文章からうかがえる。

そこに立派な大きな文字を深く彫って、『烈女』という仏教の尊稱接頭語を加えて、少女の名がしるしてあった——

烈女畠山勇子墓（中略）

寺で僧は私に悲劇の遺物と記念品を見せてくれた。小さな日本の剃刀は血が皮となって嘗て白く柔らかな紙を厚くその柄にまきつけたのが、固まって一個の堅い赤色の塊となっているもの——安価な財布——血で硬くなった帯と衣類（着物の外は、すべて寺へ寄進するに先立ち、警察の命令により洗濯された）——手紙及び控え帳——勇子及びその墓の写真（私はこれを買って求めた）——墓地に於いて葬式が神官によって営まれた折の集会の写真などであった。（中略）

衣類は粗末で安価なものであった。彼女は旅費と埋葬の費用に当てるため、最上の所持品を質に入れたのであった。私は彼女の伝記、死の物語、最後の手紙数通、種々の人が彼女のことを詠んだ歌——頗る高位の人の作歌もあった——及び拙い肖像画を載せた小冊子を買った。（中略）勇子の手紙は、日本人のかの奇異なる興奮状態を示していた。恐ろしい目的は一刻の油断なく緊張しながらも、しかも心は最も些々たる事実問題にも、あらゆる注意を与え得るようになっている。（中略）

その平凡なる事実の暴露といふ、生硬強烈なる光の下に照らしてみると、一八九四に書いた私の『勇子』と題する小品文は、暫くは、あまりにも空想的に思われた。し

<sup>144</sup> 太田雄三、前掲（註7）163-164頁。

かし、それにもかからわず、その事実の真の詩味——単に国民の忠愛の情を表明せんがために、若い婦人をして自ら生命を捨てるに至らしめた純なる理想——は、依然として減ずることはない。取るに足らない些細な乾燥した事実を取り上げて、その大事実<sub>145</sub>にけちをつけることは決してできない<sub>145</sub>。

(下線は筆者)

畠山勇子が使用した剃刀や粗末で安価な血まみれの衣服、遺書、写真、そして死の直前まで金の使い道を詳細に記し続けた控え帳は、彼女の一連の行為が、限られた状況の中で極めて綿密な計算の下行われていたことをハーンに示したのだろうか。彼は「一八九四に書いた私の『勇子』と題する小品文は、暫くは、あまりにも空想的に思われた」と認めている。大津事件から5年という歳月が経ち、その間に日本へのまなざしが大きく変化していたハーン自身の内面的変化<sub>146</sub>が垣間見られる部分である。

ただ、それでもなお、彼の自省が十分でないと言わざるを得ないのは、その後<sub>147</sub>に続く「それにもかからわず、その事実の真の詩味——単に国民の忠愛の情を表明せんがために、若い婦人をして自ら生命を捨てるに至らしめた純なる理想——は、依然として減ずることはない<sub>147</sub>」という言い訳じみた文章だけではない。彼は、ここで彼がいかに「あまりにも空想的」であったのかという説明をしないことで<勇子>を矛盾に満ちた存在に<sub>147</sub>してしまっているのである。

この犠牲の行為は、私を感動せしめたよりも、更に多くの国民の感情を激励した。(中略) もし平凡な事実が、西洋で人々が好んで『上品な感情』と稱するもの<sub>147</sub>に取って、不快の感を催さしめるとすれば、その上品は不自然で、その感情は浅薄であることの證據である。真の美は内的生命に存することを認めている日本人にとっては、平凡些細な事柄は、貴重なものである。(中略) もし勇子が日本一の美人であって、彼女の家族は最も高い地位の人々であったならば、彼女の犠牲の意義が身に浸みて感ぜられる

<sup>145</sup> 小泉八雲著、田部隆次訳『小泉八雲全集 第5巻』(第一書房、1926) 76-81頁。

<sup>146</sup> 岡村多希子氏は、「勇子——一つの追憶——」とこの「京都紀行」のは畠山勇子に関する部分について、以下のように述べている。「前者が、伝聞を基に勇子の行動や心理を美しく空想的に描いているのに対し、後者は、実際に末慶寺で勇子の墓に参り、血のついた帯、安物のガマ口、金銭支出メモなどの遺品や、勇子や彼女の身内の写真といった現実的な品々を見た上での勇子観をあらためて述べている。」岡村多希子「京都、末慶寺所蔵 W. de Moraes 書簡について As Cartas de W de Moraes Guardadas em Makkeiji, Kyoto」『東京外国語大学論集第46号』(東京外国語大学、1993) 164頁。

<sup>147</sup> 小泉八雲著、田部隆次訳、前掲(註145) 80頁。

ことは、遥かに少なかったであろう。実際の場合に於いて、高尚なことを行うのは、概して普通の人であって、非凡の人ではない。（中略）西洋の多数の人は、普通人民から彼らの倫理学を今一度改めて習はねばならないだろう。西洋の教養ある階級は、あまりに長く以て非なる理想主義、単なる因習的偽善の雰囲気のうちに生活してきたので、純心正直な温かい感情は、彼らの眼には卑劣俗悪に映るのである。して、その当然避けがたき罰として、彼らは見ること、聞くこと、感ずること、考えることができなくなってくる。哀れなる男子が、彼女の鏡の裏に書いた小さな歌詞の中には、西洋の月並的理想主義の大部分におけるよりも、一層多くの真理が含まれている。

くもりなくこころの鏡みがきてぞよしあしともにあきらかにみむ<sup>148</sup>

（下線は筆者）

ここには<男子>が美人ではなく、家柄も非常に平凡なものであったとされている。日本の社会を知っている読者は「<男子>はサムライ（多くの庶民を統治していた支配階級）の娘ではなかったのか」と思うに違いないし、そうでない人にはサムライの娘<男子>が、日本の標準的な人物であるという更なる誤解を与えてしまう。そして自ら死を選んだ畠山男子が「哀れなる男子」とされていることについても説明が十分であるとは言えないだろう。畠山男子の実像にここで改めて向き合うのであれば、畠山男子と<男子>を異なるものとして明記し、「新女性」となれなかった畠山男子を「哀れだ」とすべきではないか。すなわち、彼は畠山男子と<男子>を顧みる機会を自ら作り出しておきながらも、目の前の現実と、過去の自身に向き合うことができなかつたと言える。

このように、この物語からは現実を捉えられなかつた、あるいは捉えようとしなかつたハーンの姿が浮かび上がってくる。それまでのジャポニスム小説の流れを受け、存在しない日本の姿を彼の中にある<sup>エキゾチシズム</sup>異国趣味というフィルターを通して描き出してしまったのである。そして、それらをあたかもノンフィクションかのように示したことは、この物語自体の評価を下げていると言わざるを得ない。

しかし、ここで繰り返しておきたいのは、『蝶々夫人』を始めとした先駆的なジャポニスム小説の流れを完全に踏襲しているわけではないということである。<男子>は確かに、それまでのジャポニスム小説の<sup>ムスメ</sup>musuméたちのように理解不能で神秘的な存在ではあったが、結末の死は狂気的な見世物としてではなく、儂いながらも真のある強さと美しさを読者に

<sup>148</sup> 小泉八雲著、田部隆次訳、前掲（註145）82-82頁。

示している。それは単なる人形に過ぎない〈お菊さん〉や幼児性と無知さを強調され続けた〈蝶々夫人〉のような、慰みのための女性たちとは全く異なった女性像である。いうなれば、そういった女性像から脱皮を図ろうとしたものの、それを達せなかったハーンの葛藤をも見いだせるのではないだろうか。

さらに、ジャポニスム小説の中で主流となった「自己犠牲を厭わない日本女性」の姿は男性への服従と一途な愛をテーマに書かれることが多かったが、〈勇子〉のように、国のために自己を犠牲にするというのは、新しい印象であり、これはのちのジャポニスム小説に影響を与えている。

羽田美也子氏は、メアリー・フェノロサ<sup>149</sup>の *The Breath of the Gods*『神々の息吹』(1905)の主人公〈ユキ〉について、以下のように述べている。

メアリー・フェノロサは、指針を犠牲にして日本という国のために尽くそうとする女性を主人公として、献辞にも述べられているように、大和魂＝日本精神の素晴らしさを描こうとしたのである。(中略) 日本を救うためのユキの献身と、ハガネ公のユキに対する深い愛情が全ての人々の心を動かす<sup>150</sup>。

ここに見られるように、国のために命を投げ打った〈勇子〉は、ハーンの再話作品の中ではあまりにも不可解な人物にとどまってしまっているものの、その後、近代思想に基づいた上での愛国心を抱く〈ユキ〉と、その献身へと引き継がれていっていると言ってよいだろう。こうして考えれば、平井呈一のいうようにハーンとその作品が19世紀の「過渡期<sup>151</sup>」のものであるという本当の意味が浮かび上がってくる。この「勇子—ひとつの追憶—」も、二章、三章で扱う「赤い婚礼」、「きみ子」も、ハーン個人の過渡期の作品であり、ジャポニスム小説の中の過渡期の作品でもあるのである。

<sup>149</sup> ハーンは1898年から1899年頃、フェノロサ夫妻と親交を深めている。ハーンはメアリーに『仏の畑の落穂』、「永遠の憑きもの」や「髑髏のはなし」のゲラ刷りなどを送り、一方のメアリーは昔の詩二篇を送り、『巣立ち—詩の飛翔』*Out of the Nest: A Flight of Verses* (1899) はハーンに贈呈されるほどであった。彼女は献辞に「親愛なる友ラフカディオ・ハーンに、我が処女作の最初の献呈本を送る。オアガリナサイ！メアリ、マクニール・フェノロサ—八九九年十一月 東京」と記した。彼女はハーンの影響を強く受け、執筆活動を開始したと言われる。坂東浩司、前掲（註14）608-633頁。

<sup>150</sup> 羽田美也子、前掲（註24）164頁。

<sup>151</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）712頁。

## 第二章 鉄道での心中—〈およし〉と〈太郎〉の初恋—

### 第一節 新聞記事からの着想—「赤い婚礼」



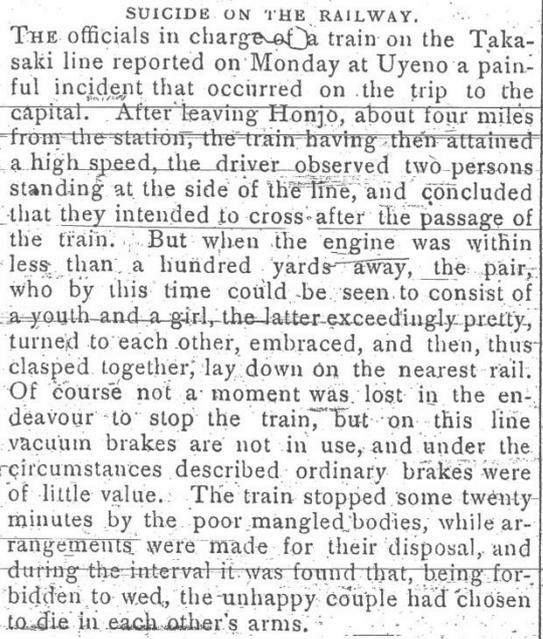
【図1】1891年2月28日付 Japan Weekly Mail<sup>152</sup>

「赤い婚礼」Red Bridalは、ハーンの松江時代1891年2月28日付の『The Japan Weekly Mail』に掲載された「鉄道自殺」Suicide on the Railwayから着想を得、2年9ヶ月後、熊本時代The Atlantic Monthlyに掲載、その後『東の国から』Out of the East (1895)に所収されたものである。また、2001年、第54回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞したアメリカ短編映画『おはぎ』Bean Cake (David Greenspan 監督)の原作としても知られている。ハーンは新聞の片隅にある、ほんの数行の小さな記事から再話作品の中でも長めの作品「赤い婚礼」を作り出した。

これは思い合う二人の男女がその恋を成就させることができないため自殺するという、いわゆる心中物語である。この物語の基となった新聞記事では、高崎線で事故が起こったこと、運転手が事前に線路脇に二人を見ていながらも、まさか自殺するとは考えていなか

<sup>152</sup> 『Japan Weekly Mail』(1891年2月28日付)

<sup>153</sup> 「Suicide on Railway (『鉄道自殺』)」『Japan Weekly Mail』(1891年2月28日付)



【図2】Suicide on Railway『鉄道自殺』<sup>153</sup>

ったこと、そして、事態に気づいた時には、すでに事故を防ぐことができない状況であったことを伝えているのみ<sup>154</sup>で、これが青年と少女の心中であったことについては最後の一文に書かれているだけである。わずかなこの記事から 37 ページにも渡る作品を書いたのであるから、人物の設定から流れに関してすべてがハーン<sup>155</sup>の創作であるといえる<sup>155</sup>。

心中物語と言え、近世から盛んに描かれるようになったもので、そこには遊女が多く登場していることが指摘されている。

死による恋の完成というモチーフが、ひとつの物語的到達点を迎えるのは、「心中」が「心中」という意味を獲得した近世であろう。元禄時代（一六八八—一七〇四）末期には、実際に心中が流行し、その相手には遊女が多かった。（『NHK ニッポンときめき歴史館（1）』）。遊女との恋には、経済的トラブルや身分の差、男性側が既婚者といった現実的障害が伴いがちだったからである<sup>156</sup>。

近松門左衛門の『曾根崎心中』（1703）、『心中天網島』（1720）、あるいは明治期に入ってから樋口一葉『にごりえ』（1895）、<sup>ひろつりゅうろう</sup>広津柳良『今戸心中』（1896）、さらには大正期に書かれた泉鏡花『日本橋』（1914）などまで、心中ものは遊女と関連付けて語られることが多かった。

また、現実の社会においても少なからぬ心中が行われていたことはよく知られたところであろう。「横浜で外人が情死未遂<sup>157</sup>」、「実の兄妹が情死未遂一妹に縁談起りしを悲観<sup>158</sup>」、

---

<sup>154</sup> 「鉄道自殺」高崎線担当の当局は、月曜日、上り列車で起こった痛ましい事件を上野へ報告した。本庄駅出発後、駅からおよそ 4 マイルの地点で電車は最高速度に達していたが、運転手は二人の人間が線路脇に立っているのを確認し、列車通過後に線路を渡ろうとしているのだらうと判断した。しかし、列車が後方 1 ヤード以内まで来たとき、その二人は青年と非常にかわいい女の子であること、そしてお互いに向き合って、線路に横たわったことが分かった。無論、瞬時に電車を止めようと必死に試みられたが、この線で真空ブレーキは使われておらず、このような状況でかけられた普通のブレーキはほとんど価値をなさなかった。列車は無残に彼らを断ち切ってから、それらを処理する間約 20 分間停車し、その間に、結婚を禁じられた不幸な恋人が互いの腕の中で死ぬことを選んだのだということが判明した。（Japan Weekly Mail 2 月 28 日付 拙訳）

<sup>155</sup> 新聞記事との類似点と言え、*「One of them, a woman, he judged by the color of her robe and girdle to be very young. (そのうちのひとは女で、それも着物と帯の色合いからみて、ごく若い女に見えた。）」*、*「They… turned, wound their arms about each other, and lay down cheek to cheek, very softly and quickly, straight across the inside rail (くるりと向き直ると、たがいに両腕をからみあい、頬と頬をぴったり押しつけて、しずかに、すばやく、内側の線路の上に身を横たえた。）」*といった部分のみである。

<sup>156</sup> 佐伯順子『「愛」と「性」の文化史』（角川学芸出版、2008）185 頁。

<sup>157</sup> 朝日新聞社編『朝日新聞の記事にみる恋愛と結婚—明治・大正』（朝日新聞社、1997）70 頁。

<sup>158</sup> 朝日新聞社編、同上、81 頁。

「嫁、式から逃げ投身一きはれた男も出刃で自殺<sup>159</sup>」、「情夫と縁切りの証書—自殺未遂の嫁、婿殿に詫び状<sup>160</sup>」など、恋愛や結婚のもつれから多くの者が命を絶とうとし、ある者は未遂に終わり、またある者は死を全うした。

このような中で、ハーンは新聞記事に「若い男と女が鉄道で心中した」というテーマだけを与えられ、それをいかようにも描くことができたわけだが、それでも、その主人公を変哲のない娘に設定した。河島弘美氏は、この鉄道自殺の事件が、当時多く描かれた遊女と男の心中ではなく、若く素朴な男女の純愛の結末であることにハーンが強く惹かれたのだらうと指摘する。

一般に、心中するふたりはこの世で得られぬ幸せを来世に託して、つまり来世で夫婦になれることを願って死ぬのであるから、親の決める早婚の多い日本の場合、相手の女は女郎であることが多い。(中略)

西洋が女性崇拜に片寄った社会であるのに対して、日本は「迷い」を起こさせる花柳界の女性と、ひっそり家庭内で一生を送る女性との二種類から成る社会だと考えるに至っていた。従ってハーンの関心は恐らく、幼馴染に男女の心中らしいと知らされたことによって、この事件にひきつけられたに違いない。家庭婦人として一生を過ごす筈だった娘が、どんな風に心中の道を辿ることになったのか、解釈と細部をつけ加え、内容をふくらませて、一篇の素朴な愛情の物語に仕上げたのである<sup>161</sup>。

(下線は筆者)

ここにある、ハーンが「幼馴染に男女の心中らしいと知らされた」ことについて、未だ確証を得られてはいないが、いずれにせよ、物語の中で主人公<およし>が当時多く描かれた遊女ではないことにハーンの意図を見ることができよう。氏が指摘するように、<およし>と<太郎>の死はもちろん、残酷で悲しみを与えるものではあるが、二人の愛情は素朴で純粋で温かなものとして読者の中に残る。

まずは、あらすじを見てみよう。ある村で染物屋の息子として<太郎>という少年が生まれた。<太郎>は初めて学校へ上がった日に教師から「なにがいちばん好きか」と尋ね

<sup>159</sup> 朝日新聞社編、前掲（註157）84頁。

<sup>160</sup> 朝日新聞社編、同上、89頁。

<sup>161</sup> 河島弘美「女神との心中—『赤い婚礼』のおよしとハーン」『比較文學研究（47）（小泉八雲〈特集〉）』（恒文社、1985）145頁。

られ、「お菓子」と答えたことで笑い者になり、学校が嫌になってしまう。しかし、そんな<太郎>に話しかけ、優しく、ユーモアな性格で彼を励ましたのが<およし>であった。そして二人は長い年月をともに過ごし、互いに惹かれあうようになる。しかし、<およし>の継母である<おたま>は、彼女を貪欲な米商人<岡崎>へ嫁がせ、大金を得ようと企てる。あえて<太郎>と<およし>を仲良くさせ、<岡崎>を焦らせつつ、最終的に満足のいく金額で縁談を取り決めた<おたま>は、それを<およし>に伝える。すると<およし>の顔は一瞬青くなったが、すぐに顔を赤らめ、両親へお礼を述べる。そして数日後、<およし>は<太郎>と失踪し、鉄道自殺をするという物語である。この物語は、つまり、継母<おたま>が娘の<およし>の純愛を壊し、最終的に死へと追いやるという流れである。

この作品について、これまでもいくつかの研究がなされてきている。とりわけこの物語のタイトルでもあり、ストーリーに強い印象を与える「赤」という色について言及されてきている。例えば、藤原義之氏は赤が女の執念の世界の象徴であり、<およし>の情念の色であり、誠を持つ廉潔なヒロインをイメージさせるとしている<sup>162</sup>し、高成玲子氏は単に恋人たちの死の象徴としての赤ではなく、継母<おたま>の企み、<およし>と<太郎>の情熱、そして近代化に直面しているこの物語の背景としての日本を、白光と対照的な色で示していると指摘している<sup>163</sup>。また、牧野陽子氏は、ハーンの日本理解が深化していった過渡期の作品として、以下のように評価している。

子供の誕生前後から神戸時代にかけて、ハーンの作風は変わった。「赤い婚礼」をはじめとして、市井の名もない庶民を主人公とした物語が大半を占めるようになるのである。ほとんどが来日第三作、『心』所収のこれらの短篇は、いずれも一見平凡な日常生活のなかの事件や心理ドラマを淡々と語ることで、日本人の内面生活と情緒的特質を浮き彫りにして、ハーン中期の代表作とされる。(中略) 一雄という家族の小さな中心を得て、ハーンの文学的視野もまた外の世界から身の周りの日常世界に潜む真実へと収斂したかのようであった。そしてこの変化のなかで顕著なのは、「赤い婚礼」のように、人間の人生における幼年期というものが生彩を放つ普遍的な主題として浮上し

<sup>162</sup> 藤原義之「『赤い婚礼』—女性の執念について」『へるん第34号』(八雲会、1997) 60頁。

<sup>163</sup> 高成玲子「ラフカディオ・ハーンの『赤い婚礼』について—何故、赤い婚礼なのか—」『英学史研究(30)』(日本英学史学会、1997) 24頁。

てきたことだろう<sup>164</sup>。

このように、これまでの先行研究では、ハーンがストーリーの主題を「赤」という色に込め、それがストーリーの全体をまとめ上げる優れた手法であること、あるいは、長男一雄の誕生により、ハーンの文学的視野が深まっていったことを読み取れるのだと指摘されてきているのである。

しかしこの物語を読むとこれらの指摘を否定はしないまでも、一つの物語として未完成な印象を拭い去ることができないのもまた事実であろう。この心中物語は結局のところ、日本が舞台になってはいるものの、そのテロップは「継母による娘いじめ」という典型的なものに従っており、白雪姫やシンデレラといった物語と大筋はほとんど変わらない。それらと異なるのは、ハッピーエンドではなく、死が最後の場面を飾っているということだけである。しかしこの部分もまた、死という絶対的な行為により、継母の企みを阻止し自分の意志を貫くという意味で、また来世において結婚するという意味では幸福な結末でもある。

西洋の読者に向け、共感を呼び起こしやすいと思われるこのストーリーは、しかしながら、その登場人物の対立が矛盾に満ちていることを指摘せざるを得ないものとなっている。ハーンはもちろん、「近代化した日本にうまく順応しているように見えながら、実は何も理解できない愚かな庶民」としての継母<おたま>と、「近代化の波に乗ることができず、身を滅ぼしてしまいがちながらも、その内に秘めた強さや美しさを決して失わない旧日本の武士階級」としての<およし>という対立を描こうとした。しかし日本の封建制度や新しい教育制度などを加味して物語を構成できなかったハーンが描いたこれらの女性には、彼の思惑とは正反対の性格をも、知らず知らずのうちに付加されてしまったのである。

すなわちハーンは、それまでにすでに存在していた、言い換えれば、ありきたりとなっていた物語の展開を用い、西洋人が好むであろう日本のエキゾチシズムを取り入れ物語を構成した。問題はこれら一つ一つの要素が微妙にかみ合っていないということである。言い換えれば、ハーンは新聞から着想を得、「日本の物語」を一から作り上げようとしたものの、充分でない彼の日本理解がそれを阻んでしまったことが窺えるのである。この「ハーンの限界」について太田雄三氏は、①ハーンの再話作品には現実の日本を過度にエキゾチックなものとして描写したり、それとは逆にストーリー全体を西洋的価値観へ合わせよう

---

<sup>164</sup> 牧野陽子、前掲（註2）150頁。

としたりする傾向があること<sup>165</sup>、②限られた個人的な経験や知識を一般化してしまう傾向があること<sup>166</sup>を指摘しているが、まさにこういったことがこの物語からも読み取れる。これについて本章では、主人公〈およし〉や継母〈おたま〉を中心に物語の人物設定と描写に注目し、考察していく。

## 第二節 〈およし〉に込めた理想像

### 2-1. 「永遠の女性」としての〈およし〉

まず、主人公〈およし〉であるが、彼女の描写にはハーンの理想的な女性像が込められているということがすでに指摘されてきている。河島弘美氏は「およしはハーンの夢を体現する女であり女神<sup>167</sup>」で、女神およしに寄せた共感から読者に強い感動を与える作品であると評している<sup>168</sup>。また同氏は『小泉八雲事典』の「赤い婚礼」において、「およしは、ユーモア、優しさ、勇気という、ハーンが人間において最大に評価していた三つの資質をすべて備えた女性であり、ハーンにとっての理想の女性像といえるであろう<sup>169</sup>」と述べ、さらに、『赤い婚礼』の後にも、ハーンは何人もの女性を描くが、彼自身の理想像をおよしほど素直な形で体現している人物は他にいないのではないだろうか<sup>170</sup>と述べているように、〈およし〉の姿は、まさにハーンの中にある理想をそのまま表しているといつてよい。

ここでは、〈およし〉に込められた女性像を考えてみたい。〈およし〉の優しさは、〈太郎〉の孤独を包み込むような母性的なものとして描かれる。〈太郎〉は家族に非常に大切に育まれてきた一人息子であった。そんな彼が初めて学校へ上がった日、家族からは楽しいところだと聞いていたその場所が、厳しく、恐ろしく、孤独を与え続けるものとして感じられた。ハーン自身、決して社交的な性格ではなく、常に孤独と悲観的な考えに縛られていた人物であったこともつだってか、〈太郎〉の孤独観の描写は手に取るように分

<sup>165</sup> これについて太田雄三氏は次のように指摘する。「ハーンには、(一)再話を欧米の読者の世界とはまるで違うめずらしい世界の出来事についての話にするため、なるべく原話の持つ異国的なものを保ち、時には原話にはない要素によってさらにそれを強めて提示する傾向と、(二)話が欧米の読者に受け入れられるために、必要な場合には欧米の平均的読者の価値観に近づけるように原話を変える傾向という二つの傾向が見られることだ。」太田雄三、前掲(註7) 172頁。

<sup>166</sup> これについて太田雄三氏は「ハーンの異文化に対する態度には反面教師的などころがあった」とし、次のように指摘する。「自分の限られた個人的な体験や限られた知識にもとづいて外国や外国人についての性急な一般化をする傾向である。」太田雄三、前掲(註7) 193-194頁。

<sup>167</sup> 河島弘美、前掲(註161) 154頁。

<sup>168</sup> 河島弘美、同上、144頁。

<sup>169</sup> 平川祐弘『小泉八雲事典』(恒文社、2000) 5頁。

<sup>170</sup> 河島弘美、前掲(註161) 153頁。

かりやすく描かれている。＜太郎＞の姿は、内向的なハーン自身の姿と重なっているようにも感じられる。

家族が一人もいない一人ぼっちの学校という空間は、＜太郎＞に恐怖と強い孤独感を与えた。「みんなが自分のことを見て笑っているのだと思」い、恐ろしい教師の様子に怯え、彼は最早パニック状態であった。そして、教師からの「何が一番好きか」という質問に「お菓子」と答えたことでクラスメイトに笑われ、小さい＜太郎＞は絶望的な悲しみに突き落とされる。さらに休み時間になると、誰も自分の存在を気かけず外に走り出して行ったことで、その孤独感に耐え切れず泣き出してしまふ。級友に笑われたことによる羞恥心と、誰にも相手にされないという孤独感、家をそれまで出たことのない＜太郎＞にはどう処理してよいか分からないものであった。そして、ただひたすら声を殺して泣くことしかできなかつたのである。そこに現れたのが、聖母のような、天使のようなくおよし＞である。

と、そのとき、ふいにだれかの手が、かれの肩にそっとかけられたと思うと、だれか知らない優しい声が、太郎にささやきかけた。太郎がひよいとふりかえってみると、そこに、生まれてまだ見たこともないような、やさしい、情のこもった目がふたつ、じーっと自分のことを見入っている。——太郎よりも年がひとつぐらい上の、女の子の目である。

「どうしたの？」と女の子がやさしく尋ねた。

太郎はそれに答えるまえに、すばらくすすり泣きながら、さもたよりなげに鼻を鳴らしていたが、「おれ、つまんねえ……家へ帰りてえ。……」

「どうしてよ？」女の子は、太郎の首っ玉へ片腕をまわしながら、そういつて尋ねた。(中略)

「だって、……だって、ほかのやつ、みんな外で遊んでるのに、おらばかり、ここにいるんだもの。」太郎は不服を言いたてた。

「だめ、だめ。そんなわからないことを言っちゃ。ねえ、あたいに行って遊ぼう。ね、あたい、お相手したげるから。……さあ、おいでよ。」

太郎は、それをきくと、たちまち大きな声をあげて、わあっと泣きだした。自分で自分がいじらしくなり、それと感謝の思いと、新しく見つけた同情にたいするよるこびと、そんなものが、太郎の小さな胸のなかでいっぱいにはちきれたあまり、いきおい声をあげて泣き出さざるをえなかつたのである。泣いている自分を、そばからす

かしなだめられるのが、太郎はひどくうれしかった。

が、女の子は、ただ、あはははとって笑ったと思うと、そのまま、すばやく太郎の手をひっぱって、教室から外へとびだして行った。小さな母性愛が、その場を察して、機敏にうごいたのである。「いいのよ。あんた、泣きたけりゃ、いくらでも泣いてなさい。だけど、遊ぶときには、遊ばなくっちゃだめよ。」そうして、おお、ふたりは、なんとまあ、たのしく遊んだことであつたらう！<sup>171</sup>

(下線は筆者、260-261 頁、原文[5])

七歳の小さなくおよし>の登場により、<太郎>は先ほどまでの絶望的な孤独感から救済される。<およし>に相手をしてもらえることが分かったあとの<太郎>の涙は、悲しみの涙ではなく喜びの涙であり、感謝の涙であり、また安堵の涙である。<太郎>は、まだ名前も知らない優しい少女と、これまでになく楽しい時間を過ごした。<およし>のこの優しさについて、河島弘美氏は以下のように述べている。

優しさ<tenderness>についてハーンは、「永遠に女性的なるもの」に関するチェンバレン宛の書簡の一通に、「それは、感受性、理解力、いつでも衝動的に弱者の力になってやれる状態」であると述べている。まさにおよしのために用意された言葉のようではないか。深い意味でのこの tenderness は日本人の男には見られない、と考えていたハーンであるから、この場面に限らず全体を通じて、もっぱらおよしの優しさを描くのに力を入れているのも無理はない<sup>172</sup>。

(下線は筆者)

氏の指摘通り、<およし>には他人の孤独を自分のものとして捉えられる感受性と、その状況を理解する力、そしてすぐに思いやりを行動を以て示す勇気が備わっている。ハーンは、この「優しさ」を<およし>に意図的に取り入れたと見るのは間違いないだろう。

第二部は、次の台詞で締めくくられる。

ふたりの遊びともだちは、太郎のうちで、約束のお菓子をいっしょに食べあつた。

<sup>171</sup> 小泉八雲 著、平井呈一 訳、前掲（註 20）260-261 頁。以下、「赤い婚礼」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

<sup>172</sup> 河島弘美、前掲（註 161）148-149 頁。

およしは、そのとき、からかうように先生の威厳をまねながら、太郎に言った。「内田太郎、おまえは、このあたよりも、お菓子のほうが好きかね？」

(262 頁、原文[6])

このユーモア溢れる優しさは、<太郎>の苦い記憶を、甘いお菓子と楽しい会話の思い出へと塗り替えたに違いない。そしておそらく、この時間は二人が過ごした中でも最も貴重な瞬間であったと言えるのである。

そして、彼らがレールに身を置き、走り来る列車に命を投げ出したときも、<およし>は<太郎>に優しい最後の言葉をかけた。

ふたりは、さあ今だぞと思った。そして、ふたたび線路にとってかえし、くると向き直ると、たがいに両腕をからみあい、頬と頬とをぴったり押しつけて、しずかに、すばやく、内側の線路の上に身を横たえた。もうそのときは、線路は、すでに驀進してくる列車の震動で、金床のようにガンガン鳴りうなっていた。

男はにっこりほおえんだ。女は、男の首にまいた腕をぐっとしめながら、男の耳もとにささやいた。

「二世も三世も、わたしはあなたのおかみさんよ。あなたはわたしのだんなさまよ。ねえ、太郎さん。」

太郎は、なにをいういとまもなかった。その瞬間に、空気制動機のない迅速な列車は、百ヤードあまり手前で、必死になって停車しようとしたのだけれど、そのかいもなく、ついに車輪はふたりの上を通過した。——おおきな刈り鉋で切ったように、まっぶたつに切断して。

(下線は筆者、289 頁、原文[7])

<およし>は、こうして、初めて<太郎>に話しかけた時と同じように、腕を彼の首へ巻きつける。そして、最後に「永生を予告した<sup>173</sup>」のである。<およし>の終始一貫した優しさは、<太郎>を救い、育み、死後の世界をも約束するものであった。

こうした母性に溢れる女性は、言うまでもなくハーンが求め続けていた存在であると言

<sup>173</sup> 鶴木奎治郎「ハーンの『赤い婚礼』とホーソーンの『ラパチーニの娘』『へるん 11 号』(八雲会、1974) 10 頁。

えよう。母ローザと幼くして生き別れ、母の愛情を渴望し続けたハーンは女性の、万物を包み込むような優しさに最大の価値を置くようになる。あるいは、自分を信じ、常に支え続け、さらにかげがえのない長男一雄を生み育てているセツの美しさと優しさを、〈およし〉に映し出したということもできるかもしれない。いずれにせよ、ハーンの中にある〈およし〉への思慕、憧れそして愛情を見てとることは難しいことではあるまい。

以上のように見てみると、理想的な女性〈およし〉が死を以て愛を貫いた美しい愛の物語ということになる。そしてその〈およし〉にはハーンが永遠に求めた母親の愛<sup>174</sup>と、その母親として新たな生命を産み育むセツの姿が反映されていることはおそらく間違いないだろう。しかしここで問題にしたいのは、この物語の中に何か釈然としない、理解しがたい点があることについてである。それは単に継母にいじめられた少女が、青年との愛を貫こうとする西洋の典型的ストーリー展開が、明治期日本を舞台に繰り広げられるという不自然さからだけではない。むしろこうした不釣り合いな要素を、書き手であるハーンが消化しきれていなかったということが指摘できるのである。

## 2-2. 〈およし〉の二面性

〈およし〉は確かにハーンの理想的な女性の反映ではあるが、同時に何か釈然としない人物でもある。それは極端に美化され過ぎた、天女のような〈およし〉に不快感を抱くといったことではなく、彼女の地位であれば、当然なされるであろう行為がなされず、突拍子もない思いつきがまるで然るべくしてなされたのだといったように描かれる一連の流れがそうさせていると考えられる。

〈およし〉は〈勇子〉同様、サムライの娘であるとされている。これは再話作品においてハーンが好んで使った手法、西洋人には到底理解できない異質な存在<sup>175</sup>としての日本人の描き方であることは言うまでもない。このように伏線を張っておくことで、その後、どのようなことが起きても、読み手である西洋人には「サムライの世界で起きた出来事」として、一定の距離感をもって受け入れられることになる。そして、不可解であるからこそ惹

<sup>174</sup> 藤原義之氏は「一歳年上のおよしの特質（太郎がもっとも惹かれたはずの）、『母性』の強さを際立たせる効果を生んでいる。太郎にそそぐおよしの肉親のような情愛は、四歳で生き別れたハーンの母への思慕とも交錯する。」と述べている。藤原義之、前掲（註162）59頁。

<sup>175</sup> 太田雄三氏は「勇子——一つの追憶」の〈勇子〉描写について、「日本人と西洋人の本質的な違いを強調しながら、西洋人には決して本当に分かるはずがないと自らも考えている一日本女性の内面について、独断的に長々と書いているところは全くハーン的だ」と述べている。こうした「理解できない異質な存在」としての女性像は、〈勇子〉に限らず、再話のいたるところに点在している。太田雄三、前掲（註7）163頁。

かれるエキゾチックな魅力を、ハーンは<およし>に付加させていく。それは、世俗的な庶民である継母<おたま>には到底理解できない、非常に特別な存在としての<およし>であり、庶民との間にある絶対的な差を強調している。

<およし>を死へと追いやる継母<おたま>の存在は、基本的には「金に目がくらみ娘を売り飛ばそうとする女」であるが、ここで注目したいのは、その貪欲さ、狡猾さ、冷酷さといったものの要因を、ハーンが<おたま>の個人的な問題とはせず、日本社会が作り上げたものだとしている点である。

これについて以下の描写を見てみよう。これは<おたま>が<およし>に、富豪<岡崎>との結婚が決まったことを告げた場面である。

はじめ、およしは死人のようにまっ青になった。が、すぐとそのあとで、顔をあかく染め、にっこりとわらって、ていねいに頭を下げた。そして、親につかえるあらたまったことばづかいで、なにごとともご両親のお心におまかせいたしますと申しのべたので、宮原夫婦はほっと胸をなで下ろしたものの、内心、ひそかにおどろいた。打ち見たところ、およしの態度には、内々不服があるようすも見えない。そこで、おたまは喜びのあまり、さっそく打ちとけて、いちぶしじゅうをおよしに打ちあげ、橋わたしの話のあいだに起ったおかしかったことや、こんどのことについては、岡崎もだいぶ自腹を痛めていることなどを、いろいろ話して聞かせた。(中略) およしは、継母の助言にたいしては、つつましやかに、いくども頭を低く下げながら、すなおに礼をのべた。(中略)

おたまは、それをおよしが満足の思いをあらわしたものと見て、むりもない、やっぱりお金持ちに縁づけば、いろいろためになることがあると、今になってそれがわかって、それで満足なのだろうと想像したのであった。

(283-285 頁、原文[8])

この後、<およし>は姿を消し、数日後、思い合う<太郎>と共に鉄道自殺をする。<おたま>にしてみれば、娘の意志を完全に無視し、進めた縁談が思いの外難なく成立することに一旦安堵したものの、数日後には破談となり、思わぬどつぼにはまってしまったのである。留意すべきなのは、初めに真っ青になった<およし>が顔を赤らめにっこりと笑い、その現実を受け入れた(かのように見えた)姿に、彼女の本意を見抜くことができない

かった<おたま>への眼差しである。ハーンはこの<おたま>の膚浅な態度の原因を、農民という身分におき、以下のように述べている。

そういうおよしの気性のなかに、おたまは、せいぜい百姓の分際で読みとれる程度のことだけは、読みとっていた。(中略)ところが、そういうおよしの内部には、じつは、おたまごときに目には、しかと見さだめがたい、まったく別の性質が内在していたのである。——ふだんは、深く抑えかくしているから、うわべから見たのでは、ちょっと見えないけれども、それだけに、根ざしが深く、道義上の悪に敏感で、しかも人に負けまいとする自尊心、それを、どんな肉体の苦痛にも打ち勝てるだけの意志力、そういうものを、およしは内に深く蔵していたのである。(中略)——サムライの血が彼女にそれを教えたのである。

(283 頁、原文[9])

このように、百姓の身分では、サムライの血を推し量ることは到底できないのだとしている。つまり、継母<おたま>とサムライの娘<およし>は、生まれながらにして異なった血統を持ち、前者は、崇高な後者の考えを理解するのはそもそも不可能なことであると述べているのである。

しかし、ここで述べておきたいのは、彼女の地位の強調が物語の流れを不自然なものにしているという事実である。すなわち、本当に<およし>が生粋のサムライの娘として生きたのならば、物語の展開はこれとは逆の方向に進まねばならない。

近代化以前の日本において、上流階級にとっての結婚とは一つの通過儀礼であり、それは恋愛感情とは区別して捉えられるものであった。武士階級の人間であれば、結婚はイエとイエとの結びつきを強め、その発展のための政略的なものであるということは最早常識で、娘はその目的を達成するためのモノに過ぎなかった。近代化以前の結婚について、上野千鶴子氏は以下のように述べている。

たしかに封建時代にも当事者があずかり知らぬところで勝手に結婚相手が決まる結婚はあった。これは武士の階級や豪商・豪農の階層にある、一種の政略的結婚である。女が「家」の勢力拡大の道具に使われた。女に利用価値がある限りは、婦徳にいわれる「貞女は二夫にまみえず」というような規範は通用しない。戦国時代の政略結婚、

たとえば千姫の例に見られるとおり、いったん嫁いだ娘が相手の夫が滅ぼされた後もまだ利用価値があるとわかると、二夫にまみえずどころか、再婚・再再婚をいとわないのが現実であった。しかしながら政略結婚は守るべき家があって、その家の勢力を拡張する動機のある階級に限られている。守るべき家（家名、家格、家産、家職、家業等）があるところでは、戦略としての結婚が重要になってくる<sup>176</sup>。

明治時代に入ってもその伝統的な風習が瞬時に消え去ることはなく、とりわけ地方においては、その考えが根強く残っていた。そして、この物語のヒロインをサムライの娘〈およし〉とするならば、彼女は殊更、この考え方に順じ、豪商〈岡崎〉との結婚に身をゆだねなければなるまい。自由な恋愛の果てに結婚があるなどという考え方は毛頭なかったはずで、彼女は不幸な結婚をすることになるのである。そうしてこの物語が、日本に未だ残る封建社会への批判を込めた物語となっていれば、筋の通ったものとなったはずである。しかし、物語はその真逆へと進んでしまう。

はじめに青くなったのは、あれは、ああ恐ろしいと、ぞっと身ぶるいを感じた恐怖の衝撃であった。（中略）こんどの縁談は、身分不相応な巨利をつかもうという、ただそれだけの動機から、あんな老醜目をおおうような老爺のところへ、自分を売り込む人身売買だ、しかもその売買契約は、残忍非道、破倫きわまるもの、というはっきりした認識がともなっていた。（中略）慎重な考えが、ひらめくごとく浮かんだのである。およしが、あの時にっこりわらったのは、じつに、これだったのである。にっこり笑いながらも、およしの若い意志は、そのとき、はがねと化した。（中略）自分は何をしたらいいのか、それをおよしは、はっきりとその場で自覚したのであった。——サムライの血が、彼女にそれを教えたのである。

（285 頁、原文[10]）

このように、〈およし〉は重視すべき孝を完全に無視し、一旦ことを丸く収めたかのように見せかけ、最後は腹違いの娘に教育まで授けてくれた継母〈おたま〉にどんでん返しを食らわすといった流れになってしまっている。

この問題について、別の視点から考えてみると、同時期に日本を訪れていたアリス・M・

<sup>176</sup> 吉川弘之『結婚（東京大学公開講座）』（東京大学公開講座東京大学出版会、1995）54-55 頁。

ベーコンが指摘しているように、明治期の日本人の結婚観は当時、まだ西洋のそれほど凝り固まったものではなく、日本人が非常に寛容に結婚を捉えていたことが分かる。

今でも日本人は、結婚生活を必ずしも一生のものと考えていない。夫と妻の双方から結婚を解消することができる。庶民は離婚に対して強い抵抗感もないので、結婚と離婚を幾度も繰り返す男性は珍しくない。女性だって、一度や二度離縁されても、再婚や再々婚することはしょっちゅうある。上流階級では、男と女の問題はスキャンダルとして噂の種になるので、勝手気ままに離婚するというわけにはいかないが、それでも離婚は珍しくないで、離婚経験のある上品で立派な人に会うことがよくある<sup>177</sup>。

ここから分かるのは、近代化以前の考え方を根強く残しながらも、明治時代に入り、女性から離婚を切り出すことができるようになるなど、日本人の結婚観が少しずつ変化していることである。現に、多くの女性が様々な理由で実家に帰されるといったことは、明治期に入っても少なくなく、逆に当時の離婚率が驚くほど高かったこと<sup>178</sup>も周知の事実である。サムライの娘であることを強調され続けた〈およし〉ではあったが、それでは何か腑に落ちない点があることから、このように明治時代に生きた女性であることへと意識を広げると、今度は、たかが一度の結婚を前に心中の道を選んでしまった彼女の姿が非常に行き過ぎたものとして映ってしまうのである。

あるいは染物屋の跡取り息子〈太郎〉と、商売がうまく行っている家の娘〈およし〉であるなら、鉄道で駆け落ちする程度の金銭的余裕はあっただろう。なぜ逃げなかったのか。逃げることで、命を落とすことなく、継母〈おたま〉の企みを頓挫させ、二人の思いを貫くことができたのではないか。逃亡こそ、封建的社会への挑戦としてふさわしい手段ではなかったのか。鉄道も敷かれた明治時代に、〈およし〉は、〈太郎〉と近代教育を施す小学校で出会い、11歳まで教育を受けられた。これは主人公の周辺を封建社会から解放しているかのように見える。しかしながら、彼女はサムライの血を引いているにも関わらず、

<sup>177</sup> アリス・メイベル・ベーコン『明治日本の女たち』（みすず書房、2003）64頁。

<sup>178</sup> 湯沢雍彦氏は、明治期の離婚について「すなわち現代日本の数値（二〇〇四年＝平成十六年で二・一五）よりもかなり多かったのではないだろうか、と私は推測している。」と述べ、その理由として①庶民の意識の根底に、結婚は生涯続けなければならないもの、との認識が乏しかったこと。②姑が早期に嫁の欠点を指摘して、離婚を迫ることが多かったこと。③離婚しなければならない原因が社会的に明確にされていないこと。④離婚の手続きがきわめてルーズであって、なんらの届出を必要としない所が多かったことを挙げている。湯沢雍彦『明治の結婚 明治の離婚—家庭内ジェンダーの原点』（角川学芸出版、2005）63-64頁。

封建的社会に生きるわけでもなく、教育を受けたからといって、変わりゆく時代の中で思いを巡らすわけでもなく、あっけなく死を選んでしまうのである。

### 第三節 <おたま>の二面性

#### 3-1. 明治に生きる女<おたま>

ここまで、主人公<およし>の二面性に注目してきたが、物語の中核をなすもう一人の女性、継母<おたま>もまた、相反する二つの側面を併せ持っている。そして<およし>のそれに絡みあうように、物語の流れを複雑なものにしている。

<おたま>の役割は、継子<およし>と豪商<岡崎>を結婚させ、家を富ませることであつた。<およし>と<太郎>の仲を知りながらも、巧みな心理作戦で駆け引きし、最終的に二人を引き裂き、彼らを死へと追いやつた女性である。

<おたま>に関する描写は、<およし>のそれよりもはるかに多くの紙数が割かれ、克明に記されている。まず、身分は<およし>の父<宮原>の家に入りしていた小作人の娘で、外見的には「色こそあらぶきの銅貨みたいにあか黒かつたけれど、目鼻だちの十人並すぐれた、きりょうよしの百姓むすめ<sup>179</sup>」となっている。若くして儂くも亡くなつてしまつた<およし>の生みの親（士族の娘）とは対照的に、元気な女として描かれる。

そして彼女について特筆すべき点は、全くの文盲であるにも関わらず、商売をこなし、宮原家にそれまでの二倍の富をもたらしたことである。そして、継子である<およし>にも一切つらく当たることなく、優しく接し、学校へも通させたという点である。つまり、<おたま>は賢く、母親としても抜け目ない女性である。

さらに注目したいのは<おたま>が旧日本を全面的に否定し、それを蔑む姿である。熊本時代、古き良き日本を捨て去り、近代化へ邁進しようとする日本の姿に絶望したハーンは、そうした日本人の姿を彼女に映し出そうとしたのかもしれない。

おたまという女は、サムライと平民とは、生まれながらにして、その氣質がはっきりと違つてゐるものだと考える昔からある考え方を強情に信じない女だつた。武士階級と農民階級、このふたつの階級のあいだには、国が決めた士・農・工・商のおきて、それとこれまでの世の中のしきたりとがつくりだした差別以外には、べつになんらそ

<sup>179</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）262頁。

ここに違った点はない、しかもそういう国がきめたおきても、世の中のしきたりも、けっしてそれはけっこうなおきてでも、しきたりでもありはしなかったと、おたまは考えていた。あんなおきてやしきたりがあったからこそ、かえって今のようにみんな弱虫になったり、阿呆になったりしたのさ。——そう考えて、おたまは、内心ひそかに士族というものを軽べつしていた。(中略) おたまにすれば、およしが士族出の生みの母をもっていたからとて、それがおよしにとって、何の多足になるとも、考えていしなかった。それどころか、およしが生まれだち、かぼそい性なのは、彼女が武家出のおふくろをもったせいだところえて、むしろ、よくよく不仕合せな血すじを引いたものだと思っているくらいであった。

(282-283 頁、原文[11])

こういった武士階級への蔑みは、それまでの日本社会を批判する立場である。これについて、藤原義之氏は「通行のたびに平伏させていた後家老が、維新後の今、農町民に援助を求めている。職を失った侍らは無能で甲斐性もないと、彼女は軽蔑していた<sup>180</sup>」とくおたまの様子を分析し、農民出で無学のくおたまには「生理ではつかめない侍の来し方、気質の違い」があり、それがこの物語に「悲劇的な伏線」を張ったのだと分析している<sup>181</sup>。ここから読み取れるのは、近代化の象徴としてのくおたまの姿と、それを批判するハーンの意図であろう。ハーンの思い描いた「真なる日本」の姿を否定するこの人物は、最終的に、この物語の中で一旦は全てを掌握したかのように思えたが、瞬く間に砂上の楼閣のごとく崩れ去ってしまう現実を突きつけられてしまうのである。

そしてこの物語のメインイベントであるくおよしの結婚話に関して、くおたまの非情な本性がありありと描かれていく。「母親のひややかな<sup>けい</sup>炯眼は、同時にまた、結婚市場におけるおよしの値打というものについても、とうからちゃんと胸にそろばんをおいていた<sup>182</sup>」とあるように、彼女は継子を使って莫大な利益を得ることを長年考えていたことが記されている。彼女はく岡崎の足元を見、金額を定め、夫であるく宮崎に今回の結婚の意義を熱弁して丸め込むことに成功する。さらにあくどいのは、く岡崎を翻弄するためにく太郎とくおよしを利用したことである。つまりくおたまは、く太郎とくおよしをあえて仲良くさせておくことでく岡崎を焦らせ、さらに金額を吊り上げようという算

<sup>180</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）282頁。

<sup>181</sup> 藤原義之、前掲（註162）60頁。

<sup>182</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）271頁。

段であった。〈太郎〉の父が息子と〈およし〉の結婚を正式に依頼してきたときも、返事を濁し、あやふやなままにすることで周囲の人間と感情を利用し続けたのである。巧みな心理作戦により、〈岡崎〉から多額の金をとることができた〈おたま〉について、以下のように描写される。

おたまの作戦は、かくべつ、なにも込み入ったものではない。ただ、人間の本性のみにくい面を、深い勘で知っている、その知恵のうえに打ちたてられた作戦なのである。おたまは、こりやもう成功疑いなしと感じた。どだい、約束なんてものは、これは愚かなやつらをつる道具。証文なんざ、正直者を事におとし入れる罠だ。

(275 頁、原文[12])

おたまは、じっさい、目から鼻へぬけるような女だった。いままでにも、これといって大きな見そこないをしたというようなことは、ついぞない。おたまのような女は、いわば卑劣な人間の弱みにつけこんで、うまくそれを利用しながら、世の中をらくらく押しわたって行くように、うまれつきできている人間のひとりであった。

(281 頁、原文[13])

こうして強欲非道な〈岡崎〉をも丸め込み、淡々と縁談を取り決め、最後に〈太郎〉の父親に「とうていできない相談の金談を、からかいづらに持ちこ」んだのである。〈おたま〉にとって〈およし〉は「宮原家を富ませる」ための材料であり、それをいかに取引するかといったことは、物のそれとなんら変わりはない。〈おたま〉の貪欲な性格とずる賢さは、常に合理的で、利益の獲得という目的を達成するためにあれこれ思慮を巡らす姿が終始強調され続けている。

このように、〈おたま〉の金銭第一主義的な性格が全面的に表されたこの物語について、鵜木奎治郎氏は『赤い婚礼』は、日本の社会が、その上は封建時代から現代に至るまで、恐らくは将来も、女性的価値、つまり金銭的価値を第一義とする社会になり得る可能性を予告しているように思えるのである<sup>183</sup>と述べている。近代化により変化し得る日本人の姿を〈おたま〉が表していると指摘している。すなわち、〈おたま〉を近代化した日本人の象徴として見なすことができるのである。

<sup>183</sup> 鵜木奎治郎、前掲（註 173）11 頁。

### 3-2. 封建社会に従う〈おたま〉

しかし問題は、〈おたま〉が旧日本を蔑視していた一方で、彼女の行為が、極めて旧日本的な要素を帯びていたと見ることも、また自然なことだということである。幕末から明治期にかけての結婚制度について、上田博氏は以下のように述べている。

封建社会は、人間を身分と土地に縛り付けている社会であって、門地、資産、年齢と健康状態、両親、兄弟姉妹の性格などをたしかめる術は、比較的容易であったのである。部落内には、若者組、娘組などが、姿格好以外にも、他人への思いやり、応対、気転や働きぶりを基準にして、「よい若者」「よい娘」を「衆議する場」として公認され、仲人や若者頭が部落の世話を代表して、共同体の中に似合いのカップルを誕生させてきたのである。

柳田国男は、こうした「恋愛教育」の機関が壊れ始めたのは、封建社会が解体し、人が身分から離され、土地から引きはがされ、交通機関が発達して人の往来が自由になったからだと説明している。(中略)石井研堂の『明治事物起源』には、明治十年、東京、浅草に「結婚媒介所」が出店、看板に「養子婿嫁妻妾縁組仲媒」を掲げていたとある。維新戦争の戦乱による親子兄弟姉妹の生き別れ、地方人の新首都への移動と定住による夫婦の別居や別離、親族、知己の行方不明など、新しい時代の懇談と、それに伴って形成される新しい門地、社会階層の形成の為の様々な縁組が、結婚事情に反映されているのである<sup>184</sup>。

このように、限られた共同体の中で比較的容易に取り決められてきた結婚という行事は、封建社会の崩壊により、一種のビジネスと化した。その一方で、ムラ制度が解体したことにより、農民の地位が不安定なものとなり、それまで概して平均的であった農民たちの中に階級が存在するようになると、それまで、農民たちにとってさほど重要な関心事でなかった結婚も、まるで武士階級の人々のように、イエの存続を左右する一大事になってしまった。こうして仲人を介し段取りを進める結婚が一般化すると、勃興する家にとっては、家族戦略のための道具として娘の持つ意味の重要性が増してきて、その結果、〈おたま〉のように娘の価値を落ち度なく見定める家族の存在が浮かび上がってくるのである。

この点を考慮すれば、継子〈およし〉の結婚を家計の足しにしようとする〈おたま〉が、

<sup>184</sup> 上田博『明治の結婚小説』(おうふう、2004) 1頁。

物語の中では極悪非道な人物として描かれてはいるものの、実は極めて一般的な女性の姿であることが分かってくる。鶴木奎治郎氏は「おたまはおよしの中なるサムライの精神を見損なっていたというのが、ハーン的主張であるように見えるが、実は、おたまは武家の妻よりもまだ封建的な態度でおよしを処分しようとしたのである<sup>185</sup>」と指摘している。つまり、ハーンは潔く命を絶つことで純愛を守った〈およし〉（善）と、サムライの崇高な考えを理解できず、金のために娘を売り飛ばそうとした〈おたま〉（悪）という対立を描こうとしたが、そこには、サムライの道理に反した娘〈およし〉と、封建社会に忠実に従う女性〈おたま〉の姿が混在してしまっているという矛盾が存在しているのである。

#### 第四節 未消化に終わった女性像

ここまで、〈およし〉と〈おたま〉の人物描写の矛盾を指摘してきた。さらに視野を広げれば、姿を潜める男性たちの存在もまた物語を不自然なものにしていると言える。例えば〈およし〉と恋仲である〈太郎〉であるが、彼は終始内気な性格で、物語の中で積極的な行動を何ら起こさないにもかかわらず、〈およし〉が〈岡崎〉と結婚することになったことで、いつの間にか死ぬ覚悟をしてしまう思い切りの良さ、あるいは諦めの早さを持った人物である。彼を幾度となく神社へ連れて行き成長を願い続けてくれた両親、学校の道具を全て揃え、送り迎えをしてくれた祖父、〈およし〉との結婚を最後まで交渉してくれた父といった家族への思いは、内容が明かされない遺書にしたためられているに過ぎない。孝の精神といったことは掻き消され、恋愛至上主義的な人物である。

そして、〈およし〉の実父〈宮原〉の影はそれ以上に薄い。鶴木奎治郎も指摘しているように、この物語において〈宮原〉はほとんど存在価値がなく、すべてのことが〈おたま〉によって支配されている。〈おたま〉が宮原家の富を増やしたといっても、家長は〈宮原〉であることに違いはない。また血統的なつながりから見ても、実の娘である〈およし〉の結婚にほとんど関与しないばかりか、継母〈おたま〉の言いなりになって娘を売り飛ばそうとする姿は、〈おたま〉以上に冷酷な人物であると言わざるを得ない。

通常父親が子どもの縁談を取り決めるはずが、継母〈おたま〉が〈およし〉の結婚を支配し、「封建時代の家長的な父親が娘に期待する忍従<sup>186</sup>」が、〈おたま〉から〈およし〉へ

<sup>185</sup> 鶴木奎治郎、前掲（註173）11頁。

<sup>186</sup> 鶴木奎治郎、同上、10頁。

直接的に求められている。女性が家長となって家を取り仕切ることも完全になかったわけではないが、非常に稀で、且つ一時的なものであったことは既に知られているところで、先のアリス・M・ベーコンも著書の中に記している<sup>187</sup>。しかし、この物語では「継子いじめ」の典型的ストーリー展開と同様、父親はほとんど見る影もない。

こうして考えてみると、ハーンの理想的女性の代表ともいえる〈およし〉は、実はサムライの娘らしからぬ行為をしていることが分かるし、逆に〈およし〉に見る封建制度を蔑みながらも、彼女以上にそれに従順に従う〈おたま〉が物語を掌握する悪者となっていて、しかもこれがノンフィクションの雰囲気漂わせる物語である（すなわち、時代的背景が明治半ばである）ということから、物語が非常に理解しにくいものとなっている。ここにあるのは、ハーンが近代化以前の日本に憧憬を抱きながらもそれを把握できなかったこと、そして近代化への嫌悪感に苛まれることで、現実にも目を向けられなかったということである。こうしたことから、西洋読者にも受け入れられやすいテロップでありながらも、日本に対する多くの誤りを含むこの物語が非常に不自然なものとなっていると言わざるを得ないのである。

---

<sup>187</sup> 「日本では、個人はあくまで家の一員である。日常生活の細かいことから結婚にいたるまで、すべて家長や家族会議によって決められる。(中略) 比較的自由的な男性でさえそうなのだから、当然、女性は完全に家の意志の下にある。女性の家長もごく稀にはいるが、それは一時的なものであることが多いし、そのような場合は家の中の地位が低いとき以上に家族の利益を最優先し、自分のことは後回しにしなければならない。」77頁。とし、独身女性が家長の場合は結婚するまで、未亡人が家長の場合は、後継ぎが成長するまでといった具体例を挙げている。アリス・メイベル・ベーコン、前掲(註177)319頁。

### 第三章 ジャポニスム文学への挑戦—遊女〈君子〉の物語—

#### 第一節 「きみ子」*Kimiko* (1896) とジャポニスム

1862年のロンドン万国博覧会をはじめとして、日本が「豪華ごうしやに着飾った華やかな遊女たち<sup>188</sup>」のイメージを西洋諸国に発信し続けたことから、「遊女」は「ゲイシャ」という一つの記号として、「サムライ・フジヤマ・ハラキリ」などと共に、典型的日本のイメージとして定着していたことは、前述の通りである。そして、日本女性は容易に「ゲイシャ」を連想されるようになった。例えば、フランスでは「日本の女たちは拒むすべをしらない<sup>189</sup>」という見方が生まれ、欧米では日本女性がフェミニズムをしらないこと、キリスト教的道徳観に縛られない上、儒教的な親孝行の教えに従うため、身を売る女性がいるのだとみなされるようになった<sup>190</sup>。

絵画から始まったジャポニスムの流行はそれだけにとどまらず、文学や戯曲などにも見られるようになる。芸者や高級娼婦といった存在に溢れた世界<sup>191</sup>として日本を捉えようとする『お菊さん』や『蝶々夫人』はあまりにも知られたところである<sup>192</sup>。

本章で扱う「きみ子」*Kimiko* は『こころ』*Kokoro* (1896) に収録された物語で、一人の遊女が主人公となっている。この原話については明らかになっていないが、セツが新聞の三面記事から拾ったものを再話した物語であるとされている<sup>193</sup>。

この物語は、五部に分けられる。一部では芸者街や芸者のシステムについての説明、二部では空前絶後の流行り芸者であった〈君子〉と、ある〈青年〉による落籍まで、三部では士族の娘〈君子〉の生い立ちと、一家の没落、四部では〈君子〉の失踪、五部では尼となった〈君子〉と〈男〉の間接的な再会が描かれる。

まず、あらすじを見てみよう。これは、筆者ハーンが主人公〈君子〉について、彼女を育てた姉女郎〈君香〉に話を聞くスタイルで物語に入っていく。〈君子〉は極めて聡明で、並々ならぬ美人であった。芸事も、和歌、生け花、茶の湯、刺繍、押絵などあらゆること

<sup>188</sup> ヘレン・バーナム編、前掲（註21）20-21頁。

<sup>189</sup> 塩川浩子、前掲（註28）78頁。

<sup>190</sup> 塩川浩子、同上、79頁。

<sup>191</sup> ヘレン・バーナム編、前掲（註21）65頁。

<sup>192</sup> これら以外にも、レオン・ド・ロニーの戯曲「緑龍の尼寺」（1871年パリ初演）、サン＝サーンスのオペラ・コミック「黄色い皇女」（1872年パリ初演）、エミール・ジョナスのオペレッタ「日本娘」（1873年ウィーン初演）をはじめとして、1870年代から日本を取り上げた演目が、パリのオペラ座、ロンドンのサヴォイ劇場といった大劇場から大衆的なカフェ・キャバレーのレビューにいたるまで数多くみられた。ヘレン・バーナム編、前掲（註21）87頁。

<sup>193</sup> 長谷川洋二、前掲（註17）169頁。なお、『心』の原稿は1895年8月には完成している。

に秀でている。そして<君香>によって、男のあしらい方も十分に仕込まれたため、大きな過ちもせずにご過ごした。無礼な客にはすげなく対応し、自分に思いを寄せる客に対しても上手にあしらった。次第に熱狂的な流行妓<sup>はやりっこ</sup>になり、外国の皇太子からもダイヤモンドなどを贈られた。そこまでの女性でありながらも、彼女は決して心中立を迫るようなことをしなかったため、堅気の女性からも悪く言われることはなかった。ある日<君子>の心を動かした男が現れる。彼は<君子>のために自殺を図ったが、それを介抱した彼女が、心を動かされ、遊廓を去ることになった。そもそも<君子>の本名は「あい子」である。ハーンはこの名前が「愛」であり「哀」であるとして、彼女の一生はこの二文字で表されると説明している。彼女は士族の娘であり、幼い頃から侍の私塾で学び、その後は近代教育が施される公立小学校へ通った。その後明治維新が起り、武士階級は零落し、彼女は学校を辞めざるを得なくなる。そればかりか、機織り以外に何もできない母と、幼い妹の3人きりになってしまったことで、あらゆる装飾品を売っても生活できず、先祖の墓を掘り起こして、刀の柄<sup>つか</sup>でさえ売ってしまった。生活が貧窮したため、<あい子>は芸者になることを決意し、家を出る。そして<君香>に弟子入りし、花柳界を騒がせる名妓になったのである。<君子>と名家の<男>の結婚は、彼の家族すら反対していなかった。しかし、<君子>は何度も結婚を延期し、最終的には、自分は彼の妻にふさわしくないと行って、姿を消してしまう。その後その<男>は別の女性と結婚し、男の子をもうける。ある日、旅の<尼>が<男>の家の前を通りかかると、施しものを受けながら<男>の息子へ話しかける。そして、息子はその言葉を父に伝える。それを聞いた<男>は号泣する<sup>194</sup>。

この、遊女<君子>と彼女を愛した<男>の間にある愛情を表した物語を読み解く際、これが1896年という時期に西洋に向け発信されたという時代的意義を考慮しなければならないだろう。それまで、日本女性像の歪曲を増長し続けてきた、ロティを始めとするジャポニスム文学を念頭においてこの作品を見ると、ハーンがこの作品にそれまでとは完全に異なった日本女性像を込めていることが分かってくる。ただし「きみ子」もまた、「現実の遊女たち」あるいは、「現実の日本女性たち」を表しているわけではない。この作品が『心』に収録され出版されたのが1896年、すなわち1872年のマリア・ルーズ号事件から20年以上経過した明治期日本においてであったにもかかわらず、激動する社会での苦悩、葛藤、悲劇的な現実が描かれることはなく、そういったものと切り離された遊廓世界、理想的な女性<君子>の姿が存在しているということである。具体的に言えば、運命や苦境に葛藤

<sup>194</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）639-658頁。

する姿を一切見せない<君子>は、家族や男性のために自己を犠牲にすることをためらわない強い意志を持っている。彼女の美しさは永遠で、身の引き際を悟っている潔い姿が強調される。こうした姿は、苦悩、病気、死、裏切り、金、欲望が渦巻く「苦界」に生きた多くの遊女の姿とは一致しない。

しかし、それではハーンが現実にも目を向けられないまま、「ゲイシャ」というモチーフに美しい日本女性像を反映させたにすぎない作品なのかと問えば、否であろう。日本の典型的イメージであった「ゲイシャ」の存在を利用し、この作品を書いたハーンの意図は、実は、それまでの「ゲイシャイメージ」の傾覆<sup>けいふく</sup>にあったと見ることができる。そして、その背景には、松江体験とセツとの出会いによる彼の日本女性観の変化、それに伴うジャポニスム作品への認識の変化といったことが深く関係していると考えられる。完全に無私無欲でありながら、自分の人生とそれに関わる周囲の人間を、確固たる意志を持ってコントロールしていく女性<君子>は、それまで「人形のような」日本女性を思い描いていた西洋の読者に、全く異なった日本女性のイメージを与えたに違いない。

## 第二節 ピエール・ロティとハーン

### 2-1. ロティへの憧れと批判

ジャポニスムという流れの中でハーンを見つめ直すとき、ピエール・ロティの存在は避けて通ることができないものであろう。幼少期から東洋への憧れが強かったハーンは、当然ジャポニスムの影響を少なからず受けていた。前述の通り、フィラデルフィア万国博覧会の後も、ハーンはロティの『お菊さん』*Madame Chrysanthème* (1887)、パーシヴァル・ローエル『極東の魂』*The Soul of the Far East* (1888)などを精読していたことが知られている。こうした多くのジャポニスム文学は、ハーンを含む多くの西洋人に「固定された日本女性像」を抱かせた。

ここで特に注目しておきたいのは、ハーンとロティとの関係である。ハーンが『お菊さん』を始めとするロティの著作に強い影響を受けていたことはよく知られたところであり、E・L・ティンカーはアメリカ時代のハーンにとって、ロティがいかなる存在だったのかについて、以下のように述べている。

ピエール・ロティに彼はすっかり夢中だった。ロティの熱帯地方の女たちとのなま

めかしい冒険はハーンが望んでやまぬものだったし、彼の洗練された文体の美は努力の目標だった。ロティのいくつもの本が出るに従って、ハーンはその物語を何度か『タイムズ・デモクラット』紙に載せた。(中略)

ハーンはロティとの文通を続けた。すると、恐らくハーンがいくつも書いたロティ称賛の論説への感謝の気持ちからか、未発表の東洋生活の記録数編が遂に送られてきた。ハーンがどれほど細心に、情熱をこめてこれらを訳したことか！一八八四年十二月二八日、『タイムズ・デモクラット』紙上に、一面全部を使って、「ピエール・ロティのノート・ブック」が鳴り物入りで掲載された時、ハーンは胸の内の誇りではち切れんばかりだった<sup>195</sup>。

このように、ハーンはアメリカ時代からかなりロティに傾倒していたことが分かる。ハーンにとってロティがフランス語で書く物語を英語に翻訳する仕事は、この上ない誇りで喜びであったことは想像に難くない。憧れの人物ロティの『お菊さん』も、したがって、ハーンにとっての重要な書物であるとみなすことができる。これについて、平井呈一もまた、以下のように推察している。

わたくしはもう一つここに、ハーンにとって最も重大な「文献」があったと思うのであります。おそらくこれは、その比重からいったら、当時のハーンのニューオリンズの下宿の書棚にあった、日本関係の書物をぜんぶ束にした重さよりも、ハーンにとっては、まだ重いのではないかと思われるくらい、重要な作品でした。それは、ピエール・ロッティの「お菊さん」であります。(中略) ロッティ文学に対するハーンの尊敬と傾倒、これはハーンの生涯を通じて持続したほど深いもので、(中略) それほどまでに傾倒し、お互いに文通までしあって理解と信頼を深め、書き上げたまま未だ発表しない作品の翻訳まで許す(「わが日録の断片」一八八四年十二月二十八日「タイムズ・デモクラット」掲載)ほどの親しかったロッティの、日本を題材にした作品に、ハーンがどれほど胸を躍らしたかは、想像するに余りあります<sup>196</sup>。

ここにあるように、アメリカ時代にハーンが触れた多くの文献の中でも、ロティのそれ

<sup>195</sup> エドワード・ラロク ティンカー著、木村勝造訳、前掲(註50)147頁。

<sup>196</sup> 平井呈一「八雲と日本」小泉八雲著、平井呈一訳『日本瞥見記(下)』(恒文社、2009)450頁。

は極めて重要で、それがハーンの文学にも終始影響を与え続けていたと指摘している。このように考えれば、ハーンの再話作品もまた、ジャポニズムの流れの中に位置づけることができると考えられる。

ただし、来日前にロティに夢中になり、彼の美しい文体によって描かれた日本という世界に憧憬を抱いていたハーンの、ロティへの評価は来日後、殊日本女性に関しては、批判的なものへ変わっていく。チェンバレンとの書簡でのやり取りの中で、「ロティのこれらの本は、わたくしが昨日この部屋から追い出さねばならなかった小さな梅つばきの木に似ています。その花はかつては美しく芳香を放っていたのです。しかし、今や盛りを過ぎて病的に見えました。そしてなお悪いことには、病んだ匂いがしました<sup>197</sup>」とのチェンバレンの言葉に対し、ハーンは「やがてその色彩と光が色あせて行くと、歓楽に感覚を鈍化された神経だけが残ったのです。そして詩人は一つまらぬ病的な、現代風の気取ったフランス人になったのです<sup>198</sup>」と書き送っている。これについて、平川祐弘氏は以下のように言及している。

「私にとって一時期、ロティは自然の赫奕と燃えあがる魂のすべてを覗き見た人のように思われました」

ハーンはチェンバレンへ宛てた一八九三年（明治二十六年）二月十八日付の手紙で、自分のかつてのロティへの傾倒をそのように表現した。『お菊さん』（一八八七年）を読み、その官能的生活に誘われて来日したと思われる節のないでもないハーンは、しかし奇妙なことに、松江へ行き、小泉節子と生活を共にするに及んで、自分とロティとの違いをまざまざ自覚させられてしまったのである。かつてロティを読んで空想した日本と、自分の眼で見、肌で触れた実際の日本と、その差のあまりの甚しさにハーンは驚いた。日本はロティの文章を通して思い描いたよりもずっと心美しい国だった。すると憑きが落ちたように、ロティがにわかにも光も色も褪せて、

「小さなつまらぬ、病的で、鼻持ちならない、近代的フランス人となってしまった」

ハーンはその翌明治二十七年二月には、再びチェンバレンに向けてはっきりと書いた。

「ロティは日本の女に対して公平を欠いています」

その不満の表明は、東洋の港町へ到着して次の船出まで「結婚」するような、女の

<sup>197</sup> ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘他訳『ラフカディオ・ハーン著作集（第14巻）』（恒文社、1992）533頁。

<sup>198</sup> ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘他訳、同上、534頁。

人格を無視した白人植民者流儀は自分の生き方とは相容れぬ、というハーンの意志表明でもあったろう。ロティをあらためて読み返すと、彼は人生に<sup>う</sup>倦み疲れ、情に感ずる心を失った blasé (無神経) な生き方をしている。自分はそうした生き方は是認できない<sup>199</sup>。

(下線は筆者)

こうしたロティへの冷やかな<sup>けいがん</sup>慧眼には、平川祐弘氏の指摘にもあるように、ハーンの松江での経験が影響していると考えられる。さらに、チェンバレンが『お菊さん』を酷評し、問題点を指摘し続けたこともまた、ロティへ傾倒していたハーンへ刺激を与えたに違いない。ここで論を逸して注目すべきなのは、そのチェンバレンの指摘である。彼は、ロティを「かれのこれまでの人生の自然な成行きとしての放縦による嫌悪感と倦怠感を持ち込んでいる、擦り切れた快樂主義者<sup>200</sup>」であるとし、また、彼の文学を「死にかけた文学<sup>201</sup>」と酷評する。そして、「いったいロティは喧嘩腰で主張するかれの母親への愛情と、『お菊さん』“*Mme Chrysanthème*”のような本の出版とをどのように和解させているのでしょうか？ というのも『お菊さん』のような本は、ユグノー教徒のどんな老女をも間違いなく苦しみ、憤激させずにはおかないからです<sup>202</sup>」とハーンに問うのである。さらに翌日には「わたくしは、かれの人間自体が嫌いなのです。なかんずく、かれの『お菊さん』をわたくしが許したことは、一度たりともないのです。この本は、日本女性に対するクレメント・スコットの酷評のごとき下品な非難のどれと比べても、さらにそれよりもはるかに残酷な、日本女性に対する侮辱であることは間違いのないのです。——よりまことしやかで、より説得的であるがゆえに、これはいっそう残酷なのです<sup>203</sup>」と主張する。ハーンはその度に、チェンバレンの意見に同調しながらも、ロティの他の作品を挙げ、彼を弁護している<sup>204</sup>。それは、前述の通り、彼がロティの文体や官能的で美しい文章に影響を受け続けたことを示している。

<sup>199</sup> 平川祐弘、前掲（註 51）36 頁。

<sup>200</sup> ラフカディオ・ハーン、前掲（註 58）78 頁。

<sup>201</sup> ラフカディオ・ハーン、同上、120 頁。

<sup>202</sup> ラフカディオ・ハーン、同上、78 頁。

<sup>203</sup> ラフカディオ・ハーン、同上、80 頁。

<sup>204</sup> ハーンは終始ロティに対して批判的であったチェンバレンに、懲りることなくロティの作品を勧め続ける。「『少年の物語』” Le Roman d’ un Enfant” です。これはわたくしには、ロティが書いたほとんど間違いなく最高の作品に思われますし、お読みになれば、あなたは、ロティをもっと高く評価するでしょう。」（1893 年 4 月 28 日付）「ロティの『アフリカ騎兵の物語』“Roman d’ un Spahi” には、つまりあのアフリカの春の強烈なる爆発、欲望の暴発のただなかにいる全自然、そして魁偉な月の下での野蛮なダンスを描写するあの見事にも魔術的な一章（中略）、あの驚嘆すべき章をお読みになってください。」ラフカディオ・ハーン、同上、43-45 頁。

しかし、こうしたチェンバレンからの示唆とロティに関する活発な議論が、「きみ子」の出版時期<sup>205</sup>以前に行われたことは注目に値するだろう。

## 2-2. ジャポニスム文学の本流『お菊さん』（1887）

松江における心酔時代から、近代化に邁進する日本を目の当たりにせざるを得なかった熊本時代を経て、ハーンの日本への想いは「振り子のように揺れる<sup>206</sup>」ようになる。そしてチェンバレンとの議論の中で、ロティへのまなざしが次第に変化し、さらには、前述の通り、「これまでの本に、能力の許すかぎり『いのちと味わい』を注ぎ込む」というハーンの執筆に関する明確な目的<sup>207</sup>が、それまでのジャポニスム文学とは全くことなつた作品を描かせることを可能にしたのだと言えよう<sup>208</sup>。ハーンは、「西洋の男性」、「日本ムスメ」、「かり

<sup>205</sup> ボストンのアトランティック・マンスリーの編集部からの1895年12月26日付の手紙で「きみ子」“Kimiko”と「祖先崇拜の思想」“Thoughts about the Worship of Ancentors”は、わたくしとしては例の諸篇と一緒にまとめたいと思います。それはあなたのご提案であり、わたくしとしても好ましく思われるからです」とあり、ハーンのその他の作品が予定よりも遅れていることについて催促している。ラフカディオ・ハーン、前掲（註58）311頁。

<sup>206</sup> ハーンはメイスン宛書簡で、次のように述べている。「チェムバレン教授は、日本に対する各人の感じの変わり易い事は丁度振り子の震動のようなものだに僕に話された。今日は悲観の方へ揺れると思うと、明日は楽観の方へ傾く。僕は此の感を屢々経験するが、君も毎度そう感じられるだろうと思う。けれども悲観的感情は大概、新日本に就いて何か経験した時、楽観の方は何か旧日本の物に触れた時起ってくる。」小泉八雲著、田部隆次編『小泉八雲全集 第12巻』（第一書房、1930）130頁。

<sup>207</sup> 多くの外国人が、日本を「未開の地」と見做していたのに対し、ハーンにとっての日本はすでに多くの外国人によって「踏み均された場所」であり、後発者としての意義は、全く新しい方法で、日本という、ある意味ありふれた題材と向き合うということであった。これについては、パットン宛ての手紙に入念な執筆計画を記していたこと（エドワード・ラロク ティンカー著、木村勝造訳、前掲（註50）294頁）は前述の通りである。

<sup>208</sup> ジョージ・ヒューズ氏は、ハーンが西洋では未だ異常な心理を持った変質者だと見なされていると述べ、ハーンとロティについて次のように述べている。「ハーンが試みたことと、ピエール・ロティがエキゾチックな東洋文化のなかで次々に行った『結婚』との間には明らかな類似が見られる。ハーンはロティの文体を心から称賛し、彼を新しい土地での生活感覚を本当に伝えられる作家として重要視した。しかしハーンはロティを超え、彼自身の価値観を真剣に再評価しようとした。ある視点から見れば、このようなパフォーマンス全体が世紀末芸術家の特徴と言える。しかし別の視点から見れば、それが非常に危険であることがわかる。ハーンは結局のところ日本人ではない——すくなくとも彼が通りですれ違うほとんどの人にとっては、彼はキモノを着た西洋人なのだ。彼が自分のパフォーマンスについて書いたものでさえ、英語で書かれている。彼はロティにはない真摯さで自分のパフォーマンスに取り組んではいないものの、二つの世界の狭間に自意識的に陥っている。このような人物はどちらの世界からも受け入れられることはない。（中略）彼は文化的にはどっちつかずで、真の西洋人でも真の日本人でもない。彼は、因習的な『国民』というアイデンティティを侮辱する、危険な存在である。日本についての学問的議論においてさえ、彼は曖昧な人物であって、まさにその立場の不安定さによって、ナショナリズムという概念がさまざまな政治的力がぶつかりあう場であることを露呈させるのである。彼は私たちが不変のものと考えがちな重力の中心をかき乱し、そうすることによって今日の文化を豊かにしてくれる。」と述べている。すなわち、ハーンは真摯な姿勢でロティを超えようとしたけれども、最終的に彼は自分の立場を西洋人としても、日本人としても定めることができなかったというのである。そしてそれが西洋における大きな批判の要因のひとつであると同時に、彼のそうした立場自体が「作家としてのハーンの功績の中でも大きい」ものだと述べている。ジョージ・ヒューズ、前掲（註53）432-433頁。

そめの結婚」、「混血児の誕生」、「一方的遺棄」といった展開<sup>209</sup>とは全く異なる、多様な登場人物とテーマの物語を書き続けた。

本章では、ロティに強い影響を受け続けたハーンが、ジャポニスム文学の代表作品ともいえる『お菊さん』の舞台日本でいかなる女性像を描きだしたのかについて、ある遊女を主人公とした物語、「きみ子」に注目する。ここでは〈お菊さん〉と遊女〈君子〉を比較することにより、先行するジャポニスム作品に慣れ親しんだハーンが、いかなるまなざしを日本女性に向け続けたか、そしてそれらとはどのように異なった女性像を西洋へ発信しようとしたか、またそこにはどういった意図を読み取ることができるのかを考察していきたい。

ここで、ロティの『お菊さん』を見てみよう。これは、1887年12月、フィガロ紙に掲載され、単行本としては1888年に出版された。当時「異国情緒の絵画美を珍重され、欧米各国で愛読」された<sup>210</sup>。これが、ジョン・ルーサー・ロング『蝶々夫人』へ、そしてそれを基に作られたプッチーニのオペラ作品『蝶々夫人』へとつながっていくことを考えれば、その影響は何年にも及んだと言える。この点で、この作品はヨーロッパのジャポニスムあるいはエキゾチズムを強く刺激したと言える<sup>211</sup>。和田章男氏は『お菊さん』の中にジャポニスムの影響が随所に認められるとし<sup>212</sup>、内藤高氏は「本国フランスで多少なりともロチがその流行に親しんでいたジャポニズムを再確認しようとした場」であり「〈理解不能な日本人〉をあらためて発見する場」であったとしている<sup>213</sup>。さらに、カバ・メレキ氏はこれがジャポニスムの内容の充実に寄与していると述べている<sup>214</sup>。

この物語について、あらすじを見ていくまえに注目しておきたいのは、物語に入る前の筆者の前置きである。ロティはこの作品をリシュリュウ侯爵夫人<sup>215</sup>に捧げている。ロティは彼女に〈お菊さん〉のモデルとなったオカネの写真を見せ、「これは我が家の隣に住んでいた婦人です」と紹介した。その女性が長崎でのロティの同棲相手であることを察したり

<sup>209</sup> 羽田美也子、前掲（註24）204頁。

<sup>210</sup> 落合孝幸『ピエール・ロティ——人と作品——付 ロティをめぐる女性群像』（駿河出版社、1992）2頁。

<sup>211</sup> カバ・メレキ「ピエール・ロチ『お菊さん』のジャポニスム：一八八七年フランス語版挿絵における日本女性を考える」『文学研究論集(26)』（筑波大学比較・理論文学会、2008）19頁。

<sup>212</sup> 和田章男「ピエール・ロチ『お菊さん』—日本イメージ形成の物語—」懐徳堂記念会編『異邦人の見た近代日本』（和泉書院、1999）3頁。

<sup>213</sup> 内藤高「音としての日本：ピエール・ロチ『お菊さん』を手掛りとして」『同志社外国文学研究 64』（同志社大学、1992）1頁。

<sup>214</sup> カバ・メレキ、前掲（註211）21頁。

<sup>215</sup> ハインリヒ・ハイネの姪にあたり、のちにモナコ公アルベール一世との再婚によってアリス・ド・モナコとなる人物。

シュリユー夫人は微笑んだだけで何も口に出していうことはなかった。この出来事に触れ、ロティは献辞を次のように述べている。

全体を通じて最も重要な役割はマダム・クリザンテムの上<sup>ロオル</sup>に在る如く見えるかもしれませんが、その実、三つの主要な人物は、私と日本と及び此の國が私の上に及ぼした効果と、それだけです。(中略) どうぞあのやうな寛大な微笑を以つて私の此の本をもお納めください。危険とか善良とかそんな道徳的な意義をこの中にお探しなさることなく、——丁度、私があなたのためにすべての奇怪の本産地なる此の不思議な國から持ち帰つたをかしな花瓶、象牙の像、こまこました奇妙な骨董品などをお納めくださったやうに<sup>216</sup>。

<お菊さん>はこの物語の中で重要な役割を担っていないこと、そしてこの作品は危険さや道徳的な意義を何ら持たない奇妙な骨董品と同等のものであるというこの言い訳じみた言葉には、どのような意味が含まれているのだろうか。遠藤文彦氏はこの部分について、「『珍妙さ』という言葉は、読者に対する作者側からの弁明として持ち出されており、読者を作者との一種の共犯関係に導く契約的な機能を担わされている」とし、以下のように言及している。

なるほど私の作品は見方によっては少々けしからぬ、ときにはごく不謹慎な内容さえ含んでいるかもしれないが、かの国においては一切がこんな調子なのであり、さらにはそのようなことが道徳的に問題に付されている気配すらない、私がこれから語るエピソードもそんな「珍妙な」世界の「珍妙な」一場面にすぎない、ということである。さらに敷衍<sup>ふえん</sup>して言うなら、日本に関わることはどれもこれも、われわれ西洋人の理性(合理)・常識(共通感覚)・習俗(道徳)からは逸脱しているように見えるが、それらは結局のところ他愛なく罪のないものであり、赦免に値する(あるいはもとより咎めるに値しない)、要するに道徳的ではないが不道徳というほどのことでもない……作者が「珍妙さ」という言葉によって暗に伝えようとしているのは、おおよそこんなところではないだろうか<sup>217</sup>。

<sup>216</sup> ピエール・ロチ作、野上豊一郎訳『お菊さん』(岩波書店、1988) 5-6頁。

<sup>217</sup> 遠藤文彦「『珍妙さ』の美学:『マダム・クリザンテム(お菊さん)』試論」『長崎大学教養部紀要 人文』

これは、氏が「この言葉がいずれ否定的な意味あいを帯び、軽蔑的なニュアンスをともなっている」としているように、物語に入る前から既にロティの日本への態度が如実に表されている。

それでは、この物語のあらすじを見てみよう。フランスの海軍士官だったロティ、すなわち主人公の〈僕〉は、搭乗していた砲艦ほうかんの修理のために長崎に短期滞在することになる。寄港する船の上で〈僕〉は、弟分である〈イヴ〉に、長崎での計画を打ち明ける。それは、長崎に着いたらすぐに可愛らしい、人形よりあまり大きくない、皮膚の黄色い、髪かみの黒い、猫のような目をした女の子と結婚するというものであった。到着後、「醜く」、「卑しく」、「怪異グロテスク」な日本人を見ながらも、計画通りに〈勘五郎〉という人物から女の斡旋を受けることになる。彼は当初〈マドモアゼル・チャスマンそけい（素馨）〉を宛がおうとするが、〈僕〉は拒否。その場にたまたま居合わせた〈マドモアゼル・クリザンテエム（お菊）〉が目にした〈イヴ〉に勧められ、彼女を月 12 ピアストルで買うことにする。その後、3 ヶ月間生活を共にするが、〈僕〉は〈お菊さん〉を理解することができない。彼女は、他の日本の奇怪な事物と同じように、意味不明で理解できない一つの風景のような存在として終始冷ややかな態度で描写され続ける。そして、最後の場面は、この物語の基となった日記には存在していない、完全なフィクションの部分である。〈僕〉が日本を去ることとなり、最後に会いに来てほしいという〈お菊さん〉のために、抜き足差し足で彼女を訪問すると、彼女は手切れ金の銀貨の真価を確かめていた。これに興ざめた〈僕〉は、彼女との契約に無関心な状態に立ち返り、日本を離れる。

以上があらすじである。この作品については、とりわけ日本においては批判的に論じられることが多い。それは言うまでもなく、この作品に溢れる蔑視に満ちた日本描写についてである。寺田光徳氏は、これを日本人には「苦々しい内容をもった小説」とし、「お菊に限らずこの小説中での日本人に対する描写の仕方はおしなべて批判的で、最初の物売りや芸者たちとの出会いから容赦なく『猿』や『子鼠』という形容を浴びせて、我々の神経を逆撫ですることが多い<sup>218</sup>」と述べている。中でも、〈僕〉、すなわちロティの〈お菊さん〉へのまなざしは、彼女を一個人としては認めず、あくまでも人形、あるいは玩具といったモノとして描写され続けている。カバ・メレキ氏は、この作品のジャポニズム性

---

科学篇 37』（長崎大学、1996）294 頁。

<sup>218</sup> 寺田光徳「ピエール・ロチの見た非西洋世界—フランス・コロニアリズム期文学における—」伊藤洋典編『「近代」と「他者」』（成文堂、2006）2-5 頁。

を5つに分類している<sup>219</sup>。中でも「日本女性類似化されるお菊さん像、その個性の不在」については、「エキゾチシズム・コロニアリズム・人種偏見などといった解釈は現在、異論の余地がない」とし、この作品を「コロニアリズム・レイシズムの特徴をもつ異人間恋愛譚」としている。

本論では、『お菊さん』に描かれた様々な日本の中から、作者自身が、そのタイトルにしながらも取るに足りない存在であると明言した日本女性〈お菊さん〉像と、ロティに傾倒し続けたハーンが熊本時代を経て描いた〈きみ子〉像を比較していきたい。これは、アメリカ時代、ロティに夢中であったハーンが、日本体験—松江での心酔、熊本での絶望—を経て、いかにそうしたジャポニズムに囚われない自身の日本女性像を発信しようとしたかを考える上で、非常に重要な作業であると考ええる。

### 第三節 廓の華、遊女〈君子〉—人形としての〈お菊さん〉との対比から—

#### 3-1. 人形〈お菊さん〉とサムライの娘〈君子〉

ロティの〈お菊さん〉描写は、一言で言えば「人形としての女性」であろう。〈僕〉が〈イヴ〉に促されて〈お菊さん〉に目をやり、結婚後3日を過ぎるまでの彼女に関する描写は以下のようなものである。

長い睫毛を持った目、少し細てではあるが併し世界中のどこの国へ行っても褒められさうな目。殆ど表情であり、殆ど思想である目。円い頬の上の銅色。真っ直ぐな鼻。こころもちふくらんだ唇、併しいい形をして、非常に愛らしい口もとをした唇。(中略) 多分十八ぐらいだらう。でも、ずっと女になっていて、彼女は退屈なやうな、また少し蔑むやうな口つきをしている。(中略) この家庭がどんな風になって行くか、それが誰に分かるものか？それは女であるか、それとも人形であるか？……数日たったら多分分かるだらう。(中略) クリザンテムは花を私たちの青銅の花瓶に活けたり、凝った着物の着方をしたり、拇指の別れた足袋をはいたり、さうして憂鬱な音色を出す柄の長いギタルの一種〔三味線〕を終日掻鳴らしたりしている。(中略) どんなものがあの小さな頭の中に浮かんだりするのだらう？ (中略) それに、彼女の頭の

<sup>219</sup> ①日本女性として類似化されるお菊さん像、その個性の不在②長崎の自然にみるジャポニズム③西欧の白人男性の普遍化されるヘゲモニー④日本人の日常生活に見られるジャポニズム⑤陶磁器・茶碗に描かれている。カバメレキ、前掲(註211)23頁。

中に全然なんにも起らないことは一に対する百ほど明らかである<sup>220</sup>。

(下線は筆者)

ここで、〈お菊さん〉の外見的美しさを一応描写してはいるものの、その内面に踏み込むことは一切なされていない。これはこの物語全体にいえることである。〈僕〉は結局、最後まで〈お菊さん〉の内面を垣間見ることすらせず、またできない。ここには、「非西洋世界を常にく見る〉主体である西洋の白人（特に男性）を前提にし、非西洋世界の白人ではない人々を〈見られる〉客体として確実に決めつける<sup>221</sup>」態度が現れている。言い換えれば、理解不能な存在であるが、それは理解しようと試みるにも値しない存在としての女性像である。つまり〈お菊さん〉は、月 12 ピアストルという金額で芸者の母親によって売られた下層の女性でありながらも、その背景については全くの無関心であり、単にその状況をほとんど理解できないまま傍観しているに過ぎない。これについて、遠藤文彦氏は以下のように述べている。

語り手にとって日本のムスメたちは本質を欠いた「人形」にすぎない。（中略）ムスメたちはなるほど概観は可愛いすが、そのじつ「本体＝身体のない小さな操り人形」《petites marionettes sans corps》（ibid.）にすぎない。彼女たちの着物は何も表しておらず、何も隠していないのだが、何もとは何も本質的なものを、つまり魂をとという意味である（要するにそれは、存在の否定ではなく、価値の否定なのである）<sup>222</sup>。

ここで指摘されているように、〈僕〉にとっての〈お菊さん〉は単なる人形で、彼自身が「私は私を<sup>たのし</sup>ますために彼女を選んだ」としているように一時的な娯楽にすぎない。そうした態度で〈お菊さん〉に向き合う限り、彼女は単なる人形でしかない。自己を持たず得体の知れない存在としてい続けることを余儀なくされている。

一方、ハーンが主人公に据えた〈君子〉もまた遊女であり、いうまでもなく社会の底辺に生きる女性たちで、一家が生活に行き詰まるほど困窮を極めた場合や、両親と死別した

<sup>220</sup> ピエール・ロチ作、野上豊一郎訳『お菊さん』（岩波書店、1988）46-55 頁。

<sup>221</sup> カバ メレキ、前掲（註 211）23 頁。

<sup>222</sup> 遠藤文彦「『珍妙さ』の美学：『マダム・クリザンテーム（お菊さん）』試論」『長崎大学教養部紀要 人文科学篇 37』（長崎大学、1996）313 頁。

ことや、私生児であることから売られたりするケースが多く、そうした生き方以外に最早選択肢が与えられないような状況であった<sup>223</sup>。瀧川政次郎が「赤裸々なる遊女の生態の歴史は、艶といわんよりはむしろ醜である<sup>224</sup>」と述べているように、遊廓で働く女性たちの現実には過酷極まるもので、まさに苦界であった<sup>225</sup>。一見華やかな花柳界も、奴隷として物同様に扱われた女性たちが文字通り身を削った世界であったことは言うまでもない。

しかしながら、ハーンによって描かれた<君子>は、確かに貧困のために花柳界へ足を踏み入れるけれども、その状況に至るまでの過程が詳細に記される。しかも、この物語の全てが、「<君子>の姉女郎<君香>によって語られた」と設定されており、<君子>の生い立ちからゲイシャとしての生活のあらゆることが、よりリアリティを持つことになっていく。

中でも注目したいのは<君子>が、士族の娘、すなわちサムライの娘とされていることである。「君子が、ほかの芸者とちがうところは、血統が高いことであった」とし、<君子>の幼少時代は以下のように描写される。

芸名をつけられるまえの本名は、「あい」といった。「あい」というのは、漢字で書けば「愛」という意味である。また、おなじ音の漢字で書けば、「哀」という意味にもなる。「あい」の一生は、じつに、この、「哀」と「愛」の一生だったのである。

(中略)

君子はちいさい時から、折り目正しく、きちょうめに育てられた方であった。まだ年端もいかない子どもの自分から、かの女は、ある年とった侍の私塾へかよわせられた。(中略)

<sup>223</sup> 草間八十雄は、「多数の女が己れの家を離れ墮落の途を辿り哀れにも売笑婦となる」原因として1914(大正3)年に発表された伊藤富士雄の調査に触れている。これによると、「一家貧困のため」が最も多く、次いで「父又は母若くは兄弟病気のため」、「両親なくして親族に売られたるもの」、「父或兄弟素行不良にて生活に行詰まりたるため」、「父愚直にて周旋人に欺かれて」、「私生児のため継父に売られたるもの」などが続いている。草間八十雄『近代下層民衆生活誌』(明石書店、1987)832-833頁。

<sup>224</sup> 瀧川政次郎「遊女の歴史」谷川健一、大和岩雄編『民衆史の遺産 第3巻(遊女)』(大和書房、2012)42頁。

<sup>225</sup> なお、瀧川政次郎は「遊女・白拍子・傾城・太夫・芸妓と呼ばれたものは、また一面芸能人であって、彼らを見捨て日本の芸能誌を語るができない。この芸能人としての一面をもっているものが、ここにいう『遊女』であって、彼らは社会史の上からも芸能を持たない単なる売色の徒と区別して考察されねばならない。(中略)遊女となるには、多少とも芸能に関する修練を必要とするから、遊女は一つの職業であり、職業婦人である」と述べている。本章では、ハーンが「geisha」として<芸者>や<きみ子>を表しているが、<君子>は「遊女」であるとみなすに値するため、ここでは「遊女」で統一する。瀧川政次郎「遊女の歴史」谷川健一、大和岩雄編『民衆史の遺産 第3巻(遊女)』(大和書房、2012)48頁。

その後、かの女は、公立の小学校へかよった。ちょうどそれは、この国ではじめて近代的な教科書が発行された時分のことで、その教科書には、名誉だの、義務だの、義烈だの、そういうことを書いた、英・仏・独の物語がいっぱい載っていた<sup>226</sup>。

(647-648 頁、原文[14])

このように、幼い<あい>は、近代化以前からサムライの私塾に通い、サムライの心得を学ぶとともに、明治期に入って近代教育をも受けたことになっている。そして<君子>が教育を受けた賢い女性であるということ、そしてその高い血統こそが、他の芸者たちとは異なる特別な存在として読者へ印象づけられていく。

こうした中、明治維新により没落士族となってしまった一家に様々な災難がふりかかり<あい>は<母>と幼い<妹>を養わなければならなくなった。あらゆる財産を手放し、最終的に先祖の墓を掘り起こす場面が以下のように描写される。

死んだあい子の父が葬られた時、さる大名から拝領した太刀を、棺のなかに納めた。その太刀が、黄金づくりだったことを思い出したので、背に腹はかえられず、墓をあらばいて、名工の作になるりっぱな柄を、安物の品ととりかえ、蠟塗りの鞘のかざりも取りはずした。(中略)士分の家古式ののっとり、亡くなった父を土中に埋葬したとき、あい子は、当時、高禄の武士の棺として用いられた、土焼の大きな赤甕のなかに、端然と正坐していた父の顔を見た(中略)あい子が刀の中身をもとどおり返してやると、それを見た父は、凄愴な顔をして、はじめてよしよしと安心してうなずいたようであった。

(650 頁、原文[15])

先祖の墓を掘り起し、サムライの魂ともいえる刀に手を出すというこの場面からは、没落した武士階級の悲惨な姿が見て取れる。さらに、その黄金ですら使い果たしてしまうと、その後はもうどうしようもなく、<あい>は遊廓へ入ることを決断し、「お母はん、もうほかはどうしよむもないさかえ、わてを芸子に売っておくれやす」と言って、自ら家を出ていく。ここに存在する主人公<君子>とは、他の芸者とは異なる血筋、すなわちエキゾ

---

<sup>226</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲(註20)647-648頁。以下、「きみ子」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

チックなサムライの高貴な娘であり、〈あい〉が〈君子〉となる過程の描写において、サムライの自尊心を捨て、家族のために自己を犠牲にすることを厭わない献身的な女性の姿が表される。

単なる人形である〈お菊さん〉が、芸者の母親に売られ、〈僕〉と生活を共にするのは対照的に、〈君子〉は自らの意志で、家族のために堅気の世界から離れることを決意する。そしてこうした意志の強さと自己犠牲の態度は、〈君子〉の中の一つの重要な軸であり続ける<sup>227</sup>。

### 3-2. 完璧な Geisha たる〈君子〉

こうして社会の底辺で生きる遊女となった〈君子〉であったが、問題は、その悲惨で醜悪な生活状況が一切描写されず、むしろ決して穢れることのない完璧な女性として描かれ続けることである。彼女の美しさは、「Japanese ideal of beauty (日本の美の理想)」であり、「one woman in a hundred thousand (千万人に一人)」かそれ以上であると描写される。さらに〈君子〉の描写について、留意しておきたいのは、その完璧さである。入廓後、彼女の才能と美貌は更に凄みを増していく。「genteel (高家の淑女)」と描写される彼女は、あらゆる芸事を完全に習得した。さらに、客のあしらい方も精到であったという。彼女は万事をうまくこなし、一流のゲイシャになったというのである。

ここで問題なのは、〈君子〉が足を踏み入れたこの遊廓の世界が、いかに悲惨な空間であるかといったことが、全く描写されていないということである。例えば、彼女の客のあしらい方について、以下のように描写されている。

かの女は、起請に自分の名を血で書いたり、かわらぬ愛情のしるしに、左の小指を切れ<sup>①</sup>などと、妓に迫ったりするような若い遊治郎には、とくにすげなくした。そういう男どもには、たわれごころを治してやるために、思うさま、からかってやった。家も屋敷もあてがってやる<sup>②</sup>、そのかわりに、からだところは、おれのものにする、——そういう条件を切り出してくる金持ち連中は、それよりももっとすげない扱いをうけた。また、なかには、姐さんの君香を金持ちにしてやるから、そのかわりに、君子を無条件で身請けしようと、大束に出る客もあつたりした。君子は、その客のここ

<sup>227</sup> なお、『お菊さん』を基に作られた『蝶々夫人』の〈蝶々さん〉は、〈君子〉同様に、上級武士の娘であるが、父親が切腹させられたため、一家が貧しくなり、一家のために〈蝶々さん〉が芸者になるという流れを取っている。

ろざしは、心からありがたいとして受けた。しかし、妓籍は退かなかった<sup>228</sup>。おなじ肘鉄砲をくわすにしても、かの女は、けっして相手の憎しみを買わないように、じょうずにあしらった。そして、たいがいそのつど、相手の絶望をなんとか治してやる術をこころえていたのである。

(下線は筆者、644 頁、原文[16])

この描写から浮かび上がるのは、売れっ子の〈君子〉が高潔さを失うことなく客を扱う様子である。彼女がいかにすげなく遇しても、客たちは彼女に群がり、その絶対的な人気を失うことはない。

こうした姿は、もちろん、現実の遊女ではありえない。遊女たちは客の心をつなぎとめるため、必死にならざるを得なかったのであり、そのための心中立（ここでいう、客の名を血で書くこと、小指を切って渡すこと等）は手練手管の一つであった。これについて、小森隆吉氏は以下のように述べている。

放爪・誓詞（血書）・断髪・入墨・指切・貫肉をあげている。客に対する自分の誠を誓うしるしとして、遊女は爪をはがしたり、断髪や入墨をしたり、指や肉を切ったりするなど、自分の身体を痛めたのである。誓詞を書くにしても、指を切って血判を押した。現代ならば、さしずめプレゼントをする程度であろう。それにくらべて、残酷であった。しかも、遊女の誠はほとんどが商売上の技法である。自分の身体を賭けて客の心をつなぐ——心中は遊女の哀れさを物語る行為だったとあってよい<sup>228</sup>。

このように、多くの遊女は誓詞や指切を求める客に「とくにすげなく」することはできなかった。客は高額な金を使って遊女遊びをするのである。すげなくされるために通い続けるのではない。溢れる遊女たちの中で、自分に金を落とす客を決して離すまいと必死になるからこそ、遊女たちは「哀」しいのである。

まして、身請けの申し出は、遊女にとって若くして苦界を出られる方法であったことは言うまでもない。宮本由紀子氏は、遊女が廓から解き放たれる方法として、年季明け<sup>229</sup>（定

<sup>228</sup> 小森隆吉「手練手管（心中立・張り・廻し）」西山松之助編『遊女（日本史小百科）』（東京堂出版、1994）111 頁。

<sup>229</sup> 年季の期間は 20 年以下と定められているため、例えば 7、8 歳で廓へ入ったとすると 27、28 歳に年季が明けることになる。これは平均死亡年齢を大きく上回る年齢であることは言うまでもないが、それで

められた期間勤めあげ、借金を返済して出ること)の他に、死ぬこと<sup>230</sup>(この場合、死体は投げ込み寺に捨てられた)、身請けの3つしか存在しなかったと述べている<sup>231</sup>。年季明け前に客によって身請けしてもらえることは、これらの中で最も早く、確実に自由の身になれる手段であった。著名な遊女を例に挙げれば、浮雲は、源六という男に彼の妻として350両で身請けされたし、高尾は久兵衛という者により彼の娘として<sup>232</sup>、また吉野は京の富豪紹益に<sup>233</sup>より出廓されたことはよく知られたところであろう。ただし、伊達綱吉が仙台高尾を身請けした際、彼女の体重と同じ重さの小判を支払った<sup>234</sup>とされるように、身請け代は非常に高額であったため、遊女たちにとって、よほどの富裕層に、相当のめり込まなければほぼ不可能な道であった。こうしたことを考慮すれば、「家も屋敷もあてがってやる、そのかわりに、からだところは、おれのものにする、——そういう条件を切り出してくる金持ち連中」は、遊女<君子>にとって、「もっとすごい扱い」をする相手ではなく、毎晩売春を強いられる苦界から自分を救い出してくれる救世主であったはずである。しかし、そうした遊女の悲惨な現実が存在しないこの作品において、<君子>は心中立もせず、身請けの話をも辞す、非常に高貴な女性であり続けることが可能になっている。

ここから分かるのは、ハーンは<君子>の人生を「『哀』と『愛』の一生」としながらも、本当の「哀」の部分を描ききれていないということである。サムライの娘が、遊女へ転落することの憂いは、<君子>の美しさを描くことでは当然描ききれものではない。母と妹のための自己犠牲は、結局、遊廓を華やかに生きる<君子>の姿に影を潜めてしまっている。

ただし、ハーンが遊女の裏面を全く知らなかったわけではない。来日早々、ロティがゲイシャを「悪魔」と呼んだこととは対照的に、ハーンはゲイシャ<君子>の姿を単に美しいだけでなく、その仕事に生きる女性として描いていることも指摘しておかなければなるまい。ハーンは、熊本時代、チェンバレンに宛てた手紙の中で、ゲイシャの見習いの子

---

も何とかそれまで生き抜いた場合であっても、それは遊女としての盛りを過ぎ、より低級な遊女として、切見世へ流れていく場合が多かった。宮本由紀子「身売り・年季 女衞」西山松之助編『日本史小百科 遊女』(東京堂出版、1994) 36-37 頁。

<sup>230</sup> 遊女の平均寿命は短かった。西山松之助によると、死亡平均年齢 22.7 歳であったという。(西山松之助『くるわ』(至文堂、1963) 205 頁。)よく知られた遊女の中から見てみても、例えば夕霧は遊女としての全盛期に 22 歳で亡くなっているし、吉原年中行事の燈籠に深い関係のある玉菊もまた、わずか 25 歳でこの世を去ったそこには過酷な労働に加え、梅毒を始めとする性病が蔓延していたことがある。

<sup>231</sup> 宮本由紀子「身請け」西山松之助編『日本史小百科 遊女』(東京堂出版、1994) 38 頁。

<sup>232</sup> 宮本由紀子、同上、38-39 頁。

<sup>233</sup> 比留間尚「吉野」西山松之助編『日本史小百科 遊女』(東京堂出版、1994) 177 頁。

<sup>234</sup> 小森隆吉「高尾」西山松之助編『日本史小百科 遊女』(東京堂出版、1994) 174 頁。

どもたちの過酷な訓練について伝えている。

わが家の庭をはさんでこの隣家の反対側からは、わたくしはあまり心楽しくないものを見たり聞いたりしています——つまり、若い芸者 geisha の稽古です。女の子はとても幼いのですが、毎日彼女は七時間近くも歌わなければならないのです。その女の子の疲れ切った調子によって、わたくしには何時だか時間がわかります。時々彼女はもう続けられなくなり、泣き叫んで解放を乞うのですが、これは聞き入れてもらえません。大人たちはこの子を打擲するようなことはしませんが——彼女は歌わなければならないのです<sup>235</sup>。

こうした現実を間近にみたハーンにとって、芸者は単なる売春婦ではなく、まさに芸をする者であり、過酷な訓練を経てその仕事に就く存在であった。したがって、〈君子〉が単なる美しい女性としてではなく、「優雅な和歌もつくれば、生け花・茶の湯は奥許し、刺繍もやれば、押絵もできる<sup>236</sup>」女性であること、そして、常に心中立を迫る客や強制的に身請けしようとする客に無難に対応することが求められる境遇にいることの描写は、そうした才に恵まれ、また努力を惜しまない、そして特殊な職業に徹する遊女の象徴であるとと言える。

一方の〈お菊さん〉は、そうした要素は全くない。常に家にいながら、憂鬱で、何を考えているのか分からず（恐らく何も考えてはおらず）、時折三味線を弾くぐらいのものである。ここで、〈お菊さん〉と三味線の音について、考えてみたい。内藤高氏が指摘しているように、人形である〈お菊さん〉がわずかに感情を表現するのが、この三味線の音色なのである。

三味線を横において昼寝をしていたお菊さん、その目覚めをまず彼女が奏で始めた三味線の曲がロチの耳に達することによって知る箇所（八六―八七）も、たんに一つの出来事の描写というよりも、眠りの中にいる女が——ある意味ではこうした状態の中に居る方がロチにとっては好ましい女が、目覚め、その音楽によって、ささやかな自己の活動、表現を開始する瞬間の換気という役割を帯びている。（中略）

<sup>235</sup> ラフカディオ・ハーン著、斎藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集』（恒文社、1980）151頁。（1893年9月23日付チェンバレン宛書簡）

<sup>236</sup> 小泉八雲著、平井呈一訳、前掲（註20）643頁。

ロチにとって、何が頭の中を横切っているのか理解できない、この不可解な日本女性がわずかにその感情を示す瞬間というのは、多くの場合、彼女が三味線の演奏をするときとなる。(中略)

テキストの中でまず三味線—お菊さんが騒音あるいはそれに近いネガティブなニュアンスから出発していることはいうまでもない。(中略)三味線は「憂鬱な音色を出す柄の長いギター」(五三)であり、お菊さんはそれを終日掻き鳴らしている。一緒に暮らし始めたものの、お菊さんはロチにとって家の「屋根の蟬のようにうるさい」(五八)存在であり、この女が三味線を弾いている傍に一人でいるときは、どうしようもない悲しさを覚えるとロチは強調する<sup>237</sup>。

ここにあるように、「此の小さなクリザンテムがいつも眠つてゐられないのは実に惜しいことである。此の状態に置いて置くと、彼女は非常に装畫的<sup>デコラチヴ</sup>である。その上、少くとも、彼女は私を退屈させない<sup>238</sup>」と願われる存在である<お菊さん>はこのわずかな自己の表現ですら、好ましいものとして受け入れられることはない。ここには、芸者の三味線の音を「日本のすべての騒音の基調<sup>239</sup>」と見なすロチの冷笑的な視線が現れている。

これに対してハーンは、<君子>を一個人として描写し、ゲイシャという職業についても、敬意を込めて記していることが分かる。それは決して、悲惨な売春の世界に身を沈めなければならない遊女たちの姿ではなかった。しかしながら、それでも、一人の美しく才能のある女性が、一つの困難な職業に生きている姿を、描写しようとしているのである。ハーンのこうした姿勢は、「きみ子」だけに見られるものではない。『影』*Shadowings* (1900)に収められた「普賢菩薩の物語」*A Legend of Fugen-Bosatsu*もまた遊女が信心深い高德の僧に普賢菩薩の姿となって現れる話である。ハーンはこの物語の最後に以下のように記している。

男の欲情に奉仕せねばならぬ遊女の境涯は、みじめな下積みのそれである。いったい誰がこのような女が菩薩の化身であろうと知ろうか。しかし仏や菩薩は、この世で数限りない異なる形を取って顕現する。そのような姿形が世の人々を真実の道へと導き、人々を惑いの危険から救う衆生化度の役に立つ時は、仏や菩薩は世にも卑賤な者

<sup>237</sup> 内藤高、前掲(註213)6-7頁。

<sup>238</sup> ピエル・ロチ、前掲(註216)85頁。

<sup>239</sup> ピエル・ロチ、同上、219頁。

の姿形をお選びになることもある。それらはいずれも尊い憐れみのお気持ちからそのようになさるのである、と<sup>240</sup>。

ここから分かるように、ハーンはたとえこうした職業の女性たちであっても、それが時に高德な僧侶までもを悟らせる存在であるとみなしていた。それは、単なる鑑賞物としてのモノではなく、身を挺して人を魅了し、またそれを越えた真実を伝える存在としての女性である。

#### 第四節 現地妻〈お菊さん〉と身を引く遊女〈君子〉

物語のタイトルになりながらも、その中で存在価値を認められない〈お菊さん〉とは対照的に、遊女〈君子〉が単なる置物ではなく、主体的に物語をリードしていく存在となっていることは、非常に重要な部分であろう。前述のように、〈君子〉と一夜を共にしたい客たちは、次々とすげない態度であしらわれ、中には彼女と無理心中をしようと試み、一人冥途へ旅立った男すらいた。この点において、遊女〈君子〉は、男に弄ばれる女性ではなく、男たちを翻弄し続ける高嶺の花として存在している。

ある日、それまでどんな客にもなびくことのなかった売れっ娘〈君子〉が、ついに、ある〈男〉とともに遊廓を去ることになる。この最後の場面まで、〈君子〉はその〈男〉と〈君香〉を始めとする周囲の人々を翻弄させる存在である。その場面を見てみよう。

かの女は、じっさいに、姐さんの君香に別れを告げ、ある男と手に手をとって去って行った<sup>①</sup>のである。その男というのは、かの女が欲しいと思うほどの美服は、なんでも与えてやるだけの腕をもち、そのうえ、かの女を日かげの女にはしたくない、そして、かの女の芳しからぬ前身については、けっして世間の人たちにうしろ指をささせない、しかも、かの女のためには、十度死んでもさらに思い残すところはないと思っているほどの、君子恋しさのために、半分は死んでいるという人であった。君香のいうところによると、この痴れ男は、君子ゆえに、自殺をはかったことがあり、君子はそれをふびんにおもって介抱し、もとの愚人に生け返してやったのだという。(中略)そして君香は、わが身くやしさとばかりもいえない涙をこぼしながら、君子はもう帰

<sup>240</sup> 小泉八雲、平川祐弘訳『怪談・奇談』（講談社、1990）162頁。

ってはきますまい、と言っていた。つまり、いまはふたりとも、たがいに七たび生まれかわってもという、深い相思の仲だった<sup>②</sup>のである。

ところが、君香の言ったそのことばも、半分は当たらなかった。この姐さんも、頭のいいことは図抜けていたけれども、君子のこころのなかにある、ある秘密な抽斗だけは、見抜くことができなかつた<sup>③</sup>のである。もし、それを見抜くことができたなら、君香は、あっと驚きの声をあげたにちがいない。

(下線は筆者、646-647 頁、原文[17])

このように、<君子>を、自殺を図るほど愛した<男>と共に遊廓を去った<君子>は、その<男>と深い愛を確かめ合った。しかしそこには、「ある秘密」すなわち<君子>の思惑があったのである。結末を言えば、<君子>はその<男>と生まれ変わって結ばれなかったばかりか、その後婚約を破棄してしまうのである。

<君子>は、何度も結婚を延期させ、最終的に婚約を破棄する理由を一方的に語り、姿を消す。その説明は非常に長く、第4部はほぼ<君子>の言葉が占めている。その要点を3つにまとめるならば、①母親と妹のために遊女となって苦界で過ごした自分が、良家の嫁になる資格などない。人の親になる資格もない。②自分は<男>が思っている以上に狡猾な人間である。自分と<男>とはあくまでも一時的な客と遊女であり<男>の想いは迷いに過ぎない。③適当な家から嫁をもらって、子が生まれれば、会いに来る。そして、「but a wife to you never, --neither in this existence nor in the next (あなたの妻にはこの世でも来世でも決してならない)」と言い放ち姿を消すのである。

この場面は、上記の理由から、不釣り合いな良家に泥を塗りたくないと言身を引く、<君子>の自己犠牲的側面が見て取れる。彼女は母親と妹のために、堅気の女性としての人生を犠牲にし、今度は愛する<男>の本当の幸福のために、妻となること、母となることを諦める。ここには、彼女の「サムライの娘」的側面、あるいは彼女が受けた「サムライの教育」の影響を見て取ることができよう。遊廓は武士や百姓、町人の男たちが「イエ」の規範を恐る恐る無視してしか通えない悪所<sup>241</sup>であったことは言うまでもなく、したがってそこは、いわば現実の日常生活とは切り離して考えなければならない特別な空間であった。サムライの教育を受けた幼い<あい子>の中には、朱子学を基盤として作られた封建制度の中で、自らの存在がそれを揺るがす、好ましくないものであることを強く認識していた

<sup>241</sup> 布川弘「宮島の遊郭」『日本研究 特集号 (1)』(日本研究会、2001) 71 頁。

と言えよう。

そして、由緒ある家に遊女の身分で嫁ぐことはできないとして彼女が身を引く自己犠牲は、後に<男>が他の女性と結婚し、息子をもうけ、平凡な生活に幸福を感じることで完結する。

しかし、君子が予言したことは、その後まもなく、事実となってあらわれた。——時というものは、どんな涙をも乾かすものだし、どんな思慕をも鎮めてしまうものだ。  
(中略) そして、やがてのことに美しい新妻が選ばれて、その人にひとりの男の子まで生れた。そうして、また幾年かがたった。君子がかつて住んだあの仙女の宮殿には、いまは幸福がたなびいていた。

ある朝のこと、この家へひとりの旅の尼が、施しものでももらうようなふうをして、やってきた。(中略) 尼は、いくども男の子に礼をいったのち、さて尋ねた。「坊ちやま、あんた、もう一ど、いまわてがお父さまに申し上げて下されとお願いしたことを、そこでおっしゃって下さりまへんか。」そう言われて、子どもは、まわらぬ舌で言った。——「お父さまに、この世で二どとお目にかかれぬ者が、お父さまのお子さまを拝見して、こんにうれしいことない言うてやはる。」

尼はにっこりと笑って、もう一ど子どもの顔を撫でると、そのまま、風のように行ってしまった。(中略)

ところが、父親は、そのことばを聞くと、きゅうに目をうるませて、子どもをかきだいて、思わず男泣きに泣いた。なぜかというのに、父親だけが、門前にきたものの誰であるかを知っていたからである。それと同時に、いままで秘し隠しに隠されていたすべての事情の献身的な意味をも、父親はそのとき卒然と悟ったのであった。(中略)

自分と、自分をむかし愛してくれた女との距離、それはもう、恒星と恒星とのあいだの距離ほどにも隔たり去っていることを、かれは知っていたのである。

(下線は筆者、656-658 頁、[原文 18])

このようにして、<男>は美しい妻を迎え、息子と共に幸福な人生を送ることとなった。そして、尼となった<君子>は、約束通り、息子に会いに来たのである。それは、「秘し隠しに隠されていたすべての事情の献身的な意味」、すなわち彼が今感じている幸福は<君子>の犠牲の上に成り立っているのだということを意味した。

しかしながら、この結末を異なる視点から捉えなおせば、様々なことが<君子>を純粹に自己犠牲に徹した「理想的女性」とはみなせなくしていることに気がつくであろう。それは、この物語全体を通して、彼女が誰にも従うことをしていないという点である。

<君子>は終始、あらゆることを自ら決断している。もちろん遊女となる道を選んだのは、家族を生かすための最悪の手段であり、自分の人生を犠牲にしていることは確かである。しかしながら、多くの遊女が強制的に遊廓へ売り飛ばされたのに対し、彼女は自らの意志で、納得の条件の下で入廓し、自分の思うがままに客を扱い続ける。

そして、ある日、<男>と結婚すると決断し、廓を去る。実際には、遊女が意志を持って廓を出入りすることなどできるはずもないのであって、身請けされたのであるから、前述の如く、そこには金銭が動いている。<男>は一流の遊女を多額の金で買い取ったのである。それはいわば、「家も屋敷もあてがってやる、そのかわりに、からだところは、おれのものにする、——そういう条件を切り出してくる金持ち連中」が試みたことを、最終的にその<男>が成し遂げたに過ぎない。

しかしながら、<男>は大金を叩いて遊女を買ったにもかかわらず、<君子>は突然「決してあなたとは結婚しない、これ以上言い寄ってくるなら私はあなたの前から去る」と言って姿を消すのである。この<君子>の言い訳は彼女から一方的に<男>に主張され、そこで<男>は一言も言葉を発していない。すなわち、<君子>の「秘密な抽斗」とは、自分を廓から出すことができるほどの裕福、かつ自分に盲目で、「たがいに七たび生まれかわってもという、深い相思」をにおわせれば、信じ込むほどの「愚人」である男を探し、出廓後は、結婚を破棄し、「自分の心を治すことができるものはこの世にはない」といつて尼になるという計画であった。真なる「自己犠牲的女性」であれば、多額の金を積んだ<男>に、自分の意志はどうであれ、身も心も捧げるはずであろう。しかしながら、<君子>は、廓で他の男たちにしたのと同じように巧みに言い訳をし、<男>が望んだ人生に従うことから逃れているのである。

このように見てくると、最早<お菊さん>と比較するまでもないかもしれない。彼女の場合、単に一時的に男性に見られる客体としての女性にすぎなかった。ロティは、<お菊さん>との別れの場面を以下のように描写する。

さあ、小さいムスメ、私たちは仲良く別れよう。お前が望みとあらば、私たちは接吻しよう。私は私を娛ませるためにお前を手に入れたのだ。お前はそれに対して

は大変よく成功したとは云へない。併しお前はお前の呉れられるだけのものは呉れた。お前の小さい身体も、お前のお辞儀も、お前の小さい音楽も。要するに、お前は日本のお前の種類の中では、たしかにかあいいものであった<sup>242</sup>。

ここにあるのは、1ヶ月12ピアストルで購入した人形〈お菊さん〉に対する最終評価である。〈お菊さん〉は、最後までその内面を全く理解してもらうこともできず、ただただその外見と身体を楽しまれるだけの存在である。

さらに、手切れ金として受け取った銀貨が本物かどうかを確かめている姿を見た〈僕〉の姿は、次のように表される。

私は彼女の様子を十分に眺めていた上で、彼女に呼びかける。

—おい！クリザンテム！

彼女はまごつき、振り返る。この仕事をみつげられたので耳の根もとまで赤くなつて。

けれども、彼女がそんなに面食らうというのは間違っている。——なぜというに、私は反対に大変喜んでいるのである。彼女を悲しませねばならぬかも知れぬという心配は、私を少し苦しめなければならぬものであった。私は、この結婚が始まった時のように、愉快に終りを告げる方が幾ら望ましいか知れない。

—お前さんのやっていたことはいい思いつきだ。（中略）早く私の居るうちにやってしまうがいい。若しその中から贋が出たら、私は喜んで取りかえてあげよう。

けれども、彼女は私の前でそんな事をつづけてするのはいやだと云う。私もそう云うだろうと思っていた。（中略）

クリザンテムは首をうなだれて、それっきり黙ってしまった。そうして私がどうしても行きそうなを見ると、彼女は私を見送るために立ち上がる<sup>243</sup>。

もちろん、この場面には〈僕〉の少なからぬ失望が表されていると見てよい。〈僕〉は最終的な別れにおいて〈お菊さん〉が悲しみに打ちひしがれてほしいとどこかで願っていた。それは〈お菊さん〉の内面を知ることのできなかつた彼が、彼女の想いにわずか

<sup>242</sup> ピエル・ロチ、前掲（註216）233頁。

<sup>243</sup> ピエル・ロチ、同上、231-232頁。

ながら期待している様子である。しかしながら現実には、自分が一時的な慰めに過ぎないことを重々承知していた<お菊さん>は、その対価としての銀貨を楽しそうに確認していたのである。しかし、これにより<僕>はそれまでわずかばかり抱いていた<お菊さん>への同情心といったものと決別する。そしてあっさり最後の別れをすましてしまうのである。カバ・メレキ氏は、『お菊さん』には「白人男性にとっての日本女性に対するヘゲモニーの欲望」が描かれているとして以下のように述べている。

『お菊さん』における西洋の白人男性（ロチ、その友達のイヴ、他のフランス人男性など）が登場する挿絵の特徴は人物配置における西洋の白人男性の優越的位置取りである。（中略）日本人、特に女性がテキストと絵の両方で高い／低いといった二項対立によって差異化されているが、挿絵をよく見ると、相対的に誇張されるように、お菊さんがことさら小さく（そして幼く）描かれている。その構図は西洋／日本の優劣を表すというだけではなく、小さくて幼い日本女性はまさに愛玩物としての人形—それは小動物（ペット）に似る—のイメージというべきであろう。（中略）

日本女性たちのイメージは白人男性に仕えて快樂と慰安の時間を与える役割に献身している姿として描かれる。これらの構図が西洋の白人男性に与えるイメージは何か。それはおそらくアラビアのハーレム、東洋の儒教道徳に支えられた良妻賢母型の自己犠牲といった男性中心主義の実現であろう。世紀末の文明の爛熟と、それによる精神の頹廢に深く傷つけられていたヨーロッパ知識人にとって、精神と肉体の解放と慰藉への憧れをはっきりと投影させた構図だったとあってよかろう<sup>244</sup>。

ここにあるように、<お菊さん>は<僕>にとっての愛玩具であり、それは<お菊さん>側にとっても承知の上の契約であった。ここには、白人男性が常に日本人女性よりも優位にある世界、その小さい存在を精神的にも肉体的にも楽しむことができる世界としての日本が存在している。

---

<sup>244</sup> カバ・メレキ、前掲（註211）31頁。

## 第五節 ハーンの示した遊女〈君子〉

ここまで、ロティの〈お菊さん〉描写とハーンの〈君子〉像を比較してきた。ロティが描いた〈お菊さん〉が、人形のように理解不能な日本人でありながら、最終的に銀貨が本物かどうかをほんの少し確かめただけで、非常に世俗的な貪欲な人間として幻滅を与えているのとは対照的に、〈君子〉はあらゆることを自分で決断し、その人生を生きた。彼女は、至上の愛を放棄し、無言の愛で男性を幸福へと導く女性でありながらも、実は自身が最も過酷な人生を選択しながらも、周囲の全てを掌握し、決して何人にも支配されない女性である。これは、ジャポニスムに沸いた西洋諸国に向け、「拒むすべをしらない」女性とは全く異なる女性の提示であり、それはまさに、ハーンが遊女〈君子〉をもって、示した「いのち」と「味わい」であったとみることができる。

もちろん、「きみ子」には、美しい遊女の世界が強調されるあまり、そこに生きる女性たちの苦悩や葛藤—すなわち、〈あい子〉の「哀」の部分—が十分に描かれているとは言えない。また、身請けされた遊女が自分の意志で結婚を破棄し、失踪するといった、不自然な流れもこの物語の非現実性を高めている。ここにある、完全に無私無欲でありながら、自分の人生とそれに関わる周囲の人間を、確固たる意志を持ってコントロールしていく女性〈君子〉には、現実には存在し得ない、ハーンの理想的女性像が反映されているといえる。つまり、遊女の悲惨な現実を描き、男を破滅へと導く悪女としての女性ではなく、社会の底辺に生きながらも、ゆるぎない道德観を持ち生きようとする日本女性の姿を描いたのは、ハーンが社会を構成する多くの庶民に日本の美しさを見たこと、そして西洋かぶれした熊本の知識人たちへの幻滅から、殊更その思いが強くなっていった、彼の日本体験が関係しているといえる。

したがって、ロティが日本女性を「人形」として枠にはめたのと同様に、ハーンもまた自身の思い描く女性像を日本女性に当てはめようとしたことも否めない。しかし、この作品を読む『お菊さん』の読者たちは、それまでとは全く異なった日本女性のイメージに衝撃を受けたに違いない。それこそが、ハーンの見論であり、この作品の意義なのである。

## おわりに

ここまで、『東の国から』(1895)及び『心』(1896)に収録されている作品の中から、「勇子——一つの追憶——」、「赤い婚礼」、「きみ子」の三作品を取りあげ、論じてきた。政治や歴史に強い関心を持ち、国の危機に何としてでも役立ちたいと願う〈勇子〉は、その実像を完全に失われ、美しく潔い、と同時に得体の知れない〈勇子〉の姿に変更され、その描かれた〈勇子〉に、西洋の読者たちは極東日本と日本女性の姿を重ね合わせるようになった。また〈およし〉は鉄道も敷かれた明治時代に、〈太郎〉と近代教育を施す小学校で出会い、11歳まで教育を受けた近代的な少女である。しかしながら、彼女はサムライの血を引いているにも関わらず、封建的社会に生きるわけでもなく、教育を受けたからといって、変わりゆく時代の中で思いを巡らすわけでもない。そして彼女の「サムライ性」を引き立てるはずであった農家の娘、継母〈おたま〉が、結果的に〈およし〉よりも封建社会に従順に生きる女性となってしまっていた。さらに「きみ子」もまた、苦界に生きる女性の苦悩や葛藤が描かれることなく、身請けされた遊女〈君子〉が自分の意志で結婚を破棄し、失踪するといった、非現実的な流れとなっている。

こうした物語からは、エキゾチックな国としての「日本」、不可解な存在としての日本人描写が如実に表れている。そして、来日前、日本に関する多くの書物や、ジャポニスム文学に触れてきたハーンの東洋への憧れ、異国趣味といったものが浮かび上がってきた。言い換えれば、日本語能力が決して高くなかったことも手伝って、現実を捉えられなかったハーンの姿、あるいはそれまでのジャポニスム小説の流れを受け、存在しない日本の姿を彼の中にある異国趣味というフィルターを通して描き出すことに留まってしまっていると言えるのである。

しかし、〈勇子〉、〈およし〉、〈君子〉らは、それまでのジャポニスム小説の<sup>ムスメ</sup>たちのように理解不能で神秘的な女性たちではあったものの、そこにはゆるぎない意志が存在していることを見逃してはならない。それは単なる人形に過ぎない〈お菊さん〉や幼児性と無知さを強調され続けた〈蝶々夫人〉のような、「拒むすべを知らない」、慰みのための女性たちとは全く異なった女性像である。これらの作品に触れた当時の読者たちは、エキゾチックな国日本の、得体の知れない女性たちに、強い決断力を見ることになった。

これらの作品からは、それまでの凝り固まった日本女性像からの脱皮を図ろうとしたハーンの試みを見ることができた。過度にエキゾチックさが強調される過程で、現実の明治

期日本とは相容れない、不自然な作品になってはいるものの、それらの試みは、晩年の再話活動へと結びついていくものであると考えられる。

第Ⅱ部では、近世の物語が原話となっている再話作品を取りあげ、松江、熊本、神戸時代を経てたどり着いた、本格的な再話活動によって描かれた女性像に迫る。

## 第Ⅱ部 新しい女性像の発信

### はじめに

第Ⅱ部で扱うのは、ハーンが松江時代（1890-1891）、熊本時代（1891-1894）、神戸時代（1894-1896）を経て、晩年の東京時代（1896-1904）に入ってから出版された『霊の日本にて』*In Ghostly Japan*（1899）、『影』*Shadowings*（1900）、『日本雑録』*A Japanese Miscellany*（1901）『骨董』*Kotto*（1902）『怪談』*Kwaidan*（1904）に収められた作品である。第Ⅰ部の作品とは異なり、後期から晩年にかけての再話は、その題材として近世の物語を用いるようになったことが特徴的である。

ここで、近世において女性たちがどのような生き方をしていたのかを見ておきたい。封建制度が敷かれ、男性中心の社会であったこの時代、階級によって女性の生は大きく異なっていた。高い階級に属する女性たちは、身分の高い女性たちは『仮名列女伝』、『女式目』等を始めとする女訓書に学び、政略的な結婚の道具として扱われ、貞節を一方で強要されながら家の犠牲になった<sup>245</sup>。「貞婦は二夫にまみえず」とする貞操観念は、武士階級の現実的な意識として定着してはいなかったが、男女ともに結婚にも再婚にも、個人として選択の余地はほとんどなかった<sup>246</sup>。あくまでも「家」の存続こそが最優先事項だったのである。一夫一婦制が原則であったものの、確実に世継ぎを得るため側妾の存在は必然化し、歴然と格付けされる社会であった<sup>247</sup>。

その一方、農民の中でも上層の女性は若くに結婚し、多くの子を産んで、家の中で安定した生活を送った。家業、家政を通して「家」の維持繁栄には役割を果たし、家内では一定の権限を持っていた。下層農民に属する女性は、生家から婚家へと生活の場を移すことはできず、奉公人として働き、家を支えたのち、その生活圏の中で結婚するというコースを辿った<sup>248</sup>。結婚後も、家の外で働き家計を支え、自らが家長となって家を維持せざるを得ないケースもあり<sup>249</sup>、強固な家父長制を維持継承できる状態ではなかったのである。

<sup>245</sup> 脇田修「幕藩体制と女性」女性史総合研究会『日本女性史第3巻』（東京大学出版会、1982）12-13頁。

<sup>246</sup> 柳谷慶子「武家のジェンダー」大口勇次郎他編『新体系日本史9 ジェンダー史』（山川出版社、2014）201頁。

<sup>247</sup> 柳谷慶子、同上、201頁。

<sup>248</sup> 女性史総合研究会『日本女性生活史 第3巻 近世』（東京大学出版会、1990）34頁。

<sup>249</sup> 菅野則子「農村女性の労働と生活」女性史総合研究会『日本女性史第3巻』（東京大学出版会、1982）62頁。

町人の場合はと言えば、同様に、富豪であるか否かで生活は異なった。豪商の娘であれば、それ相当の家に嫁ぎ、子を産むが、家事や育児は乳母等にやらせるため、直接する必要はなかった。すべきことと言えば、奉公人の管理や冠婚葬祭を取り仕切ることであった。彼女たちは芝居見物や踊りへの参加などに興じることができ、中には文学や和歌などの趣味を持つ女性すらいた<sup>250</sup>。これほどのレベルでなくても、上中層に属する町人女性たちは、相当の教育を受け、読み書きそろばんはもちろん、茶道・華道、和歌や読書を楽しむことができた<sup>251</sup>。赤木志津子は、江戸時代は、武士の世というより、経済力で実質的な権力を握った町人の世であった<sup>252</sup>と指摘しているように、町人レベルの女性たちは、江戸の町を彩る存在であったと言える。

近世において、封建制度が敷かれ、家父長制度のもと多くの女性たちがしがらみの多い生活を強いられていたことは言うまでもない。武士階級でなくとも、「女大学」、「女今川」などといった、比較的簡潔で短い女訓書は多くの女性に影響を与えたことはよく知られたところである。しかし、上流武士階級を除く庶民たちは、比較的自由に、多様な生を享受していたのもまた事実なのである。

明治半ばに来日したハーンは、当然、こうした近世の社会を体験することはなかった。しかし、晩年に取り組んだ、近代化以前の物語を題材とした再話作品こそ、現在まで高く評価されているものである。第Ⅱ部では、七作品を取りあげるが、「孝」、「貞」、「嫉妬、復讐」に大きく分類することができる。

そしてこれらは言うまでもなく、第Ⅰ部で見てきた女性たちよりも多様な描き方をされている。その背景には、心酔の松江時代、絶望の熊本時代、そして西洋社会（神戸）での生活を経て確実に深化したハーンの日本理解がある。

ここで描かれる女性たちは、男性を含む周辺を何らかの形で教化させるという任務を担わされている。自らの信じるところを、時に身を挺して示そうとする女性たちは、周りの人物に、宗教的あるいは道徳的な理想を気づかせるはたらきをしている。彼女たちは、社会的弱者としての女性が、美しく、はかないものとして、言い換えれば自己を犠牲にすることでしか生きられなかった存在としてではなく、むしろその対極にある存在、すなわち彼女たちの生きる社会制度へ積極的にはたらきかける姿として描かれる。

<sup>250</sup> 林玲子「町家女性の存在形態」女性史総合研究会『日本女性史第3巻』（東京大学出版会、1982）第3巻108頁。

<sup>251</sup> 林玲子、同上、112頁。

<sup>252</sup> 赤木志津子『日本史小百科 女性』（近藤出版社、1977）32頁。

さらに、ハーンが女性の嫉妬や復讐を描くようになったことにも注目したい。それは、単なる自己犠牲的女性ではなく、心の葛藤、抜け出すことのできない苦しみといった人間的感情を女性に与えているからである。それは、封建制度という枠に閉じ込められていた女性に、嫉妬という感情ばかりか、復讐することをも与えている。

さらに、この著作が対象とした社会にも意識を向ける必要がある。それは、言うまでもなく西洋諸国の人々であり、とりわけ、アメリカやイギリス人読者である。当時、アメリカでは社会の公的な活動の場に数多くの女性が進出し、西部の州では女性に参政権が与えられ、女性が公職に立候補することさえあった<sup>253</sup>。その一方、ヴィクトリア時代の家庭の中で母親という概念が再定義され、母性的国家という理想が育まれた<sup>254</sup>。つまり、1860年代から1890年というのは、アメリカの女性たちが家庭と社会との間で揺れ動きながらも、次第に、そして着実に社会の中で権利を獲得していった時代であった。そして、それ以降はそれまでの女性の社会的地位を更に高め、かつ強固なものへしようと多くの女性が奮闘し始めるのである。このようなアメリカの社会に向け映し出された「日本女性」の姿は、ハーンなりの道徳観に基づいて読み手に新たな視点と気づきを与えようとするものであった。

以上のことから、第Ⅱ部では、熊本時代、神戸時代を経てたどり着いた再話作品が、初期のそれと比べて、いかなる変化を帯びているのかに注目していく。様々な女性を描いた再話作品が、ジャポニスムへの挑戦の意義を越え、ハーンの中にある普遍的な理想像の表象へと、いかに深化していったのかを浮き彫りにする。

---

<sup>253</sup> サラ・M. エヴァンズ『アメリカの女性の歴史—自由のために生まれて』（明石書店、1997）229頁。

<sup>254</sup> サラ・M. エヴァンズ、同上、229頁。

## 第四章 娘と孝—「蠅のはなし」(1902)、「雉子のはなし」(1902)—

### 第一節 松江時代と学生たち、そしてセツ

#### 1-1. 日本との出会い

ハーンが来日したのは、1890年(明治23年)のことである。彼は当初「お雇い外国人」としてではなく、ニューヨークのハーパーズ・マガジンの通信員として来日し、横浜港に降り立った。しかしその契約をまもなく破棄したことで日本での滞在費をまかなえなくなると、英語教師としての職を探し、最終的に島根県に赴くことになった。その後、彼は松江(1年3ヶ月)、熊本(3年間)、神戸(2年間)、東京(8年間)と日本を転々としながら、日本を見つめ続けた。

当時の日本は、学制発布から18年、教育令を経て1886年の学校令公布へと近代教育が次々と取り入れられ、日本が他のアジア諸国に先駆けて近代国家の仲間入りを果たし日清戦争・日露戦争に向け強固な国家作りに邁進している状況であった。

このような状況において女性を取り囲む環境も次第に変化していく。それまでの封建制度から良妻賢母思想という新たな枠組みに入ることが求められ、女性は殊更「家」に尽くす存在として見做されるようになるのである。この状況について、以下の指摘が示唆に富む。

明治30,40年代にかけて公教育体制のなかで、近代日本の女子教育理念となった「良妻賢母」は、西欧的でかつ近代的な女性像としての「良妻賢母」とも、儒教的でかつ復古的な女性像としての「良妻賢母」とも、異なる意味をもつものであった。(中略)つまり、国体の頂点に位置する天皇を理論的に支える装置であった家族国家観の構造の底辺で、女性は「良妻賢母」というイデオロギーによって、国体の最小単位である個々の家を管理する責任をもたされる存在として意味づけされ、家族国家観の構造の中に埋め込まれた<sup>255</sup>。

つまり、日本における「良妻賢母思想」は女性を封建制度から解放するものではなく、新たな国家体制に利用するための枠組みにはめ直したことを意味しているのである。そし

<sup>255</sup> 陳延媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』(勁草書房、2006) 30-32頁。

て明治 20 年代の日本はまさにそのような過渡期としての意味を持っている。近代化・西洋化がいち早く進められた都市部とは対照的に、ハーンの滞在した島根県などといった辺境の地では未だに古い日本の女性たちが多く存在した。そして小泉セツもその一人であったのである。

## 1-2. セツの手足と孝

ハーンが本格的に日本で生活を始めた松江時代から、その最期まで支え続けた女性、それが妻、小泉セツである。ハーンの著作の中で日本に関するものは、再話作品に限らず、直接的あるいは間接的に、妻セツが与えた影響が非常に大きいことは周知の事実である。梶谷泰之は「今日、セツの功績をたたえる人は少ないが、よく夫を扶けた典型的出雲婦人としてセツはもっと称揚されねばならぬ<sup>256</sup>」とし、ハーンがセツと結婚したことは、日本での 14 年の輝かしい業績に結び付くものだと指摘している。実際、ハーンの著作の中で、多くの再話作品はもとより、日本に関するあらゆるものにセツが与えた影響は計り知れない。これは研究者のみならず、ハーン自身も認めている明白な事実である。つまり、ハーンにとってのセツとは、単にハウスキーパーとしての役割を担う妻ではなく、彼にとって、失われた左目とも言えるほど、彼の視野と可能性を広げたと言えるのである。

ハーンとセツとの結婚については前述（序章 4.）の通りである。没落士族の娘セツは貧窮した家族を養うため、学校で学びたいという気持ちを抑えながら、手足を農家の娘のように太くし、家族への「孝」を尽くし続けた。ハーンとの出会いも、この貧しさがきっかけと言っても過言ではない。セツの実母を始め彼女を囲むすべての人々は困窮を極め、セツを唯一の頼りとしていたのである。だからこそ、セツは言葉も通じない西洋人の住込み女中になること、時に「洋妾<sup>ランシャメン</sup>」と後ろ指を指されることをも厭わなかった。

そして、ハーンは女中として懸命に働くセツの姿に、かなり早い段階で特別な感情を抱くことになった。士族の娘であるはずのセツが農家の娘のような外見をしていることは、近代化の犠牲者であることからくるものであることを知ったハーンは、セツの手足を以て日本の「孝」を理解した。さらに言えば、単に作られた日本女性のイメージからではなく、現実を何とか生き抜こうとするセツの健気さから、彼は幸運にも日本女性の本当の美しさに出会うことができたのである。そして、ハーンは彼女の手足の太さを後々まで、セツの親孝行の証拠としてあげるようになった。そして、決して細身ではない若かりし頃のセツ

<sup>256</sup> 梶谷泰之、前掲（註 88）379 頁。

に向かって「私マイリットルファットヘンの小さい肥った雌鶏」「小餅のママ<sup>257</sup>」などと呼び、小さく弱く、愛おしいものとして熱愛するようになるのである。

### 1-3. 孝と男女の愛—男子学生に見た日本の思想—

ところで、ハーンは14年の日本滞在のうち神戸時代を除くおよそ12年間を英語教師として過ごした。そこで出会った多くの男子学生の中に日本の思想を見出そうとし、易しい英語で英作文を書かせ続けたのはよく知られた話である。改めて言うまでもないが、ハーンが日本において多く交際した日本人はほとんどが男性（職場の人間か学生）であった。そして、とりわけ松江時代に触れ合った学生たちの中からは、古き日本の社会制度に生きる日本人の姿を見ることができた。

ここでは、まずハーンが書かせた英作文や学生たちとの会話から、ハーンが日本の「孝」をどのように知り得たのかについて見てみたい。

#### ヨーロッパと日本の習慣

……私たちがとても不思議に思うのは、ヨーロッパでは全ての妻が両親よりも夫をより愛することだ。日本では夫よりも両親をより愛さない妻はいない。

またヨーロッパ人は妻と道を歩く。私たちは八幡のお祭りのとき以外はそれを断固拒む。

日本女性は男性によって女中のように扱われ、一方ヨーロッパの女性は主人のように尊敬される。私はこれらの習慣はどちらも悪いと思う。

私たちはヨーロッパ女性を待遇するのは非常に面倒なことだと思う。そして私たちはなぜヨーロッパでそれほどまでに女性が尊敬されるのか分からない<sup>258</sup>。

この文章は、ハーンが松江尋常中学校で英語教師として働いていた時に、学生に書かせたものの紹介で、「英語教師の日記から」（『知られぬ日本の面影』）に収められている。これは実際の英作文の抜粋で、かなり表現が抑えられているが、ここからハーンの伝えたかった日本の孝を読み取ることができよう。男性が女性と一緒に外を歩かないこと、それはすなわち公衆の面前ではそれが適切な行為ではないと思われる社会である。そして、女性

<sup>257</sup> 小泉一雄、前掲（註111）299頁。

<sup>258</sup> Lafcadio Hearn. (1894). *Glimpses of unfamiliar Japan Volume 2*. Boston, New York: Houghton, Mifflin and Company. 460-461より拙訳。

が僕のように扱われるのが当然である日本社会に生きる男子生徒にとって、女性が男性に手厚く扱われる社会は想像もつかないことであった。そして何よりも、彼が「不思議に思う」のは、「日本では夫よりも両親をより愛さない妻はいない」にも関わらず、ヨーロッパでは「ヨーロッパでは全ての妻が両親よりも夫をより愛する」らしいということだ。これは当時「孝」の考えに則り成立していた結婚という一つの秩序に反する行為であった。それゆえ、それが当然と罷り通るヨーロッパという社会を、この若者が理解できないのは当然のことだろう。そしてこの英作文を見たヨーロッパの人々は、これとはまさに反対の意味で衝撃を受けることになる。

ところで、この文章の元となった英作文は代表的なハーンの教え子、大谷正信のものである。ここに、その一部も引用してみよう<sup>259</sup>。

世に最も怖いものは何か？

(前略) (私の意見は大いに間違っているかもしれませんが) 現下日本でもっとも恐ろしいものはヨーロッパ人、特にクリスチャンだと思います。ヨーロッパ人の本質は日本のそれとは多いに異なる。ヨーロッパ人は孝行については何ひとつ分かっていません。これは「親に従う」又は「子たるものの本分」(しかしこれは厳密な訳ではありませんが)として英語に訳されているものです。そしてこれは日本道德の五つあるうちの第一番目のものです。両親と妻が同時に水に落ちて溺れたとき、ヨーロッパ人はまず妻を救うそうです。しかし日本の道德ではこれは理に合いません。ヨーロッパ人は日本人のように自分の主人や国を離れるのに痛みを感じない。忠誠心も忠義心も大してもってはいない<sup>260</sup>。

このように大谷正信少年の率直な表現を読むと、ハーンがいかに表現を柔らかくして読者に伝えようとしたかが分かる。大谷は、その若さも手伝って、かなり強く西洋思想を批判し、いかに彼が「孝」の概念を重んじているのかを主張している。ここで注目しておきたいのは、ハーンは、大谷のこのような発言と思想について決して見下すことなく、むしろそれを尊重する態度を以て彼らと接しているということである。以下は、彼が大谷の英作文に対してつけたコメントの一部である。

<sup>259</sup> 尚、ここに引用する英作文は、当時の中学生が書いたものであり、文法や表現方法などに誤りがある場合がある。そのため、ハーンが添削し終えた後のもののみを引用する。

<sup>260</sup> アラン・ローゼン、西川盛雄訳『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』(弦書房、2011) 35-37 頁。

ここに君が述べていた聖書からの引用がある。

—「人はその父と母を離れて、その妻と結ばれる。」

(マタイ、19章、5節)

さらに(マルコ、10章、7節)

さらに(創世記、2章、24節)

これは聖書から取った三つのテキストです。ヨーロッパでは妻は夫の両親と同居することを望まない。一度結婚したら息子は両親を捨て、余程のことがないと助けることはない。ヨーロッパには日本にあるような慈悲深い哀れみの心がないのです。一例外的に生れつき良い心をもった人はそうしますが<sup>261</sup>。

このように、男女の愛を最優先する聖書に依って生きる西洋の人々の考えが、儒教思想を基盤とする日本人と根本から異なっていることについて同意している。そして日本のように、結婚が家制度に組み込まれたものではなく、独立を意味するものであること、そしてそれは「慈悲深い哀れみの心」の欠如がそれを可能にしているのだと述べているのである。さらに、進化論を持ち出し「チャールズ・ダーウィン卿の原理に従って日本民族は少しずつヨーロッパのようになるであろう<sup>262</sup>」と予測する大谷に対し、ハーンは、キリスト教がいかに関係者に不適なものであるかを述べ、「それにしても、私は日本民族の力に大きな信頼を置いている<sup>263</sup>」とし、日本人はその強さを以てキリスト教を受け入れないようにすべきだとしている。

さらに、「英語教師の日記から」に記された、学生との会話を見てみよう。

授業中において、外国の諸事情に関する会話も同じようにおもしろく、啓発されることがたびたびある。

「先生、もしあるヨーロッパ人が、彼のお父さんと奥さんと一緒に海に落ちたとして、そして彼だけが唯一泳げる人だとしたら、彼は彼の妻を最初に助けると言われたことがあります。本当ですか。」

「たぶん、そうでしょうね。」と私は答えた。

<sup>261</sup> アラン・ローゼン、前掲(260)、41頁。

<sup>262</sup> アラン・ローゼン、同上、39頁。

<sup>263</sup> アラン・ローゼン、同上、39頁。

「でも、なぜですか。」

「一つの理由は、ヨーロッパの人々は弱者を第一に助けるのが男性の義務だと考えているからです。特に、女性や子どもたちだね。」

「そして、ヨーロッパの人々は彼の両親よりも妻を愛するのですか。」

「いつもそうとは限らないが、たいてい、おそらく、そうだろうね。」

「なぜ、先生、私たちの考えによれば、それは非常に不道徳です<sup>264</sup>。」

このように、まだあどけなさの残る中学生たちの素朴でまっすぐな発言の中に当時の日本人の思想を見ることができる。そして、この会話からハーンは面白みと同時に、「孝」を第一に考える人々の存在を認識し、「suggestive (啓発)」されたのである。

女性が「弱者」として力を持つ社会、そして男女の愛は何よりも優先され、その愛に基づいて物事が進んでいく社会、それが西洋であった。そして、そのような社会に生きる人々には到底想像もできない社会をハーンは松江の地で学生の中に見出した。

ここで注目したいのは、ハーンが学校で触れ合った学生たちは皆男子でありハーンは男の中に「孝」を見たということである。新日本を担うことになる学生たちが、孝への確固たる信念を持っているのを英作文や会話で痛切に感じたはずの彼が、物語の再話ではその任務を多くの女性に負わせているのである。

これを踏まえ、第二節からは明治以前の社会に生きた女性の姿をハーンがいかに描き出したかに迫る。ここでは「蠅のはなし」と「雉子のはなし」の二作品を分析しながら、女性を中心として展開されるプロットの中に、ハーンが伝えようとした「孝」ものは何なのか、そしてそこにはハーンと関わったどのような要素が関係しているのかについて見ていく。そこに描かれる女性たちと「孝」との関係性を考察する。いずれの作品も「死んだ親への孝行」がテーマとなっており、これは一見近代化を推し進める新日本の流れとは逆行するような内容のようにも受け取れる。だが、彼が数ある多くの古い話の中から選び抜いたこれらの作品からは、彼の思い描く日本において、女性が非常に特別な意味を持っていることが読み取れるのである。この章では、とりわけ「孝」という一つの概念に注目し論じていく。

---

<sup>264</sup> Lafcadio Hearn、前掲（註 258）、461 頁より拙訳。

## 第二節 孝への執念―「蠅のはなし」―

「蠅のはなし」 *Story of a Fly* は『新著聞集』の「亡魂蠅となる」を基としたハーンの再話作品で『骨董』 *Kotto* (1902) に収められている。『骨董』にあるほとんどの作品と同じように、「蠅のはなし」も『怪談』 *Kwaidan* (1904) にある作品のように広く知られ注目されてはいない。〈玉〉という女中が親に孝を尽して間もなく亡くなり、蠅に姿を変え主人の元へ幾度となく帰り、自らの弔いを託すというのがそのあらすじで、ほんの5頁にも満たない作品である。しかしこの短い作品からハーン的女性観、とりわけ明治以前の社会に生き、「孝」を何よりも重んじた女性の姿を如実に読み取ることができる。さらに、そこには語り手としてのセツの影も映し出されているのである。

ハーンの再話作品を読み解く前に、原典である『新著聞集』の「亡魂蠅となる」から見てみよう。以下がその全文である。

洛陽寺町通松原下ル町に、飾屋九兵衛といふ者の召つかひに、玉といふ女あり、生国は若狭の者なり、四、五ヶ年も奉公つとめしに、しかへ衣類など持たさりければ、主人もこころにくゝおもひ、ある時、尋しに、されば、幼年のころ、父母ともにはかなく成けるが、我身より外、跡弔ふべき人もなければ、此辺なる常楽寺に位牌を立、忌日ごとに供養をなしたき志願有て、何事も心にまかせずくらし候ひしが、最早、百目ほどの銀を、用意せしと申ければ、主人も、下賤の身として、奇特なる志かなとて随喜し、扱、かの寺へ、二霊の位牌をたて、資堂料とて、銀七十目おさめぬ、残りし銀をは、主人の妻にあつけ置きし

かくて、玉、過し冬のころより悩めるが、病もおもひければ、宇治の辺に、伯母なりし者の方へ引こし、医療を加へしかども、叶て、元禄十五年正月十一日に身まかりし、主人のもとへも、此よし通じければ、不便の事におもひし然るに、二月へ入り、いまた時節もいたらず、殊に、いつもよりも余寒つよきに、余常見なれしよりも、ひときは大なる蠅、一つ飛来り、九兵衛夫婦があたりをのみ、飛まはりければ、うるさく覚へ、痛まぬやうに捕へて、他へはなちやるに、中二日程すぎて、帰りへけば、かさねては、裏なる高瀬川のあなたへ放しけるに、又帰りぬ

されは、家内の者とも、これは玉か亡魂ならんと口ずさみければ、主人もあやしき事におもひ、心ためしにせんとて、羽先を少し切て、所を隔て放しやるに、此蠅、又

帰りけり

あまりの不思議さに、此たひは、かたちを紅に塗りて放ちけるに、印きへすして、又帰りければ、今は夫婦の者も興さめて、とやかに思ひはかるに、日外あづけし銀の事をおもひ出し、是に執着せしものか、亦是追善などうけんが為か、兎に角、不便におもひ、いかゞせんと思慮するに、伯母は、後世の道には疎き者の様に、常々語りしかば、その者の為なれば、右の銀をは、貴き寺へも上げ、回向をこひ、然るへしとて、日此帰依し奉る事なれば、深草の通西軒自空上人と、又は亡者の宗門なれば、同じ山の瑞光寺慈明上人と、此両寺へおさめ奉り、事の子細を具に申上よとて、二月廿八日、九兵衛が弟、勘右衛門へ申ふくめ、幸、明日は四十九日にあたりければ、たゞ今まいれとて、申渡しける処に、今まで飛びまはりける蠅、何としてかは、目前にて自滅しければ、みな一同におどろき、いよゝ奇異のおもひをなし、これをも箱に入れて、通西軒へ持参し、始終を語れば、律師もあはれに思し召、蠅に加持土砂をふりかけさせたまひ、施餓鬼など、ねんころに修し、右の信施は、永々の資堂にぞ入れさせけり扱、瑞光寺の上人へは、法義異なれ共、年来の親切なれば、この蠅をつかはし、供養をうけさせ、然るべしとて、浄人恵雲法師承り、持参申されければ、妙典八軸読誦したまひ、則、山上へ法のことくに葬せたまひ、卒塔婆など立させ、翌日も又、回向の為にとて、此所へ来たまふに、塔婆の際に深ふして細き穴ありければ上人も不思議に覺へ、掘せらるゝに、昨日埋めさせられし蠅、無りけり、実に両大徳の追善により速疾生天せしものと、有がたくこそ侍りし

其後、九兵衛、深草へ来り、廿八日以来、蠅来らず、かへすゝも希有の事にありしと、語りけるとなり<sup>265</sup>

以上が原典のすべてである。

## 2-1. 飛び回る「蠅」というモチーフ

ハーンが再話する手順として、まず日本に伝わる多くの物語の大まかな流れをセツに話させ、それが再話するに足る物語であると判断した場合にのみ、その詳細についてさらに語らせたというのは既によく知られた話であろう。セツは再話の作業について、以下のよう振り返っている。

<sup>265</sup> 花田富二夫 他『假名草子集成（第46巻）諸国百物語・新著聞集』（東京堂出版、2010）253-255頁。

私が昔話をヘルンにいたします時には、いつも始めにその話の筋を大体申します。面白いとなると、その筋を書いておきます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと、「本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけません」と申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました<sup>266</sup>。

このように、ハーンは再話する際、セツによって語られる物語が再話できるものかどうか取捨選択していた。それではこの「亡魂蠅となる」の場合、そのどの部分が彼の琴線に触れたのだろうか。

この物語から受ける最初の印象は、亡くなった親へ懸命に孝を尽そうとする若い娘と、彼女が死後に乗り移る蠅のしつこさであろう。親への孝をやっと果たした矢先に、命を絶やしてしまう不幸な娘が、どういうわけか人を煩わせる蠅に魂を移し、人々に自分の願いを伝えようとする。これが、例えば可憐に飛び回る蝶であったり、はかなく光を灯す螢であったりするのであれば、少女の魂を容易く連想させうるのであるが、彼女は蠅になるのである。しかもハーンは蠅を蝶や螢に書きかえることはしていない。あくまでも「蠅のはなし」として再び描き出すのである。

ここで、ハーンが蠅に見出した意義について考えてみたい。＜九兵衛＞夫婦が「ひときは大なる蠅」を「うるさく覚へ」何度も外へ放すというこの行為の中にハーンが見たもの、それは、蠅一すなわち＜玉＞の中にある「孝行への執念」だったのではないだろうか。

＜玉＞は4、5年も＜九兵衛＞のところで働き報酬を受けながらも主人を心配させるほど着物を買わず、両親の位牌を立て、法事を営むべく一心不乱に自らの生活を切り詰めていた少女であった。その彼女が蠅となり、放されては戻り、放されては戻ったその忍耐強さとしつこさは、自分を何としてでも正式に弔ってほしいという願いからであった。そしてそれは自らが浄土へ行きたいという、いわば自らの幸福のためではなく、死後の世界で両親への再会を果たしたかったからだと考えることができよう。あるいは、自分が行った供養によって、両親が無事来世で過ごしているかということを目見たいという気持ちからだったかもしれない。いずれにせよ、彼女の生前の行動から考えて、＜玉＞という少女

---

<sup>266</sup> 小泉節子、前掲（註109）22頁。

は、両親への思いの外に何か強い希望やら意志やらがあったわけではなく、ただ自分の存在の価値を両親へ置いていたと考えられる。そしてこのような女性の姿は、ハーンが日本で見出した一つの女性像と一致する。

他人のためだけに働き、他人のためだけを思い、他人のためだけに生きる女、限りない愛情と限りなく無私の心を持ち、犠牲を厭わず、返礼を求めない、そんな女だ。

しかし何世代にもわたり幼い頃からあらゆる面で厳しく教え仕込むことにより、ついにそのあり得べからざる理想が現実のものとなった。(中略) むろん、これほどできた女は、古来稀で、女性一般の風となることは決してなかったが、少なくとも昔の日本では、それがお手本にできるくらい身近な存在であった<sup>267</sup>。

(下線は筆者)

すなわち、<玉>にとっての幸福は唯一の親に孝を尽すという義務であり、その義務を全うするためには人に疎まれる蠅となり、何度も人々にまとわりつく執念で両親への思いを果たそうとしたのである。

「亡魂蠅となる」は、<玉>という健気な少女と蠅という、一見不自然な組み合わせながらも、そこに見える女性の一途さをハーンに見せた。そしてハーンはこの物語を「蠅のはなし」として蘇らせるに至ったのである。

## 2-2. しとやかさの加筆

それではここから、ハーンが再話した「蠅のはなし」を見ていこう。まず主人公である<玉>がどのように描き直されているかに注目する必要があるだろう。前述の「孝」への思いに加え、原典には描かれていない「女性らしさ」を読み取ることができる。それは、<九兵衛>が<玉>に着物を持っていないことについて尋ねる場面からである。まずは原典から見てみよう。

四、五ヶ年も奉公つとめしに、しかへ衣類など持たさりければ、主人もころにくゝおもひ、ある時、尋しに、されば、幼年のころ、父母ともにはかなく成けるが、我身より外、跡弔ふべき人もなければ、此辺なる常楽寺に位牌を立、忌日ごとに供養

<sup>267</sup> 小泉八雲著、平川祐弘『明治日本の面影』(講談社、1990) 405 頁。

をなしたき志願有て、何事も心にまかせずくらし候ひしが、最早、百目ほどの銀を、用意せしと申ければ、主人も、下賤の身として、奇特なる志かなとて随喜し……<sup>268</sup>

このように、4、5年勤めている<玉>が十分な着物を持っていないことについて、<九兵衛>が気がかりに思い、その件について尋ねると、<玉>は幼い頃に両親を失い、弔う者が自分以外いないため、両親の供養のために資金を貯めていたと話すに留まっている。そして、既に十分な銀を用意したと聞き、<九兵衛>は身分の低い少女の心がけを喜ばしく思っている。

一方、ハーンの再話では以下のようにになっている。

しかし、玉は他の女の子のように、きれいな着物を着ようとせず、休みを貰っても、いい着物を数々頂戴していたにもかかわらず、いつも仕事着のまま出かけるのであった。奉公して五年程経ったある日、九兵衛は、どうして着る物にいっこうに頓着しないのかと尋ねてみた。

玉はこの間にこもっている非難にパッと顔をあからめ、丁重にこう答えた。

「両親が亡くなりました時、私はまだ小さな子供でございました。他に子供がありませんでしたので、両親の法要を営むことが私の務めとなりました。当時はそれに必要なお金をこしらえることができませんでした。しかしお金ができれば、早速二人の位牌を常楽寺という寺に置いてもらい、法要も営むようにしようと心に決めました。それでこの決心を貫くために、お金と着物を節約しようと努めました——自分の身のまわりをかまわぬとお思になるほどでございますから、きっと節約が過ぎたのでございましょう。しかし今申し上げました目的のために、もう銀百匁ほどの貯えができましたので、これからはお前に出る時は身だしなみを考えるように努めます。これまで身なりをかまわなかった失礼を、どうかお許し下さいますように」

九兵衛はこの率直な告白に感じ入ったので、玉に親切なことばをかけて、これからどんな着物を着ようとこちらはいっこうにかまわないと言い、その親孝行を賞めてやった<sup>269</sup>。

(下線は筆者、57-58 頁、原文[19])

<sup>268</sup> 花田富二夫、前掲（註 265）253 頁。

<sup>269</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）241-242 頁。以下、「蠅のはなし」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

このように、原典ではわずか5行足らずの場面が、ハーンの再話ではかなり詳しく描写されているのである。ここでの明白な違いは、2つある。一つ目は、原典において二人の会話がかかなり淡々と行われているのに対し、再話では<玉>の心理描写、すなわち<玉>が<九兵衛>の質問の中に「非難」が含まれていると捉え、「顔を赤らめ」ながら「うやうやしく」答えたという、心の動きが示されていることである。<九兵衛>の家で勤める少女<玉>にとって、主人である<九兵衛>はおそらく最も身近な男性であったことだろう。ここで、その<妻>ではなく<九兵衛>から衣服の指摘を受けることは、年頃の少女にとって、顔が赤くなる程恥ずかしいことであった。原典の<玉>は、自分が着物に無頓着であることについて、確固たる理由として「孝」を主張しているのに対し、再話の<玉>からは少女の羞恥心が描かれることで「かわいらしさ」、「少女らしさ」が感じられる。

さらに、<玉>が主人である<九兵衛>に「約束」をし「許し」を請うという場面が新たに加筆されたことにも注目しておきたい。<玉>は「今後のご主人様の前に身ぎれいにしてお目にかかるようにいたします」と約束し、「これまでの怠惰と失礼をどうかお許しくださいますよう、お願い申し上げます」と許しを請うのである。つまり、長年両親のために着物を買わなかった<玉>は、今後<九兵衛>のために自らを着飾ることを約束するのである。ここにあるしとやかさに見える「自己」のなさは、前述したハーンの女性観に通ずるところである。自らの意志云々ではなく、常に周囲のために自己を存在させようとする女性こそ、西洋に向け発信された「蠅のはなし」の主人公としてふさわしいと考えていたのだろう。

### 2-3. <伯母>の不在

ここで、<玉>以外の人物の変化も見てみたい。「亡魂蠅となる」が「蠅のはなし」になる過程で、登場人物が簡潔化され、それに伴って<玉>、<九兵衛>、そしてその<妻>の行為も変化している。この点について詳しく読み解いていこう。

まず、最も分かりやすい物語の変化は、ハーンの「蠅のはなし」には<伯母>の存在が欠けているという点である。この登場人物の簡略化が意味するものは何なのだろうか。まず、原典での<伯母>の存在を見てみよう。

かくて、玉、過し冬のころより惱けるが、病もおもりければ、宇治の辺に、伯母な

りし者の方へ引こし、医療を加へしかども、叶て、元禄十五年正月十一日に身まかりし、主人のもとへも、此よし通じければ、不便の事におもひし然るに……<sup>270</sup>

ここから分かるのは、<九兵衛>のところで女中として働いている<玉>が、病に臥した時に身を寄せた「身内」としての<伯母>の存在である。<玉>は幼い頃に両親を亡くし、また一人娘であったことから、頼れる身内は親戚、すなわちこの<伯母>以外にいなかったのである。一方、再話の方にはこの存在は描かれず、「ところが、冬になってほどなく、玉はにわかになりに病の床に臥した。しばらく煩った末に、元禄五年（一七〇二）年一月十一日に死んだ。九兵衛夫婦の悲しみはひととおりではなかった<sup>271</sup>」とのみあるように、<玉>がどこで闘病し、亡くなってしまったのかについては言及されていないのである。この後も<伯母>の存在が一切描かれていないことから、読者は当然彼女が<九兵衛>の家で患い、亡くなったと読み取ることになる。また、<九兵衛>と<妻>が彼女の死を非常に悲しんだことから、あるいは彼女が彼らから看病を受けたとの印象すら与える可能性もある。

そして、もう一つの<伯母>の役割は、「信仰心の薄い」、すなわち<玉>が信頼を寄せない人物としての存在である。

今は夫婦の者も興さめて、とやかに思ひはかるに、とやかに思ひはかるに、日外あづけし銀の事をおもひ出し、是に執着せしものか、亦是は追善などうけんが為か、兎に角、不便におもひ、いかせんと思慮するに、伯母は、後世の道には疎き者の様に、常々語りしかば、その者の為なれば、右の銀をは、貴き寺へも上げ、回向をこひ、然るへしとて、……<sup>272</sup>

（下線は筆者）

このように、死後、蠅となって<九兵衛>と<妻>の周りを飛び回っていた<玉>について、夫婦が思慮する場面がある。「前に預かっていた銀で、法要してほしいのかしら。確か、玉は彼女の伯母さんが信仰心の薄い人だといつも語っていた。それでは、この銀を寺に持って行き、法要を営んでもらうことにしよう」と彼らは考えるのである。

<sup>270</sup> 花田富二夫、前掲（註 265）253 頁。

<sup>271</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）242 頁。

<sup>272</sup> 花田富二夫、前掲（註 265）254 頁。

さらに、この点について更に考えれば、〈玉〉が100匁の金を持っていて、そのうち70匁を両親の供養のために寺へ支払ったにも関わらず、残りの30匁を〈妻〉へ預けておいたという以下の部分にも納得がいく。

かの寺へ、二霊の位牌をたて、資堂料とて、銀七十目おさめぬ、残りし銀をは、主人の妻にあつけ置きし……<sup>273</sup>

つまり、〈玉〉は日ごろから〈伯母〉へ信頼を置いておらず、自分の財産を雇い主である〈妻〉へ預けておいたということになる。「後世の道には疎き者」であった〈伯母〉であるから、今の生活のために〈玉〉の蓄えを当てにしていたとも考えられる。いずれにせよ、両親の供養のために身なりに構わず儉約し、孝を尽そうとする彼女とは価値観が非常に異なる人物なのである。

一方、再話でも「貯えたお金の中からこうして七十匁つかった。残りの三十匁は預かっておいてください、とお内儀<sup>かみ</sup>さんに頼んだ<sup>274</sup>」とあるように、〈玉〉は〈妻〉へ30匁を預ける。しかし、理由は書かれることなく、〈玉〉は〈妻〉へ残りの全財産を預けるという流れになっているのである。この〈伯母〉の不在からはハーンのどのような意図が読み取れるのだろうか。

まず一つは、信仰心の薄い〈伯母〉の存在、そしてそれによる〈玉〉の身の上における不調和といった部分を排除することで、〈玉〉から彼女の両親への孝の気持ちとそれに基づく行為へより焦点が絞られるという効果があるだろう。すなわち、両親を失った〈玉〉は他に頼る所のない天涯孤独の身でありながら、それでもなお、亡くなった両親への思いを失わず、自らのことを顧みず儉約し続ける、健気な少女として描かれる。そこに親戚である〈伯母〉の存在は不要なのである。

そして、親戚である〈伯母〉の排除は、〈九兵衛〉と〈妻〉と〈玉〉との距離をより親密なものにしている。前述の通り〈玉〉が病に倒れた際、原典のように〈伯母〉の元へ送り返すという件を残すと、〈玉〉は〈九兵衛〉夫婦にとって一人の労働者に過ぎない存在となる。しかし、ハーンはその点について描写しないことで、〈玉〉を〈九兵衛〉夫婦により近い存在、言い換えれば主従関係を越えた特別な存在として描きだしたのである。さ

<sup>273</sup> 花田富二夫、前掲（註265）、253頁。

<sup>274</sup> 小泉八雲著、前掲（註240）242頁。

らに、＜玉＞が特別な理由もなく全財産を＜妻＞に預けることも、ここでは単に財産を預けることではなく、彼女自身の死後をも託すことにつながっている。そして「玉は九兵衛夫婦に親切にされ、心底から二人を好いているように見えた<sup>275</sup>」というハーンの追記も読者にこの印象を強調させている。

#### 2-4. ＜家内の者とも＞の不在

さて、ハーンの再話の中では＜伯母＞だけではなく、＜家内の者とも＞すなわち妾たちの存在、＜弟勘右衛門＞、＜瑞光寺の僧侶＞なども同様に削除されている。ここでは、＜家内の者とも＞の不在が物語の中でどのような意味を持っているのかについて考えてみたい。

真っ先に考えられるのは、前述の通り、当時のアメリカの出版界と読者に対して、ハーンの著作が「道徳的」でなければならなかったということがあるだろう。ここで中川智視氏の論を繰り返せば、ハーンの再話作品の書き換えは、「いずれも一夫一婦制以外の結婚に関することで、読者に一夫多妻を想起させないための腐心<sup>276</sup>」だったのである。

だが、ここでさらに注目したいのは＜家内の者とも＞の不在が、単に日本の「一夫多妻制」の削除のみを意味したのではなく、＜妻＞の意義を強めているという点である。それは、＜妻＞が夫である＜九兵衛＞へ直接的に真実を示唆するという働きである。この点について、読み比べてみよう。まず、原典では飛び回る蠅について、以下のように記されている。

されは、家内の者とも、これは玉か亡魂ならんと口ずさみければ、主人もあやしき事におもひ、心ためしにせんとて、羽先を少し切て、所を隔て放しやるに、此蠅、又帰りけり……<sup>277</sup>

すなわち、真っ先に噂し始めるのは＜家内の者とも＞であり、主人はその「口ずさみ」を耳にして、不思議なことだと思い始めるのである。しかし、再話の場合は、以下のようになっている。

---

<sup>275</sup> 小泉八雲著、前掲（註 240）241 頁。

<sup>276</sup> 中川智視、前掲（註 55）341 頁。

<sup>277</sup> 花田富二夫、前掲（註 265）254 頁。

九兵衛の妻は、これは不思議なことだと思った。

「もしかして玉ではないかしら。」と言った。

(死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者は——時折虫の姿となって戻って来るのである)

九兵衛は笑って答えた。「目じるしをつけたら分るだろう」

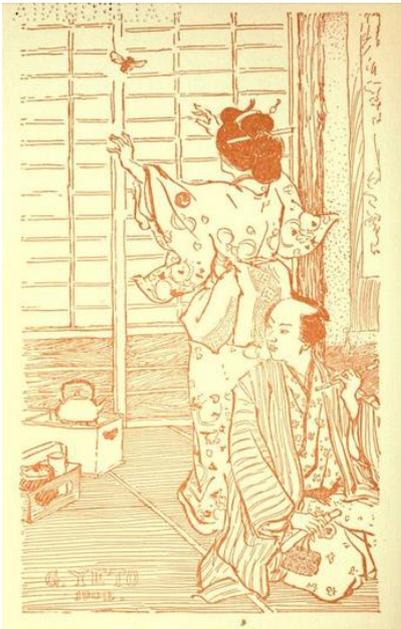
彼は蠅を捕えて、翅の先端にごく僅か鋏で切れ目を入れた—それからかなり遠いところへ持って行って放した。

(243 頁、原文[20])

このように、<九兵衛>の気づきは、妻の推測が直接彼に伝えられることで起こる。しかも、

蠅はあまりしつこく飛び廻るので、敬虔な仏教徒であった九兵衛は、痛めぬように細心の注意を払いながらも、それを家の外へ放り出した。

(242 頁、原文[21])



【図3】「蠅のはなし」の挿絵<sup>278</sup>

とあるように、<九兵衛>は熱心な仏教徒であったにも関わらず、「死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者は——時折虫の姿となって戻って来るのである」という仏教的な考え方に

真っ先に気づいたのは<妻>の方であり、その発言に対して彼は、「笑って答え」、その後、ハエの羽を切ったり、体に色を塗りつけるなどして、疑い深くも家から遠く放し続けるのである。

また、蠅の死に際についても注目したい。原典では、自空上人に<九兵衛>夫婦が呼び寄せられた瞬間、それまで飛び回っていた蠅がなぜか目の前で死んだというこ

<sup>278</sup> Lafcadio Hearn. (1902). *Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs*. New York : The Macmillan Company ; London : Macmillan & Co., ltd. 56.

とになっている<sup>279</sup>。一方のハーンの再話では、以下のようになっている。

「玉だと思う」彼は言った。「何かして欲しいのだ——でも何だろう」

妻が答えて言った。

「玉の貯えの三十匁がまだ私の手許にあります。あのお金をきっとお寺に納めて欲しいのでしょ、自分の魂の供養のために——。後生のことを玉はいつもたいそう気づかっています」

そう言っている間に、蠅はとまっていた障子から下へ落ちた。九兵衛が拾い上げてみたら、死んでいた。

(243 頁、原文[22])

このように、何度も蠅に試練を与え、最終的に蠅が<玉>であると確信した<九兵衛>が次に思いを巡らすのは「玉の望み」であった。しかしそれを既に察していた<妻>は、また彼に諭すのである。そして彼女の言葉を聞いた瞬間、蠅ははかなくも命を絶やしてしまう。しかも、原典で「今まで飛びまはりける蠅、何としてかは、目前にて自滅しければ、みな一同におどろき」とあるように、皆の目の前で明白に死んだのに対し、ハーンの再話では、蠅は力尽きて「それまでとまっていた障子から落ちた」のであり、<九兵衛>が拾い上げた時には既に命がなくなっているのである。

原典では、それまで元気に飛び回っていた蠅が、突然一まるで自分の意志とは関係がないかのように一飛ばなくなった。しかし再話では、<九兵衛>が玉だと確信した時には既に蠅には飛ぶだけの気力が残っておらず、辛うじてしがみついていた障子から「落ちる」ということが<妻>の言葉に安堵し力尽きた<玉>のはかなさを強調している。

このように、孝行娘である<玉>が、<九兵衛>夫妻に自らの死後を託すという色彩が強い原典に対し、ハーンの再話では二人の女性—<玉>と<妻>—が男性—<九兵衛>—へ真実を教唆するという形を取っていることに注目したい。これは、仏教の経典を読んでいるであろう夫（男性）よりも、目の前にある素朴で奇異なことに仏教の神髄（真理）を見出す妻（女性）の存在が描かれている物語なのである。そして、当時の読者へ向けたハーンの女性像の一つであると見ることができよう。

ここまで「亡魂蠅となる」と「蠅のはなし」を読み比べてきた。後者における主人公<

<sup>279</sup> 花田富二夫、前掲（註 265）254 頁。

玉>のしとやかさの加筆、そして江戸時代には極めて一般的であった大家族からの変更が意味するものは何なのだろうか。それは単なる家族の西洋化だけではなく、ハーンの求めた理想的な女性像へつながる書き換えであったと言える。そしてそれは必ずしも現実の日本女性と合致するものではなく、むしろそういった現実的なものとは一定の距離を保つ、ハーンの中に存在する「女性たるもの」の姿であったというのが妥当であろう。

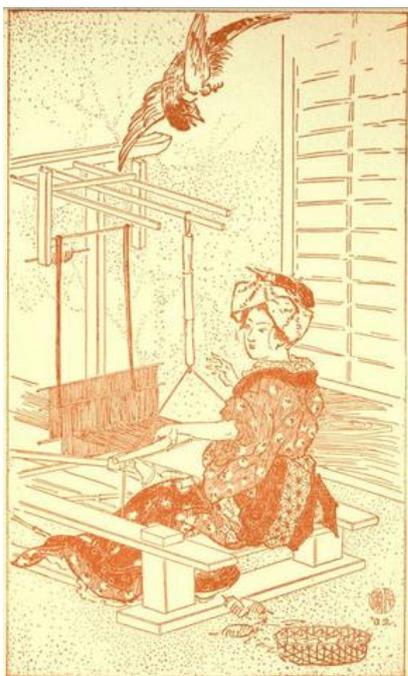
### 第三節 孝の実践—「雉子のはなし」(1902) —

#### 3-1. 孝への勇氣

*Story of a Pheasant*<sup>281</sup>「雉子のはなし」は、「蠅のはなし」同様『骨董』に納められた作品である。山里に住む農夫の<妻>が、亡くなった舅への孝を尽す物語である。そしてここでは<妻>と対照的な人物としてその<夫>が描かれ、それが彼女の孝への情熱を助長している。そして注目すべきは、孝に対する日本人の姿を、男性ではなく女性を通して西洋に伝えようとしたハーンの意図である。ハーンがセツから、そして多くの男子生徒から

知り得た「孝」の概念は、再話作品の中で男性にではなく「wives (妻)」或は「women (女性)」に組み込まれているという点である。

ここで、まず物語のあらすじを述べておく。昔、ある村に若い農夫とその妻が住んでいた。ある晩妻は夢を見た。その夢に数年前に亡くなった舅が出てきて「明日自分は非常に危険な目に遭うから、できるなら助けてくれ!」と言った。翌朝、妻と夫はこの件について話をした。朝食の後、夫は畑へ行ったが妻は機織のために家に残った。やがて外で大きな騒ぎが聞こえたので驚いて出てみると、地頭が大勢の狩猟班を連れて家の付近へ近づいてきていた。そして、一羽の雉がわきの方から家の中へ飛び込んできた。



【図4】雉子のはなしの挿絵<sup>280</sup>

そこで彼女は昨夜の夢を思い出した。その雉が舅に違

<sup>280</sup> Lafcadio Hearn、前掲(註278)、61頁。

<sup>281</sup> この作品の原典は未だ明らかになっていない。

いないと思った彼女は、鳥のあとから急いで家に入って、それを捕まえて、空の米櫃の中に入れて蓋をした。しばらくして地頭の部下が何人か入って来て、雉を見なかったかと尋ねた。大胆にも彼女は否定したが、獵人の一人がその家へ鳥の飛び込むのをたしかに見たと言った。そのため、狩獵班は家の中をあちらこちらとさがしたが、米櫃の中のことは誰も気付かないまま引き上げていった。農夫が家に帰った時、妻は夫に見せるために米櫃に隠しておいた雉の話をした。すると夫はその雉を自分の父親だと半ば確信しながらも、それを食べるために首をねじって殺した。この行為を見た妻は、泣き叫び家から飛び出した。そして、地頭に一切を話すと、地頭は彼女をなだめ、孝を重んじなかった夫をその村から追放すると共に、妻に新しい夫を迎えさせた。以上がこの物語のあらすじである<sup>282</sup>。

この物語は、日本の国鳥である雉へと姿を変えた<舅>と、孝を全うしようとする<妻>、孝を無視し目の前にある雉を食べようとする<夫>、さらに彼を罰する<地頭>で構成されている。そして、<妻>が孝を尽すきっかけとなるのが、夢へ<舅>が現れたことである。以下、この物語の冒頭部分を見てみよう。

尾州の国、遠山の里に、むかし若い農夫とその妻が住んでいた。家は山あいの、淋しい場所にあった。

ある夜、妻は、数年前に亡くなった舅が、夢にあらわれて、「明日、わしは非常に危険な目にあう。できるなら、わしを助けてくれ!」といった。(中略)

朝食をすませてから、夫は畑へ行った。妻は家に残って機を織っていた。やがて、戸外に大きな叫び声が聞こえたので、彼女は跳び上がった。戸口へ走りよると、土地の地頭が、狩りの一行をひき連れて、こちらへ近づいてきた。そのまま見ていると、一羽の雉子がわきをすり抜けて家へとび込んできた。彼女は不意に、昨夜の夢を思い出した。「ことによると、これはお舅さんかもしれない」彼女は心に思った、「助けてあげなければならない!」そこで、鳥——すばらしい雄の雉子だった——の後を追って急いで家にはいると、苦もなくそれをつかまえて、空の米櫃の中へ入れて、蓋をした。

その後すぐ、地頭の家来たちが何人かはいつてきて、雉子を見かけなかったかと訊ねた。彼女は大胆にも、知らないと答えた。が、漁師の一人が、たしかこの家へ逃げ込むのを見たと言った。そこで一行は、隅々にいたるまでのぞき込むようにして、さ

<sup>282</sup> 小泉八雲著、上田和夫編『小泉八雲集』(新潮社、2012) 135-138 頁。

がし回った。しかし、米櫃をさがすことまで思いつく者はなかった。いたる所しらべてみたが、なんの手がかりもなかったので、みんな鳥はどこか穴から逃げて行ったにちがいないと思いきった。彼らはそこで立ち去った<sup>283</sup>。

(135-136 頁、原文[23])

このように、狩猟班はその地域を治めている〈地頭〉の率いる班であったにも関わらず、そこから逃げてきた雉を〈妻〉は昨夜の夢の〈舅〉の化身とみなし、必死にかくまおうとする。雉を見てから、米櫃に入れ、〈地頭〉の部下に嘘をつく瞬間まで、「舅を助けてあげなければ」という信念を持ち、決して迷うことはない。これは、第一節でも触れたハーン的女性観、すなわち「他人のためにのみ働き、他人のためにのみ考え、他人に喜びをもたらすことだけが幸福である存在<sup>284</sup>」としての女性、そして、「いつ何時でも自分の生命をなげうち、義務とあればすべてを犠牲にする心構えの備わった存在<sup>285</sup>」としての女性の姿と通じている。かくまったことが発覚し罰せられることになったとしても、彼女はこの行為を間違ったものとして後悔することはないだろう。この〈妻〉はまさに、孝を期待通りに全うする女性として描かれていることになる。

### 3-2. 自分勝手な〈夫〉と、セツの初婚

ところで、夫婦は二人とも山の間寂しい村で暮らす農民であり、当然学のある人々とはいろいろな面で状況が異なっていたはずである。それでもなお、〈妻〉は理想的な女性として描かれた。ただ、彼女の〈夫〉はそれとは対照的に無情で短絡的な考え方を持つ人間として描かれ、彼の存在が〈妻〉の孝への純粋な気持ちを引き立てている。ここからはその〈夫〉の行動を中心に見てみたい。

農夫が家に帰ってくると、妻は彼に見せようとして、米櫃に隠したままにしておいた雉子の話をした。「捕えたとき、すこしももがきませんでしたよ」妻はいった、「そして米櫃の中で、たいそうじっとしていました。きっとお舅さんにちがいありません」農夫は米櫃のところへ行き、蓋をあけて、鳥を取り出した。鳥は、まるで飼いならさ

<sup>283</sup> 小泉八雲、前掲（註 282）135-136 頁。以下、「雉子のはなし」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

<sup>284</sup> 小泉八雲、前掲（註 267）405 頁。

<sup>285</sup> 小泉八雲、同上、405 頁。

れたように、手の中にじっとしたまま、いかにも平然と彼を見ていた。目の片方がつぶれていた。「父も片方の目がつぶれていた」農夫はいった、「右目が。この鳥の右目もつぶれている。ほんとに、これは父のようだ。見る！いつもの父のような目つきでこいつは見ている！……かわいそうに父は、『鳥になっているからには、猟師どもにつかまるより、子供たちに食わせてやるほうがましだ』と心に思っているにちがいない。昨夜、お前がみた夢の意味はそれだ」こういい添えると——気味の悪い笑いを妻のほうへ向けて、雉子のくびをひねった。

(136-137 頁、原文[24])

このように、<妻>から雉の話聞かされ、実際にその鳥を見た<夫>は、その様子と特徴からそれが自分の父親の化身であることを半ば確信する。にもかかわらず、最終的にうす笑いをうかべながらその鳥を殺してしまう。人里離れた寂しい村に住み、彼らの子どもが登場しないことから、まだ若い夫婦であったに違いない。しかも雉（食用の肉）が入っているのが空の米櫃であったことから、彼らの食生活が非常に乏しいものであったことも窺える。その結果、<舅>が夢の中で「助けてくれ」と頼んだにもかかわらず、『鳥になっているからには、猟師どもにつかまるより、子供たちに食わせてやるほうがましだ』と心に思っているにちがいない」などと、身勝手な解釈をし、雉を殺すのである。ここで注目しておきたいのは、この物語とセツの身の上の類似性である。

前述の如く、セツは没落士族の娘であり、ハーンと出会う前に為二という男性と結婚していた。江戸時代の武家では父の家禄を受け継ぐ長男だけが、妻を娶り子供を持つことができたため、二男以下の男性が婿養子として侍の家に迎えられることは非常に幸運なことであった。そして為二もまた、見方によれば、その幸運な男性であったのである。しかし、困窮を極めた稲田家の婿となった為二とセツとの結婚は、結局1年も続かなかった。

稲垣家の婿養子の為二は、どうにもならない貧窮にもはや耐え切れず、一年もたたないうちに、ついに逃奔し行方し行方をくらましてしまった。セツは今や、いかんともしい難い哀れな状況に置かれた。だから、やがて為二が大阪にいるということを耳にした時、なんとか旅費を工面して大阪まで出向き、彼に会って、一緒に帰ってくれるように切に頼んだのである。しかし、その必死の懇願も冷たい言葉で退けられた。為二と別れて橋の上に立ったセツは、ひと思いに川へ身を投じようという衝動に駆られ

た。だが、その時ふと、年をとってゆく家族一人一人の顔が頭に浮かんできたのである。自分という生活の支えを失ったら、彼らはどうなるのだろう……。セツは堅く心を決めて松江に帰った。そして、老いゆくばかりの親たちを養うために、必死に働きもし、また、どんな仕事でもした<sup>286</sup>。

このように、死をもよぎる程貧しさを極めた状況で最後まで親の顔を思い浮かべるセツとは対照的に、為二は大阪へ逃げ、再び帰ろうとはしなかった。結婚に際し少なからぬ覚悟を決めたであろうはずの彼は、無責任にもその妻と家族を置き去りにしたのである。つまり<夫>も為二も、家族を養う覚悟も能力も欠如し、自分の利益を優先する身勝手な行動をとるのである。

このことから、この物語に描かれる<妻>の涙は、大阪でのセツの絶望とつながっていると見ることができる。ハーンはこの女性に、セツの哀れな境遇と必死に家族を守ろうとする健気な姿を込めたのである。

そして、物語の後半部分で、<妻>は<夫>の悪行について<地頭>に涙ながらに訴え、結局孝道から外れた<夫>は追放となる。以下がその部分である。

この畜生にも劣る仕業を見て妻は、悲鳴をあげて叫んだ。

「まあ、なんてひどい人！あなたは、鬼です！鬼のような心をもった人でなければ、そんなことできるはずがありません！……そんな男の妻でいるくらいなら、死んだほうがまだましです！」

そういったかと思うと、草履をはく間もあらばこそ、戸口へとんで行った。(中略) まっすぐ地頭の居館へ急いだ。そして、涙ながらに、地頭にいっさいを訴えた(中略) 地頭は女にやさしい言葉をかけて、家来によく面倒をみてやるよう下知をあたえた。しかし、夫は召し捕えるように命じた。(中略)

「よほどの悪心を持った者でなければ、そのほうのやったようなことはできるものではない。そんなねじくれた奴がいるとは、土地にとって迷惑千万。当地の住民は、孝心を重んずる者ばかりだ。そんな所に、そのほうのような奴を住まわせておくわけにはいかぬ」

こうして、農夫は土地から追放され、万一、帰ってきたさいには、死罪に処せられ

---

<sup>286</sup> 長谷川洋二、前掲(註17)103-104頁。

ることになった。が、女に対しては、地頭は土地をあたえた。それから、のちに、よい夫を持たせてやった。

(137-138 頁、原文[25])

このように、「孝」を尽さなかった<夫>に絶望し、嫌気が差した<妻>は<地頭>のところへ逃げ出した。雉を捉えようとしていた狩猟班のリーダーに、雉を隠した事実を自首しに行ったのである。家から<地頭>の家までの道のりは、<妻>自身の言葉通り<夫>との決別と、「死」、すなわち何らかの刑罰を意味し、そこを彼女は泣きながら裸足で駆けたのである。この姿はまさに、男子生徒がハーンに伝えた女性の姿と一致する。大谷少年が言ったように、「日本では夫よりも両親をより愛さない妻はいない」のであり、その点で<妻>の行為は日本女性の「あるべき姿」であった。

そして<地頭>もまた、その考えに賛同している。その地域において、「孝」は何よりも優先すべき当然の行為であり、その道から外れるのは共同体全体にとっての不幸であると断言し、厳しい判決を下すのである。すなわち、ここでの<地頭>は善良で公平な人物として存在している。したがって、この物語は空の米櫃が<夫>の能力、或いは怠惰といったものに結びつき、その状況で彼が行った行為は、無能力で短絡的な人物像へつながっていく。そして、際立っているのが「孝」の欠如の象徴としての存在である。一方の<妻>の孝に対する信念と勇気、そして涙は、血縁の繋がりを越えて全うされるべき日本人の当然の行為として描かれている。さらに、この物語の背景には、それを語り聞かせたセツの境遇と、ハーン自身の父親への思いも少なからず反映されていると見てよいだろう。

#### 第四節 日本女性と描かれた「孝」

これまで見てきたことから、ハーンが描き出す女性たちは彼にとっての「理想的な女性」としての役割を担わされていることが分かる。『蠅のはなし』の<玉>のように、確固たる「自己」がなく、唯一の親への孝を生きがいとして、忍耐強く生きようとする少女や、『雉子のはなし』の<妻>のように、実の親でもない<舅>に孝への義務を必死に果たそうとする女性は、前述のとおり、必ずしも現実の日本女性そのものと合致しているわけではない。実際、江戸時代に生きた女性たちについて見てみると、必ずしも彼女たちの社会的地位が低いわけではなく、経済力を持ち男性と対等の力を持ってたたかき生きていた女性

も少なからずいたことはすでによく知られた事実であろう。女性は社会の枠に閉じ込められ、その中で生きざるを得なかったということでは決してなかったのである。しかし、ハーンの作品の中に生きる女性は、孝への固い信念を持ち、自己を犠牲にすることをはばからない堅実で健気な存在であった。それはもちろん、ハーンが日本で見たつましやかな女性たちの姿が反映されてもいるだろうが、それよりもハーンの中にある「理想」が女性を以て示されたということができよう。

そして、『蠅のはなし』『雉子のはなし』に出てくる女性たちは家に留まり、単に男性の言いなりになっている受け身の姿勢ではなく、かといって男性社会に挑戦し、女性の場所を家庭から社会へと広げようと積極的に活動するわけでもない。ただ、生かされている社会で、自ら信じていることを頑なに守り、貫くことで周囲を教化していく存在としての女性なのである。このような存在はそれを読む多くの当時の西洋人たちには理解し難いものであったかもしれない。しかし、だからこそ極東の一国に生きる、非常に異なった女性の姿の提示が、ハーンの最も意図するところであったはずである。そして、これらは、ハーン自身の母親への思慕や、妻セツ、或は男子生徒たちが示した揺るぎない「孝」への思いが彼に示した一つの信念であった。

## 第五章 貞淑な妻、慈悲深い母としての女性

### —「葬られたる秘密」(1904)「紫雲たな引密夫の玉章」—

#### 第一節 反面教師としての〈お園〉、その変容—失われた江戸の色彩—

「葬られたる秘密」 *A Dead Secret* が『新撰百物語<sup>287</sup>』の「紫雲たな引密夫の玉章」を再話したものであるということ、そして再話に際していくつかの点が大きく書き換えられていることは、これまでも指摘されている。門田守氏はこれらの作品について以下のように述べている。

日本の文化を西洋人に伝える際に、ハーンはさまざまな日本の物語に書き換えを行っている。「葬られたる秘密」には劇的な書き換えが施されており、興味深い。すなわち原話はヒロインのお園は丹波の田舎から都に上って、男関係が盛んであった不貞の妻という印象を抱かせるような語りになっている。彼女は素晴らしく美人で頭が良い一方、都では当世風に言えば色情的な印象を抱かせる女性なのである。こんな罪深い女でも最後には仏様のお慈悲で成仏できるという、仏のありがたさと若い娘に身持ちの堅さを教える教訓談として原話は捉えて差し支えない。一方、ハーンはこの作品をただ一度の不義の罪を犯したロマンティックな娘の悲恋話に仕立て上げている。表層的書き換えと言うよりも、深層的な物語自体の意味をハーンはつくり変えている。これはハーンによる創造的要素が強く前面に現れている作品になっている<sup>288</sup>。

(下線は筆者)

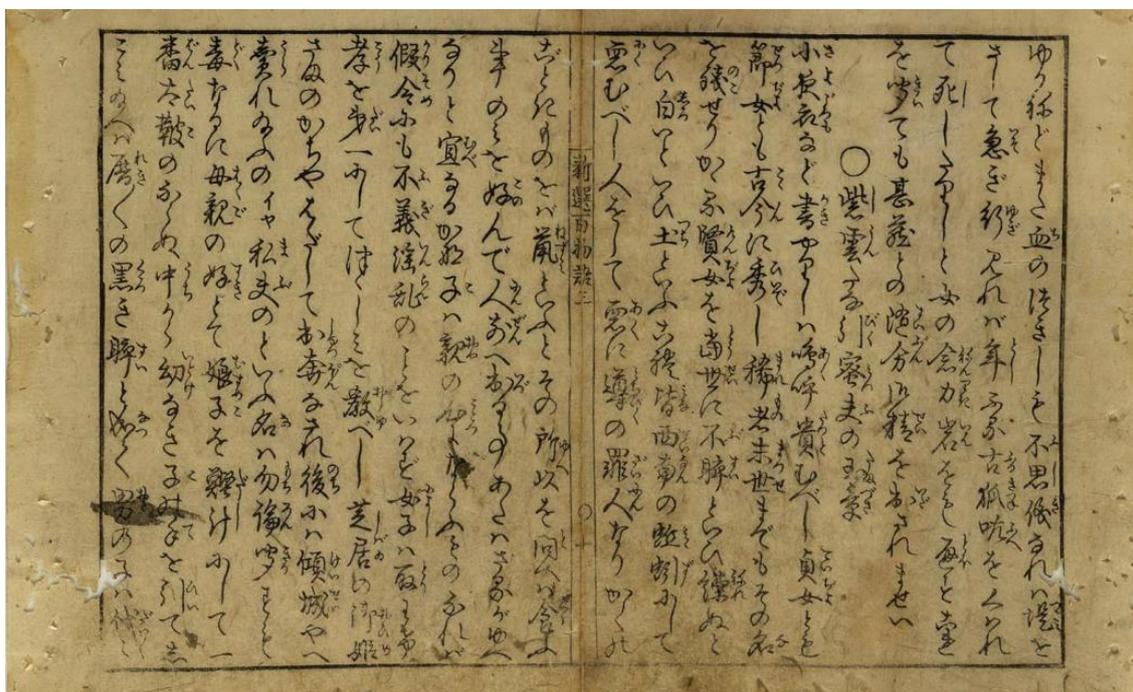
すなわち原典において主人公の女性はいわゆる「好色」として描かれていたが、ハーンの再話では一度だけ男性に心を動かされた女性ということになっているのである。そして氏の指摘通り、そこにはハーンの意図的かつ深層的な物語の変更があった。そしてこの再話に描かれた女性のつつましさは、西洋の読者へ、そして現在の私たちに「伝統的な日本女性」というイメージを与え続けている。

<sup>287</sup> 『新撰百物語』は江戸時代後期、明和3年(1766年)(推定)刊の浮世草子で、5巻からなる。計15話の怪談奇談集であり、大阪において吉文字屋市兵衛が出版したとされている。

<sup>288</sup> 門田守「ラフカディオ・ハーンと繋がり意識—『怪談』における再話の方法について—」『奈良教育大学紀要第53巻第1号』(奈良教育大学、2004)263頁。

しかしながら、ここで問題にしたいのは、この「色情的」或いは「好色」といったことにこそ、本来、この物語の神髄を見ることができないだろうかということである。すなわち、ハーンが行った変更は、ある意味で「再話」という枠を超えた創作となっているのではないかと考えているのである。

そもそも原典の「紫雲たな引密夫の玉章」は単なる一つの物語というよりもむしろ、「女性のあるべき姿」を教示する一つの道德物語であるといえる。冒頭部分は、次のように始まる。



【図5】『紫雲たな引密夫の玉章』の原文<sup>289</sup>

小夜衣など書やりしハ嗚呼貴むべし貞女とも節女とも古今に秀し稀者末世までも  
 その名を残せりかゝる賢女を当世に不躰といひ練ぬといひ白いといひ土といふこれ  
 皆西南の蚯蚓にして悪むべし人をして悪に導の罪人なりかくのごときものをバ鼠と  
 いふとその所以を問へば食ふ事のミを好んで人前へ出る事あたはざるがゆへなりと宜  
 なるかな子は親の心にならふものなれば假令にも不義淫乱のことをいはず女子ハ取  
 け孝を第一にしてつゝしミを教べし芝居の御姫さまのかちやはだして出奔なされ後  
 にハ傾城やへ売れ給ふのイヤ私夫のといふ名ハ勿論聞かすも毒なるに母親の好とて娘

<sup>289</sup> ラフカディオ・ハーン旧蔵書。富山大学ヘルン文庫にて収蔵。これは富山大学学術情報リポジトリ ToRepo で公開されているものである。

子を鯉汁にして一番太靴のならぬ中から幼なき子の手を引てしこみ給へば曆々の黒き  
膝と成て男の子ハ代々の家をもち崩し辻だちの狂言するやうになり女子は密夫の種  
と成ものぞかし<sup>290</sup>

このように、物語に入る前に「女」の育て方、社会における女性のあるべき姿について記してある。当時、野暮ったいと見做されがちだった「貞女」や「節女」といった女性たちを、賢女であると褒め称え、今一度これらの女性に価値を見出すべきだと説く。そして、女子教育に関しては、特に注意を払うべきで、不義淫乱なことは決して言うてはならず、孝を最優先させ、つねに慎みを教え込まなければならないのだという。さもなければ、その女の子が情夫を作り出すばかりか、家を崩壊させる原因ともなるのである。このような厳格な文章に続く物語は、したがって、当然、この倫理観を何らかの形で示すものとなる。そしてここに登場する〈お園〉とその両親は反面教師として描かれる。

今ハむかし丹波の国に稲村や善助とて呉服商売する人ありてお園といふ娘をもち  
しが只ひとりの娘といひ諸人にまされる容色なれば父母の寵愛すくなくならず田舎育  
となさんも惜しと一年のうち大かたは京大坂に座敷をかり乳母婢を多くつけ置地下で  
も堂上まさりじやと名にたつ師をとり和歌を学せ茶の湯も少し知いでハと利休流の  
人へたのミ長板までもたてまへ覚へ廻り炭に心をくだけハお精がつきやうと婢とも  
琴三絃を取出し明日ハ芝居にいたしましよと女形の容貌に気をつけ声色をうつし仕立  
あけたる盛の年二九からぬ目もと口もと田舎にまれなるうつくしき引手あまたの其中  
の長良や清七とてこれもをとらぬ身代がら両替商売目利の嫁子白無垢娘二世かけ  
て夫婦の中ハ黄金はだへ振手形なきむつましきはや其としに懐妊して玉のやうなる  
和子をもふけて世話にすがたも変らねハ下地のよいのハ各別と讚そやされし<sup>291</sup>

すなわち、〈善助〉とその妻は、娘〈お園〉が非常に美しいという理由で、彼女に大金をはたき、都へ留学させるのである。彼女は庶民であるにも関わらず、一流の教師から芸事を習い、そればかりか乳母と多くの下女たちとともに三味線や芝居など都の娯楽生活を楽しむのであった。この様子から、〈お園〉は「孝を最優先させ」たり「つねに慎み」深

<sup>290</sup> 小泉八雲、前掲（註 240） 388 頁。

<sup>291</sup> 小泉八雲、同上、388-389 頁。

くする「貞女」や「節女」といった女性とは正反対であることが分かる。そしてこれは、〈お園〉自身の人格とともに、彼女をそのように育んだ両親への批判も込められているといえる。結局、美しい〈お園〉は難なく結婚をし、息子を産み育てながらもその変わらぬ美しさを保ち続けた。いずれにせよ、彼女にとって「美しいこと」が何よりも強調されている。

ここで留意しなければならないのは、この反面教師が示すのは、それだけ現実社会が戒められなければならない状況であったという事実である。すなわち、社会に存在する〈お園〉予備軍へ向けた、警鐘としてこの物語が存在していたのである。前述のごとく、これが出版された1766年、「貞女も節女も、今も昔も極めて優れ、たぐいまれな存在で、世の末までも名を残す」べきであるにも関わらず、「現在において『野暮だ』、『不慣れだ』、『白ける』、『不細工だ』という」考え方が極めて一般的であった。それが現実だったのである。これについて、樋口清之氏は以下のように言及している。

町人は武士階級からの圧迫をうけることは少なく、かなり自由な生活をもつことができた。封建社会では、恋愛は社会の秩序をみだすものとして罪悪視されたが、町人の間では、恋愛は道徳的な善悪をこえた、なまの人間の感情であるという考えかたが強かった。浮世草子の代表作家である井原西鶴が、「好色一代男」「好色一代女」「好色五人女」などの好色物を書いて一般にうけたのも、当時の享樂的な都市生活を反映して、かなり自由な恋愛がおこなわれたあらわれであった<sup>292</sup>。

このように、自由が非常に制限され、『新撰百物語』のいう「貞女」、「節女」が求められ、また実際に存在していた武士階級とは異なり、〈お園〉のような町人、すなわち庶民となれば、性の概念は完全に異なるものとして捉えられていた。だからこそ、井原西鶴『好色一代男』(1682)、山東京伝『江戸生艶気樺焼』(1785)といった庶民の恋愛を描いた作品が好んで読まれていたのである。そうすると、〈お園〉とその周辺的行為一都へ留学させ、和歌やら茶の湯やらを学ばせ、芝居を見させ、気ままに遊ばせたこと一は、裕福な町人であれば見栄も相まって、少なからず行っていたことだとみることもできる。本来保護者として伴った乳母も下女たちも、そういったことが悪いとは考えもしないで〈お園〉と楽しむ。こういった人々が多く存在していたという時代背景が、訓戒としての「紫雲たな引密

<sup>292</sup> 樋口清之『恋文から見た日本女性史』(講談社、1965) 146-147頁。

夫の玉章」を生み出したのである。

それでは、ハーンの「葬られたる秘密」の〈お園〉はどのように描かれているのだろうか。同じ部分を引用してみよう。

むかし、丹波の国に稲村屋源助という金持の商人が住んでいた。彼にはお園という娘が一人あった。非常に利発で器量よしだったので、源助は、田舎の師匠にできるような教育だけで一人前にするのはかわいそうに思った。そこで、信のおける供を何人かつけて、京都ややり、そこで都の婦人たちのうける雅やかな芸事を習わせるようにした。こう躰を受けたあと、父方の知合いの——長良屋という商人に縁づいた。こうして、ほぼ四年のあいだ、幸せに暮した。夫婦のあいだに一人の子供があった——男の子である<sup>293</sup>。

(219 頁、原話[26])

もちろん「葬られたる秘密」の方には前置きはなく、直接物語が始まっている。そして〈お園〉についての描写も大きく異なっている。まず、彼女が伶俐であることである。単に美しいだけでなく、賢さも言及されている。その能力を殺さないよう、〈源助〉は都へ娘を送ったのである。そして〈お園〉がそこで享樂したという部分は削除され、両親の求めた教育をしっかりと受け、親の決めた相手と楽しく暮らし、男の子を産んだことになっている。彼女は美しいばかりでなく、誠実で真面目な女性に書き換えられているのである。この書き換えによって失われたもの、それは江戸時代の時代的背景と庶民の女性の生の姿であった。この〈お園〉は、町人の娘でありながら、なぜか武士階級の娘のような振る舞いをしているということになる。さらに言えば日本にいる女性は全て、階級に関わらず、「貞女」であり「節女」であるというイメージを生み出しているのである。つまり、原話は主人公が不貞であるからこそ、「罪深い女でも最後には仏様のお慈悲で成仏できるという、仏のありがたさと若い娘に身持ちの堅さを教える教訓談<sup>294</sup>」としての意義があったが、再話ではその根幹的部分を大胆に変更した創作となっているのである。

---

<sup>293</sup> 小泉八雲、前掲（註 282）219 頁。以下、「葬られたる秘密」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

<sup>294</sup> 門田守、前掲（註 288）263 頁。

## 第二節 「玉章」へのこだわりが示すもの

### 2-1. 貞淑なくお園>に見るセツの影

そして、<お園>は思いがけず若くして亡くなってしまふのだが、その突然の死が、彼女と周囲を悩ませることになる。ここからはまず「紫雲たな引密夫の玉章」の後半を見よう。

下地のよいのハ各別と讃そやされし身なりしが秋の末にはあらねどもいつともなしにぶら〜とさして病氣といふにもあらず只何となく面痩せて気むつかしげに衰へて物おもほしき気色なれば両親舅姑輩にハかに驚き医者へも見せ薬よ鍼よと騒ぎたち諸神諸仏へ立願をかけ奉る御宝前に肝胆をくだきいのれども終に此世の縁つきて会者定離とは知りながら恋こがれしもあだし野の露と消ゆく花ざかり鳥部の山に植へかへて涙の種となりけらしふしぎや野辺に送りし夜よりお園が姿あり〜と影のごとくにあらはれて物をもいはずしよんぼりと単箭のもとにたゝずめりみな〜傍に立よりてノフなつかしやと取すがれとた、雲霧のごとくにて手にもとられぬ水の月何ゆへこゝに來りしぞと尋ぬれども返事もせず涙にむせぶ斗にて様子もしれねば詮かたなく可愛やわが子が清七にこゝろ残りて迷ひしならんとさまの〜仏事をなし跡ねんごろに帛へども所も違ハす姿もさらず扱ハ単箭の衣類の中か手道具などにも執着せしかと残らず寺へ送れども猶も姿ハしほ〜とはじめにかはらぬ有様なれば一門中ひそかにあつまり衣類手道具寺へおくりかたのごとく仏事をなせどもすこしもするしのなき時ハなか〜凡慮の及ハぬ所道得知識のちからならでハ此妖怪ハ退くまじと其ころ諸国に名高き禅僧太元和尚にくハしく語れば和尚しばらくかんがへて後ほど参りようすをみとゞけ迷ひをはらし得さすべしと初夜すぐる比たゞ一人長良やに來られしに見れば一家の詞にちがはず亡者のすがた霞のごとく單箭のもとにあらはれて目をもはなさず單箭をながめ涙をながしかなしむ有さま和尚始終をよく〜見て亡者の躰を考るにひとつの願ひあるゆへなり暫く此間の人をはらし障子ふすまをたて切べしいかやうの事ありとも一人も來るべからず追付しるしを見せ申さんと其身ハ亡者のすがたに

向ひいよ〜窺ひ居たりしが立あがり單箭の中一々によくあらため顧れども始にかはらずとてもの事に單箭の下をと引のくれバ不義の玉章數十通ひとつに封じかく

したりこれを迷ひの種なるべしと幽霊にさしむかひ心やすく成仏すべし此ふミ共ハ  
焼すて、人目にハ見せまじと約束かたき誓ひの言葉亡者のすがたはうれしげに合掌す  
るぞと見へけるが朝日に霜のとくるがごとく消てかたちハなかりけり和尚ハ歎喜あさ  
からず一門のこらず呼出し亡者はふたゝび来るまじ猶なき跡を弔ふべしと立帰り彼ふ  
ミども仏前にて焼すつる煙の中にまぎ〜と亡者ハ再び姿をあらハし大悟知識の  
引導にて即たゞ今仏果を得たりと紫雲に乗じて飛びされりと太元和尚の宗弟の物が  
たりぞと聞およぶ<sup>295</sup>

このように、〈お園〉が突然病気で亡くなって、残された手紙を理由に何度も姿を現すという流れになっている。そして彼女は、涙を流し、むせび泣くことで自分の欲求を表現し続ける。そして、これまでも指摘されているように、その恋文が一通二通ではなく、数十通であったことに注目しなければならない。その量からして一人の男性から受けたものというよりは複数の男性からであったと考えるのが自然であろう。彼女は刺激的な都時代、芝居などとともに男性との交流も楽しんでた。つまり、ある意味で一般的な「好色」であった。

ここで江戸時代の恋愛において恋文がいかに重要なツールであったか、以下の指摘に注目したい。

恋しい人にわが想いを伝えようと、恋文の筆をとった町人の娘が、さて何と書きおくるか、どのように書いたらあの人的心里に通じるであろうかと思ひ迷うとき、まことに便利な恋文の手引書があった。(中略)「詞花懸露集」はもともとは「堀川院艶書合」といい、数種の異版が相ついで刊行されていて、相当に需要のあったことが知られる<sup>296</sup>。

このように、自由な恋愛を享受していた町人の若娘たちは恋文を多くの書物で学び、男性の心をつかもうとしていたのである。そして思いが通じあった男女間でも、恋文は非常に重要な役割を担い続けた。この点を留意すれば、彼女が執着していた複数の恋文が彼女の恋愛の全てを露呈するものであったのは言うまでもない。過去の恋愛遍歴が露呈される

<sup>295</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）389-391 頁。

<sup>296</sup> 樋口清之、前掲（註 292）153-154 頁。

恋文が家族（他人）の目に触れるのは良い気がしないものであるから、都時代の恋文だけだったと仮定しても彼女がそれに固執する理由になる。あまりにも多くの男性と交際していたということを恥じたのかもしれないし、身分違いの恋もあったかもしれない。或いは若気の至りで、口には出せないようなことも出てきているのかもしれない。さらに、〈お園〉が多くの恋文をいつ受け取ったのかということが書かれていないことが、結婚後も複数の関係を持ち続けたということにもつながっていることに注意しなければならないだろう。彼女の性格は、結婚後も変わることなく、多くの「密夫」と交わりながら生活していたということも、少なからずあり得るのである<sup>297</sup>。

結婚前の恋愛がほとんど規制されることなく楽しむことができた町人にとって、「好色」であることは必ずしも悪いことではなかった。しかし、結婚後も変わらず複数の男性と関わっていたのであれば、それは当然意味が異なってくる。結婚前の単なる浮ついた気持ちや異性への好奇心では済まされず、不貞を繰り返したということになるからである。

江戸時代の結婚は、恋愛とは全くの別物であり、家の存続のため親によって決められ、子はそれに従うのが当然のいわば一つの社会的通過儀礼であった。そして、それに従わず別の男を愛する娘は、親が容赦なく斬り殺しても無罪なのであった<sup>298</sup>。「密通の男女ともに、夫が殺したとき、筋目がとおっていればお構いなしで、夫は無罪<sup>299</sup>」であり、「私通、密通が明らかなきは、匹夫下賤しのものでいかなる刑をほどこすかは、その夫の心次第<sup>300</sup>」とされるほど、人妻の密通は厳しく罰せられた。〈お園〉は町人の娘であることから、武家ほど厳密な縛りはなかったにせよ、結婚後も複数の男性と関係を持ち続けるのは、男が妾を侍らせるのとは全く意味が違うことであったことは言うまでもない。したがって、家族に自分の体面を保ちたい、自分の素行と素性を知られたくない、という気持ちが涙を流し苦しむという場面につながっていくのである。

その姿は最初「なつかしや」と家族に取り囲まれたにも関わらず、次第に「妖怪」と呼ばれ、最終的には「亡者」とみなされた。あくまでも〈お園〉は罪深い「好色」であった。

---

<sup>297</sup> 門田守氏も同様に〈お園〉は「男関係が盛んであった不貞の妻」と見なしている。すなわちこれは結婚前の浮気ではなく、結婚後も続いている不貞なのである。門田守、前掲（註288）263頁。

<sup>298</sup> 井上清氏は当時の結婚について次のように述べている。「結婚はすべて親がとりきめるたてまえであり、娘や息子の自由な恋愛は『不義』、『密通』とされる。生まれたばかりの子供に親が『いいなずけ』をきめて、子は成長したらそれにしたがわねばならない。（中略）反対に親が縁談をとりきめたのちに、娘がそれにしたがわなくて、ほかの男を愛すれば、姦通と同罪として、親はその娘と男を斬り殺しても無罪である。（御定書百箇条）井上清『日本女性史』（三一書房、1954）127頁。

<sup>299</sup> 原田伴彦『日本女性史』（河出書房新社、1965）145頁。

<sup>300</sup> 原田伴彦、同上、145頁。

身を固く持ち、仏の道に生きるべきだと当時の「好色」たちへ説いた物語である。

それでは、「葬られたる秘密」の〈お園〉はどのようなになっているのかを見ていこう。

しかし、嫁いで四年目に、お園は病気にかかり、亡くなった。

お園の葬式のあった夜、その小さな息子が、おかあさんが帰ってきて、二階のお部屋にいるよ、といった。母親は子供を見てにっこり笑ったが、なにも言おうとしなかった。それで怖くなって、逃げ出してきたというのである。(中略)

で、あくる朝、箆笥の引出しが空けられた。お園の飾り物や衣装がすっかり寺に運ばれた。しかし、彼女はその晩もあらわれ、前のように箆笥をじっと見つめている。(中略) それからそのあくる夜も、またつぎの夜も、毎晩もどってきた。家は恐怖につつまれた。

お園の姑は、そこで檀那寺へ行き、住職に事の次第をのこらず話し、助言を求めた。寺は禅寺である。住職は、大玄和尚として知られた、老知識であった。(中略)

「よろしい」と大玄和尚がいった、「今夜わしがお宅にまいり、その部屋で見張りをして、どうしたらよいか考えてみよう。見張りをしているあいだ、わしの呼ぶまで、だれも部屋へ入らぬよう、よく言いつけておいてくだされよ。」(中略)

すると不意に、お園のすがたが箆笥の前に浮かび出た。顔はもの思いに沈み、目を箆笥にじっと向けている。(中略)

「わしは、そなたを救いにここに参った。おおかた、あの箆笥に、なにかそなたの気にかかるわけのものがあるのじゃろう。そなたのために、探して進ぜようかな」影はかすかに頭を動かして、同意の様子を示した。(中略)

が、一番下の引出しの紙の下から、それを見つけた——一通の手紙である。「これが、そなたの心を悩ましていたものかの」和尚は訊ねた。女の影は、和尚のほうを向いた——弱弱しい視線を手紙のほうに注いでいる。「焼き捨てて進ぜようか」と、彼は訊ねた。女は、頭をさげた。「この朝のうちに、寺で焼き捨てよう」和尚は約束した、「わしのほか、誰にも見せはしない」女の姿は、にっこり笑って消えた。(中略)

手紙は焼き捨てられた。それは、お園が京都で修業している折にもらった恋文であった。しかし、その内容を知っているのは、和尚だけである。秘密は、和尚とともに葬られた。

(219-223 頁、原話[27])

以上が物語の後半部分である。〈お園〉は結婚前、すなわち都時代にもらった一通の恋文のことが気かりで成仏できないのであった。それは家族中の誰が探しても見つけることのできない場所に隠してあった。突然体調を崩してしまった彼女はそれを処分することができないまま亡くなってしまったのである。原話と同じように〈お園〉は何度も姿を現すことになるのだが、涙を見せることはせず、ただ静かに箆笥を見つめ、沈黙の中に悲しみを表している。この場面について、広瀬朝光は以下のように分析している。

原話では玉章数十通がお園の箆笥の一番下の抽出の敷紙の下に隠してあったとあり、何かしら彼女が不貞の女性であるかのように描かれているが、小泉八雲はそれを一通の手紙に書き改め、しかも京都で修業の折に寄せられた恋文であると、その手紙の出所を明らかにしている。この描写を書き加えたために、「葬られた秘密」の物語は一段と光彩を放つことになった。お園は貞淑な妻に生まれ変わり、若き日に付けられた恋文すらもその死後に葬りたいと願い、亡霊となっても自分の願望を達しようとし、太元和尚の高徳により救われて、今生における唯一の恥を消滅させるのである<sup>301</sup>。

このように、手紙の数を数十通から一通へとしたことと、結婚前に都でもらったものであると設定をし直すだけで、手紙の意味と〈お園〉の人格は180度変わってしまう。手紙は青春の思い出の一つになり、それを隠し持った妻はいじらしい純粋な女性で、それに執着する姿は、最愛の夫や子ども、家族への誠実さと思いやりということになるのである。

この〈お園〉の姿には、「日本女性ほど美しい性格の持ち主はありません。日本民族の持っている隠れた良さはすべて女性の中に集中的に存在していると思います<sup>302</sup>」とチェンバレンに書き送ったハーンの理想的女性像が反映されていると言ってよいだろう。そしてそれを身近で彼に痛感させたのはセツであり、さらに広く捉えるならば彼女との結婚生活であるだろう。ハーンの結婚生活は、チェンバレンに以下のように伝えられた。

午前六時——小さな目覚まし時計が鳴る。妻が起きて、昔の侍の時代のような礼儀正しい挨拶をして私を起こす。(中略) 他の部屋では、小さな灯明が先祖の位牌と仏様

<sup>301</sup> 広瀬朝光『小泉八雲論—研究と資料—』(笠間書院、1976) 64頁。

<sup>302</sup> ラフカディオ・ハーン、前掲(註197) 137頁。

(神道の神々ではない)の前にもともされていて、お勤めが始められ、先祖へお供えをする。(中略)

午前七時——朝食。(中略) 妻が給仕をする。私はいつも妻と一緒に食べるように言うが、あとで家族一同の朝食にも出なければならぬと言っている、少ししか食べない。(中略) 私は洋服を着始める。はじめのうちは、妻が着る物をひとつずつ順序よく渡し、ポケットにも気を配るといった日本風の習慣がいやでした。これでは怠惰になってしまうと思ったのです。しかし、それに反対しようとしたら、妻の感情を害し、楽しみを損ねていることに気づきました。それで古い習慣におとなしく従っています。(中略)

午後八時——(中略) 皆が私が寝る時間の合図をするのを待っている。(中略) 女中たちは昼に手をついておやすみなさいの挨拶をする。それからまったく静かになる。

眠りにつくまで時々読書をする。(中略) いつも妻は昔の習慣に従って、「失礼して先に休ませて頂きます」と言う。そんな言い方は控え目すぎると思って、一度は止めさせようと思いました。しかし、結局は、そういった習慣は美しく、また、魂の中にしみ込んでいるので、止めさせることはできませんでした<sup>303</sup>。

(下線は筆者)

このような結婚生活は、それまで一人で世界を放浪していたハーンにとって非常に不思議で、かつ喜ばしい幸せなものであったことは想像に難くない。小泉家に身を置き、小泉八雲としてこの物語を書いたハーンが、<お園>を不貞の日本人妻として書けるはずはなかった。<お園>のいじらしさ、純粹さ家族への誠実さと思いやりといったものは、ハーンの空想的なものではなく、セツが知らぬ間に見せた姿と重なるのである。

## 2-2. <お園>に付加された母性愛

さらに再話の<お園>には原話にはない母性が付け加えられている。それは、幽霊となった彼女を息子が第一に発見するという部分である。手紙のことが気がかりであり出てきた<お園>が息子に微笑みかけたというわずかな加筆が、彼女の母としての姿を示している。一方の原話では息子が母の姿を見ないばかりか、「可愛やわが子が清七にこゝろ残りて迷ひしならん(かわいいわが子、清七のことが気がかりで迷い出てきたのかしら)」と周囲が思いを巡らせ「さま—の仏事をなし跡ねんごろに弔(様々な供養をした後、丁寧に弔)」

<sup>303</sup> ラフカディオ・ハーン、前掲(註103)、45-48頁。

ったにも関わらず、「所も違はず姿もさらず」と言ったように、息子のことなど一向に意に介さない様子が描写されている。この点についても、自己中心的な女から、温かな愛を持つ母の姿へと変更することが、物語全体の印象を変えている。

この点についてももちろん、前述と同様に、セツの影響があるだろう。彼女はハーンとの間に4人の子どもを生み育てる。1893（明治26）年には43歳のハーンにとって初めての子ども、長男一雄が誕生した。初めて父親になった喜びようは大変なもので、生まれた瞬間には思わず産婆にキスをし、母となったセツに対する感謝と尊敬の念を友人への手紙に書き綴った<sup>304</sup>。セツは、単なる女中から妻へ、そして母なる女性となってハーンの女性像に強い影響を与えることになったのである。そして母なるセツには、ハーンが生き別れ、追慕し続けた母ローザの姿も投影されていく。

そして子どもに寛大で、子どもの成長を温かく見守る日本人の姿については、例えば、イザベラ・バードが日本人のことを「これほど自分の子供たちをかわいがる人々を見たことはありません（中略）子供がいなくては気がすまず、また他人の子供に対してもそれ相応にかわいがり、世話を焼きます<sup>305</sup>」とか「日本人は子供がとにかく好きです<sup>306</sup>」と繰り返し述べたり、モースが「日本は確かに子どもの天国である<sup>307</sup>」としたり、フィッセルが「私は子供と親の愛こそは、日本人の特質の中に輝く二つの基本的な徳目であるといつも考えている<sup>308</sup>」と評したりするように、当時来日した多くの西洋人が驚きをもって受け止めていたことと、ハーンがここに込めた日本人の印象は変わらない。

これについて、門田守氏はハーンが〈お園〉に「清らかな日本女性の愛<sup>309</sup>」を込めたとし、その愛が向けられた対象の中には、彼女の息子が含まれていると指摘している。このように、〈お園〉のしおらしさやつつましさに加え、子どもへの愛もまたそれまでの典型的日本人像の一つとして読者へ受け入れられていくことになる。そして、こうした「子どもへの愛」こそ、現在多くの日本人が忘れかけている日本人の美質の一つであり、ハーンが〈お園〉に込めた日本人像なのである。

<sup>304</sup> ハーンの喜びようは、前にもふれたとおりである。（註104）

<sup>305</sup> イザベラ・バード、時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行（上）』（講談社、2008）182-183頁。

<sup>306</sup> イザベラ・バード、同上、272頁。

<sup>307</sup> E・S・モース、石川欣一訳『日本その日その日（1）』（平凡社、1971）37頁。

<sup>308</sup> フィッセル、庄司三男訳、沼田次郎訳『日本風俗備考2』（平凡社、1978）125頁。

<sup>309</sup> 門田守、前掲（註288）265頁。

### 第三節 妻として、母としての女性

これまで見てきたように、〈お園〉の不貞な要素は全て排除され、死後も家族を思うしおらしさを前面に出すことによって彼女は生まれかわった。夫や息子を始め、自分を育て、支えてくれた両親や舅、姑などへの思いは当然、何にも代えがたいものでありその思いが彼女を亡霊にしたのである。確かに、彼女は恋文を大切に保管していた。しかし若かりし頃の淡い恋は誰であっても自然と経験するものであり、それが彼女を不義淫乱の例とすることはできない。ハーン作品ではあくまでも、〈お園〉は親に従い教養を身に着け、また同様に結婚をし、それぞれの境遇で幸せな生活を送った女性となっているのである。これについて、門田守氏は「ひょっとして、お園はラブレターをもらっただけで、一度も相手の男と関わらなかった可能性さえある」とし、お園を「罪とも呼べぬほどの罪を犯した女<sup>310</sup>」だと見做し、以下のように分析している。

むしろあくまでも彼は淑やかでしおらしい、西洋人がいかにも想像しそうな日本女性を登場させることに最新の注意を払っている。彼女のつつましやかな恥の意識は僧侶によって拭かれる。彼女は控えめに微笑みを浮かべて消えていく。この一連の語りの中でハーンは西洋人の抱くジャパニズムを満足させつつ、清らかな日本女性の愛、つまり思いを寄せた男への思慕、さらにわが子への思い、小さな恥じらい等を凝縮させてみたのである。このあくまでも清らかな女の恥じらいのもつ可愛らしさ、日本らしさ、小ささへの愛好等を描き出すことがハーンの本意だと思う<sup>311</sup>。

前述の通り、再話作品「葬られたる秘密」は江戸の社会的背景が排除されている。そして反面教師としてではなく、淑やかさやいじらしさで、むしろその逆を示すこととなった〈お園〉は、氏の指摘通り、西洋人の抱く日本女性へ合致する存在であった。この物語は、大胆な主人公の変更と細部の小さな変更の積み重ねで、物語の意義、そして色彩までもががらりと変わってしまっている。しかしながら、多くの読者はこの物語に描かれた一途で健気なくお園〉や母親としての愛情に溢れた彼女に、「典型的日本人女性」の姿を思うのである。そして、こうした美しい日本女性と日本の姿は、「旧日本への愛」と、西洋至上主義

<sup>310</sup> 門田守、前掲（註 288）265 頁。

<sup>311</sup> 門田守、同上、265 頁。

にとらわれず、日本を相対的に捉えていたハーンだからこそ描き出せた真の日本の姿であると思いがちである。

しかしながら、たった一通の手紙（しかもそれが実際に会ってもいない男性からのものの可能性すらある）に執着し、成仏できない〈お園〉と、不貞を繰り返したことを後悔し、成仏できず、仏の力にすがらざるを得なくなった女〈お園〉とを再度比べてみれば、明らかに後者の成り行きが当然であり、前者の〈お園〉の姿には何か納得できない不自然さが残る。繰り返すが、再話の〈お園〉は、受け取った一通の恋文に異様な執念を抱く。自分が書いた恋文ではなく、受け取ったものであるにも関わらず、である。そして息子に優しく微笑みながら、最後は美しく去っていく。

こうしたストーリーの展開について、何ら疑問を抱くことなく読み過ごしてしまうのはハーン作品の意義を履き違えてしまうことにつながりかねない。そこには、現実の日本社会ではなく、ハーンの中にある一貫した理想像が映し出されているということをも考慮する必要があるのである。

それは、1863年から1890年までイギリスやアメリカにいたハーンが、ジャポニズムという大きな流れの中に存在していたこと、すなわち「固定された日本女性像」を抱いていたこともあるだろう。そして、そうしたイメージを抱き、来日したハーンは、「サムライの娘」として紹介されながらも、手も足も太く、農家の娘にしか見えないセツを見たハーンは、自分は騙されているのではないかと感じ、「士族ナイ」「私ダマス」「ノー」と抗議した<sup>312</sup>というのはよく知られた話であるが、このように、ハーンが抗議までして「サムライの娘」にこだわったこと、ここから、彼の思い描く「日本女性像」が見てとれる。すなわち、来日前から来日間もない頃のハーンは、当時の他の外国人同様、ジャポネズリー或いはジャポニズムといったいわゆる「日本趣味」が作り上げた日本観から自由ではいられなかったのだとみることができるのだ。ハーンにとってセツは女中、すなわちハウスキーパーとしての役割を果たすに過ぎない女性ではあったが、それでも、サムライの血を引く、エキゾチックな女性でなければならなかった。そしてそれは当然「きゃしゃでしなやかで」あるはずだった。しかし、残念なことに、ハーンのセツに対する第一印象はその幻想をたちどころに否定するものであった。

しかしここで重要なのは、このセツこそがハーンをあらゆる面で支え、彼に最も近いところで「日本女性」の姿を見せ続けたという事実である。セツは第一印象こそハーンの理

---

<sup>312</sup> 長谷川洋二、前掲（註90）66頁。

想とはかけ離れていたが、実際には彼が思い描き、求め続けていた女性そのものであったと言っても過言ではないだろう。セツは、夫の再話活動の題材を探し、古本屋を歩き渡り、物語を解釈し、話し聞かせ、議論し、しかしながらその名すら著作に一度も登場することはなかった。また、彼女はハーンとの間に4人の子どもを生き育てたことは、前述の通りである。

セツは、単なる女中から妻へ、そして母なる女性となってハーンの女性像に強い影響を与えることになったことは想像に難くない。ハーンが生き別れた母ローザの姿もまた、母なるセツへ投影されていったに違いない。

サムライの血を引くセツ、そして彼女を取り囲む武家一家、この特別な女性は、ハーンに「武家の女性」を示し続けた。その環境の中心に自分を置くことになったハーンは、家庭以外にそれとは全く異なった女性を見たにせよ、あるべき日本女性の姿を近代化以前の幻として思い描くことができたのである。このように考えていけば、庶民の間で決して珍しくはなかった「淫乱なくお園」を、「貞淑なくお園」へと変化させえた背景に、「理想的な女性、セツ」の存在が色濃く表れていて、それが西洋の読者へ向けたハーンの「ジャポニスム」すなわち、ハーンの中に生き続けた「日本女性たるもの」がこの作品に生かされていると読み取れるのである。

戒めるべき女性の存在を、ありのままに再話することができなかったことは、あるいは、現実の日本女性を描き出すことができなかったハーンの限界ともいえる。しかし、晩年に再話されたこの作品には、ハーン自身の日本体験における、発信すべき女性像が描かれていることもまた事実であろう。それは、テンポラリーワイフとしてしか日本人女性を見なかった西洋人とは異なり、自らが帰化することでセツと法的に結婚し、小泉家の一員として14年を過ごしたハーンが見た日本女性の姿であり、ジャポニスム文学に描かれた女性像とは全く異なる、妻としての、母としての女性である。そして、その背景には日本で彼を支え続けた理想的な女性セツの影が如実に浮かび上がってくる。そしてこれらが、「サムライ」、「ハラキリ」といったエキゾチシズムに固執していた初期の作品には見られないものであることもここで再度強調しておきたい。

## 第六章 静かなる抹殺と転生—「お貞のはなし」(1904)、「怨魂借体」—

### 第一節 <長尾>と手紙—「裏切り」の加筆—

「お貞のはなし」*THE STORY OF O-TEI*は、『怪談』に収められた作品で、男が女との約束を破り、他の女と結婚する物語である。『夜窗鬼談』の「怨魂借体」を原話とするこの物語は、再話の過程で大きな変更が行われ、一読すると女の怨みを削除し美しい恋物語へ生まれ変わったかのような印象を受ける。しかしこの作品もまた、単なるロマンティックな恋物語ではない。むしろ細部を丁寧に読み解くと、原話を超えた女の執念、男への怨みが浮かび上がってくるのである。ここで明らかにしたいのは原話よりも「男の裏切り」が明確化されることにより、女の行為の意味が変わっているという点である。原話が書かれた時代的背景、ハーンが意識した西洋の読者たちのことを踏まえつつ、物語に込められた新たな側面に迫りたい。

まず、原話のあらすじを確認しておこう。原話は、新潟の医師の息子<長尾>が鬱病の芸者<阿貞>を治療することから始まる。彼女の心を癒すことで全快へと導いた<長尾>は、ある夜<阿貞>にお礼の席を設けられ、同衾する仲になる。<長尾>の父は息子が遊蕩していることに憤慨し、医学の修業に集中させるため強制的に江戸に行かせた。<阿貞>はそれを聞き嘆き悲しみ、病が再発し、結局左目を失明した後に亡くなってしまう。五年後、<長尾>が帰省すると、息子が再び女に走らないよう、父が急いで結婚をさせた。稼業は継母の息子(長尾の義弟)が継ぐことになっていたため、<長尾>は妻と共に江戸へ戻った。医者としての名声が高くなり、順風満帆な生活を送っていたが、ある日<長尾>は左耳が聞こえなくなる。自分で「不治の病だ」と診断したが、ある日、有名な占い師に相談すると、彼は言った。「二十年位前に、ある婦人を裏切りませんでしたか。」それに対し<長尾>は「記憶にない」と答えた。しかし占い師は続けた。「その婦人は夜に左目を失明し、最終的に鬱病で死んだ。怨念は残っている。」そこで<長尾>は愕然として<阿貞>に崇られているのだと知る。占い師に「霊を祀って罪について謝りなさい」と言われ、その方法に従って彼は手紙を書いた。「私が誓いを破ったのは、やむを得なかったからだ。もし未だに私のことを慕っているのなら、生まれ変わって誓いを守らせてほしい。しかし私は年を取って、気も衰えている。だから見た目があなたに似ている女に魂を移せば、私たちはこの世で縁を果たすことが出来るだろう。私にはまだ子供がいない。あなたを妾にすることができる。子供を一人産んでくれれば、私にとっても幸せだ。」そしてこの手紙を

仏壇の前で焚いた。その後、耳の聞こえはやや良くなった。そして三年後には完全に治癒した。その前に、＜長尾＞の父が亡くなった。＜長尾＞は故郷に帰り、十三年の法要も行った。江戸へ帰る途中、伊香保温泉へ行った。そこにいた十六歳程度の若い婢が非常に＜阿貞＞に似ていたので、彼女に尋ねた。「あなたの容貌は私が知っている女性にとっても似ています。あなたはどこから来たのですか。」すると婢は彼の手をとって、魅力的に答えた。「あなたは＜阿貞＞を忘れたことはありませんでしたか。私はあなたの誓いを信じてあなたの帰郷を待っていました。しかし病が再発し、怨みを抱いたまま死んでしまいました。私の念が消えず、あなたの体を悩ますことになりました。あなたの手紙を得たので、生まれ変わることを待たず、この女に体を借りて、縁を果たしたいと思っています。約束を破らないで、すぐに一緒に連れて帰ってください。私は妾となることもいやではありません。」こう言って、悶絶してしまった。意識を取り戻した少女は、何が起きたか覚えていないが、自分の体に別人が入り、怨みを述べる声は聴いていた。改めて、彼女の素性を聞くと、高崎の落ちぶれた士族の娘で名前は＜貞＞、負債のためにこの旅館に来ることになったという。この旅館の主人は彼女を憐れみ、あまり酷使してはいなかった。彼女の身の上に同情した＜長尾＞は彼女を妾にすることにした。間もなく彼女は男の子を産み、妻との関係も良好で、妻の遺言により妻の死後、＜貞＞は＜長尾＞の後妻となった。以上が原話「怨魂借体」のあらすじである<sup>313</sup>。

再話「お貞の話」は、原話から多くの点に変更されている。変更点を一瞥すると、以下の通りである。①＜お貞＞は＜阿貞＞のように芸者ではなく、＜長尾＞の父親の友人の娘（許嫁）である。②＜お貞＞は鬱病ではなく肺病で命を落とす。③再話において＜長尾＞は＜お貞＞の位牌に手を合わせ「生まれ変わったら必ず娶る」という誓いを立てながらも別の女と結婚した。④再話の＜長尾＞はある時期に立て続けに家族（両親、嫁、息子）を失うという不幸に見舞われる。⑤再会を果たした＜貞＞は、原話では他の女の体に移っていたが、再話では実際に16年の歳月をかけて生まれ変わった人物である。このように、主な変更点を挙げるだけでも物語の色彩が大きく変わっていることが分かるだろう。それではこれらの点に注目しながら「お貞の話」にこめられた意味を読み解いていこう。

まず、「お貞の話」で注目すべき点として＜長尾＞の裏切りが明確化されているという点である。原話では、＜長尾＞と＜阿貞＞は芸者と客の関係であり、＜長尾＞が＜阿貞＞と同衾したと言っても二人の間に結婚についての明確なやり取りはない。したがって、＜長

<sup>313</sup> 小泉八雲、前掲（註240）367-370頁。

尾>はごく普通に父の決めた相手と結婚し 20 年間の間、左耳が聞こえなくなるまで<阿貞>の存在を忘れ去っている。

一方の再話では「両家では、長尾が学業を了えたらすぐ、婚礼の式をあげることに話が決っていた<sup>314</sup>」とあることから、<長尾>にとって<お貞>は正式な許嫁であった。しかし、<お貞>は不治の肺病におかされ、15 年という短い生涯を終える。死に際に、彼女は<長尾>に以下のように告げる。

「長尾様、わたしどもは幼い時から行く行くは一緒になると言い交したいいなづけの仲でございました。(中略) しかしいまわたしは死なねばなりません。(中略) それに、わたしどもまたいつかお会い出来る気がして、そのことをあなたさまに申しあげたく思いました」……(中略)

「西方浄土のお話をいたしたのではございません。わたしどもはこの世でまたお会いするよう運命づけられている、と信じているのでございます——たといこの体が明日埋葬されようともでございます」

長尾は驚いてお貞を見つめた。長尾が驚いた様を見てお貞がにっこりとした。お貞は、やさしい、夢見るような声で続けた、

「左様でございます。この世で——あなた様の今生のうちに、またお目にかかれるのでございます、おしたわしい長尾様……ただ、本当にあなた様がお望みならばでございますよ。ただ、そうなるためには、もう一度女の子に生まれて一人前の女にまで育たなければなりません。そのためにはあなた様はお待ちにならなければいけません。十五年か、十六年でございましょうか。これは長い年月でございます……でもあなた様はまだ十九歳でございますものね……」

臨終の苦しみを安らげようと思った長尾はやさしく言った、

「お前さまをお待ちするのは、務めというより喜びです。わたしたち二人は七世を誓いあった仲ですから」(中略)

「神様や仏様でない限り、わたしたちがどこでどうして会えるかはわかりません。でもあなた様がおいやでない限り、わたしはあなた様のもとへ帰って参ります。それはもう必ずでございます。間違いございません……どうかこのわたしの言葉を覚えておいてくださいまし」

---

<sup>314</sup> 小泉八雲、前掲(註 240) 30 頁。

お貞の言葉はそこで途切れた。両の眼は閉じた。お貞は死んだ<sup>315</sup>。

(30-33 頁、原話[28])

以上が〈お貞〉の死に際である。彼女は生まれ変わって再び〈長尾〉の前に現れるということを確信している。そしてそれを最後に許嫁に伝えるのである。19 歳である〈長尾〉は、16 年後すなわち 35 歳の時に 16 歳となった〈お貞〉と再会し、そこでめでたく二人は結ばれるというのが、〈お貞〉の描いたシナリオであった。死にゆく許嫁にその場しのぎの返答をした〈長尾〉は、結局は父が選んだ別の女性と結婚をし、さらには子供までつくってしまったのである。

ここで、〈長尾〉が〈お貞〉に宛てた手紙が、いつ、どのように書かれたのかに注目したい。原話では〈阿貞〉を 20 年もの間すっかり忘れ去っていた〈長尾〉は、占い師に諭され、謝罪の手紙を書く。その内容は、以下の通りである。

且ツ翰ヲ書シ曰ク余盟ニ負クハ己ムコトヲ得（ザル）ヲ以テナリ。卿若シ尚ホ余ヲ慕フコト有ラハ。願クハ再生シテ盟ヲ尋ケ。然レドモ余年老ヘ気衰フ。或ハ魂ヲ容貌卿ニ肖タル者ニ憑託セヨ。今世復タ前縁ヲ果スコト有ラン。我レ今マ子無シ。幸ニ妾（ト）為（ス）コトヲ得テ。一子ヲ生マバ。我ノ願亦足レリ。書シ了ル<sup>316</sup>。

20 年もの間完全に忘れてしまっていた女性に書く手紙としてはずいぶん都合のよい内容である。自分が誓いを守れなかったのはやむを得ない事情があったのだと弁解し、今でも可能ならば彼女を受け入れるつもりがあるというのである。そして彼自身が年老いつつあるので、できるだけ早く再生するなり別人に乗り移るなりしてくれればこの世で結ばれることができる、ついでに子どもを一人産んでくれと、家の存続というかなり実利的な望みを託すのである。若くして亡くなった〈阿貞〉の執念とは対照的に、年老いた〈長尾〉にとっての結婚などたかがこれくらいのものかと、気が抜けてしまう。

しかし再話の〈長尾〉が、〈お貞〉の死後、間もなく書いた手紙はこれとは全く異なった意味を持っている。

<sup>315</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）30-33 頁。以下、「お貞のはなし」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

<sup>316</sup> 小泉八雲、同上、368-369 頁。

長尾は心からお貞を愛慕していただけに嘆きは深かった。(中略) その位牌を仏壇に置いて毎日その前にお供えをした。お貞が死ぬ直前に自分に言った不思議な言葉について、いろいろと思いをめぐらした。そしてお貞の御魂を慰めるために、もしお貞が別人の姿で自分のもとに帰ってくる事が出来るなら、自分はお貞を娶りますというおごそかな誓いを立てた。その誓いの言葉を紙に記すと長尾はそれに自分の判を捺し、仏壇のお貞の位牌の脇に置いた。

しかし長尾は一人息子であったから、嫁を貰わねばならない。家族の願いをもだしがたくて、父が選んでくれた女をじきに妻に迎えることを承諾せざるを得なかった。しかし結婚したあともお貞の位牌の前にお供えを欠かさず、いつも愛着をこめてお貞のことを思い出していた。だがそれでもなおお貞の面影は長尾の記憶の中で次第に薄れ思い返すのが難しい夢のようになってしまった。こうして歳月は過ぎて行った。

(下線は筆者、33頁、原話[29])

原話において、〈阿貞〉の気持ちを左耳を失聴することにより気付いた〈長尾〉が過去への謝罪の意味で手紙を書いたのに対し、再話では将来への誓いとして書き留め、捺印したという点で、正反対の意義を持っていると言えよう。しかし「お前さまをお待ちするのは、務めというより喜びです。わたしたち二人は七世を誓いあった仲ですから」と死に際の〈お貞〉に明言し、「もしお貞が別人の姿で自分のもとに帰ってくる事が出来るなら、自分はお貞を娶りますというおごそかな誓い」までもたてた〈長尾〉は、間もなく別の女と結婚をし、息子をもうけるのである。

〈長尾〉と〈阿貞〉が医者と患者から、芸者と客という関係へと変化した原話とは異なり、〈長尾〉と〈お貞〉は天が定めた運命の相手であるというような設定となっている。前者において、〈長尾〉が別の女性と結婚したとしても、〈阿貞〉の芸者という職業上、見方によっては全く問題にならないのに対し、後者においては「七世を誓いあった」相手がいるにも関わらず、別の女性とすんなり結婚する〈長尾〉の行為が「裏切り」として映るように設定されている。

## 第二節 再会のための準備

### 2-1. 失われた四つの命

この「裏切り」について、〈お貞〉は一見何もしていないように見える。「和解」の〈先妻〉のように死体になって〈夫〉の前に現れたわけでもないし、「破られた約束」の〈先妻〉のように〈後妻〉を呪い殺したわけでもない。さらに言えば、原話の〈阿貞〉のように、〈長尾〉の身体に不具合を起こさせたり、再会後に恨み辛みを述べたわけでもない。それでは、全く何もしなかったのかというと、実はその真逆なのである。

再話において、〈お貞〉は〈長尾〉と17年越しに再会を果たすのだがそれ以前に奇妙にも四人の命が消失している。そしてそれに関する描写はほんの二行足らずの以下の文章である。

その間にいくつかの不幸が長尾を襲った。まず両親と死別し——それから妻と一人息子が亡くなり、いつかこの世でひとりきりとなった。

(33頁、原文[30])

両親と妻、そして息子の死に関して具体的な時期や死因などが一切記されていない。そして天涯孤独となった〈長尾〉は一人旅に出、そこで生まれ変わった〈お貞〉と再会するのである。繰り返すが、〈お貞〉は〈長尾〉が別の女性と結婚したこと、子どもをもうけて幸せな結婚生活を送っていたことについて再会後も責めることはない。彼の過去について一切触れないのである。彼女が無意識のうちに語ったのは、以下のことだけである。

たちどころに——あの忘れもせぬ亡くなった人の声で——女はこう答えた。

「わたしの名はお貞と申します。(中略)十七年前、わたしは新潟で死にました。それからあなた様はわたしが女の姿をしてこの世に戻って来れるならばわたしを娶ると誓いを立ててくださいました。その誓いの言葉に判を捺して封をし、仏壇の中の私の名前が記された位牌の脇に置いてくださいました。それゆえ戻って参りましたのでございます……」

この最後の言葉を発した時、女は気を失って倒れた。

(34-35頁、原文[31])

このように、自分が十七年前に亡くなった〈お貞〉であること、〈長尾〉が誓いを立てたことを信じ、生まれ変わってきたのだということのみにふれている。そして約束通り二人は結ばれるのだが、生まれ変わった〈お貞〉はその後、「前世のことについてもなにも思い出すことが出来なかった」とあるように、この件に関して一切のことを忘れてしまい、思い出すことができない。物語の最後は、「あの出会いの瞬間に不思議にもよみがえった前世の記憶は再び消え去って、その後ははっきりしないままになっていたとのことである<sup>317</sup>」と、あやふやなまま二人が暮していくということになっている。〈長尾〉はこの不可思議な流れに何も感じなかったのであろうか。再会を前に、計ったかのように身内がかき消され、自分が結婚したという過去が全くない状態で〈お貞〉に会うのである。そして彼女は17年の間、彼がどのように過ごしてきたかということに無頓着のように見え、純粹に誓いと彼自身を信じているように見える。二人の間に必要のないものは、既に何もないのだから、彼が首を横に振るはずもないのである。或いはこの〈お貞〉であれば〈長尾〉が結婚をせずひたすら待ち続けていたという愚かな嘘をついたとしても、微笑みで受け入れたに違いない。全ては彼女が思うままに物事を進めることができたのだから。

この点については、遠田勝氏が以下のように言及している。以下示唆に富む部分であるので、長文を引用する。

しかし、これは原話を見れば明らかなのだが、お貞は本来、怨霊であって、その点に注意して読むと、この物語は、「破られた約束」や「因果話」と同じく、前妻が後妻に祟り復讐する怨霊譚と分類することも可能なのである。(中略)

原話でお貞は、若き杏生に恋した遊妓で、杏生の父親に仲をさかれ、恨みをのんで死ぬが、後年、杏生に祟り、逆に説き伏せられて、年老いた杏生のためにこの世に再生し、妾となって嗣子を産み、本妻の没後、その妻になおる。怖いというより、なにやらめでたい怪談である。

漢学者鴻斎が徹底的に儒教化してしまったために、とんでもなく不思議な話になっているが、お貞がもともとは怨霊であったことに間違いはない。ハーンは再話するにあたり、お貞が怨霊であることを表面上はきれいに消し去ってしまったが、それでもよく読むと、これは鴻斎の儒教訓話より遙かに怖い怪談なのである。ハーンの「お貞

<sup>317</sup> 小泉八雲、前掲（註240）35頁。

の話」では、杏生は、お貞の臨終の場で、結婚せず、あなたの再生を待つと、はっきり約束している。そして杏生は、お貞の再生をまたず、妻を迎え、子供までつくってしまったのだから、その約束はもの見事に反故にされたことになる。つまり「お貞の話」は「破られた約束」と同じく破約の物語なのだが、表向き、お貞はその約束に対し、なんの恨みもいわず、復讐もしていない。しかし、その破約ののちに起った出来事は何であったのか。

During those years many misfortunes came upon him. He lost his parents by death -then his wife and his only child. So that he found himself alone in the world.

あまりにもそっけない語りで、つい読み飛ばしてしまいがちだが、ここで杏生の破約にかかわるすべての者が、病名も死因も告げられぬまま、消し去られているのである。まるで、お貞の再生の邪魔になる者は生存をゆるされないとでもいうかのように。

「お貞の話」は明らかに二つの声で語られた二重の物語である。ひとつは、明るく澄んだ声で語られるラブ・ロマンス。お互いを思い続けたがゆえに、死を乗り越えて結ばれた許嫁たちの幸せな結婚の物語。しかし、その背後には、低いひそやかな声で語られる復讐の物語が隠されている。その破約にかかわったという、ただそれだけの理由で、名前も与えられないまま物語から消し去られてしまった「両親」と「妻」そして「ただ一人の息子」の受難の物語。この低音部に耳を澄ませたとき、「お貞の話」は「破られた約束」や「因果話」に勝るとも劣らない残酷な復讐譚に変貌する。(中略)

お貞は並外れた力をもった魔女で、杏生の妻として再生するために、あらゆる準備をひとりで成し遂げてしまったようだが、夫と引き離されたすべての女が、これほどの靈力に恵まれているわけではない。例えば「和解」(『影』)の女など、かわいそうなほど非力である。貧しいという、ただそれだけの理由のために離別され、その悲しみのために世を去った女にできたことは、たった一晩だけ、醜く屍をさらした茅屋ほうおくのなかで、夫を生前の姿で迎えることだった<sup>318</sup>。

このように、<お貞>は沈黙のうちに四つの命を抹消しておいて、自分を裏切った<長尾>、あるいは自分を裏切らせた彼の家族たちに復讐をした。<阿貞>の行為については

<sup>318</sup> 遠田勝、前掲(註1) 230-232頁。

後述するが、ここで強調しておきたいのは、〈お貞〉と〈阿貞〉の立場の違いが、彼女たちの行為を全く異なるものに行っているという点である。〈お貞〉はもともと両家が認める許嫁であった。すなわち医師〈長尾〉の正妻になるべき女であった。一方の〈阿貞〉は単なる芸者である。妾という立場に甘んじて喜ぶことができる〈阿貞〉は、彼の正妻を殺す必要はない。彼女にとっては、自分を救ってくれた男性の妾となって、遊郭から去りたい、すなわち芸者たちの極めて一般的かつ幸福な遊郭からの去り方を自らも実践したいという〈お貞〉に比べれば極めて素朴な願いに過ぎなかった。

## 2-2. ターニングポイントとしての「伊香保」

これに関連して、かれらが再会を果たす伊香保という場所の意味も考えてみたい。物語を伊香保前、伊香保後に分けて捉えることで、両作品の違いが浮き彫りとなる。

まず原話であるが、伊香保は以下のようにあらわされている。

是ヨリ前キ父歿ス。生亦屢バ郷ニ之ク。十三年ノ忌辰ニ了テ亦郷ニ於テ祭ヲ修ス。  
帰途伊香保温泉ニ浴ス。客舎ニ在ル数日。婢有リ年僅ニ破瓜ニ<sup>ナンナン</sup>垂トス。而(シテ)容貌音声。酷夕阿貞ニ肖タリ<sup>319</sup>

すなわち群馬県伊香保は、故郷である新潟と修業先から生活の場となった江戸との中間地点であるということになる。故郷で執り行った父親の十三回忌から、江戸への帰途で〈長尾〉は〈阿貞〉の魂が乗り移った〈貞〉と会うのである。

そもそも〈長尾〉と芸者である〈阿貞〉との間を引き裂いたのは〈長尾〉の父親であった。〈長尾〉は父親に従わざるを得ず、故郷を離れ、江戸で修業をすることになった。そして新潟へ戻ると、今度は急に結婚させられ、再び江戸へ戻るのである。このように考えると、故郷である新潟は父の存在、すなわち「長尾家の息子」としての〈長尾〉を強いる場所であると言えよう。一方の江戸は、それらから解放され自由を謳歌できる場所だったはずである。だからこそ、本来なら自分が継ぐはずであった医院を継母の息子（義弟）が継ぐことになっても、それを気にも介さず妻と共に江戸へと向かったのである。

再話同様、原話でも〈阿貞〉が唯一の邪魔者である〈長尾〉の父を消し去ったことは改めて言及するまでもないが、その後、伊香保という「イエ」と「自由」の中間地点で再会

<sup>319</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）369 頁。

を果たすのは、彼がその後、父のいない故郷と決別し、＜長尾＞自身の決断で＜貞＞を妾にし、自由なる都江戸で幸せな生活を送れるという意味を持っている。彼の歩みは、父という束縛から解放され、人生の成功者として妾を侍らせることのできる江戸へ向かっているのである。

一方の再話ではどうだろうか。以下、伊香保の描かれ方である。

その間にいくつかの不幸が長尾を襲った。まず両親と死別し——それから妻と一人息子が亡くなり、いつかこの世でひとりきりとなった。長尾は寂しい我が家を捨て、悲しみを忘れるために長い旅に出た。

ある日、旅の途次、伊香保に着いた。伊香保はいまでも温泉として名高い風光明媚の地である。この山中の村の宿に泊まると、若い給仕の女が現れた。その顔を一目見るやはっと息を呑んだ。心はかつてないときめきを覚えた。不思議なほどお貞に似ている。長尾は夢を見ているのではないかと我と我が身をつねってみた。

(33-34 頁、原文[32])

このように天涯孤独の身となった＜長尾＞は故郷でも江戸でもない地へ足を向けた。故郷にも家族はなく、江戸にも家族がないのである。戻るべき一切の場所がない彼が、家を捨て、そこでの仕事も捨て、旅に出た先が伊香保だったのである。原話での「故郷と江戸の中間地点」という意味合いが変わっていることが分かるだろう。彼は、＜お貞＞により周囲の人物を全て抹殺され、孤独となり、故郷も都も失っている。言うなれば人生を完全にリセットした状態なのである。

原話の＜長尾＞が、妾として＜貞＞を江戸へ連れ帰り、彼女を「他室ニ置」いたのと、再話の＜長尾＞が、＜お貞＞を妻として受け入れ、どこか分からない場所で「仕合せに」くらしただのでは、全く意味が異なる。前者の＜長尾＞は、家族（本妻）と生活の基盤（医師としての仕事、妾をおける部屋のある邸宅）を失っていない。そこに＜貞＞を追加し、子どもをもうけ、本妻共々かわいがったのである。一方の後者では、＜長尾＞は＜お貞＞によって全てを徹底的に失わされている。彼にはもはや彼女を受け入れる以外の道は残されていない。色々なことがあやふやなままで過ごすことになった新たな人生しか選択の余地はなかったのである。このように考えると、一人旅の目的地伊香保は＜お貞＞の思惑の集大成の意味を持っている。彼をあらゆるものから引き離し、自分が死ぬ間際から思い描

いていた計画通りにその後の人生をスタートさせる重要な場所なのである。

### 第三節 <お貞>と<阿貞>、その変容

#### 3-1. <長尾>の欲望を満たす存在—従順な<阿貞>—

ここで、改めて両物語に描かれた女性の変容、すなわち<阿貞>がどのように<お貞>に変化していったのかについて見ておきたい。なぜならこの女性の描き方にこそ、ハーンが物語の意義を込めたはずだからである。

芸者<阿貞>は終始非常に従順で、<長尾>に対する復讐も最小限である。<長尾>に会えなくなったことを嘆き悲しみ、失明しながら鬱病で亡くなってしまうときも、彼に何かを伝えたわけではなく、ひっそりと逝去している。そして自分のことを思い出させたく取った行為は<長尾>の左耳を失聴させることであつたが、これも彼からの謝罪の後には完全に回復させている。

そして、彼女の従順さが如実に現れるのは、前述の身勝手な手紙の内容を違ふことなく遂行したことである。ここで再び、その手紙の内容に触れると、

且ツ翰ヲ書シ曰ク余盟ニ負クハ己ムコトヲ得（ザル）ヲ以テナリ。卿若シ尚ホ余ヲ慕フコト有ラハ。願クハ再生シテ盟ヲ尋ケ。然レドモ余年老ヘ気衰フ。或ハ魂ヲ容貌卿ニ肖タル者ニ憑託セヨ。今世復タ前縁ヲ果スコト有ラン。我レ今マ子無シ。幸ニ妾（ト）為（ス）コトヲ得テ。一子ヲ生マバ。我ノ願亦足レリ<sup>320</sup>。

と、彼女が死に至るまでの苦しみに同情し謝罪することは一切なく、（父のせいで）やむを得ず約束を守ることができなかつたと弁解し、未だに自分のことを思慕しているのなら生まれ変わり、約束を果たせと指示している。しかも自分は年老いているから、あまり長い時間は待てない（彼女が生まれ変わり、結婚できるまでの歳月を待つことはできない）ので、他の女を犠牲にしてでもできるだけ早く再会できるようにしろという。ここでいう「待てない」の意味は、<阿貞>に息子を産ませるといふ思惑においてである。早く再会し、子どもを産ませれば、<阿貞>の恋心を利用し「イエの存続」という利益を得られるというあまりにも自分本位な謝罪文である。

<sup>320</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）368-369 頁。

しかし、彼女はこの謝罪文を受け入れ、彼のすべての指示に従うのである。＜長尾＞が自分を受け入れられなかったのは彼の父の存在のせいだと知り、再会までの段階で父を亡き者にしている。そして、指示通り＜貞＞という婢に移った。時間的な計算をすると、＜長尾＞が＜阿貞＞の存在を思い出し、手紙を書いたのが40歳のときで、3年の間に父を亡くし、十三回忌の後の再会であるから、54歳か55歳の時に再会したということになる。もし、手紙の後、＜阿貞＞が生まれ変わり17歳で再会することを選択していたら、＜長尾＞は60歳になっている。彼女は「最短で＜長尾＞に会う」ということに全力を尽くした。＜阿貞＞が唯一、怖ろしい印象を与えるのは、以下の場面である。

婢生ノ手ヲ捕テ嫣然トシテ曰ク。君貞ヲ忘ルコト無（キ）ヤ否ヤ。生驚テ曰ク汝ハ阿貞ノ再生スル者カ。曰ク君ノ誓言ヲ信シテ。君ノ帰郷を待ツ。凶ラズ故病再ビ起リ。遂ニ怨ヲ吞テ亡セリ。一念滅セズ。往テ君身ヲ脳マス。後君ノ書翰ヲ得テ。再生ヲ俟タズ。此女ニ体ヲ借テ以テ前縁ヲ果サント欲ス。君約ヲ爽ヘズ。速ニ相伴ヒ去レ。婢妾（ト）為ルヲ厭ハザルナリ。言ヒ訖テ悶絶。気脈断ント欲ス。生急ニ水ヲ与ヘ藥ヲ啣マシム。少頃アリテ驀然（サムル）トシテ甦ス<sup>321</sup>。

ここで少々怖ろしいのは、恨み辛みを「嫣然トシテ」語ったということであろう。美しい微笑みと共に、裏切りに対する彼女の怨みを語られ、彼女が彼の耳を聞こえなくさせたのだという真実を聞かされるのはそれなりに不気味な場面である。しかし、＜長尾＞は「汝ハ阿貞ノ再生スル者カ」と驚きながらも会話をしているし、悶絶した＜貞＞を冷静に正確に救助している。見方によれば、この「嫣然」は、ハーンが見出した日本人特有の微笑みであり、悪意はなく、相手を思いやることからきているものであると見ることができる。そして、彼女の発言も、＜長尾＞を責めたてているというよりは、これまでの流れを彼に丁寧に説明しているとすら読み取れるのである。彼女は、＜長尾＞の指示に従ってこのような行為をし、本妻のいる＜長尾＞の妾にしてくださいと願う。

さらに、彼女の従順さ、温厚さは最後まで続いていく。

生携へ帰テ之ヲ他室ニ置ク。幾モ無クシテ男ヲ挙ク。生ノ妻子無（キ）ヲ以テ。之ヲ愛スルコト己ノ出ノ如シ。又貞ヲ愛スルコト妹ノ如シ。貞長スルニ及ンテ言語挙動。

<sup>321</sup> 小泉八雲、前掲（註240）369頁。

毫モ阿貞ニ異ナルコト無（シ）。数年ノ後。妻病ヲ以テ歿ス。死ニ臨シテ生ニ謂テ曰ク。貞性温厚謹直。妾死スルノ後。請フ貞ヲ以テ継妻ト為セ。他人ヲ娶ルコト勿レト。是ニ於テ貞妻ト為ル<sup>322</sup>。

<長尾>が彼女を連れて、江戸へ戻り、別室に彼女をおいて間もなく、彼女は彼が望んだように男の子を産む。そして本妻と彼との間を引き裂くようなことはせず、柔和な態度で夫婦に接するのである。だからこそ、妾の子供である男児は、「己ノ出ノ如」く夫婦から溺愛され、彼女自身も本妻から「妹ノ如」く接してもらっている。最終的に<長尾>が<貞>を妻とするのも、本妻の遺言があったからであろう。彼女は、<長尾>のために生まれ変わり、<長尾>の欲望を満たし、嫉妬で家庭を崩壊することなく、彼に幸せな人生を提供している。

### 3-2. <長尾>の人生を操る存在—魔力的<お貞>—

一方の<お貞>はというと、物語のすべての展開において主導権を握っている人物である。<阿貞>が<長尾>の指示に従ったのに対し、<お貞>は死にゆく自分が生まれ変わることを知っていた、言い換えれば、強い執念で生まれ変わってみせることを<長尾>へあらかじめ伝えている。ここで、<お貞>の言葉のみを拾ってみよう。

「わたしどもはこの世でまたお会いするよう運命づけられている、と信じているのでございます——たといこの体が明日埋葬されようともでございます」

「左様でございます。この世で——あなた様の今生のうちに、またお目にかかれるのでございます、おしたわしい長尾様……ただ、本当にあなた様がお望みならばでございますよ。ただ、そうなるためには、もう一度女の子に生まれて一人前の女にまで育たなければなりません。そのためにはあなた様はお待ちにならなければいけません。十五年か、十六年でございましょうか。これは長い年月でございます……でもあなた様はまだ十九歳でございますものね……」

「でもあなた様がおいやでない限り、わたしはあなた様のもとへ帰って参ります。それはもう必ずでございます。間違いございません……どうかこのわたしの言葉を覚えておいてくださいまし」

<sup>322</sup> 小泉八雲、前掲（註 240） 370 頁。

彼女の言葉は、それが繰り返される毎に確信を増している。「運命を信じている」という柔らかな表現から、最終的には、必ず、間違いなく帰ってくるから、私の言葉を覚えておけとまで言うのである。これは単に運命に身をゆだねる者の物言いではなく、死にゆく自分の運命を何としてでも変えてみせるという強い執念と覚悟が表れているとみてよいだろう。そして前述の如く、粛々と<長尾>の家族を殺し、家と仕事を奪い、伊香保の温泉旅館でそつなく再会を果たすのである。そして、このような成り行きになった理由を<長尾>の行為へと結びつけ、次のように述べる。

「わたしの名はお貞と申します。あなた様はわたしのいいなづけの夫、越後の長尾杏生さまでいらっしゃいます。十七年前、わたしは新潟で死にました。それからあなた様はわたしが女の姿をしてこの世に戻って来れるならばわたしを娶ると誓いを立ててくださいました。その誓いの言葉に判を捺して封をし、仏壇の中の私の名前が記された位牌の脇に置いてくださいました。それゆえ戻って参りましたのでございます……」

(下線は筆者、34-35 頁、原文[34])

これは、彼女がそれまでしてきた悪行が、全て<長尾>の誓いに因るものと暗に伝えているといえよう。彼女の魔力ともいえる能力は、単に物事を思うがままに遂行できるだけでなく、その因果の帳尻を合わせることに抜かりがないことから見ることができ。実は、終始彼女が全てをコントロールしていたにも関わらず、<長尾>と、この物語を一読する者にはまるで<阿貞>の如く、<長尾>への一途な愛を貫く健気な女性として映るのである。

## 第七章 男の裏切りへの復讐—「和解」(1900)の裏面にあるもの—

### 第一節 男の柔和化の意義

「和解」*The Reconciliation*は『影』*shadowings*に収録された作品で、原話は「亡妻霊値\_旧夫語\_」であるとされている。これは『今昔物語集』(12世紀前半)に収められている物語である<sup>323</sup>。また、ハーンがこの物語を再話するよりも前、1768年には上田秋成によって「浅茅が宿」という作品に描き直されている。そしてこの物語は『雨月物語』(1776)に収録されている。したがって、ハーンの「和解」には原話である「亡妻霊値\_旧夫語\_」のみならず、「浅茅が宿」もまた影響を与えた可能性があるのである<sup>324</sup>。そこで、ここでは「浅茅が宿」も念頭に入れつつ、「和解」と「亡妻霊値\_旧夫語\_」を比較していきたい。

これらの物語は、美人で気立てのよい妻を離縁し別の女性と結婚した夫が、元の妻が恋しくなり、しばらくしてその妻の元へ戻り一夜を過ごす。すると翌朝にはその妻が白骨化した死体であったことに気付くというのがそのあらすじである。

ところで、ハーンの再話作品の中で、女性が悪者になる物語はほぼ皆無であると言っても差支えない。一方、男性がだらしなかつたり、自己中心的であつたりすることは決して少なくない。男性のそういった性格に女性が一途に従う、或いは勇気ある行為で男性を諷める物語は、これまでも見てきた通りである。こういった点から考えると、ここで扱う「和解」は男性の描かれ方が特別であるようなイメージを抱く。なぜならば再話の過程において、男性の自己中心的、或いは奔放な性格がかなり軽減され、一度の過ちを犯しながらも妻への一途な思いを持ち続けた男性として描き直されているからである。ここでは、こうした書き換えがどのような意味につながっているのかを考察していきたい。そして、これまで「和解」を単なる和解の物語としてきた論説に対し、この物語の裏に込められた「復讐」の影についても言及したい。

<sup>323</sup> セツがハーンに読んで聞かせたのは、宇治大納言隆国卿撰井澤節考訂纂註『今昔物語』(辻本尚古堂、1897)所収の「亡妻霊値旧夫語」であった。これは、現在富山大学のヘルン文庫に所蔵されている。

<sup>324</sup> 門田守氏は、『和解』における再話の方法—ラフカディオ・ハーンが望んだ夫婦愛の姿—の中で「和解」、「亡妻霊値\_旧夫語\_」、「浅茅が宿」の関係について次のように言及している。ハーンによる「和解」の執筆に関連した詳しい書誌学的な関係をまとめると、次のようになる。(1)12世紀前半の『今昔物語集』における原話→辻本尚古堂版の『今昔物語』の「亡妻霊値旧夫語」に収録→セツによる朗読を介し、ハーンの「和解」執筆に直接影響した。(2)12世紀前半の『今昔物語集』における原話→上田秋成による『雨月物語』中の「浅茅が宿」に書き換えられる→セツはこれを夫に朗読した可能性があり。(3)12世紀前半の『今昔物語集』における原話→岩波文庫の『今昔物語集』中の「人の妻、死にて後旧の夫に会へる語」などにおいて今日まで伝えられる。門田守『和解』における再話の方法—ラフカディオ・ハーンが望んだ夫婦愛の姿—『奈良教育大学紀要 人文・社会科学 第54巻 第1号』(奈良教育大学、2005)202頁。

### 1-1. <先妻>の放棄と思慕

まず、原話「亡妻霊値」旧夫語」と再話「和解」がどのように異なっているか、前述した「男性の描かれ方の変化」について詳しく見てみたい。はじめに、冒頭部分<夫>が<先妻>と離縁する場面から見てみよう。以下は原話である。

今はむかし。京にありける侍<sup>さむらい</sup>身をまづしくて有つくかたもなかりしが。知たる人ある国<sup>かみ</sup>の守になりてくださるを頼みて。其国にくだらんとしけるが。これまで眞<sup>まこと</sup>したりける妻は若くて。かたち心ばえもらうたかりしかども。まづしさのあまりにかれを去て。たよりある侍のむすめ<sup>めと</sup>を娶りて。それを相具して国にくだりけり<sup>325</sup>。

京都に住んでいた侍である<夫>は貧しく、生活する方法がなかったので、知人の伝手を頼って田舎で仕事をすることにした。しかし、それまでその貧しさを共に耐え忍んできた若い<先妻>が、容貌も心もいじらしく可憐であったにも関わらず、彼は貧しいことを理由に離縁し、裕福な家の娘と再婚し、田舎へと向かう。この場面は再話では以下のようにになっている。

京都に年若い侍<sup>さむらい</sup>がいた。仕えていた君主<sup>れいらく</sup>が零落し、貧窮<sup>ひんきゆう</sup>にあえぐ身となったので、やむなく家を棄て、僻遠<sup>へきえん</sup>の地の国守<sup>くにのかみ</sup>のもとで勤める仕儀<sup>しぎ</sup>となった。都を立つ前に、侍は妻を離縁した。気立ても器量もいい女であったが、別の女と一緒にいる方が出世<sup>てつる</sup>の手蔓<sup>てづる</sup>もあるかと思つたのである。それで多少は由緒<sup>ゆいしよ</sup>のある家の女を娶ると、一緒に任国へ下つた<sup>326</sup>。

(153 頁、原文[35])

このように、この<夫>は、「仕えていた君主が零落したため」貧窮にあえぐようになってしまったということになっている。つまり彼の怠惰によるものではなく<sup>327</sup>、君主の零落に伴い、自らも貧しい生活をしなければならなくなったというのである。江戸時代、「臣の君

<sup>325</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）416 頁。

<sup>326</sup> 小泉八雲、同上、153 頁。以下、「和解」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

<sup>327</sup> 「浅茅が宿」では男が怠惰であったということになっている。

に対する絶対的な服従、無限の忠誠が武士社会の最高の原理<sup>328</sup>」であり、下級武士たちは雇われている主君に全てを依存し生活していた。それゆえ、君主が零落すればそれに仕えている武士たちもまた、同じ道を辿らざるを得ないのである。そしてそれでも身を立てようと、僻遠へと向かうことにする。そして自分の人生を何とかやり直そうと、一念発起し、出世の手蔓が見込める、由緒のある家の女と一緒にすることを選んだ。ここには、〈夫〉が〈先妻〉を捨てるに至った経緯が詳しく述べられ、それが彼の気まぐれによるものではないということが示されている。この冒頭部分の変更、一見〈夫〉の行為を弁明しているかのような描写から読み取れることは何だろうか。まず、原典が12世紀前半に書かれた<sup>329</sup>作品であること、すなわち夫にとっての妻は取り替え可能な存在にすぎず、夫が状況、感情に合わせてそれを離縁することは当然のことであり説明する必要がなかったということがあるだろう。一方の再話は、読者が19世紀に生きる西洋人であったことから、離縁に際してそれなりの説明が必要であった。それでもやはり、〈夫〉の身勝手さは軽減されているとは言い難いが、それでも人生を立て直そうとする侍の姿として読者に映っているかもしれない。

ところで、この再話作品に影響を与えたとされている「浅茅が宿」では〈夫〉が〈先妻〉を離縁し別の女と再婚するという場面はない<sup>330</sup>。ここでは、離縁しないまま男が去っていくのである。しかしながらハーンはこの場面を原話に従っている。すなわち、〈先妻〉は〈夫〉と貧しさを分かち合ってきたにも関わらず、結果的には捨てられているという事実は変わらない。ハーンにとって、「離縁と再婚」すなわち、〈夫〉が〈先妻〉を捨て、〈後妻〉と共に任国へ向かうという流れにこだわった。〈夫〉「裏切り」は変えることのできない物語の中核であったということになる。

さらに、この文脈で〈夫〉の性格は、離縁した後の様子から大きく印象を変えていく。ここからは、〈夫〉が〈先妻〉をどのように懐かしむようになるのかという点を比較しながら見てみたい。まず原話であるが、〈夫〉の〈先妻〉への思いは端的に示されているに過ぎず、それにより心的というよりも肉体的な欲求という印象が拭えない。

<sup>328</sup> 井上清、前掲（註298）116頁。

<sup>329</sup> 門田守、前掲（註324）201頁。

<sup>330</sup> この物語では、農業を怠け続け貧しくなった〈勝四郎〉（夫）が家を再興するため、京都で足利染の絹を交易する商売をすることになる。美しく気立ても良い〈宮木〉（妻）はその計画に反対しようとしたが、どうしようもなく、結局夫と離れたくないという別れの気持ちを語る。しかしそれに対して〈勝四郎〉はその年の秋には帰ってくると約束し、去っていくのである。すなわち、〈宮木〉と離縁することも、新しい妻を迎えるということもない。

かくて月日たつにしたがひて。京に捨てくだりにしもとの妻が事。わりなく恋しくて。にはかに見まほしくおぼえければ。疾とくのぼりてかれを見はや。いかにしてかあるらんと身をそぐごとくなりしかば。よろづ心すごくて過しける程に。月日も過にんて任もおはりぬれば。守の共としてのぼりけり。おとこ思ひけるは。我よしなくもとの妻を去けり。京にかへりのぼらば。やがて行てすまんと思ひて。上るやおそきと。後の妻をは家にやりて。その身は旅装束たびしやうぞくのまゝにて<sup>331</sup>。

このように月日が過ぎるとともに、〈夫〉は甚だしく、耐え難く〈先妻〉のことが恋しくなってくる。そしてすぐに京都へ戻り、彼女に会いたくなる。そして「身をそぐ」ような肉体的苦痛を味わうのである。こういった描写について、門田守氏が「この男が腹の底から先妻を追い求めている性欲の強さを感じさせる<sup>332</sup>」と述べているように、或いは平川祐弘氏が「原初的な本能的な感情<sup>333</sup>」と表しているように、精神的なものというよりもむしろ、肉体的な欲求であるという印象が強い。

一方の再話では、ハーンの繊細な描写により〈夫〉が精神的に〈先妻〉を求めるようになると考えられている。この点について、同場面がいかに描き直されているか、全文を引いて考えてみよう。

しかしそれは若気わかげのいたりであった。身を切るような生活かたによい不如意に心迷って女の情愛じょうあいの真価しんかを解さなかったからである。気安く最初の妻を棄てたものの、再婚の方は一向にうまく行かなかつた。二度目の妻は利己的で性格もけわしかつた。(中略)しかも自分がいまなお好いているのは元の妻であつて、二度目の妻をととてもああは愛することは出来ない、とさとつた。そうなる自分がいかに恩知らずの悪者であつたと思えてたまらなくなつた。悪い事をしたと思ふ気持ちはやがて深い後悔こうかいの念に化し、しまいには気持ちが安らぐ日々もなくなつた。自分が酷ひどい目にあわせた女のこと——女の優しいものいい、にこやかな顔付、上品で可愛い振舞、非の打ちどころのない辛抱強さ——そうしたことが始終頭しじゆうに浮かんで離れなかつた。時々夢に機はたを織っている女

<sup>331</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）416 頁。

<sup>332</sup> 門田守、前掲（註 324）203 頁。

<sup>333</sup> 平川祐弘『小泉八雲とカミガミの世界』（文藝春秋、1988）144 頁。

の姿が浮かんだ。二人の生活が不如意の間、妻は日夜そうして働いて助けてくれた。自分が妻を置きざりにしてきたあのもの淋しい小部屋で、妻がただ一人坐って、涙に濡れた頬をすりきれた袂でおおうて泣いている姿も夢に浮かんだ。昼間、国守の館に伺候している間も、思い出されるのはその妻の姿である。(中略)大丈夫、妻が別の男を夫に迎えたりするはずはない、必ずや自分を許してくれる。それでもし都へ帰り着いたら、いちはやく妻を見つけ出し、許しを乞い、自分のもとへ連れ戻し、男として出来る限りの償いをしようと心中ひそかに決めた。しかしそうこうする間にも歳月は過ぎて行った。

国守の任期もついに終り、仕えていた侍もいまは自由の身となった。

「さあ、好きな女のもとへ戻るぞ」

と男は自分に誓った、

「あの女を離縁するなどなんという酷い、馬鹿な真似をしたことか」

二番目の妻との間には子供がなかったので、親もとへ返すこととし、侍は都をみざして急いだ。都に着くと、旅装束を改めもせず、昔の妻の居所へまっすぐ行った。

(下線は筆者、153-154 頁、原文[36])

原話ではほんのわずかな部分が、これほどまでに膨らんでいる。この部分から、まず<夫>は自分の身勝手な行為が、若気の至りであったと自分の行いを深く後悔していることが分かる。そして次第に<先妻>を求めていることが詳細に描写されている。「優しいものいい」、「にこやかな顔付」、「上品で可愛い振舞」、「非の打ちどころのない辛抱強さ」そして、「機を織っている女の姿」こういった細かなイメージが、彼と<先妻>とが過ごした思い出を構築し、その中に<先妻>の影を追うようになるのである。しかし、このような描写が<夫>の肉欲的な思いを、純粹で精神的な思いへつなげるという意味を持っているとは言い難い。というよりもむしろ、一見、ハーンがロマンティックな描写によって夫の欲求を美しく飾り立てているように見えても、実はその中にある男の身勝手さや欲望が決して失われてはいないということに留意すべきである。

これを考えるとき、原話にはない「<後妻>の性悪さ」が新たに付け加えられていることにも注目する必要があるだろう。<後妻>が悪い人物で、結婚生活が破綻していたことが<先妻>の大切さに気付かせる。つまり、裕福な家の娘と結婚したものの、彼女の性格の悪さから、彼は金よりも大切なものに気付くというのである。この点について、門田守

氏は、以下のように言及している。

この後妻はわがままで贅沢三昧のひどい女であった。彼女は男が離縁しても当然と思えるキャラクターを付与されている。この後妻に利己的で厳しい性格の女のイメージを与えている。(中略)ところが、二つの日本の原話では、この後妻にはそのようなマイナスのイメージが与えられていないことを見逃してはならない。(中略)後妻への悪口はない。男は勝手に後妻を気に入らなくなり、捨てたと解釈しても差し支えない。ひょっとしたら、後妻も甲斐甲斐しい妻であった可能性も残されている。すべては男が先妻を恋しくなっただけのことである。それゆえ、後妻も彼を豊かにした後は捨てられてしまった。男には心底人を愛するだけの情の深さはないのだ。先に見たように、この点は性欲や本能で先妻を追い求めていた男の態度とうまく符合する<sup>334</sup>。

このように、原話において<夫>は最初、貧しくても美しい妻と過ごし、金が必要になれば裕福な女を選び、そしてそれがなくなれば今度はその女を捨て、美しい女へと戻る。つまり<夫>は欲望のまま、気ままに女を利用する人物として徹底的に悪人に仕立てられているのだと門田氏は指摘している。

これに従えば、一方の再話では<後妻>を悪女とすることで<夫>はそういった人物になることから逃れることができているということになる。そして<後妻>は<先妻>との比較対象として、また<夫>を自己中心的な人物ではないという根拠として存在しているということになる。しかし果たして男女の仲をそのように都合よく解釈することができるのだろうか。すなわち二度目の結婚の失敗を<後妻>の性悪さのみに結論付けることが、ハーンが本当に意図したところなのだろうか。

確かに<後妻>が「利己的で性格もけわしかった」ことは結婚生活を送る上で障害となったかもしれない。しかし彼女がなぜ「利己的」になったのか、「けわしさ」を<夫>へと示したのかといった<後妻>側からの描写はない。或いは「出世への手蔓」を目的として結婚したという<夫>の態度が、彼女を苦しめつづけていたという可能性もあるだろう。いずれにせよ、ここではあくまでも<夫>側からの視点に徹することで女は男の判断に従わざるを得ない境遇にあるのだとわかる。<後妻>は貧しい侍と結婚させられ、わずかな時間を共に過ごしたのち、「二度目の妻は利己的で性格もけわしかった」と、たったこれだ

---

<sup>334</sup> 門田守、前掲(註324)204頁。

けのことで離縁されてしまう存在に過ぎない。そして〈夫〉は最終的に「自分がいまなお好いているのは元の妻であって、二度目の妻をとってもああは愛することは出来ない」と、結婚という一つの社会的規範を愛欲で再び壊そうとしているのである。

さらに、原話では〈夫〉が〈後妻〉を離縁する際、「後の妻をは家にやりて」と実家に送り返した事実のみを述べているのに対し、再話では「二番目の妻の間には子供がなかったので、親もとへ返すこととし……」と、子どもについて言及している。これについて門田氏は西洋の読者についても触れ以下のように分析している。

結婚や離婚の状況についてや、子どものあるなしについては、きちんと説明をした方が西洋の読者には納得がいくからである。さらにハーンにすれば、二番目の妻のことはきれいさっぱり作品から捨て去った方が、男のロマンティックな気持ちに話の焦点が移っていくプロット展開の点から好ましいのである。だから、二番目の妻には子どもがいない方が彼女の痕跡を作品上から消すために好都合であったのだ<sup>335</sup>。

このように、〈後妻〉はあくまでも〈先妻〉の大切さを思い知らせる存在であり、その役割が終わればできるだけ後腐れなく、いなくなってくれる方が物語の流れ上好都合であることは間違いないだろう。したがって子どもはいないことが好ましい。そしてそれを明記したのは、門田氏の言う西洋の読者への配慮であったと見ることもできる。

しかし、この「子どもがいない」ことが当然のように「親もとへ返す」ことにつながったのには、時代的背景も考慮して捉える必要があるだろう。江戸時代の日本社会では、中国や朝鮮ほど厳格ではないにしろ、とりわけ武士階級の人間には「七去の悪」の考え方が広く知れ渡っていた。すなわち、妻たるもの七つのことを守らなければ夫に離縁されても当然というのである。そのうちの一つ、「無子（子どもができない）」に当てはまっていた〈後妻〉は、夫に去られても当然の女であったということが出来る。仮に妻がその他の面で優れた女性であったにせよ、この点だけで「悪しき」女性として夫は去ることができた。再話でも、実際には子どもの有無が離縁の原因ではないにせよ、〈夫〉はそれを建前として離縁することができたのである。

しかし、このような夫が稀に見る悪人であったのかということ、そうとは言い切れない。むしろ、こういった自分勝手に女性を扱うのが極めて一般的であったという見方すらでき

---

<sup>335</sup> 門田守、前掲（註 324）207 頁。

る。

江戸時代に離婚がどんなに多かったか、たしかな数字はむろんあろうはずもない。けれども、「女房と畳は新しいほどよい」とか、「女房は着物と同じで、何度とりかえてもよい」などといわれ、また実行され、たいていの孝子伝にあるように、親のために女房を二度離縁したとか、三度ひまをやったとか、まるで女房を離縁する回数が親孝行のものさしのような時代、「われら勝手につき」、すぐ追い出してそのあとまたいくらでも妻に来るものがあつた時代(中略)このような時代に、「合わせ物をはなれ物」で、離婚がおそるべき高さであつたことは十分に断定できる<sup>336</sup>。

井上清の指摘の通り、男たちが自分の都合に合わせ、時に孝行心を建前として女を取り替えていたというのはさほど珍しいことではなかつた。この物語の〈夫〉の場合も、実情をのぞけば、〈先妻〉への肉欲に負けた〈夫〉が、自分を出世させてくれた〈後妻〉を「利己的でけわしい」ために捨てるという身勝手さを読み取ることができる。〈夫〉はあくまでも、気ままに女を利用し、欲望のままに行動しているのである。

### 1-2. 〈夫〉の懺悔への〈先妻〉の対応

再話において、〈夫〉が表面上柔和化したように見える描写は〈先妻〉と再会した後の描写でも続いていく。原話では〈夫〉が終始優位な立場で〈先妻〉と接しているのに対し、再話では〈夫〉は〈先妻〉に許しを乞い、語りかけ、理解し合いたいという気持ちが表れている。この点について詳しく見ていこう。

頃は九月中の十日の事なれば。月もあかく夜ひやゝかに心ぐるしき程なり。家の内に入りてみれば。常に居たりし所に妻ひとり居て又人なし。妻男を見て。うらみたる気色もなく。うれしげにて。こは何とておはしつるぞ。いつ上り給ひたるぞといへば。男国にて年比思ひつる事どもをいひて。今はかくてすむべし。国より持のぼりたる物は明日とりよせん。従者などをもよぶべし。今夜まづ此由申さんとて参りつるなりといへば。妻よろこびて。年比の物語どもして。夜も更ぬれば南面の方に行てともふしたり。男爰には人なきかと問ば。女わりなき有様にて過しつれば。<sup>(ママ)</sup>さかはるゝ者も

<sup>336</sup> 井上清、前掲(註298)131頁。

なしと答つゝ。こしかた行末のことを終夜かたる程に。暁になりて。ともに寝入ぬ<sup>337</sup>。

(下線は筆者)

以上が<夫>が<先妻>に再開を果たし、彼女と語り合う場面である。この部分を読むと、<夫>が常に優位に物事を進めていることが分かる。まず、男は家に入って真っ先に妻以外の人間がないことを確認している。再婚許可証ともいわれる三行半を渡し、正式に離縁したのであろうから、<先妻>は再婚しても何ら問題ないわけだが夫はこの時点で妻が再婚していないことをほぼ確信している。そして、このことがその後の彼の態度を亭主関白的なものにしていく。

「今はかくてすむべし。国より持のぼりたる物は明日とりよせん。従者などをもよぶべし。今夜まづ此由申さんとて参りつるなり（これからはここで住もう。田舎から持ってきたものは明日届くだろう。従者たちも呼ぼう。今夜はこのことを言うためにここへ来た）」の部分はそれをよく示しているといえよう。<夫>は<先妻>が住む家に戻り、これまでのことを話した後、このように述べる。これは「この家にもう一度帰ってきてもいいか」と尋ねているわけではなく、あくまでも自分の意志で戻ってくることを決め、彼女に伝えているに過ぎない。そして、荷物やら従者やらを呼び寄せることも勝手に決めている。

ここで、夜が更け寢床につくや否や<夫>が核心的な質問をした点について注目してみよう。「爰には人なきか」である。この間について、門田守氏は以下のように述べている。

この点に関連して、男が寢床で妻を抱いて横になったときに、辻本尚古堂版では「爰には人はなきか」(142)、岩波文庫版では「此には人は無きか」(178)と男が妻に問うているのは、まず第一にこの家に使用人がいるのかいないのかを問題にしているのである。妻に寄り添う男の存在を彼が気にしていた先の場面と、この添い寝して妻に「人」の存在を聞いている場面とでは「人」の意味が違うことは自ずから明らかである。敢えて言えば、この男は妻に寢床で他に人はいないのかと問いながら、使用人のことを明示しつつ、別の恋人か亭主のことを暗示しているという穿った見方も許されるかもしれない。ともあれ、あからさまに別の男の存在を問わないことで、この侍は自らのプライドとともに妻への優位性を保っているのである<sup>338</sup>。

<sup>337</sup> 小泉八雲、前掲（註 240） 417 頁。

<sup>338</sup> 門田守、前掲（註 324） 204 頁。

筆者もこの「穿った見方」に賛同する。すなわちこの場面で<夫>が指す「人」は、単なる使用人等ではなく、「別の男」がいないことを、ほぼ確信していながらも、はっきりとさせておきたいという気持ちだったのだと読み取れる。<先妻>は気付いているのかいないのか、一人で暮らしてきたとだけ答えるに留まっている。しかしこの一言で<夫>は<先妻>が未だに自分の所有物なのだと実感するのである。

それでは、次に、以下再話の同部分である。

侍も欣然<sup>きんぜん</sup>として女の傍に坐ると、一切を打明けた。——いかばかり利己的な己の仕打を悔やんだか。お前なしに自分がどれほど惨<sup>みじ</sup>めな思いをしたか。いつもどれほどお前を慕<sup>した</sup>い偲<sup>しの</sup>んでいたか。どんなに長い間、償いをしようと、あれこれ思いをめぐらしたか。そう言いながら優しく女を撫で、幾度も繰返し女の許しを乞うた。すると女は優しく情<sup>じょう</sup>をこめて、男の心が望むままに答えた。(中略) こうしてあなた様がお訪ねくださいましただけでもう十分でございます。こうしてお目にかかれます仕合せにまさるものがあるとも思われませぬ。こうしてたとい一瞬なりとも——

「たとい一瞬なりとも！」

と男は思わず打笑い、楽しげに言った、

「いやいや、七度<sup>ななたび</sup>生れ変わろうとも一緒に、と言うてください。もしお前さまがおいやでないなら、私はいとしいお前のもとへ戻って、いつまでもいつまでも一緒に暮したい。もう二度と別れたりはいたしません。いまは資産もあれば伝手<sup>つて</sup>もある。もう貧乏に苦しめられたりはしません。明日になれば私の道具類はみなここへ運ばせましょう。下男下女も呼んでお前に仕えさせましょう。そうしてこの家を綺麗<sup>きれい</sup>に作り更えましょう……今晚は」(中略)

それから女は南に面した温かい部屋へ男を案内した。昔、二人が婚礼を挙げ床入り<sup>とこい</sup>をした部屋である。女が男のために布団を敷きはじめた時、男はたずねた、

「この家には手伝いをする者は誰もいないのか」

「はい、おりませぬ」

と女は朗らかに笑いながら答えた、

「それだけのゆとりがございませんでした。それでずっとひとりで暮らしてまいりました」

「明日は大勢召使いが来る」

と男は言った、

(下線は筆者、155-157 頁、原文[37])

このように、<夫>は男のプライドを捨て、自分が利己的であったことを認め、自分が<先妻>なしで非常に惨めであったと告げている。そして、愛の深さをつたえ、優しく彼女をなで、何度も繰返し彼女の許しを乞うのである。さらに、自分が再び彼女と住むことを独断することなく「もしお前さまがおいやでないなら、私はいとしいお前のもとへ戻って、いつまでもいつまでも一緒に暮したい」と最終的な判断は彼女の意志に任せるといった言い回しをしている。あくまでも<夫>は許してもらう側でい続けているのである。ここで、その低姿勢な<夫>に<先妻>は、理想的な対応をし、優しい言葉をかけ、彼の謝罪を受け入れているように見える。しかし、ここでの「Have you no one in the house to help you? (この家には手伝いをする者は誰もいないのか)」を文字通り「手伝いをする者」と読むのは、やはり無理があるだろう。二人が婚礼を挙げ、床入りをした温かい部屋へ導かれ、<先妻>が布団を敷いているときにした質問であったことを考慮すれば、これもまた当然「別の男」の存在を聞いているに外ならない。そして彼女は「ずっとひとりで暮らしてまいりました」という答えをしている。

ここは結末から見ると非常に重要な部分である。低姿勢を貫いた<夫>に対し、彼が望む通りに返事をし、優しい言葉をかけ、彼を許しているように見える彼女の対応、そして彼が去ったあとにずっと一人で生活していたという優しい嘘は、この物語を一見、タイトル通り「和解」へと導いているかのように見えるだろう。こここそ、ハーンが仕掛けた「どんでん返し」へとつながる部分なのである。

## 第二節 <先妻>の幽霊、その意味—「和解した」という見方—

この疑問について、物語の結末から考えていこう。原話も再話も、結末の大筋は同じで、<先妻>と共に夜を過ごした<夫>が、翌朝干からびた死人(先妻)を見つけ、驚き、恐れおののく。そして隣人から彼女はしばらく前に死んでしまったのだということを知られるのである。しかしここでもなお小さな変更点があり、それが最終的な結論を異なるものへと変えていることに注目しなければならない。

第一に、〈先妻〉がいつ亡くなったかということである。原話では、〈夫〉が〈先妻〉を再訪した年の夏ということになっている。二人が再会したのは9月10日のことであるから、ほんの1~2か月前までは彼女が生きていたということになる。〈夫〉が彼女を捨ててから数年の間、彼女は生きていたということになる。

一方の再話では、〈夫〉が〈先妻〉を離縁し、〈後妻〉と都を離れた年の9月10日ということになっている。そしてこれは彼が〈先妻〉を訪れた日と同月同日なのである。彼は9月10日に〈先妻〉から去り、また同じ日に戻ってきたのである。それはさておき、原話では〈先妻〉が数年生きていたのに対し、再話では離縁後まもなく亡くなったということに注目する必要があるだろう。〈先妻〉は離縁された後、彼が都を離れるまでの間に思い悩み、病に伏し、他に頼るところもないまま命を絶やしてしまう。孤独である上に、命のほかなさが強調されている。

次に、〈先妻〉が既に死んだのだという事実、言い換えれば自分は死体と一夜を共にしたのだということを知らされた〈夫〉が、どのような反応を見せるかという点にも注目したい。以下、まずは原話を引いてみる。

妻を見るに、<sup>かたしかた</sup>枯々としたる死人なり。こはいかにとおそろしければ。起走って躍り下て。僻目か<sup>すいかんぼかま</sup>と見れ共うたがひなき死人なり。其時に水干袴<sup>となり</sup>を着て。隣の小家<sup>となり</sup>に行て。今はじめて尋るやうにて。此隣の人はいかゞ成しぞ。家に人はなきやと問ければ。其人は年比の男の去て。遠国にくたりしを思ひ入てなげきし程に。病つきてありけれども。いらふ人もなくて。此夏うせ侍りぬ。死骸<sup>しがい</sup>を<sup>ママ</sup>を取て捨るものもなければ。いまだ有なりといひしかば。男いよ〜おそれてにげ帰けり。実になにおそろしかりなん<sup>339</sup>。

このように、〈先妻〉と共に夜を過ごした〈夫〉は、翌朝彼女が干からびた死人であることに驚き、恐れおののくこととなる。そして、隣人に尋ねると、彼女がその年の夏に孤独死したのだということを知られる。自分が死体と一夜を共にしたことを知ると、〈夫〉はさらに恐ろしくなり、逃げていった。彼はここで再び〈先妻〉を捨てるのである。

一方の再話ではどのようになっているのだろうか。

眼を覚ました時、日光は雨戸の隙<sup>すき</sup>から燦々<sup>さんさん</sup>とさしこんでいた。驚いたことに自分は

<sup>339</sup> 小泉八雲、前掲（註240）417頁。

崩れかかった床の剥出しの板の上に寝ている。さては夢であったか、と思ったがいや違う女はそこにて、まだ寝ている……男は女の方に身を屈めて、覗いて、思わず金切声で叫んだ。寝ている女に顔がない。いま目の前に横たわるのは、葬式用の布でくるまれた女の死骸——朽ちはてた死骸であった。骸骨と長い纏れた黒髪とを除けば、ほとんど何も残っていない死骸であった。

.....

男はぞっとして、身震いしながら、白日の下、ゆっくり起きあがった。だが氷のように冷たい恐怖は次第になんとも耐えがたい絶望、残酷な苦痛へと変っていった。男はそれでもなお一縷の迷いの影にすがりついた。己を嘲笑う疑惑の影であった。この近辺は不案内であるかのようなふりをすると、妻がかつて暮らしていた家へ行く道を思いきってたずねてみた。

「あの家には誰もいませんよ」

と道を聞かれた人は答えた、

「何年か前に都落ちした侍の奥さんの家でした。お侍は都を去る前に奥さんを離縁して、ほかの女と一緒にになったんだそうです。後に残された奥さんはそれを思い悩み、思い焦がれてついに病気になりました。京都には身内の人はひとりもいなかった。世話を焼いてくれる人は誰もいなかった。それでその年の秋に亡くなりました。確か九月の十日でした……」

(158-159 頁、原文[38])

このように、隣人の言葉でこの物語は終わっている。したがってこの言葉を聞いた後に、<夫>がどのような行為をしたのかについては、読者に投げかけられる形となっているが、しかし物語の流れは、原話とは異なった結末へ結びつくものとなっている。それはまず、死体の詳細な描写、つまり<先妻>が「骸骨と長い纏れた黒髪とを除けば、ほとんど何も残っていない死骸」であったということである。これは<夫>が恐れながらも<先妻>の状態を細かく見ているということを表している。死体を見てすぐに「起走って躍り下」りる原話の<夫>とは違い、再話の<夫>はどこか冷静さを保ちつつ、彼の愛おしい妻の変

わり果てた姿を凝視する<sup>340</sup>。

そして、「ぞっとして、身震いしながら」も、その単なる恐怖が「次第になんとも耐えがたい絶望、残酷な苦痛」へと変化していったことが明記されている。〈夫〉は死体に脅かされた恐怖心よりも、〈先妻〉を完全に失ってしまったという絶望を感じているのである。そしてそれは自分が彼女を捨て去ったからだという自責の念—ここでいう「残酷な苦痛」—へつながっていく。

しかも男はそのような状況でもなお、一筋の希望を捨てない。「己を嘲笑う疑惑の影」、すなわち侍たるものが幽霊を信じるなど決してあってはならないという気持ち、そして何よりも妻はやはり生きているのではないかという望みである。しかし、それは隣人の言葉によって完全に否定される。そして、その言葉の後に〈夫〉がどのように行動したか、それは原話とは異なっていると考えるのが自然だろう。〈夫〉はここで「おそれてにげ帰ったとは考えにくい。絶望にうなだれ、かつてない孤独の淵に立たされたと考えられるのである。

この部分の書き換えは、物語の印象を大きく変えている。〈夫〉が単に幽霊を怖がり、逃げ惑うのか、〈先妻〉の影に執着し絶望を感じるのかという違いは物語の意義を変えていると言っても過言ではないだろう。我々は、この違いに何を読み取ることができるだろうか。

妻を離縁し別の女性と結婚した夫が、元の妻が恋しくなり、妻の元へ戻り一夜を過ごす。そして翌朝に、その妻が白骨化した死体であったことに気付く。この物語で幽霊となって〈夫〉と一夜を過ごした〈先妻〉の行動は、復讐だったのかどうか、これが両物語の結末であり、読者が読み解くべき物語の意味であり、またハーンによる書き換えの意図が集約された部分でもある。

これまでの研究では〈夫〉と〈先妻〉が和解するため、ハーンは多くの点を変更したのだという見方が強かった。例えば、門田守氏は〈夫〉の性格の変化に注目し、以下のように分析している。

---

<sup>340</sup> これについて門田守氏は次のように言及している。「日本の原話と同じく、『和解』においても侍はこの妻の有様を見て肝を潰して驚く。ただし、原話と再話では決定的な違いがある。原話では男は驚いて妻の死骸から逃げ出してしまうのである。特に、岩波文庫版では『衣を搔抱て起走て』(179)とあるように、ほとんど男は裸体であったことがわかる。原話での男の不様さは見苦しい。これに対し、『和解』では男は妻の遺体をしげしげと眺めて、自分の留守中に何が起こったのかを確認しているようだ。彼は妻の死という事実をしっかりと見つめ、自分の目に焼きつけているのである。」門田守、前掲(註324) 208頁。

しかしながら、これは夫に対する妻の復讐であろうか。夫は最後に妻に騙されたと思うであろうか。妻による復讐談としてこの件を読むことは極めて難しいと思う。ハーンは愚かにも妻を捨てた夫を弁護する形で語りを進めてきたことをここで思い起こすべきである。二度目の妻をもらってすぐに彼は反省しきりであったし、思い出すことは先妻とすごした日々のことばかりであった。廃屋と化したわが家に帰ったときも、侘びしさや悲しさを感じる間もなく、彼は一直線に妻の部屋へと向かった。(中略)「七度生まれ変わっても一緒にいたい」と言っておくれと妻に求め、自身は「何度でもお前の許で一緒に暮らしに戻って来る」と宣言する男は、女から男への復讐の相手としては相応しからぬほど真摯なキャラクターをもっている。(中略)

しかしながら、ハーンの「和解」では完全に男と女は和解し、互いを許し合っていることを文脈を追いつつ、原話との比較の中で論じた。彼ら夫婦の真摯な相手を思いやる心にこそ、ハーンは価値を置いたのであった。ハーンはこの再話物語の中で、感情によって繋がった夫婦愛の世界を構築したかったのである。一時の気の迷いによっては切り離すことができない夫婦愛をこそ、ハーンは過度のロマン主義化の危険を冒して示そうとしたのであった<sup>341</sup>。

(下線は筆者)

すなわち、ハーンの再話においては原話にある「復讐」やら「性への妄執」やらといったことがかき消され、一度の過ちを犯しながらも、真実の愛に気付いた<夫>と、彼を変わず愛し続け再会を果たした<先妻>の切りがたい愛情へと変化しているというのである。その美しい二人の愛の描写のために、<夫>は良くなったのである。

さらに平川祐弘氏は、英文の意味を忠実に解釈しつつ以下のように述べている。

ところでこのように分析してみると、男は依然として女に執着している。いいかえると男と女の間に和解が成り立った一男はそう信じ、その女をひとしおいとおしく思うがゆえに、昨夜の夢ともいふべき「一縷の迷いの影」になおすがりついたのでありましょう。

<sup>341</sup> 門田守、前掲(註324)210頁。

いまその種の男女の和解説は取らず、かりに doubt を、さては女の甘言は自分を欺し、自分に残酷な幻滅と絶望を味わわせるためのものであったか、と疑う男の「疑念」であったと仮定します。だがそうした場合でも男はその疑念の影に未練がましくすがりつくであろうか。この「すがりつく」clutch at という動詞にこめられた感情やその心理上の態度から推察すると、女の復讐説という解釈にはやはり無理があるように思われます<sup>342</sup>。

(下線は筆者)

さらに、そこには語り手としてのセツの存在があり、「ハーンは妻が侍の帰宅を心から嬉しく思い、たとい一夜なりとも再会できたことを喜ぶ気持の真実を、朗読する節子の音声から必ずや理解した<sup>343</sup>」とし、<先妻>に妻セツの影を重ね合わせ美しい物語へと書き換えたのだという。

原話である「亡妻霊値\_旧夫語\_」で<夫>は徹底的に薄情で短慮な人物として描かれ、彼が悪ければ悪いほど、<先妻>の復讐への正当性が増す。悪いことをすれば、そこにそれなりの報いがあるのは当然の成り行きである<sup>344</sup>。<先妻>が幽霊として現れ、涼しい顔をして一夜を過ごし、翌朝<夫>は恐怖に身を震わせることになる。原話において<先妻>は<夫>へ復讐をしたと見ることができる。しかし、これまで見てきたような<夫>の柔和化或いは善良化ともいえる書き換えは、全て原話にある「<先妻>の行為のもつ意味」を異なったものへと変えるための作業であったのだという。<夫>を復讐するに値しない、或いは寛恕するに値する人物であると描き直すことで、この物語全体の意味を変更した。

<sup>342</sup> 平川祐弘、前掲（註 333）156 頁。

<sup>343</sup> 平川祐弘、同上、157 頁。

<sup>344</sup> 関田守氏は、この原話における妻の行為について、次のように言及している。「要するに、女の亡霊が出てきた理由は彼女の男への断ち切りがたい恋慕心である。（中略）つまり、女が男を恨んでいることにはまったく話の焦点が当たっていないのである。さらに言えば、女は語り手が展開なり、結末なりをコントロール可能なテキスト空間内部で男を恨むことを許されていないのである。否、そればかりか、もしもわれわれが彼女をテキスト空間を越えた武家社会という、客観的な時空環境に移すことが可能だとしても、彼女は男を恨むことは許されていないのではないだろうか。女は男を恨んでいるという解釈は、二重の意味でわれわれの作品解釈に対してイレリヴァントな視座しか提供しない。つまり、この物語の語り手は復讐談を望まなかったし、社会環境的にも復讐談は受けつけられにくい状況にあったのである。これによれば、女が幽霊になって現れた理由は男への思いが募り、どうあっても性関係を結びたかったからである。（中略）要するに、語り手の紡ぎ出すテキストは女の復讐を果たす空間ではそもそもなく、女の性への妄執を提示していることになる。さらに、読者への呼びかけの機能を帯びた最終文は武家社会という環境は、女の情とは注意を払えばそれで済むだけのものにすぎない、言い換えればこの物語中にあるように女の情は踏みにも一時的な男に対する驚かせにしか発展し得ないという結論を前提としていることを伝えているのである。よって、女の復讐談は両方の版において視座を武家社会におけば真剣に取り扱われていないことがわかってくる。」門田守、前掲（註 324）205 頁。

そしてハーンが付けたタイトル通り、夫婦は「和解」したというのである。

しかし、このような見方はハーンの再話技術を低く評価していると言わざるを得ない。〈夫〉の善良化が二人の和解へとつながる書き換えであるとする考えは、裏を返せば〈妻〉の行為を制限しているともいえる。〈夫〉がいかに後悔しようとも過ちは、間違いなく過ちであり、裏切り捨てたという事実は決して変わらない。原話でも再話でも〈夫〉は〈先妻〉を捨てた。その「一度の過ち」に例え〈先妻〉がこだわったとしても、別段悪いことではあるまい。自分は不甲斐ない夫の苦境を支えたにも関わらず、自分を捨て、金持ちの女と結婚をし、またふと思い出したかのように帰ってきた。〈夫〉は再婚後、確かに後悔しているけれども、〈先妻〉にその思いを手紙に綴ったわけでもなく、その様子を彼女は知る由もないのである。彼女が、愛おしい思い出よりもなお、一度のあの時の裏切り行為がどうしても許せない、ということは十分にあり得る。

しかし復讐説を否定し和解が成立したと見てしまうと、その可能性がかき消され、女性はだまされても、裏切られても、思いを貫く、健気で一途、純粋で無垢な存在にならざるを得なくなってしまう。女性は超人的に男性を無条件で愛し、受け入れ、ひたすら待つことで愛を構築していく存在でなければならない。そこには嫉妬も、悲しみも、我儘も許されないのである。そしてそれが正しいとするならば、ハーンによる〈夫〉の柔和化という肉付けは、最終的には〈先妻〉を優しく、寛容で、一途な女性にするための作業だったということになる。門田氏は、原話について、封建的な武家社会において、女が男を恨むことは許されてはいない<sup>345</sup>としているが、原話同様、ハーンの再話においても、女性は同じように「復讐」することを望まれていないということになる。ハーンは長々とした描写で〈夫〉を善良化し、彼が誠実であればあるほど〈先妻〉は復讐する正当な理由を失っていく。それにより彼女は文脈的に理論づけされ、最終的に復讐することができないように固められてしまったと言えるのである。

したがって、これまでの「和解説」に従うとハーンの再話が原話の封建的な色彩を引き継ぐ、いかにも男性中心の物語であるということになる。しかし、ハーンほどの人が単なる和解の物語に「和解」というタイトルをつけるだろうか。そこに込められたもう一つの解釈をこそ我々が試みるべきなのではないか。

---

<sup>345</sup>門田守、前掲（註324）、205頁。

### 第三節 真なる「和解」の可能性—読者へ与えた二重の解釈—

平川祐弘氏は以下のように「復讐説」を否定している。

一部の女性解放論者は彼女等の今日的価値観でもって過去の作品を読みかえても構わないと主張する。西洋の聖書も日本の古典も読みかえようとする。ハーンの短篇も女の隷属を示す「和解」ではなく、女の解放を示す「復讐」に読みかえようとする。(中略) 御承知のように今日のアメリカ女性はインテリであればあるほど権利意識が強く、そのためにかえって不幸になっている節さえ見受けられる。しかしそのような権利の要求をすればするほど彼女等は男にきらわれるのではないのでしょうか。

『今昔物語』やそれを再話したハーンの物語の古風な心根の女があわれにいとおしく思われるのは、女がそんな権利は言わず、ひたすら男の帰りを待つからです。なるほどそんな日本の女は封建的かもしれません。だがしかしこの作品の主題が和解ではなくて復讐であるとし、女の執念が deep attachment よりも vindictive feeling であるとし、また作品を要約する一句が「怨みは死よりも強し」ということになるとしたら、作品の後味はいかにも不快なものとなりましょう<sup>346</sup>。

アメリカ女性が、主張すべき当然の権利を主張して男性に嫌われ、不幸になっているかどうかということまでは言及しかねるが、ただ、ここで筆者が「復讐」の解釈を試みたいのは、単に「和解」のみをこの物語の結論とすることの方がむしろ後味を「不快なもの」としているような気がしてならないからである。

ここで改めて「和解」とは何かを考えてみたい。それは、<夫>が主観的に捉えた「和解」ではなく、「真なる和解」とも呼べるものである。<先妻>が<夫>と本当の意味で和解をしたかったのであれば、異なる行為もできたのではないだろうか。

#### 3-1. 「愛卿伝」と「李生窺牆傳」—男の裏切りの有無—

ここで、同じ「亡妻霊値\_旧夫語\_」を原話とする上田秋成の「浅茅が宿」に関連し、その物語に深く影響を与えたとされる『剪灯新話』(1378年頃)の「愛卿伝」を見てみよう。『剪灯新話』は中国(明)で著された小説であり、江戸文学に影響を与えた。ここで取り

<sup>346</sup> 平川祐弘、前掲(註333)158頁。

上げようとする「浅茅が宿」も、浅井了意によって「遊女宮木野<sup>347</sup>」に翻訳された「愛卿伝」から強い影響を受けたとされている<sup>348</sup>。「亡妻霊値-旧夫語-」同様、亡くなった妻が夫に再会を果たすというもので、夫である<趙>が都での仕事のため家を空けている間に、妻である<愛卿>が彼の母親に孝を尽くし、最終的に男性に乱暴されそうになった<愛卿>は、操を守り自害する。しかし彼女は夫に再会し、心の底から語るのである。以下、この部分を引いてみる。

彼はさっそく家に戻ると、銀杏の木の下を掘って愛卿の遺体を取り出した。愛卿の顔はまるで生きているかのようで、皮膚の色も生きているときと全く変わっていなかった。趙は愛卿の体をさすって泣き崩れ、悲しみのあまり気を失ってしまった。再び意識を取り戻すと、香料を入れた湯で愛卿の遺体を洗い、美しい着物を着せ、新しい棺を買って母の墓の隣に葬った。(中略)

趙は墓へやって来ては墓前で泣き、家に戻っては裏庭で泣いた。そんなことが十日ほど続いた。

すると、それに答える声が聞こえた。

「私は羅でございます。あなたが私のことを深く思って下さるので、あの世におりましてもとても悲しくて、そこで今日はあなたにお会いしに参ったのでございます。」

(中略)

趙はしばらく愛卿を慰め、母上は今はどこにおられるのか尋ねた。すると愛卿は言った。

「お母様は生前、悪いことを何一つなさりませんでしたので、もう人の世に生まれ変わられたと聞いております。」

これを聞いて趙が、「ではおまえはなぜまだあの世に落ちたままでいるのだ」と聞くと、愛卿は答えた。

「私が死にますと、あの世の役所では私の貞烈をお褒め下さって、ただちに無錫<sup>むしやく</sup>の

<sup>347</sup> これについて飯塚朗は「上田秋成の『雨月物語』(一七六八)にも『愛卿伝』→『浅茅が宿』、『牡丹燈籠』→『吉備津の釜』というような関係が考えられ、有名な三遊亭円朝の『牡丹燈籠』に発展する」と述べている。飯塚朗、内田道夫、駒田信二『中国古典文学大系』(平凡社、1969) 492頁。

<sup>348</sup> 平川祐弘氏は、これについて次のように述べている。「日本人はハーンの『和解』を読む時に、秋成の『浅茅が宿』の結末を念頭において読む。それでどうしても夫と妻の和解を自然に考える。中国の読者も明代の『剪灯新話』の中の『愛卿伝』——これは『浅茅が宿』の材源の一つとなった作品です——などを念頭におくので、女の復讐とは考えない。死んだ愛卿は夫の願いにこたえて生きた姿をして現れ二人は情を交わすにいたるからです。」平川祐弘、前掲(註333) 154-155頁。

宋という家へ行って、その家の男の子として生まれ変わるように申し付けられました。でも、私はあなたとの因縁が深くございますので、あなたに一目お会いして胸の懐いをお話したいと思い、生まれ変わることを引き延ばして参りました。今、こうしてあなたともお会いすることができましたので、明日にも私はあちらへ行って生まれ変わります。もしあなたが昔のままのお気持ちを持ち続けておいででしたら、どうか宋の家をお訪ねになってその男の子にお会い下さい。私、あなたにこっと笑ってみせますわ。それを、私が生まれ変わったという証といたしましょう<sup>349</sup>。」

同じように平川氏が「韓国の読者で金時習の漢文小説『金鰲新話』の中の『李生窺牆伝』を読んだ人などもやはり和解が成立したと思うでしょう<sup>350</sup>」と述べている「李生窺牆傳」も見てみたい。『金鰲新話』は朝鮮時代初期、金時習によって書かれた漢文小説であり、朝鮮では「小説の祖」と見做され、先ほどの『剪灯新話』の模倣作としても知られている<sup>351</sup>。ここに描かれた「李生窺牆傳」で、亡くなった妻と夫はどのように再会しているのだろうか。以下が、死んだ妻<崔氏>が夫<李生>の前に幽霊として現れたときの様子である。

李生はこれ以後、俗世の人間関係にはかまわなくなった。親戚や客人がお祝いや弔問に訪れても、門を閉ざして外に出なかった。いつも妻の崔氏と詩をやりとりし、唱和しあい、あるときは琴瑟を奏でたりして、ゆっくりと数年を過ごした。ある夜、妻は李生に言った。

「三度もよろこびの日を得て、私は世の出来事にはすっかり無関心でしたね。あなたとの楽しみにつかれたわけではないのですが、悲しいかな、とうとうお別れのときが来てしまいました。」

妻は泣きじゃくった。李生は驚いて娘に問うた。

「ではお前は どうして再びここにあらわれたのかね」

妻は言った。

「運命というものは避けられないものです。天帝は私とあなた様の因縁をまだ断ち切ってはならず、また私にとががないということで、私はこうして假の姿をもってあ

<sup>349</sup> 竹田晃、仙石知子、小塚由博、黒田真美子『中国古典小説選〈8〉剪灯新話—明代』（明治書院、2008）260-269頁。

<sup>350</sup> 平川祐弘、前掲（註333）155頁。

<sup>351</sup> 早川智美『金鰲新話—訳注と研究』（和泉書院、2009）315頁。

らわれることができました。そして、あなた様としばしの間、愁いに満ちて結ばれた心を解きあったのです。長くこの世に留まって、生きている人を惑わせようとしたのではありません」(中略)

李生もまた悲しみとつらさでいっぱいだった。そして妻に言った。

「このまま生きているよりも、あなたとともに黄泉の国へ行きたい。どうして楽しみもなく残りの人生を生きてゆくことができますでしょうか(中略)」

妻は言った。

「あなた様の寿命はまだ残っております。しかし私はすでに冥界の帳簿に名前が載ってしまいました。これからは永久にお会いすることはできません。もし私が人間にいつまでも想いを寄せていたなら、冥界の規則を破ることになります。しかも私だけが罰せられるのではなく、あなた様にまで禍がおよぶことになります。(中略)」

妻は李生をみつめて、ぼろぼろと涙をこぼして言った。

「あなた、どうかいつまでもお元気で」

そう言い終わると、だんだんと姿が見えなくなり、とうとう跡形もなく消えてしまった<sup>352</sup>。

これらの二作品における妻の現れ方はどうであろうか。自分が幽霊であるということを受け、その上で夫と再会している。「愛卿伝」の〈愛卿〉は自分が宋家の男の子として生まれ変わると言い残し、赤子となった〈愛卿〉は〈趙〉に微笑みかけるのである。彼らは性別も年齢も越えた愛情で結ばれていく。

「李生窺牆傳」の〈崔氏〉は、幽霊として〈李生〉の前に現れ、三年もの歳月を過ごす。出会ったところに交わしたのと同じように詩を歌い、楽しい時間を過ごす。しかし「長くこの世に留まって、生きている人を惑わせようとしたのではありません」と話し、冥界のルールに従って去っていく。この後、〈李生〉は彼女を追うように病で亡くなる。

「死んだ妻が夫の前に現れる」というのは東アジア共通のモチーフとして存在しているが、この二作品のように妻が夫の前へ現れ、生前成し遂げられなかった楽しい思い出を紡ごうとする際、そこに嘘や隠しごとは存在しない。あくまでも妻は幽霊である自分を隠そうとはしないのである。そして夫はこの世の人間ではない妻でさえも変わらず愛おしみ、失いたくない気持ちで受け入れるのである。

---

<sup>352</sup> 早川智美、前掲(註 351) 134-141 頁。

ただし、これらの作品において夫たちは不貞を働いたわけではない。ほかの女に走ったわけではなく、仕事や親の反対などのために女と離れなければならない状況であった。それゆえそもそも和解もなにもないわけである。しかしながら、だからこそ、「裏切り」を意図的に取り入れたハーンの「和解」の中の〈先妻〉と〈夫〉には、単なる「和解」を見るわけにはいかないのではないか。

ここで再び、「和解」の〈先妻〉の行動を見てみよう。ふらりと帰ってきた〈夫〉に対し、変わらぬ美しさで、嬉しそうに笑みを浮かべ、優しい言葉で話しかける。〈夫〉の謝罪に対しても、彼が求めるような答えを抜き差しなく答える。そして「七度生れ変わっても一緒にいたい」という言葉については嬉しげに振る舞い、「我が身の上に起きた嘆き苦しみに」については決して口にしない、すなわち自分が実はすでに死んでいるということについては決して打明けない。そして床入りをした部屋で一晩過ごし、何も真実を告げないまま、夫が歓喜の頂点にいる最中に、白骨化した死体として彼の前に現れるのである。これは、原話「亡妻霊値-旧夫語-」よりもなお強烈な復讐ではないか。〈先妻〉は〈夫〉に単なる一瞬の恐怖だけではなく、心底に悶々と残る残酷な虚無感、孤独、罪悪感を与えた。それは前夜が楽しければ楽しいほど、強烈に埋め込まれるのである。そして、もぬけの殻となった〈先妻〉はどうなったか。この世に何の未練もなく、ようやく爽快な気持ちで浄土へと旅立つことができた。このような読みは、果たして、男性に嫌われ自らを不幸にする、女性解放論者の読みかえに過ぎないのだろうか。

### 3-2. ハーンと女性—ローザ、マティ、そしてセツ—

ここで別の視点から考えよう。ハーンの再話作品に描かれる女性たちは、この作品に限らず彼と関わった女性たち（母ローザ、マティ、セツなど）の存在を認識することができる。前述のように、〈先妻〉が機織りをして貧しい〈夫〉を支えたという部分は、原話にはない要素であり、家族を機織りで支え続けた妻セツの影が見られることは既に指摘されている。または〈夫〉に捨てられ、知り合いのいない都で孤独に最期を迎えた〈先妻〉の姿は、ハーンの父が母と自分を捨て、別の女性と結婚したこと、そして母がアイルランドで言葉が通じない孤独な生活のために心を病んだことに重なる。さらに、ハーンが〈後妻〉を性悪としたことは、彼の初婚の相手マティの性格に困惑し、最終的に彼女を捨て去らざるを得なかったハーン自身のことだと見ることもできる。

このように、物語の中にハーンに関わる女性たちの影を見出すのであれば、ましてそれ

が最愛の母ローザであったり、妻セツであったりするるのであれば、男に捨てられた孤独な女性を復讐させないままではいられないはずである。

これについて、遠田勝氏は逆の視点から論じられている。すなわち〈夫〉はハーン自身の父親が重ねられているというのである。

よく知られるように、ハーン之母ローザは、父チャールズが別の女性を妻に迎えるために、不当な理由で離縁され、子供をイギリスに残したまま故郷のギリシャに戻り、最後はコルフ島で狂死している。だとすれば、そうした物語のなかで災いの根源にいる男たちが許されているのは、それがハーンの同性であるからというよりも、それが母の愛した男、母が自分の精神を損ねるほど愛していた父の写し絵だったからだろう<sup>353</sup>。

このように、遠田氏は最終的にハーンが〈夫〉を死なせなかった理由として、そこに自分の父親を重ね合わせ、さらにそれが「母の愛した男」であったことから、命までもは奪わなかったのではないかとしている。さらに「父を奪った女やその子供を厳しく罰し、母の気持ちを慰め鎮めるとともに、父を生きながらえさせ、母への謝罪と和解を示唆・画策しつづけていた」のだという。すなわち、男がなお生き続けているのは〈先妻〉への謝罪と和解を求め続けるためなのだろうか。だとすると、白骨化した死体の影をひたすら抱えたまま、〈夫〉は生きていかなければならないということになる。これは、結局のところ「和解」ではなく「和解を乞いつづけなければならない」物語ということになるのではないだろうか。つまり、〈先妻〉は〈夫〉に一時的な恐怖感に加え残酷な虚無感、孤独観、を与え、さらに命が続く限り背負わなければならない「和解乞い」という試練を与えたのだと言える。

### 3-3. 東アジア共通の設定と西洋の読者への意識

さらに、江戸時代という時代的背景を考慮すれば、武士階級とは比べ物にならないほど自由な社会に生きていた一般庶民であっても、やはりそこは男性中心の社会であることにかわりはなかった。夫が何かを決めれば、それになす術もなくそれに従わざるを得ない女性も多くいたのである。「浅茅が宿」の〈宮木〉の様子をここで改めて引いてみると、

<sup>353</sup> 遠田勝、前掲（註1）236頁。但し、ハーンは母ローザが精神を患って病院で亡くなったという事実を最後まで知らないままでいたという事実は、ここで記しておく必要があるだろう。

勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならずありけり。此度勝四郎が商物買て京にゆくといふをうたてきことに思ひ、言をつくして諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひがひしく調らへて、其夜はさがりがたき別れをかたり、「かくてはたのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕べにわすれ給はで、速く帰り給へ。命だにとは思ふものの、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみ給へ」といふに、「いかで浮き木に乗つもしらぬ国に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心強く待ち給へ」といひなぐさめて、夜も明ぬるに、鳥が啼東を立出て京の方へ急ぎけり<sup>354</sup>。

と、<夫>の身勝手な思い付きにも最終的には従わざるを得ず、自分を置き去りにする<夫>のために旅支度を調べ、ひとりで生活しなければならない心細さと不安を抱えながらも、涙ながらに送り出さなければならないのが妻<宮木>であった。「和解」においては、思いを募らせ亡くなってしまった<先妻>であったが、そこに単なるはかなさだけを見るわけにはいかず、心に秘めた強い執念にこそ、目を向けるべきではないだろうか。

ここで視点を広げ、韓国において、同じように男社会に涙をのんだ女性たちの姿を描いた作品を見てみよう。徐廷柱（1915～2000）の散文詩「新婦」（1975）である。

初夜、新婦は草色のチョゴリに真紅のチマを着て三つ編みをほどいたまま、新郎と二人、坐っていたが、新郎は急に尿意をもよおした。あわてて立ち上がって駆け出そうとしたが、そのはずみに新郎の袖が部屋の戸に引っかかった。新郎はますますあわてて、てっきり新婦が欲情をこらえきれずに袖をつかんで離さないのだと思い込み、後ろも見ずに飛び出した。袖はちぎれ、新郎はこりゃたまらんとばかり用を足すと一目散に逃げて行ってしまった。

そして四、五十年が経ち、たまたま用事があって新郎は新婦の家の側を通りかかった。ふと気になって新婦の部屋の戸を開け、中をのぞき込むと、新婦は初夜の姿そのまま三つ編みをほどき、草色のチョゴリと真紅のチマを着て坐っていた。新郎は哀れを覚え、新婦の側へ寄って彼女の肩に手を触れた。と、なんと新婦はたちまち灰と

<sup>354</sup> 上田秋成著、高田衛、稲田篤信『雨月物語』（筑摩書房、1997）124-125頁。

なり崩れ落ちた。そして草色の灰と真紅の灰となって消えてしまった……<sup>355</sup>。

この物語について、李在銑氏は以下のように述べている。

初夜に誤解を受け、夫に疎んじられた新婦が夫を待ち続け、死んで怨霊となったという逸話を詩にしたものである。新婦の死体は四、五十年の間腐らずにいたが、ある日偶然やって来た新郎の手が新婦の体に触れた瞬間、新婦は草色と真紅の灰になって消え去った。時間をも止め、化石にしてしまう女の怨念を描いたぞっとするような話である。

この話は私たちに、夫を待つ韓国の女たちの凄まじいばかりの情念と、愛と憎しみが入り混じってしこりとなった恨の自己攻撃性を教えてくれる<sup>356</sup>。

このように隣国韓国でも、否儒教思想が極めて深く浸透していた韓国であるからこそ尚更、男社会に無言で従わなければならない女の作品は多く存在する。この「東アジア共通」ともいえる女性の描かれ方に留意すれば、女のしとやかさや無力さに潜む執念深さや、怨恨がもたらす恐ろしさを感じずにはいられないだろう。それは時に男性への戒めともなり、物語の味わいにもなるのである。

さらにハーンが常に意識したであろう西洋の読者についても留意すべきである。女性が独立した人権と自由を求め社会に進出していった時代に、果たして単なる和解は受け入れられうるのであろうか。言い換えれば、これこそがこの物語について論じる際最も強調しなければならないことなのではないだろうか。すなわち、「和解」は読み手に正反対の解釈を可能にしているという点である。男性には「和解が成立した」と思わせ、女性には「永遠の復讐を果たした」と思わせる。これこそがハーンの微妙な筆遣いがなした業であろう。女性がいかなるときも忍耐強く我慢し、男性をひたすら待ち続け、たとえ裏切られたとしても心から許し、和解する存在であると明記してしまえば、当然共感は得られまい。したがって、死後に再び戻り、再会を果たした後、静かに姿を消すのではなく、死体として男の前に現れるのである。これは単なる恐怖を超えた絶望を以て復讐したのだと言えよう。それにもかかわらず、タイトルを「和解」とすることで復讐を全面に出すことはせず、裏

<sup>355</sup> 李在銑著、丁貴連、筒井真樹子訳『韓国文学はどこから来たのか』（白帝社、2005）323頁。

<sup>356</sup> 李在銑、同上、323-324頁。

の意味として著した。つまり、ハーンは、復讐をにおわせる形で「和解」を書くことにより、読者に二重の解釈を提示した。そしてそれは封建制度に生きた女性をハーンなりの方  
法で解放したともいえるのである。

## 第八章 武家社会にうずまく嫉妬

### 第一節 女性と嫉妬

江戸時代においては、武士階級の男性が本妻の他に妾を侍らせることが何ら問題とされず、むしろ子孫を残す義務の一つとして極めて普通であると考えられていた。これは「孝」が社会基盤として存在していたこと、すなわち男性は自分の血統の子どもを残すことが必須で、安定的に跡継を得て「家」を維持・繁栄させることを考えれば、息子は多ければ多いほど良かったのである。ここで注意しなければならないのは、重要なのがあくまでも「夫の息子である」という事実であり、女性たちの血統は完全に無視されていたということである。すなわち、男性の血統であれば、母親は妻でも妾でも構わなかった。従って、女性たちは「貞女二夫にまみえず」の理念のもと、貞操を守ることを強いられたにも関わらず、男性は遊女と遊ぶことも、時に彼女を妾にすることも、問題とされなかった。

この理不尽なシステムは女性に人格を認めないことから始まるが、しかしながら当然その歪みは社会のいたるところで現れることとなる。そしてその問題の根本には、少なからず「嫉妬」が存在していることはいままでのないだろう。嫉妬は何も女性だけが抱く感情ではない。しかし江戸時代、男性のそれではなく、女性の嫉妬のみが厳しく制限されていたのである。

#### 1-1. 「三従」と「七去」にしばられた女性たち

東アジア共通で女性に課せられた概念として「三従の道」と「七去の悪」があるのは、改めていうまでもないことだろう。「三従」とは、「生まれては父に、嫁しては夫に、老いては子に従え」という考え方である。そして「七去」は夫が妻を捨てることができる条件で、①舅・姑に従わないとき②子供がない（できない）とき③姦通、淫乱のとき④おしやべりすぎ、親類と仲の悪いもの⑤嫉妬深く、悋気を起こすとき⑥窃盗する癖があるとき⑦悪い病気のあるとき、という非常に厳しいものであった。この七つのうち一つでも当てはまれば夫側から離縁できるのであるから、おそらく男性に都合の良いものである。もちろん、この逆—すなわち男性がこの条件に当てはまったからといって、妻が夫に離縁を申し出ること—は決して許されない。「三従の道」、「七去の悪」とも儒教思想の影響で律令制度と共に輸入されたものであるが、古代にあっては、それは多分に形式的なものにすぎ

ず、本格的に儒教が政治的根拠として位置付けられた江戸時代に入ってから武家社会を中心に強制的におし進められた<sup>357</sup>。

「嫉妬」も「七去の悪」の一つであり、男性が遊女と遊んだり、妾を娶り同じ敷地内に置き妻よりも大切に慈しんだとしても、それに対して妻は嫉妬したり、悋気を起こすことは離縁につながる悪行とされていた。

## 1-2. 女性と出産—「腹は借り物」—

そして、女性の存在価値は唯一「子を産むこと」であった。前にも触れたが、武士の家は男の相続人がいなければ維持できないため、妻が産むべきは娘ではなく息子であった<sup>358</sup>。以下、示唆に富む指摘である。

武士の妻でさえ、人間として扱われたのではなく、原則として、家名と主君からもらっている俸禄を絶やさないために、あとつぎの子供をつくる生産用具として、つまり「かりもの」の「腹」を提供することを主な役目としていた。子なきは去れといわれるのはそのためである。また、あと目を絶やさぬため、妾をもつこと、つまり一夫多妻制が倫理的にも正しいものとされた。(中略)

名君といわれた上杉鷹山も、夫が妾をいくらもっても妻は嫉妬してはいけない、ひたすら、あとつぎを多くつくる方法を願って、自分よりよい女があれば、その女を夫にすすめるのが妻の道である、とさえ述べている<sup>359</sup>。

このように男性中心に家が維持されていく武家社会において、妻はあくまでも男に腹を貸すだけのいきものであり、安定的に跡継ぎ（息子）を得るためであればその腹は必ずしも妻のものである必要すらなかったのである。こうした社会において、「一夫多妻制」はもはや倫理的にも正しいものにとらえられていたことは言うまでもないだろう<sup>360</sup>。攘夷論者である会沢正志が「西洋人は畜生である。なぜなら彼らは一夫一婦制で、妻に子が生まれな

<sup>357</sup> 原田伴彦、前掲（註 299）132-133 頁。

<sup>358</sup> 総合女性史研究会編『日本女性の歴史 文化と思想』（角川選書、1993）118 頁。

<sup>359</sup> 原田伴彦、前掲（註 299）138 頁。

<sup>360</sup> さらに原田伴彦は「武士の妻とは、とにかく子を、それが阿呆であろうとたわけであろうとも、つくるのを主とし、その従属的な役目として、夫の生理的欲求をみたす以外のなにものでもなかった」と当時の女性の地位の低さを指摘している。原田伴彦、同上、137-138 頁。

くて家のあとつぎがなくなっても、なお妾もおかないからである」と言っている<sup>361</sup>ことから、当時の倫理観が現在とかけ離れていたことが分かる。

しかしながら、このように女性を人間と見做さない規範が歪みを生み出さないわけではなく、奔放な性生活を送る男性に対し、女性たちは当然嫉妬を抱くようになる。そして、女性へは嫉妬しないように戒め、同時に男性へは、女性の恨みを買わないよう、「嫉妬」は一つの警戒すべきものとなった。

これから見ていく「破られた約束」*Of A PROMISE BROKEN*は『日本雑録』A Japanese Miscellany に収められている物語で、原典は特定されていないがセツにより語られた出雲に伝わる怪談であるとされている<sup>362</sup>。この物語のテーマは女の嫉妬であり、それによる残忍な結末が読者へ恐怖を与えている。

前述の通り、嫉妬は「七去の悪」にあたるもので女は決して抱いてはいけない感情であった。この点から推測すれば、この原典は女の嫉妬を戒める訓戒の意味があったと考えられる。しかし、ハーンによって描き直されたこの作品には、女の凄まじい執念と残虐な行為がハーン独特の手法で凄惨せいさんに描かれているにも関わらず、心に訴えかけてくる悲しみを感じずにはいられない。

物語の分析に先立って、あらすじを簡単に述べておこう。ある武士の妻は、病気で亡くなる直前に、夫に再婚をしないこと、自分を自宅の庭に葬ることを約束させる。しかし武士はその約束を破り後妻を娶った。それに対して妻は後妻の首をもぎりとり、護衛の侍に斬りつけられた後もなお、後妻の生首をまさぐりつづけるというものである。ここでは、<先妻>の一途な愛と嫉妬と悲しみに注目しながら、前述の時代的背景も考慮しながら読み解いてみたい。

この物語はタイトルから分かるように、ある「約束」が破られる物語であるが約束は一つだけではない。<夫>、<先妻>、<後妻>の三角関係で、少なくとも三つの約束が交わされ、それが破られていく過程で物語が悲しく残酷なものへ変化していくのである。

---

<sup>361</sup> 井上清、前掲（註 298）117-118 頁。

<sup>362</sup> 遠田勝、前掲（註 1）220 頁。

## 第二節 愛情ゆえの「約束」、そして嫉妬へ—「破られた約束」 (1901) —

まず最も重要な約束から見てみよう。死を目前にした<先妻>は、<夫>に二つのことを約束させる。一つは再婚しないこと、そしてもう一つは彼女を自宅の庭に葬ることである。以下が物語の冒頭部分である。

「わたくし死ぬのは怖くはございませぬ」死を目前にした妻は言った、「(中略) 誰がわたくしの死後、この家に入るのでしょうか、それが知りたいのでございます」

「なにを言う」悲嘆にくれた夫は言った、「そなたのかわりなど誰にもさせはしない。わたしは、もう二度と結婚はしない<sup>①</sup>」

こう夫が言ったとき、彼は心の底からそう思っていたのだった。いま、失いかけている女を愛していたからである。(中略)

「それなら、わたくしをこの家のお庭に葬ってはいただけませんか。——二人で植えたあのお庭のすみの梅の樹林の近くに。わたくしは以前からこのことをお願いしたいと思っておりました。(中略) でもただいまあなたは二度と妻をおもらいにならないと約束してくださった。だからわたくしはためらうことなく、わたくしのお望みを申しあげます……どんなにかわたくしは庭に埋めてもらいたいことか！庭にいれば、あなたの声もときおりは耳にすることができますし、春には花々を見ることもできましよう<sup>②</sup>」(中略)

「きっと、二人で植えた梅の木の木蔭に。美しい墓をたててあげよう<sup>③</sup>」

「それから、あの、小さな鈴をひとついただけませんか」

「鈴を——」

「はい、お棺のなかに小さな鈴をひとつ入れてほしいのです。巡礼がもつようなほんとに小さな鈴をひとつ。入れてくださいますか。」

「よしよし、小さな鈴を入れよう——ほかに何かほしいものは」

「ほかにほかにいりませぬ」と妻は言った、「あなたは、これまでいつもたいそうやさしくしてくださいました。さあ、これでわたくしはしあわせに死んでゆけます<sup>④</sup>」

そう言って女は目を閉じ、息をひきとった。ちょうど疲れた子供がすやすや眠るよ

うに。美しい死に顔はやすらかで、微笑みさえ浮かべていた<sup>363</sup>。

(下線は筆者、175-177 頁、原文[39])

この部分から、彼等がとても愛情に溢れた夫婦関係を築いていたことが分かる。〈先妻〉はこの時点で嫉妬深い女の印象はなく、再婚に関しても〈夫〉自らが「もう二度と結婚はしない」と明言している。〈先妻〉に頼まれ、それを承諾する形ではなく、〈夫〉が自ら「武士の誓いにかけて」断言しているのである。そして〈先妻〉は死後も〈夫〉の傍にいたいという気持ちから、寺ではなく庭へ埋葬されることを望んだ。〈夫〉の声を聞き、美しい花をながめることで、死後も変わらず夫婦であり続けたいという〈先妻〉の一途な愛情が読み取れる。

そして最期まで優しく尽くしてくれた〈夫〉に感謝しながら、微笑を浮かべなくなった〈先妻〉は、希望通り思い出の梅の木の下へ葬られた。若くして亡くなった〈先妻〉と、それを看取った〈夫〉にとっては、不幸ながらも愛情を感じられる美しい最後の場面である。

しかしこの場面が美しさは、その後の展開を悲しく恐ろしいものへとつながっていく。まずはこの約束が一年も経たないうちに、破られることから始まる。

ところで、妻がみまかってから一年もたないうちに、武士の親戚や友達は、しきりに彼に再婚をすすめた。「まだ若い」彼らは言うのだった、「それに、ひとり息子だというのに跡継ぎがない。妻を迎えるのは武士のつとめだ。子供がなくて死ぬようなことになったら、誰が先祖の供養をするのか」

こうって周囲から責められて、彼はとうとう再婚するよう説き伏せられてしまった。花嫁はわずか十七歳だった。庭にある墓が、沈黙のうちに非難してはいたものの、男は新しい花嫁を深く愛しはじめた。

(177 頁、原文[40])

これは、当時の日本社会から見れば当然の成り行きであった。前述の通り、結婚は一つの「つとめ」であり、個々人の意志で決定されるものではないのである。ハーンは日本社会を知らない西洋の読者のために、再婚する全うな理由を明確に示している。日本は家社

---

<sup>363</sup> 小泉八雲、前掲（註 240）175-177 頁。以下、「破られた約束」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

会であり、まして武士階級の一人息子であれば家を存続させるのは当然の義務であるから、再婚は有無を言わせぬ絶対の事柄であった。たとえ<夫>に再婚する意思がなくても、最終的に「説き伏せられて」結婚するのが自然な流れである。

しかし幸か不幸か<夫>は若い<後妻>を愛するようになった。彼は十七歳の若妻と新しい幸福な人生を送ることになったのである。それは<先妻>への裏切りであり、彼女を忘却してしまうことを意味した。<先妻>の立場から見れば、自分が死ぬ間際<夫>は自分を心底愛し「もう二度と結婚はしない」と約束していた。そして自分を庭へ埋葬してくれたのである。<後妻>との結婚が決まるまで、<夫>の心は自分のものであった。そしてそれはその後も続くはずのものだった。彼女の一途な愛情と「武士の誓い」は、現実の武家社会に儂くも散った。

周囲に用意された十七歳の若娘と<夫>との結婚は至極幸福なものであった。あるいは、<先妻>は梅の木の下から二人の笑い声や語らいを聞いたかもしれない。<夫>からの愛情の喪失と、それによる寂しさ、そして嫉妬に耐えかねた彼女は、現世に再び姿を現すことになる。

### 第三節 約束は誰が破ったか—<後妻>と<夫>の行為—

約束を破られた<先妻>が<夫>の再婚を庭にある墓から「沈黙のうちに非難」するだけでは収まらず、幽霊として<後妻>の前へ姿を現すことになるのが以下の場面である。

婚礼をして七日目まで、うら若い新妻の幸福をかきみだすことは何も起こらなかった。七日目になって、夫は城中の夜勤を命じられた。やむをえず妻をひとりで留守番させたその最初の夜、花嫁は口ではいいあらわせない心の不安を感じた。(中略)

丑の刻、女は夜の沈黙のなかに、鈴がチリチリとひびく音を聞いた。鈴の音？こんな夜ふけに、武家屋敷の町を、いったい何の巡礼が通るのだろうか。しばらく間をおいて、鈴の音は、今度は、はるかに大きく聞こえた。(中略) 恐怖！夢魘の恐怖が新妻を襲った。(中略) そのとき、そっと影がすべりこむように、ひとりの女が部屋に入った。戸という戸は固く閉ざされ、ふすまは微動だにしないのに、経帷子を着て巡礼の鈴をもった女が入った。死後時がたち、眼はうつろになっている。髪はほどけて顔にかかり、もつれた髪ごしに、眼のない眼、舌のない口が、ものを言った。

「おまえをいさせるものか、この家にいさせるものか。私はまだこの女主人。出て行け。その理由を誰にも告げるな。もしあの人に言ったら、八つ裂きにする①」

そう言うと亡霊は姿を消した。花嫁は恐怖のために気を失った。明け方まで彼女は失神していた。(中略)

しかし、翌日の夜はもう疑うことはできなかった。再び丑の刻に、犬たちが唸り、遠吠えを始め、またあの鈴のチリチリが鳴りひびき、その音が庭の方からゆっくりと近づき、もう一度死んだ女が部屋に入り、かすれ声でささやいた。

「行け、去る理由を誰にも言うな。もしあの人に告げたら、八つ裂きにする……②」

亡霊は、今夜は床のすぐ近くまで来てかがみこみ、つぶやき、もの凄いい形相をした。

(下線は筆者、177-178 頁、原文[41])

このように、〈先妻〉は〈夫〉が家を空ける機会を七日間も待ち続けた。そして〈後妻〉が一人きりになった夜、初めて姿を現すのである。〈先妻〉が〈後妻〉へ提示した二つの約束は、①〈先妻〉こそが家の女主人であるから、〈後妻〉は家から出ていくこと、②家から出ていく理由を誰にも、とりわけ〈夫〉には決して言わないことである。しかし「もの凄いい形相」をしていた〈先妻〉からの約束であったにも関わらず、〈後妻〉は結局破ってしまうのである。遠田勝氏は、〈後妻〉の破約は彼女が無意識に〈先妻〉を挑発したものであるとし、以下のように述べている。

後妻の前だけに現われ、理由を告げずにただちに家を出よ、ただし、自分を見たとは決して夫に告げてはならないと命じたのである。それは現世の者からみれば怨霊の理不尽な脅しにしか聞こえないかもしれないが、霊の立場からすれば、精一杯の妥協であり、きわめて合理的な解決策の提示であった。そして、それは夫とかわしたような明白な形の約束ではないが、耐え難い嫉妬に苦しみ、現世にさまよい出た亡霊からすれば、拒めるはずのない、破れるはずのない約束だった。しかし、わずか十七歳の後妻には、その重大な意味が分からなかった。家を立ち去らず、一部始終を告げればかりか、霊を威嚇し退散させるための護衛さえ侍らせてしまった。この作品で、幽霊を本当に怒らせたのは、夫の破約ではなく、この後妻の破約、夫の愛は自分のほうに

あるという無意識の誇示と挑発であった<sup>364</sup>。

このように考えると、最終的に<先妻>に首をもぎとられてしまう<後妻>にも非があったということになる。しかし、<後妻>の対応を見ると、彼女が霊を無意識に挑発し、<夫>からの愛を無意識に誇示しているとするのは少々無理があるように受け取れる。以下、該当部分を見てみよう。

翌朝、武士が城から帰ったとき、年若い妻は夫の前に身を投げ伏して嘆願した。

「お願いでございます。こんな事を申しあげるのは恩知らずで、まったく無礼なことですが、私を里に帰らせていただきたいのでございます。今すぐ帰らせてほしいのです。」

「なにか、つらいことでもあるのか」夫は心底おどろいて尋ねた、「わたしの留守中、誰かが意地の悪いことでもしたのか」

「そんな事ではありません」彼女はすすり泣きながら答えた、「ここではみんな私に親切にしてくれました……けれども、私はこれ以上、あなたの妻ではいられないのでございます。——私は出て行かなければなりません」(中略)

「離縁してくださらなければ、私は死んでしまいます」(中略)

「おまえの側に何の欠点もないのに、両親のもとに送りかえしたら、世間にたいして申し訳がたたないだろう。離婚してほしい正当な理由、ことの次第を、話すのなら離縁状も書こう。だが、もっともな訳もないのに別れるというわけにはゆかない。家の名誉のためにも世間から非難されてはならないのだ」

そこまで言われると彼女も話さなければならぬと感じ、夫にすべてを語った。恐怖に身悶えしながら、さらに言いそえた。

「もうあなたに話してしまった以上、私はあの女に殺されます——殺されます」

勇敢で亡霊などを信じない武士も、これを聞いて一瞬、気が動転した。

(下線は筆者、179-181頁、原文[42])

このように、<後妻>は<先妻>の恐怖に怯え、必死に約束を守ろうとしていることが分かる。<先妻>に言われた通り、「理由を告げず」、「家を出ていこう」としているのでは

<sup>364</sup> 遠田勝、前掲(註1)227頁。

る。しかし、最終的には理由を尋ね続ける<夫>に対し、やむを得ず真実を語っている。これが十七歳の娘が思いつく最善の策であり、彼女に<先妻>を裏切ろうという気はなかった。これを「無意識の誇示と挑発」とし、<後妻>に非を与えることで結論付けてしまうことには、再考の余地があるように思われる。

この部分について、<後妻>の立場に立って見れば、この約束はそもそも彼女が自分の意志だけで守ることができるようなレベルのものでは到底なかった。女は嫁げば嫁ぎ先のものであり、そういった教えを幼いころから教え込まれた女性であったはずであるから、全てを捨てて身を隠すなど物理的にも道徳的にも決してできるはずはないのである。だからこそ、彼女としては嫁ぎ先である「家」にも筋を通す形で家を去らなければならなかった。そして<夫>へ相談した結果が計らずも破約という形になってしまったのである。

<後妻>はわずか十七歳で親がとりきめた結婚に従い、年の離れた鰥夫の妻となった。そして<夫>のいない夜、<先妻>への恐怖に一人で耐え続け、最終的には首をもぎとられてしまう不幸な少女である。彼女は、封建制度が求めたある意味理想的な女性であるが、それが生み出した嫉妬によって、最終的には無残な死を迎えてしまう無力な存在であった。

#### 第四節 生きながらえる<夫>—<先妻>の愛—

<夫>に約束を破られ、嫉妬のあまり現世に迷い出た<先妻>、その<先妻>によって恐怖を味わわされた挙句殺されてしまう<後妻>—この二人が時代の生み出した「嫉妬」という感情の犠牲になったのは、これまで見て来た通りである。ここで考えたいのは、この二人に挟まれた<夫>が多少の恐怖感や衝撃、妻を失う悲しみを味わったにせよ、命を奪われることなく、生きながらえることができている意味である。

そもそも、たとえそれが武士の定めであったにせよ、約束を破り再婚したのは<夫>であり、霊となった<先妻>をないがしろにし、護衛を雇い<後妻>を守ろうとしたのも<夫>である。先に遠田勝氏が<後妻>の行為について「家を立ち去らず、一部始終を告げただばかりか、霊を威嚇し退散させるための護衛さえ侍らせてしまった」とし、それが「夫の愛は自分のほうにあるという無意識の誇示と挑発」だったと述べていることについて触れた。しかし「霊を威嚇し退散させるための護衛さえ侍らせてしまった」のは<後妻>ではなく<夫>である。すなわち、この部分は、「夫の愛は自分のほうにある」と<後妻>が誇示したと見るべきではなく、「今自分が愛しているのは<先妻>ではなく<後妻>であり、

＜先妻＞は＜後妻＞を苦しめる存在であるから退散させなければならない」と、＜後妻＞との愛を誇示した＜夫＞を見るべきなのである。このように考えれば、＜先妻＞との約束を破り、＜後妻＞との愛を見せびらかした＜夫＞には、何らかの復讐がなされなければならないはずである。しかし、彼は命を落とさないばかりか、＜後妻＞が亡くなる恐怖の瞬間にも立ち会わず、最後に＜先妻＞の恐ろしい姿を見るだけなのである。

首はどこにも見あたらなかった。ぞっとするような傷あとをみると、首は切りとられたのではなく、もぎとられたにちがいがなかった。(中略)

とうの昔に埋葬されたはずの女が、墓の前になんと立ち、片手に鈴を握り、もう一方の手に、血のしずくの滴る首をもっていた。三人は痺れたようになって立ちすくんだ。一人の武士が念仏を唱え、刀を抜くや、その魔物を打った。途端にそれは土の上に崩れ落ち、空っぽの経帷子と骨と髪が飛び散った。崩れおちた残骸のなかから、鈴がチリンと転がり出た。しかし肉の落ちつくした右の手は、手首から離れながら、なおまさぐり、その指は、黄色い蟹の鉏が落ちた果物をしっかりと掴んで放すまいとするように、ずたずたに裂かれた血まみれの首を、しっかりと握っていた。

(182-183 頁、原文[43])

このように、武士が城から帰ってきた時には、既に＜後妻＞は亡き者とされていて、その無残な姿を＜夫＞が発見するのである。そして、用心棒の武士に斬られても尚、＜先妻＞の右手が＜後妻＞の首をまさぐり、決して放そうとはしない場面は非常にグロテスクであり恐ろしい。しかし、＜夫＞が味わったのはこの恐怖心だけであった。

この悲惨な結末を＜先妻＞の嫉妬を悪とするか、＜後妻＞の挑発を悪とするかと問えば、明らかになっていない原典ではおそらく前者であったことはほぼ間違いないだろう。武家の嫁たるもの本来であれば「家」の存続を願うのが常である。前述のように、息子を生子家を繁栄させるという女の任務を果たせないのであれば、喜んで妾を迎えるべきが女の務めである。まして、この場合＜先妻＞は既にこの世の者ではないのだから、尚更十七歳の若娘と＜夫＞との結婚の幸福を「嫉妬することなく」願うのが良妻であろう。原話では、おそらくこの物語を以て女性の嫉妬を戒める意味が含まれていたと推測できる。だからこそ、＜夫＞は結局生きながらえることができているのである。しかしながらハーンの話では、夫婦の愛情が＜夫＞の破約によって儚く消え、そこで生まれた嫉妬が悲劇をもたら

す物語となっていて、〈先妻〉を責め立てるような描写ではない。彼女は、最後まで最愛の〈夫〉の中では、恐ろしい幽霊としてではなく、結婚の思い出と美しい死に顔として存在していたという思いを抱いていた。しかし、その思いすら叶わないのである。

この不幸なく先妻〉と〈後妻〉に対し、〈夫〉が何も咎められていないのはなぜか。この点について、ハーンは絶妙な形で読者を取りあえずは満足させている。物語の最後に、ハーン自身が登場し、この結末について言及するのである。

「これはまた、ひどい話だ」わたしは、それを物語った友人に言った「復讐をしたければ、死んだ女は男にたいしてすべきだった」

友人は答えた。「男はそう考えるけど、女は、そういうようには思わないのだよ」なるほど友人の言うところは正しかった。

(183 頁、原文[47])

最後に示された書き手（ハーン）自身の声は、読者が書き手と共にこの問題を共有することを可能にしている。すなわち、この物語を読んだ者は必ず「なぜ嫉妬の矛先が〈夫〉に一切向けられていないのか」という疑問を抱くが、最後に書き手がその点を指摘することで、そしてここではそれを性差を以て、とりあえずは落着かされている。これについて遠田勝氏は次のように指摘している。

ここで「私」の声が代弁しているのは、西洋の読者の一般の声、つまり西洋社会の倫理と論理であり、また、生きている者（現世）の倫理と論理である。また、さらにいえば、なんの罪もない（ように思える）後妻に同情する男側の倫理と論理である。（中略）

境界は、とりあえずは、ジェンダーに設定されている。しかし、ここでハーンが読者に踏み越えさせようとしている境界線が、ジェンダーだけでないことはあきらかだろう。ふたたび「私」が読者の先回りをしてあげた声、一行空きで記された、He was right. 「その通り」というわずか三語のつぶやきが誘い込むのは、異文化の、死者の、女性の世界、そして世俗的な倫理を超越する「至上の愛」という神話の世界である<sup>365</sup>。

---

<sup>365</sup> 遠田勝、前掲（註1）226頁。

氏の指摘通り、ハーンが西洋の読者に示したのは、「西洋とは、現世とは、男性とは異なった感覚で物語が存在しているのだ」ということ、また同時にそういったものを超えた普遍的ともいえる「愛」が物語の中核にあるということであろう。この物語で、読者に多くの「境界線」を踏み越えさせ、最後に愛に気付かせるというのは最も効果的で美しい物語の流れであろう。そして、同時に<夫>に約束を破られた<先妻>の行くあてのない嫉妬は、封建制度に無垢に従う<後妻>へと向けられてしまうという悲しみと空しさも感じられるはずである。「わたし」と「友人」が言う「男の考え方」或いは「女の感じ方」というのは、必ずしも生まれながらのものではなく、様々な人間関係を通じて、時に本人の意が介さないレベルで作られてしまうものであるということが、この物語を恐ろしく悲しいものになっているのである。決して抱いてはならないはずの嫉妬の念を抱いた、いわば「悪女」ともいえる<先妻>が、ハーンの世界においては凄まじい恐怖の中に言い表せぬ悲しみとして映るのは、このように、限りない愛情が無情にも破られてしまう日本社会に生きた女性であったことがあるだろう。

#### 第五節 上流武家社会における嫉妬—「因果話」 (1899) —

「破られた約束」に勝るとも劣らない恐ろしい嫉妬の話として、「因果話」*INGWA-BANASHI*がある。これは複数の側室を抱える大名の奥方の嫉妬が引き起こした恐怖の物語で『霊の日本』*In Ghostly Japan* (1899) に収められている。原話は松林伯円の「百物語」であるが、これが三部構成の大作であるのに対し、再話では一部、二部を省き、三部のみを扱っている。共通部分のあらすじはほとんど変更されてはいないが、わずかな部分の変更はハーンの意図を感じてみたい。

分析に先立って、あらすじを述べておこう。文政十二年(1829)の四月、大名の<奥方>が死を目前にし、側室の<雪子>を呼んでほしいと言う。<奥方>は自分の死後、<夫>の寵愛を受け、正妻になるようにと熱心に伝える。そして最後に<雪子>におぶわれながら満開の八重桜を見たいと言う。言われるがまま<奥方>に背中を向けた<雪子>に<奥方>はしがみつぎ、両手を<雪子>の着物の中へすべりこませ、彼女の乳房をつかみ「やっと願いが叶った」と叫ぶや死んでしまう。その手は<雪子>の身体の一部となったかのように、決して離れず、やむなくオランダ人医師により手首から切断することとなった。しかし、その後も毎晩彼女の胸を締め付け続けることとなった。そして、<雪子>は尼と

なったという話である。

この物語には、〈奥方〉の嫉妬と執念が彼女の手に移り、死後もなお、黒ずみ干からびた手によって〈雪子〉を苦しめ続けるという不気味さと恐ろしさがある。〈雪子〉はその手によって毎晩痛みを味わいながら、恐怖の中に生き続けなければならないのである。

それでは、なぜ〈雪子〉がこれほどまでに嫉妬を買ってしまったのか。言い換えれば、なぜ〈奥方〉はこれほどまでに〈雪子〉に対し執着し続けたのだろうか。この物語からは、一夫多妻が当然であった上級武士社会に生きる女性の苦しみを読み取ることができる。

### 5-1. 一夫多妻制の武士階級—「奥」の座を狙う側室たち

そもそも、武士階級の「結婚」はどのようなものであったのだろうか。「家」の維持と発展のために結婚が一つの通過儀礼として行われていたことは、これまでも触れてきた通りである。これについて、『日本女性の歴史 女のはたらき』では、常盤潭北の『民家童蒙解』の「婦人」の項目を取り上げ当時の結婚について説明がなされている。

「婦人を娶るは、父母に俸養給仕の助け、且子孫相続の為、且家を守らする為」であり、「舅姑夫によく愛敬を以て事へまつり、親に喜ばせませが孝行也。若し不和となれば親の苦勞になる、女の不孝これより大なるはなし」と説く。そこでは明確に嫁の立場を、舅姑への従順・服従・奉仕に徹することであるとし、継嗣を生むことによる「家」の存続、並びに「家を守る」こと、さらに夫を含めた婚家の父母に奉仕することにより、家庭の「和」が保たれることが、実父母への孝行にもつながるという訓誡である。

嫁の一方的な献身（孝行）が「家」の円滑な営みの鍵を握るという認識は、ほかの「女訓書」にもほぼ共通したものといえる<sup>366</sup>。

このように、男性が女性を娶るのは子孫相続のためであり、女性は自分の両親のためにも結婚生活において「従順・服従・奉仕」に徹し、尽くさなければならないのだという。そしてこれは男性にとっても女性にとっても家を守り親への孝を尽くすという考え方に基づくものであったことは言うまでもない。したがって、結婚とは恋愛の延長線上にあるものではなく、家を守るために周到に整えられたものであった。そして町人などとは違いこ

<sup>366</sup> 総合女性史研究会編『日本女性の歴史—女のはたらき』（角川書店、1993）122頁。

ういった考えが格段に重んじられた上流武士階級においては、結婚は非常に形式的なものとなる。以下は徳川家の結婚に関する言及である。

将軍家にとって高い家客の公家から正室を娶ることは、他の大名家に家格差を見せつけ絶対的な優位に立つ手段でした。

そのため正室となる相手の実家に将軍家の格式を保つだけの家格があればそれでよいという、きわめて形式的な縁組であったようです。

それだけに夫婦関係も形式的にならざるをえず、夫婦間はよそよそしく、夫婦の営みはなかったに等しいのです。（中略）

夫婦関係が親密なものになってくるのは六代将軍家宣からで、十二代将軍家慶の頃には、正室とのあいだにも子どもをもうける努力がなされるようになったのですが、それでも歴代将軍のうち正室の生んだ男子が将軍職に就けたのは家光一人だけで、あとはみな側室の子か養子です。

ところで将軍の縁組というのは、たいてい将軍世子と決まった幼少のころに、本人の意志とは無関係に内々に決められてしまいます<sup>367</sup>。

このように、一国のトップである将軍家では幼少のころに、ふさわしい家柄から適当な女子を結婚相手としてあてがわれることになっていた。それゆえ将軍自らの意志により選ぶことができた側室に比べて、奥方は実際に寵愛を受けることは少なかった。将軍家でなくとも、この「因果話」にある大名ほどの階級であれば、結婚は同様に形式的なもので、家の繁栄のために、有力な家が有力な家と結びつく一つの政略的なものであった。自由な恋愛をする余地すらない<sup>368</sup>武士階級の女性たちは、かなり早い段階で自分が幼いうちに定められた相手に尽くすために生まれてきたのだと悟るのである。

<sup>367</sup> 由良弥生『大奥のおきて「女人版図」しきたりの謎』（阪急コミュニケーションズ、2007）114-115頁。

<sup>368</sup> 由良弥生氏は武士階級における恋愛が「不義密通」と見做されていたことについて、次のように述べている。「不義密通といえば、1655（明暦一）年十月、四代将軍家綱の時代に、『姦通』の現場を見つけたときは、その場で男女とも討ち果たしてよいという布令が出ました。夫婦以外の者と情を通ずることを『密通』とし、一方が未婚者であっても『密通』でした。両者が結婚前で通じれば『不義』という考え方でした。ただし、妾というのは将軍はじめ武家社会で当然視されていましたので、不義密通にはあたりませんでした。けれども妾でない夫のある身や未亡人にかかわらず、女が男と情を通じれば『密通』、独身女性が男と通じれば『不義』とされたのです。」由良弥生、同上、186頁。

## 5-2. 武士社会における女性の出世

また、結婚が子孫相続と家の繁栄を目的としたものでありながらも、その一方で子どもの生存率が高くないこの時代に息子を産み、育て、跡継にするまで無事に育て上げることは必ずしも容易なことではなかった。だからこそ、前述のように女性は嫁ぎ先に腹を貸すことが第一の仕事であった。そしてこの多産多死の時代、基本的に子は多ければ多いほど好ましく、当然一人の女性のみでは十分な数を産むことはできない。したがって「因果話」のような上流階級の家で、大名である<夫>は本妻である<奥方>の他に複数の側室を抱えていたのは至極当然かつ一般的なことである。前引用に再び触れると、正室は有力者との血縁関係を結ぶことで家の権威を高めることが第一の目的であり、必ずしもその間に子を持たなくてもよい。したがって、側室が生んだ子が一家の跡継ぎとなるのは極めて普通のことであった。

それでは結婚をした武士階級の女性たちはどのように生きていたのだろうか。家という狭い世界の中に正室を筆頭とした階級社会が存在し、その中で側室たちは当然より良い待遇や、権力を手にしようとした。彼女の出世は彼女のものだけではなく、両親や兄弟、親類なども潤すことになるのであるから、様々な画策やいじめの中で必死に生き延びようとするのが女性たちの現実であった。

そして女性が家の中で出世する方法は、いうまでもなく「出産」である。以下は、女性の出世に関しての言及である。

側妾は基本的には奥女中として当家に仕える身分であり、当主の子どもを産んでも、当主の家族や親族の一員とはされなかった。ただしなかには、側室となり、独自の部屋と配下の女中を与えられ、配偶者に近い待遇とされた者がいる<sup>369</sup>。(中略)

藩主の子女を出産した者は「御一門格上臈」として厚遇された。とりわけ世子の生母は特別な扱いを受けている。(中略)

このように一八世紀後半以降、将軍家・大名家ともにみられる側室の制度改革は、側室自身に武家の血筋を求めるか、あるいは生母となった側室の格式を高めるか、いずれにしても、生母の女性の立場を正室に近い扱いで家秩序のなかに安定化させる試みとして行われたものと考えられる。(中略) 側室はその出自が低い場合であっても、

<sup>369</sup> その例として、米沢藩上杉家九代治憲の側室、お豊、薩摩藩島津家三代綱貴の側室二階堂氏等が挙げられている。

高い格式を与えられることにより、当家において家臣と区別される権威的立場を保証され、君臣秩序の構築が図られたものと考えられる<sup>370</sup>。

これはあくまでも大奥の話ではあるが、大名レベルであっても正室と複数の側室たちが同じ男性の相手として生活を共にしていたのであり、同様の状況であったことが推測される。生母となり、数いる子息の中で自分の息子が跡継となれば、当然母親自身も相当の権力を握ることになるのである。子どもを産むことが自分の出世に比例するため、夫に足しげく通ってもらうことが出世の機会を増やすことにつながった。逆に言えば、「腹」でしか自分の存在価値高め、主張することができないのが当時の女性たちであった。

#### 第六節 <奥方>の怨念一二つの嫉妬一

この点を踏まえ、<奥方>が<雪子>に向けた嫉妬について考えていこう。原話における嫉妬の意義がハーンによってどのように変更されたのか、原話と比較しながらみていく。

前述の如く、原話は松林伯円の「百物語」は三部構成の大作で、一部と二部では尼となった<雪子>を家に宿泊させる人々の様子が描かれ、三部で<奥方>から受けた恐ろしい出来事を<雪子>本人が語り聞かせる形となっているが、ハーンの再話では三部のみの内容を扱い、第三者の語りとなっている。<雪子>による恐ろしい思い出話は、より客観的な物語としての色彩を帯びていく。

そして、原話における以下の文章は、この物語の意義を端的に示していると言える。

嗚呼此貴婦人は其身大家の姫と産れ妙齡にして諸侯の内室常に翠張紅闈すいちようこうけいの中に眠り世憂き事も知らずして栄華の夢も見尽して病の為に此の世を去るは定命なれば是非なけれど慎むべきは嫉妬の一念死しての後に手足を異にし自ら求めて五体不具醜き死骸を埋葬され噂さを世々に残すとハ浅猿しかりける次第なり<sup>371</sup>。

このように<奥方>は由緒ある家の姫君であったにも関わらず、慎むべき嫉妬の念を抱いたことにより死後手首を切り落とされ、五体不具者として醜い死骸を埋葬され、噂の種

<sup>370</sup> 柳谷慶子「武家権力と女性—正室と側室—」藪田貫、柳谷慶子編『(江戸)の人と身分 4 身分のなかの女性』(吉川弘文館、2010)141-147頁。

<sup>371</sup> 小泉八雲、前掲(註240)412頁。

になってしまった、浅ましい女性であったというのである。すなわち、原話は女の手が別の女を苦しめ続ける恐ろしさと共に、女性の嫉妬心を戒める意義も含んでいると言える。

一方の再話にはこのような訓戒の意義はなく、登場人物を減らすことにより<奥方>から<雪子>への嫉妬心・執着心が強調され、恐ろしさも増大している。物語の筋はほとんど変わらないものの、ハーンによって描き直された「因果話」には原話とは異なったメッセージが組み込まれているはずである。ここではまず、<奥方>の抱いた「嫉妬」について考えたい。この物語に存在する嫉妬には、単なる男女間の「やきもち」だけではない、もう一つの「嫉妬」がある。そしてここにこそ、この物語の意味が隠されているはずなのである。

### 6-1. <お雪>への憧れと恨み—桜に込められた肉体的魅力—

「嫉妬」と言ってまっ先に思い浮かぶのは、男を性的な意味で独占したい、愛されたいという意味でのものであり、この感情は<奥方>が<雪子>のみならず多くの側室に抱いていたものであると考えられる。正室は側室とは格が違い、その地位は確固たるものとされていた<sup>372</sup>と考えられてはいるが、一人の男性から複数の女性が寵愛を受けようとしている空間において、女としての魅力あるいは受けている愛の大きさに明らかな違いがあれば、当然そこには嫉妬心は生まれるだろう。夫となる武士が幼い頃に、適切な年齢の女子としてあてがわれる正室は、通常その後家に入ってくる側室よりも年齢がかなり上であり、若い側室たちの存在により自らがないがしろにされていると感じるのもまた当然の感情であろう。<奥方>の嫉妬は、死に際にまで<雪子>のことで頭が埋め尽くされている場面から、読み取ることができる。

大名の奥方が死に瀕していた。(中略)そして今や文政十二年——西暦でいえば1829年——の四月であり、桜の花が咲き誇っていた。奥方は庭の桜に、春の喜びに思いをはせた。子供たちとのことを思った。夫の幾多の側室のことを——特に十九歳の雪子  
のことを——考えた。

「愛しい妻よ」大名は言った。「そなたは三年もの間、病に苦しんだ。そなたの快癒

<sup>372</sup> 由良弥生氏は側室の地位について、以下のように述べている。「またたとえ子に恵まれても、その子は形式上、正室の子とされ、正室を母とされる。そのため生母であっても実の子から呼び捨てにされるのである。家族として扱われるのは、息子が当主となった場合だけである。側室であろうと所詮、女中であるといわんばかりだ。」由良弥生『大奥よろず草紙』(原書房、2003) 65頁。

のために、あらゆる手をつくしてきた。昼夜をかたわらず側につきそい、祈り、再三断食までした。だが我らの懸命の看護のかいもなく、名医の力も虚しく、いまやそなたの命数も尽き果てんとみえる。(中略) われら一同、たゆみなく念仏読経を手向けよう。そなたが虚空の暗闇をさまようことなく、速やかに成仏して極楽往生できるようにと」  
彼は妻を撫でさすりながら、優しさの限りをこめて語りかけた。すると、まぶたを閉じたまま、虫より細き声音で彼女は答えた。

「勿体ないお言葉——有難く——まことに有難く存じます——仰せのとおり、この三年もの長いあいだ病の床にありました。(中略) 死に臨んだこの期に及び、何故正しき道を踏みたがえたりしましょうか。……このような時に浮世のことなど考えるのは、あるいは間違いかもしれません。——ただ最後に一つだけお願いがございます——一つだけ……雪子どのをここにお呼び下さいませ——あの子を実の妹のようにかわいがっておりますことは御存知でしょう<sup>373</sup>」

(下線は筆者、140-141 頁、原文[45])

このように冒頭部分、春の美しい描写とコントラストをなすかのように、<奥方>の<雪子>に対する執着心が描かれている。ここで、<大名>の「優しさの限り」を込めた言葉は、三年間も側室に囲まれながら闘病し続けた<奥方>にとってもはや何の意味もなさない。彼女の中にあるのは、「十九歳の雪子」の存在だけなのである。

そして、この後<奥方>は<雪子>に負ぶわれて桜が見たいと懇願し、背を向けた<雪子>におぶさりながら手を着物の中に入れ、彼女の胸を鷲掴みにし息絶えるのであるが、この「桜」と「胸」が<奥方>の第一の嫉妬を象徴するものであると見ることができる。それは、ハーンによる以下の注釈である。

「庭に八重桜の木があることは知っているでしょう。一昨年大和の吉野山から持ってきたものです。今ちょうど満開だと聞きました。(中略) そう、雪子どの、お前の背中で——背中におぶっておくれ……」

こう頼むうちに、彼女の声は次第にはっきりとして、力がこもってきた——まるでその願いの強さが彼女に新たな力を授けたかのようであった。(中略)

<sup>373</sup> 小泉八雲、前掲(註 240) 140-141 頁。以下、「因果話」に関する引用については、頁数のみを本文に記す。

「この世における最後の願いだ」彼は言った。「桜の花<sup>(2)</sup>をいつも愛で好んでいた。  
(中略) さあ、雪子、この人の願いを聞き届けておやり」

あたかも乳母が子供に、お摺まりなさいと背中を向けるように、雪子は奥方に自分の両肩を差し向けて、言った。

「奥方様、用意できております。如何いたせばよろしいのか、どうぞ御申しつけくださいませ」

「ああ、こうすればよいのです！」

死にかかった女は答えると、とても人間わざとは思えぬほど力を振りしぼって雪子の肩にしがみつき、体を起こした。だがまっすぐ立ち上がると、素早くその痩せた両手を肩の上から着物の下へとすべりこませ、若い女の乳房をぐっつつかんで、途端に不気味な笑い声を上げた。

「これで願いが叶った！」彼女は叫んだ——「桜の花を望んだこの願い——ただし庭の桜のことではない！……望み叶うまで死ぬに死ねなかった。だが今、それが叶ったのだ！——ああ、嬉しや！」

そして言い終わると、うずくまっている若い女の上に倒れこみ、こときれた。(中略)

(2) 日本の詩文では伝統的に、婦人の肉体の美を桜の花に、心の美を梅の花に例える。

(下線は筆者、142-146 頁、原文[46])

物語の最後に、ハーンが書き添えた「日本の詩文では伝統的に、婦人の肉体の美を桜の花に」例えるというこの註釈により、読者は単なる美しい桜木から<雪子>の肉体美を連想することができる。しかもここでは一般的な桜ではなく、より肉厚で、豊満な花を咲かせる「八重桜」であることから、それが<雪子>の女性的な肉体的魅力の象徴、すなわち<奥方>が最後まで執着した胸であるということが容易に結びつくのである。そして、<雪子>の乳房をつかんだ<奥方>は、「桜の花を望んだこの願い——ただし庭の桜のことではない！」と言い、息絶えるのである。

<奥方>の嫉妬は、<大名>が非常に寵愛する一九歳の<お雪>に向けられた。そして、そこには<大名>の寵愛を欲しいままにする彼女の肉体的魅力が深く関わっているのである。

## 6-2. <後妻>への羨みと無念—母親の象徴としての胸—

しかし、結婚が恋愛に基づくものでなかったこの時代に、<大名>からの愛のみが嫉妬を引き起こす要因であったとは言えまい。それよりもむしろ、社会が求めた妻、すなわち「腹」として自分が成し得なかった役割を、<後妻>がすんなり果たそうとしていることへの焦り、そしてそれにより自分が初めからなかったものとされてしまう寂しさ、そういったことが嫉妬へと変わっていったということを忘れてはならない。本来自分が担わされていたはずの「家を維持する」という役割を果たせていないことへの執着こそが、彼女をより苦しめさせたのである。

この<奥方>の無念さが、その気持ちとは裏腹な言葉として以下の場面で表される。

大名の奥方は目をあけると、雪子を見て、言った。

「ああ、雪子どの！……雪子どの、よく来てくれましたね！（中略）雪子どの、私はもう長くありません。この上は、大切な殿様に諸事忠実にお仕えするように。（中略）いつも殿の御寵愛深く——そう、私の幾百倍も——そしてお前がじきに高い位に取り立てられ、殿の正室となるように……それからくれぐれも殿様のことをいつも大事にお世話するのです。決して他の女に御寵愛を奪われてはなりませんよ……お前に言いたかったのはこの事です、雪子どの……わかりましたか」

「まあ、奥方様、なんてことを」雪子は反論した、（中略）「御存じのとおり、私は生まれも貧しく、卑しいものでございます。——畏れ多くも殿の御正室になろうなど望むべくもございません」「否、否！」奥方はかすれた声で言い返した——「今や礼儀的な言葉など述べている場合ではありません。おたがいの本心のみを語りましょう。私が死ねば、お前は必ずや上の位に昇進します。そして重ねて言い置きますが、お前が殿の正室となることは私の願いなのです——そう、雪子どの、私が無事成仏することよりも、お前のことを強く願っているほどです！

（下線は筆者、141-142 頁、原文[47]）

このように<奥方>はくどいほどに<雪子>の出世を口にする。ここからは、自分が生きている間こそ<雪子>の出世を阻むことができたが、それも叶わなくなった今、その現実を自分の望みでもあるとしてあえて口にすることで、せめて正室の威厳を保とうとする姿が浮かび上がる。肉体的な魅力を持ち、<大名>の寵愛を受ける<雪子>の出世は<奥

方>の立場から見れば「生まれも貧しく、卑しいもの」の下剋上であった。

一方、<雪子>側から見れば、正室である<奥方>が死に瀕している今、その座は側室に与えられる可能性が高くなり、<大名>の寵愛を受けている自分にとっては二度とない出世の機会ということになる。そして彼女が貧しい家の出身であるならなおさら、彼女を当てにしている家族、親類のためにもこの機会を逃すわけにはいかなかったはずである。

また、死に際において<奥方>は子どもたちのことを思っているが、それが彼女自身の子どもたちであるとは記されていない。<奥方>が死ななければ、自分が好む子を跡継として推すことができたとしても、<奥方>の死後<雪子>が息子を産み、変わらぬ寵愛を受け続ければ、彼女の産んだ子が継子となり、彼女こそこの家の女社会における権力者となる。この点を考えると、単なる愛情による嫉妬よりもむしろ、本来自分が果たすはずであった地位を、若娘に奪われてしまうことを阻めない<奥方>の無念さが<雪子>への羨み、嫉妬を生み出していったと考えられる。

そしてここに、<奥方>が<雪子>の「胸」に執着したもう一つの意義を見ることができるのである。<奥方>は<雪子>の胸をつかみ、決して離さず握りしめ続けることで、彼女の「母性」を抹殺することを願ったのである。そして、ここでも「桜」は、<雪子>の母親としての役割に対する執着として見るのできるのである。

冷たい手が、一体どうしてかはわからないが、若い女の乳房に固着してしまったのだ——まるでその生身の肉体に根が生えてしまったかにみえた。雪子は恐怖と痛さで気を失った。

医者が呼ばれた。彼らには何がどうなったのか、さっぱり理解できなかった。(中略)——あまりにびったりと張りついていたので、すこしでも引き離そうとすれば、血を流さずにはすまなかった。それは指ががっちり食い込んでいたからではない。手のひらの肉が胸の肉と、何とも説明しがたい具合に合体してしまったからなのだった！

その当時、江戸で最も腕のたつ医者と言え、それは異人の蘭方医であった。彼を呼ぶことが決せられた。注意深く診察した後、自分にはどうもこの症状が理解できない、とりあえず一刻も早く雪子を楽にするためには、死体から手を切り落とす以外に方策がないと述べた。(中略) 奥方の両手は手首のところで切断された。しかし両方の手のひらだけは相変わらず胸を掴んだままだった。そしてそこで間もなく黒ずみ干からびていった——ずっと前に死んだ人間の手のように。

だが、これはまだ恐怖の序の口にすぎなかった。

萎びて血の気も失せているかにみえても、その手は死んではいなかったのだ。折にふれ、二つの手はうごめいた——ひそかに、大きな灰色の蜘蛛のように。それから後というものは、夜な夜な——必ず丑の刻になると——手は絡まり、締め付け、責めさいなむのだった。その苦痛は寅の刻にならなければ収まらなかった。

(144-145 頁、原文[48])

このように、一度胸をつかんだ<奥方>の手は手首から斬り落とされてもなお、それに執着しく雪子>を苦しめ続けた。そして出家し尼になってしまうのである。

そしてこの物語が一見美しい春の景色から始まったのには、恐怖の結末との対比の効果もあるだろうが、何度も読み返せば、最初にある「桜」が「胸」へと結びつくことが分かる。そしてその胸は、単なる肉体的魅力ではなく、母親としての役割を意味するものなのである。

ここでハーンによる別の再話作品「乳母桜」について少々見てみよう。これは金持ち夫婦の間に生まれた一人娘が、大病を患った際、その乳母が身代わりになって死ぬ話で、その乳母の代りにその夫婦が桜の木を寺に植える話である。そしてこの物語の最後は、以下のように締めくくられる。

そして翌年の二月十六日になると——その日はお袖の命日だった——見事に花を咲かせた。そのようにして二百五十四年間花を咲かせ続けた。きまって二月十六日であった。その白に薄紅のさした花びらは女の乳房の先が乳で湿っているかのようであった。それで人々はその木を「乳母桜」と呼んだ<sup>374</sup>。

この作品同様、「因果話」における「桜」と<奥方>が最後まで手を離そうとしない<雪子>の「胸」は、共に女性の「母親としての役割」一子を産み、育み、家を維持させていく存在——への執着として見ることができる。

このように考えると<奥方>の嫉妬は、封建制度に生き、その社会に忠実であればあるほど抱かざるを得ない、いわば封建制度が生み出した嫉妬であったということになるだろう

---

<sup>374</sup> 小泉八雲、前掲（註 240） 37 頁。

う。そして、原話ではこういった女性を戒める意味合いが含まれていたわけだが、ハーンの作品にはそういった部分は排除された。そしてそれにより、そこはかたない恐ろしさと限りない執着心を持つ女性の姿が強調され、それをもって西洋の読者に日本の社会を提示したのである。

## おわりに

ここまで、第Ⅱ部で扱うのは、ハーンが心酔の松江時代（1890-1891）、絶望の熊本時代（1891-1894）、神戸時代（1894-1896）における西洋社会での生活を経て、晩年の東京時代（1896-1904）に入ってから出版された『霊の日本にて』 *In Ghostly Japan* (1899)、『影』 *Shadowings* (1900)、『日本雑録』 *A Japanese Miscellany* (1901) 『骨董』 *Kotto* (1902) 『怪談』 *Kwaidan* (1904) に収められた七作品を見てきた。「孝」や「貞」に生き、「嫉妬、復讐」への執念を抱く女性たちは、いうまでもなく、前期の再話作品には見られない多様な女性たちであった。

「蠅のはなし」の〈玉〉は死後も孝への思いを失うことなく蠅の姿としてこの世へ戻って来る。そして、その思いに全く気付かない〈九兵衛〉（男）に対し、〈玉〉の意志を伝えるのもまた、〈妻〉（女）であった。「雉子のはなし」の〈妻〉は、血縁を超えた孝道を何よりも重視し、その思いを命がけで果たそうとした。物語は彼女を称え、その〈夫〉を追放するという流れをとっている。

「葬られたる秘密」は、節操のない〈妻〉を主人公とした、訓戒の意味を含む原話を、貞淑かつ母性愛に満ちた〈お園〉の物語として描きなおされたもので、ストーリー自体の意義が大きく変更された。この、淫乱な女性の物語をその真逆の女性の姿に描き直した背景には、ジャポニスム文学によって作り上げられた日本女性のイメージ、すなわち、拒むすべを知らない、慰みとしての女性像を否もうとする書き手ハーンの意図があることが分かる。来日前、ジャポニスム文学から強い影響を受けたハーンが、妻セツと幸福な生活を送る中で培った日本女性の姿を〈お園〉に込めたのだと言える。さらに、サスペンシ的な要素の強い「お貞のはなし」でも〈お貞〉は、表面上は極めて一途で、死後も〈男〉を思い続け、生まれ変わった後もまた、同じ男と添い遂げる女性である。（ただし、実際には霊的な能力で思うままに後妻や子どもたちを皆殺しにしているという恐ろしい部分も忘れてはならない。）しかし、いずれにせよ、こうした「孝」や「貞」に生きた江戸時代の庶民（農民や町人）レベルの女性たちは、封建制度という枠の中で、男性中心社会に慢心する男性たちを啓蒙していると言える。

さらに、前期の作品には決して見られることのなかった傾向、すなわち、ハーンが女性の嫉妬や復讐を描くようになったことは注目に値する。それは、単なる自己犠牲的女性ではなく、心の葛藤、抜け出すことのできない苦しみといった人間的感情を女性に与え、男たちに

復讐することで欲望を満たさせているからである。近世に描かれた嫉妬話の多くは、当然女性の嫉妬心を戒めるもので、時に、その嫉妬心をむやみに駆り立てるべきではないという男性へのメッセージの意味をも含んでいた。本論文では、これまで<夫>の裏切りを<先妻>が許す和解の物語とされてきた「和解」について、復讐の物語として読み解いた。<夫>に裏切られたことを苦に亡くなった<先妻>は、死後に再び戻り、彼と再会を果たした後、静かに姿を消すのではなく、朽ち果てた死体として男の前に現れた。これは単なる恐怖を超えた絶望を以て復讐したのだと言える。また、イエの存続が何よりも重んじられた封建制度において、それに従う<後妻>へと向けられた<先妻>の嫉妬を描いた「破られた約束」では、<先妻>が<後妻>の首をもぎ取るという残酷なシーンが、非常な悲しみの中で描かれている。こうした物語は単に「裏切った者」へ対する「裏切られた者」の憎しみ、嫉妬、復讐といったものではなく、自分の意志（愛情）で結婚相手を選ぶことのできない日本社会における女性たちの行き場のない悲しみと、虚しさを示している。

そして「結婚」が双方の感情を考慮せず、かつ男性優位な形で取り決められる社会、そしてそこに生きる日本女性の葛藤や絶望が、男女間の愛情が重要視された西洋の読者へ向け提示されたのは、上流武士階級の嫉妬を描いた「因果話」も同様である。<奥方>が<雪子>に抱いた嫉妬は二種類あった。一つは、言うまでもなく、男を性的な意味で独占したい、愛されたいという意味でのものである。そしてもう一つは、世継ぎを生まないまま、この世を去らなければならない<奥方>の無念が、それをまさに果たそうとしている若い<雪子>へ向けられたという、いわば封建社会が生み出した嫉妬であった。たとえ死後の世界であろうとも自らの欲望や願いを果たそうとする女性たちが描かれるようになったことは、初期の作品の傾向とは大きく異なる傾向であると言える。そこには、男性中心の封建社会に生きる女性たちを、死後の世界で復讐させることで、解放しようとしたハーンの姿が浮かび上がってくる。

これら晩年の作品からは、『東の国から』や『心』などの初期の作品にある女性たちのように、エキゾチシズムやジャポニスムといった日本のイメージから脱却したハーンの姿が見て取れる。それは、言うまでもなく、松江時代、熊本時代、神戸時代を経て確実に深化したハーンの日本理解と連動している。孝道を守り自己犠牲に徹する者、一途な思いを貫く者、行き所のない嫉妬心から復讐せざるを得ない者といった女性たちは、単に得体の知れない、エキゾチックな者として存在しているのではない。第I部とは異なる、こうした多様な生き方をする女性たちは、制限のある中でも自己を持ち、思う通りに生き、周囲に影響を与える

女性の象徴である。そしてそれらは、女性が次第に社会に進出しながらも、その一方で男性中心の社会に生きざるを得ない女性が多く存在した 19 世紀の西洋社会に向け提示された、新たな女性像であった。

## 終章 西洋へ示された日本女性

1854年、日本が鎖国を解くと間もなく始まったジャポニスムは、絵画、骨董品などにとどまらず、文学作品、オペラ、音楽等にまで広がっていった。日本を題材にしたコミック・オペラ『黄色い皇女』（サン＝サーンス）、白人女性モデルに着物を着せた、モネ作『ラ・ジャポネーズ』等が如実に示しているように、そこには「日本女性」が比類ないレベルで存在し、西洋諸国における日本熱は「それはもはや流行ではなく熱狂であり、狂気である<sup>375</sup>」と見なされるに至った。ピエール・ロティ『お菊さん』はジョン・ルーサー・ロング『蝶々夫人』に多大な影響を与え、それは様々な形に変化しながら現在でも受容されている。ハーンもまた、こうしたジャポニスム、異国趣味の大流行から自由ではなく、とりわけロティに関して言えば、大いに影響を受け続けた。来日前のハーンは築かれた日本のイメージに憧憬を抱き、小さなおとぎの国日本へ足を踏み入れたと言っても過言ではない。

ところで、江戸末期から大正まで続いた日本ブームはジャポニスムと称されたが、現在ではクール・ジャパンとしてより様々なジャンルの日本文化が世界中で受容され続けているのは周知の事実である。『ドラえもん』、『ポケット・モンスター』などの漫画やアニメから、村上春樹の諸小説まで、日本のソフト・パワーともいえる文化の発信と受容は確実にその範囲を広げているが、その一方で、日本女性のイメージと言え、変わることなく「小さく」、「カワイイ」存在で、また時に、「ゲイシャ」を連想させる存在であることも否めない。『ラストサムライ』*The Last Samurai* (2003)、『SAYURI』*Memoirs of a Geisha* (2005) などのハリウッド映画でさえ、「ゲイシャ」としての<さゆり>、健気に西洋人男性に尽くす女性<たか>を以て、未だに遙か昔のジャポニスムが作り上げた固定的なイメージを増長させ続けている。

小さい人形のような、得体の知れない、男性の慰みとしての日本女性のイメージが、根強く蔓延っているこうした実情の中で、19世紀に生きたラフカディオ・ハーンと、彼が描きだした日本女性像に注目すると、それらがいかに、そうした歪曲された女性像と対峙するものであるかが明らかになっていく。これまでの研究では、ハーンが再話の中に描きだす女性像には、母ローザへの思慕や、妻セツの影が色濃く表れていると指摘されてきたが、実はこの問題を考えるとき、ハーン一個人にのみ注目するのではなく、彼を取り巻いてき

<sup>375</sup> 寺本敬子「フランスにおける『日本文化』の受容と生成」森村敏己編『視覚表象と集合的記憶』（旬報社、2006）146頁。

た環境—19世紀という時代、そしてギリシャに生まれ、人生の大半を西洋で過ごしたという要因—にまで視野を広げる必要があった。本論文では、これまでに指摘されてこなかったこの部分について、19世紀という時代の中で、ハーンがいかにそれまでとは異なった作品を西洋へ発信しようとしたか、その意図を明らかにすることを目的とした。そしてその結果、以下のようなことが浮き彫りになった。

第Ⅰ部で扱った初期の作品では、エキゾチックな国としての「日本」、不可解な存在としての日本人描写が目立ち、来日前、日本に関する多くの書物や、ジャポニスム文学に触れてきたハーンの東洋への憧れ、異国趣味的要素が浮かび上がってきた。それらは、現在の日本人読者に郷愁<sup>ノスタルジー</sup>といったものよりもむしろ、不自然さや驚きを与えるもので、そこには、日本語能力の問題から明治期日本の現実を捉えられなかったハーンの姿、あるいは存在しない日本の姿を彼の中にある異国趣味というフィルターを通して描き出すことに留まってしまう、ハーンの限界も見て取れた。しかし、こうした矛盾や不自然さを含む物語であることは否めないものの、そこに描かれた女性像に注目してみれば、彼女たちは全て、エキゾチックな姿の中に強い意志を持ち行動する女性たちであり、それまでのジャポニスム小説が生み出した単なる人形としての日本女性像とは異なっていることもまた確かである。すなわち、この初期の段階から、既存の日本女性のイメージを覆そうとするハーンの姿も浮き彫りになった。そしてこの姿勢は、晩年の再話活動の深化へ結実していく。

第Ⅱ部では、近世の物語が原話となっている再話作品を取りあげ、本格的な再話活動の成果に注目した。それらの作品からは、異国趣味にとらわれないハーンの姿が見て取れた。それは、言うまでもなく、心酔の松江時代、絶望の熊本時代、そして西洋社会に身を置いた神戸時代を経て、確実に深化したハーンの日本理解と連動している。孝道を守り自己犠牲に徹する者、妻として、母として一途な思いを貫く者、行き所のない嫉妬心から復讐せざるを得ない者といった様々な女性たちは、最早得体の知れない、エキゾチックな者としての存在ではない。自分の信念を貫き愚かな男性を教化する女性たちは、「女性は男性（父・夫・息子）に従うべきであるとする考え（三従の道）」とは異なっており、自らの存在価値を示したい、あるいは、男性の愛情を得たいといった欲望を満たそうと執念を燃やす女性たちは、本来、嫉妬を固く禁じる「七去の悪」によれば悪女そのものであったが、再話ではその要素は排除されている。すなわち、ハーンによって描き直された女性たちは、彼女らを縛り付ける封建社会という枠の中で、人間らしく、主体的に生きようとする者たちの姿なのである。そしてこれらは、それまでのジャポニスムの流れによって構築された日本

女性像への挑戦であり、現在もなお、多くの人々が一つのステレオタイプに集約しようとする「日本女性像」とは異質な、多様な生を生きる存在であることが分かった。

ハーンが古い日本の物語を再話という形で蘇らせることができたことについて、これまでの研究では、彼が西洋至上主義的思想を持たなかったこと、自らのアイデンティティをギリシャ（東洋）へ置いていたこと、そして母ローザへの追慕や妻セツに見た理想的女性像が強い影響を与えたとみなされてきた。しかし、ここまで述べてきたように、ラフカディオ・ハーンの再話作品について、原話となった新聞記事や近世の物語とハーンの再話を、日本女性が生きた社会や風俗を踏まえ比較し考察することで、それらに留まらない、新たな視点を提示することができた。日本女性をエキゾチックな、得体の知れない者として描こうとした第Ⅰ部の作品から、封建社会という枠の中で、多様な生き方をし、周囲を教化したり復讐したりする女性たちを描いた第Ⅱ部の作品に見られる変化について考えるとき、ハーンが多くの外国人同様、否それ以上にジャポニズムという大きな流れの中に身を置いていたことを無視することはできない。重要なのは、ハーンは日本という一つの幻想に沸いた19世紀の西洋社会に生き、ジャポニズムの中で無視できない「日本女性」という存在に強く影響を受けながらも、それらに異を唱える形で「女性もの」を描くに至ったという事実である。本論文では、再話作品が描かれた背景（ハーンの日本体験やセツの貢献）だけではなく、再話作品が描かれるに至った背景（ジャポニズムという大きな流れ）と、発信先の背景（西洋諸国）といった、これまで見落とされがちだった部分にまで視野を広げることで、それらが西洋社会に蔓延する固定的なイメージを覆そうとするハーンの挑戦であったことを明らかにした。

そして、これはハーンが想定した19世紀の西洋人読者にだけではなく、現代の日本社会における日本女性のイメージにも示唆を与えうるものとなっている。日本は近代化すると間もなく、日清・日露戦争に向け、女性に良妻賢母思想を強く押し付けるようになり、日本女性が近世よりもむしろ、近代において画一化された生き方をせざるを得なかったのは周知の事実である。1904年9月、すなわち日露戦争の真っ只中に急逝したハーンが、明治期の女性たちではなく、あえて近世の女性たちに注目し、再話活動を続けていった意図を考慮すると、そこに、単に古き良き日本における「慎ましやかに男性に従う女性の姿」ではなく、むしろその対極にある存在、すなわち、社会の中で強く、思いを貫こうと生きる女性たちの姿がおのずと浮かび上がってくる。したがって、ハーンの再話作品を考えると、ハーンがジャポニズムの中に確かに存在した人物であること、そして近代化に邁進す

る日本で晩年を迎えたハーンがたどり着いた再話作品が、近世の物語であるということをも蔑ろにすることはできない。これまで、ハーンの描いた美しい日本の中に、失われゆく旧日本の良さを見出そうとする研究が多かった。しかし、現代を生きる私たちは、「女性もの」の女性たちを画一化された日本女性像の中に閉じ込めてしまうような読み方から脱し、いかに自由な、解放された生を生きる女性たちであったかを考えるべき段階に来ているのである。本研究では、これまで考慮されてこなかったジャポニズムという視点を取り入れ、分析、考察を行ってきた。これは、今後のハーン研究において新たな視点と展開に寄与し得るものである。

## 参考文献

### 1. 基本資料

小泉八雲、田部隆次他訳『小泉八雲全集〈第1-17巻〉』（第一書房、1926）。

ラフカディオ・ハーン著、平川祐弘他訳『ラフカディオ・ハーン著作集（第1-15巻）』（恒文社、1989）。

小泉八雲著、平川祐弘『明治日本の面影』（講談社、1990）。

小泉八雲著、上田和夫編『小泉八雲集』（新潮社、2012）。

小泉八雲著、平井呈一訳『東の国から・心』（恒文社、1975）。

小泉八雲著、平川祐弘訳『怪談・奇談』（講談社、1990）。

小泉八雲著、平井呈一訳『日本瞥見記〈上〉』（恒文社、2009）。

小泉八雲著、平井呈一訳『日本瞥見記〈下〉』（恒文社、2009）。

ラフカディオ・ハーン著、池田雅之編『妖怪・妖精譚』（ちくま文庫、2009）。

ラフカディオ・ハーン著、池田雅之訳『新編日本の面影』（角川学芸出版、2010）。

Hearn, Lafcadio. 1895. *Out of the east : reveries and studies in new Japan*. Boston : Houghton, Mifflin and Co. ; Cambridge : Riverside Press.

Hearn, Lafcadio. 1896. *Kokoro : hints and echoes of Japanese inner life*. Boston : Houghton, Mifflin and Co. ; Cambridge : Riverside Press.

Hearn, Lafcadio. 1899. *In Ghostly Japan*. Boston: Little, Brown and Co.

Hearn, Lafcadio. 1900. *A Japanese miscellany*. Boston: Little, Brown, and company.

Hearn, Lafcadio. 1901. *A Japanese Miscellany*. Boston, Little, Brown, and company.

Hearn, Lafcadio. 1902. *Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs*. New York: The Macmillan Company ; London : Macmillan & Co., ltd.

Hearn, Lafcadio. 1904. *Kwaidan : stories and studies of strange things*. Boston; New York : Houghton, Mifflin and Company.

## 2. 単行本

- 赤木志津子『日本史小百科 女性』(近藤出版社、1977)。
- 浅野三平『八雲と鴉外』(翰林書房、2002)。
- 新井勉『大津事件の再構成』(御茶の水書房、1994)。
- 朝日新聞社編『朝日新聞の記事にみる恋愛と結婚—明治・大正』(朝日新聞社、1997)。
- 李在銑著、丁貴連、筒井真樹子訳『韓国文学はどこから来たのか』(白帝社、2005)。
- 飯塚朗、内田道夫、駒田信二『中国古典文学大系』(平凡社、1969)。
- 池田雅之『ラフカディオ・ハーンの世界』(角川学芸出版、2009)。
- 池田雅之編、高橋一清編『古事記と小泉八雲(日本人の原風景 1)』(かまくら春秋社、2013)。
- 池野誠『小泉八雲と松江時代』(沖積舎、2004)。
- 井上清『日本女性史』(三一書房、1962)。
- 上田秋成著、高田衛、稲田篤信『雨月物語』(筑摩書房、1997)。
- 上田博『明治の結婚小説』(おうふう、2004)。
- 宇野邦一『ハーンと八雲』(角川春樹事務所、2009)。
- サラ・M. エヴァンズ『アメリカの女性の歴史—自由のために生まれて』(明石書店、1997)。
- 大口勇次郎、服藤早苗、成田龍一編『新体系日本史 9 ジェンダー史』(山川出版社、2014)。
- 大藪友和『世界「文化力戦争」大図解 クール・ジャパンが世界を制す』(小学館、2008)。
- 太田雄三『ラフカディオ・ハーン—虚像と実像』(岩波書店、1994)。
- 大塚英志『「捨て子」たちの民俗学—小泉八雲と柳田國男』(角川学芸出版、2006)。
- 小川さくえ『オリエンタリズムとジェンダー—「蝶々夫人」の系譜』(法政大学出版局、2007)。
- 尾佐竹猛『大津事件—ロシア皇太子大津遭難』(岩波書店、1991)。
- 落合孝幸『ピエール・ロティ—人と作品—付 ロティをめぐる女性群像』(駿河出版社、1992)。
- 懐徳堂記念会編『異邦人の見た近代日本』(和泉書院、1999)。
- 梶谷泰之『へるん先生生活記』(恒文社、1998)。
- 草間八十雄『近代下層民衆生活誌』(明石書店、1987)。
- 工藤美代子『聖霊の島—ラフカディオ・ハーンの世界 (ヨーロッパ編)』(集英社、1999)。
- 工藤美代子『夢の途上 ラフカディオ・ハーンの世界(アメリカ編)』(武田ランダムハウスジャパン、2008)。
- 工藤 美代子『神々の国—ラフカディオ・ハーンの世界 (日本編)』(武田ランダムハウスジャパン、2008)。

- 熊本大学小泉八雲研究会編『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から』(恒文社、1993)。
- 桑原羊次郎『松江に於ける八雲の私生活』(島根新聞社、1950)。
- 小泉一雄『父「八雲」を憶ふ』(警醒社、1931)。
- 小泉一雄『父小泉八雲』(小山書店、1950)。
- 小泉節子、小泉一雄『小泉八雲』(恒文社、1989)。
- 小泉時、小泉凡『増補新版文学アルバム小泉八雲』(恒文社、2008)。
- 児玉実英『アメリカのジャポニスム美術・工芸を超えた日本志向』(中央公論社、1995)。
- ジョナサン・コット著、真崎義博訳『さまよう魂—ラフカディオ・ハーンの遍歴』(文藝春秋、1994)。
- 小谷野敦『江戸幻想批判—「江戸の性愛」礼讃論を撃つ』(新曜社、2008)。
- 小谷野敦『日本文化論のインチキ』(幻冬舎、2010)。
- 佐伯順子『「愛」と「性」の文化史』(角川学芸出版、2008)。
- 佐々木健二郎『日本文化ニューヨークを往く』(東京キララ社、2006)。
- 島田謹二『日本における外国文学 上巻』(朝日新聞社、1975)。
- 島根県教育委員会編『明治百年島根の百傑』(島根県教育委員会、1968)。
- 島根大学附属図書館小泉八雲出版編集委員会、島根大学ラフカディオ・ハーン研究会『教育者ラフカディオ・ハーンの世界—小泉八雲の西田千太郎宛書簡を中心に』(ワン・ライン、2006)。
- 島根大学附属図書館『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン—「死者たちの町」が生む文化混淆の想像力』(今井印刷、2011)。
- 下山弘『遊女の江戸—苦界から結婚へ』(中央公論社、1993)。
- 女性史総合研究会『日本女性史 第3巻 近世』(東京大学出版会、1982)。
- 女性史総合研究会『日本女性生活史〈第3巻 近世〉』(東京大学出版会、1990)。
- 鈴木孝一『ニュースで追う明治日本発掘〈4〉憲法発布・大津事件・壮士と決闘の時代』(河出書房新社、1994)。
- E・スティーヴンスン著、遠田勝訳『評伝ラフカディオ・ハーン』(恒文社、1984)。
- 瀬地山角『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学』(勁草書房、1996)。
- 総合女性史研究会編『日本女性の歴史 文化と思想』(角川選書、1993)。
- 総合女性史研究会編『日本女性の歴史 女のはたらき』(角川選書、1993)。
- 大東俊一『ラフカディオ・ハーン—思想と文学』(彩流社、2004)。

- 高木侃『三くだり半と縁切寺 江戸の離婚を読みなおす』（講談社、1992）。
- 高木侃『三くだり半—江戸の離婚と女性たち』（平凡社、1999）。
- 瀧音能之『古事記 22 の謎の収集』（青春出版社、2012）。
- 竹田晃、仙石知子、小塚由博、黒田真美子『中国古典小説選〈8〉 剪灯新話—明代』（明治書院、2008）。
- 竹村民郎『廃娼運動—廓の女性はどう解放されたか』（中央公論新社、1982）。
- 田中雄次編、福澤清編『現代に生きるラフカディオ・ハーン』（熊本出版文化会館、2007）。
- 谷川健一、大和岩雄編『民衆史の遺産 第3巻（遊女）』（大和書房、2012）
- 陳姪媛『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』（勁草書房、2006）。
- 築島謙三『ラフカディオ・ハーンの日本観増補版』（勁草書房、1984）。
- 堤和彦『NHK「COOL JAPAN」 かつこいいニッポン再発見』（NHK 出版、2013）。
- E・L・ティンカー著、木村勝造訳『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』（ミネルヴァ書房、2004）。
- 遠田勝『〈転生〉する物語—小泉八雲「怪談」の世界』（新曜社、2011）。
- ジョセフ・S・ナイ著、山岡洋一訳『ソフト・パワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』（日本経済新聞社、2004）。
- 内藤誠『外国人が見た古き良き日本』（講談社インターナショナル、2008）。
- 中江和恵『江戸の子育て』（文藝春秋、2003）。
- 中村彰彦『明治を駆けぬけた女たち』（ダイナミックセラーズ出版、1994）。
- 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』（岩波書店、1998）。
- 西成彦『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』（紀伊國屋書店、2004）。
- 西川盛雄『ラフカディオ・ハーン—近代化と異文化理解の諸相—』（出版社九州大学出版会、2005）。
- 西川盛雄、アラン・ローゼン、藤原まみ他『ハーン曼荼羅』（北星堂書店、2008）。
- 西田千太郎『西田千太郎日記』（島根郷土資料刊行会、1976）。
- 西野影四郎『ラフカディオ・ハーン 小泉八雲と日本』（伊勢新聞社、2009）。
- 西山松之助『くるわ』（至文堂、1963）。
- 西山松之助編『遊女（日本史小百科）』（東京堂出版、1994）。
- 沼波武夫『大津事件の烈女畠山勇子』（斯文書院、1926）。
- イザベラ・バード、時岡敬子訳『イザベラ・バードの日本紀行（上）』（講談社、2008）。

- ヘレン・バーナム編『ボストン美術館 華麗なるジャポニスム展—印象派を魅了した日本の美—』(NHK、2014)。
- 萩原朔太郎『ちくま日本文学全典 18 萩原朔太郎』(筑摩書房、1991)。
- 長谷川洋二『小泉八雲の妻』(松江今井書店、1990)。
- 長谷川洋二『八雲の妻—小泉セツの生涯』(今井書店、2014)。
- 花田富二夫 他『假名草子集成〈第46巻〉諸国百物語・新著聞集』(東京堂出版、2010)。
- 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(彩流社、2005)。
- 早川智美『金鰲新話—訳注と研究』(和泉書院、2009)。
- 原田伴彦『日本女性史』(河出書房新社、1965)。
- 坂東浩司『詳述年表 ラフカディオ・ハーン伝』(英潮社、1998)。
- 樋口清之『恋文から見た日本女性史』(講談社、1965)。
- 平川祐弘『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解』(新潮社、1987)。
- 平川祐弘『小泉八雲とカミガミの世界』(文藝春秋、1988)。
- 平川祐弘『異文化を生きた人々 叢書比較文学比較文化 2』(中央公論社、1993)。
- 平川祐弘『小泉八雲事典』(恒文社、2000)。
- 平川祐弘、牧野陽子『講座 小泉八雲〈1〉ハーンの人と周辺』(新曜社、2009)。
- 平川祐弘、牧野陽子『講座 小泉八雲〈2〉ハーンの文学世界』(新曜社、2009)。
- 広瀬朝光『小泉八雲論—研究と資料—』(笠間書院、1976)。
- フィッセル、庄司 三男訳、沼田 次郎訳『日本風俗備考 2』(平凡社、1978)。
- アリス・メイベル ベーコン『明治日本の女たち』(みすず書房、2003)。
- 前田愛『都市空間のなかの文学』(筑摩書房、1992)。
- 牧野陽子『ラフカディオ・ハーン—異文化体験の果てに』(中央公論社、1992)。
- E・S・モース、石川 欣一訳『日本その日その日 (1)』(平凡社、1971)。
- 森下みさ子『江戸の花嫁—婿えらびとブライダル』(中央公論社、1992)。
- 藪田貫、柳谷慶子編『〈江戸〉の人と身分 4 身分のなかの女性』(吉川弘文館、2010)。
- 山本志乃『女の旅—幕末維新から明治期の11人』(中央公論新社、2012)。
- 山本博文『徳川将軍家の結婚』(文藝春秋、2005)。
- 湯沢雍彦『明治の結婚 明治の離婚—家庭内ジェンダーの原点』(角川学芸出版、2005)。
- 由良弥生『大奥のおきて:「女人版図」しきたりの謎』(阪急コミュニケーションズ、2007)。
- 由良弥生『大奥よろず草紙』(原書房、2003)。

吉川弘之『結婚（東京大学公開講座）』（東京大学公開講座東京大学出版会、1995）。

劉岸偉『小泉八雲と近代中国』（岩波書店、2004）。

アラン・ローゼン西川 盛雄『ラフカディオ・ハーンの英作文教育』（弦書房、2011）。

ピエール・ロチ作、野上豊一郎訳『お菊さん』（岩波書店、1988）。

ジョン・ルーサー・ロング、古崎博訳『原作蝶々夫人』（鎮西学院長崎ウエスレヤン短期大学、1981）。

脇田晴子編、林玲子編、永原和子編『日本女性史』（吉川弘文館、1987）。

渡辺信一郎『江戸のおしゃべり一川柳にみる男と女』（平凡社、2000）。

### 3. 論文及び学術誌

青木健「＜家庭の天使＞像と＜ニュー・ウーマン＞の狭間で：ヴィクトリア朝の女子教育論」『Seijo English monographs (36)』（Seijo University、2003）

安藤義郎「オノト・ワタンナの作品--"The Wooing of Wistaria"について-2-」『経済集志 42』（日本大学経済学研究会、1972）

鶴木奎治郎「ハーンの『赤い婚礼』とホーソーンの『ラパチーニの娘』」『へるん 11号』（八雲会、1974）

遠藤文彦「『珍妙さ』の美学：『マダム・クリザンテーム（お菊さん）』試論」『長崎大学教養部紀要 人文科学篇 37』（長崎大学、1996）

大澤隆幸「雪女はどこから来たか」『国際関係・比較文化研究 4(1)』（静岡県立大学、2005）

岡村多希子「京都、末慶寺所蔵 W. de Moraes 書簡について As Cartas de W de Moraes Guardadas em Makkeiji, Kyoto」『東京外国語大学論集第 46 号』（東京外国語大学、1993）

門田守「ラフカディオ・ハーンと繋がり意識—『怪談』における再話の方法について—」『奈良教育大学紀要第 53 巻第 1 号』（奈良教育大学、2004）

門田守「『和解』における再話の方法—ラフカディオ・ハーンが望んだ夫婦愛の姿—」『奈良教育大学紀要第 54 巻第 1 号』（奈良教育大学、2005）

金沢朱美「『ヘルンさん言葉』再考—その特質とピジン性の検証」『日本語と日本文学 36』（筑波大学国語国文学会、2003）

金沢朱美「『ヘルンさん言葉』における小泉セツの調整日本語—書簡におけるフォリナー・ライティングならびに口述筆記録に残るフォリナー・トーク」『小出記念日本語教育研究会

- 論文集 14』(小出記念日本語教育研究会、2006)
- 河島弘美「女神との心中—『赤い婚礼』のおよしとハーシー—」『比較文学研究』47号(東大比較文学會、1985)
- 姜尚中「東洋(オリエント)の発見とオリエンタリズム」(『現代思想』vol.23-03、青土社、1995)
- 北川八十四「Lafcadio Hearnの美学と『雪女』:その心性の在処」『サピエンチア:英知大学論叢 32』(聖トマス大学、1998)
- Nina H. Kennard. (2009). Lafcadio Hearn. In: Junko Umemoto. Early Biographical Sources on Lafcadio Hearn, 26: Edition Synapse.
- 塩川浩子「その頃ムスメは……—ロチのお菊さんとその姉妹たち—」『共同研究日本の近代化と女性』(共立女子大学総合文化研究所、1998)
- 仙北谷晃一「ラフカディオ・ハーンと浦島伝説—「夏の日の夢」の幻」『比較文学研究 (30)』(恒文社、1976)
- 高成玲子「ラフカディオ・ハーシーの『赤い婚礼』について—何故、赤い婚礼なのか—」『英学史研究 (30)』(日本英学史学会、1997)
- 塚本章子「樋口一葉における母と娘:『にぎりえ』、『お力』と『お初』の間に横たわる葛藤」『甲南大學紀要 文学編 162』(甲南大学文学部、2012)
- 寺田光徳「ピエール・ロチの見た非西洋世界—フランス・コロニアリズム期文学における—」伊藤洋典編『「近代」と「他者」』(成文堂、2006)
- 遠田勝「辺見じゅん『十六人谷』伝説と『雪女』—『人に息を吹きかけ殺す』モチーフと民話の語りにおける伝統の創出(その一)』『近代 107』(神戸大学、2012)
- 内藤高「音としての日本: ピエール・ロチ『お菊さん』を手掛りとして」『同志社外国文学研究 64』(同志社大学、1992)
- 中川智視「ある『西洋の』保守主義者: ラフカディオ・ハーシーと一九世紀のアメリカ」『言語社会 2』(一橋大学、2008)
- 長谷川公司「ラフカディオ・ハーシーの異国趣味」『へるん 第6号』(八雲会、1968)
- 平川祐弘「小泉八雲の民話『雪女』と西川満の民話『蜆の女』の里帰り—グローバルイゼーションとクレオリゼーションのはざまから」『比較文学 44』(日本比較文学会、2001)
- 布川弘「宮島の遊郭」『日本研究 特集号 (1)』(日本研究会、2001)
- 藤原義之「『赤い婚礼』—女性の執念について」『へるん第34号』(八雲会、1997)

牧野陽子「ラフカディオ・ハーン『雪女』について」『成城大學經濟研究 (105)』(成城大学、1989)

牧野陽子「『雪女』の“伝承”をめぐって：口碑と文学作品」『成城大學經濟研究 201』(成城大学、2013)

カバ メレキ「ピエール・ロチ『お菊さん』のジャポニスム：一八八七年フランス語版挿絵における日本女性を考える」『文学研究論集(26)』（筑波大学比較・理論文学会、2008）

### 3. 新聞・雑誌、インターネット資料

『東京日日新聞』（1891年5月24日付）

『東京日日』（明治24年5月24日付）

『Japan Weekly Mail』（1891年2月28日付）「Suicide on Railway」

Cullen Murphy (1994) 「A History of The Atlantic Monthly」

<http://www.theatlantic.com/past/docs/about/atlhistf.htm> (2015年12月8日閲覧)。

## 初出一覧

本論文は、以下の既発表あるいは発表予定の小論文によって成ったものである。ただし、発表したものに基づいて修正・加筆を行った。

## 序章 ラフカディオ・ハーンと女性、そして日本

- ・「ハーンと日本の原風景—松江—」『外国文学 62 号』（宇都宮大学外国文学研究会、2013）
- ・「ラフカディオ・ハーンとセツ、そして再話—原風景としての松江—」『比較文化研究 111 号』（日本比較文化学会、2014）

## 第 I 部 ジャポニスム文学への挑戦

第一章 国のための自害、〈勇子〉—異国趣味の投影— 書き下ろし

第二章 鉄道での心中—〈およし〉と〈太郎〉の初恋— 書き下ろし

第三章 ジャポニスム文学への挑戦—遊女〈君子〉の物語—

- ・「ジャポニスム文学への挑戦—ラフカディオ・ハーン『きみ子』を手がかりとして—」『宇都宮大学国際学部研究論集第 41 号』（宇都宮大学国際学部）掲載予定

## 第 II 部 新しい女性像の発信

第四章 娘と孝—「蠅のはなし」（1902）、「雉子のはなし」（1902）—

- ・「ラフカディオ・ハーンとセツ、そして再話：原風景としての松江」『比較文化研究 第 111 号』（日本比較文化学会、2014）
- ・「『孝』に生きる女性たち—『蠅のはなし』、『雉子のはなし』を手がかりとして—」『宇都宮大学国際学部研究論集第 39 号』（宇都宮大学国際学部、2015）

第五章 貞淑な妻、慈悲深い母としての女性

—「葬られたる秘密」（1904）「紫雲たな引密夫の玉章」—

- ・「ラフカディオ・ハーンと再話、そして女性—『葬られたる秘密』と『紫雲たな引密夫の玉章』を手がかりとして—」『比較文化研究 117 号』（日本比較文化学会、2015）

第六章 静かなる抹殺と転生—「お貞のはなし」（1904）、「怨魂借体」— 書き下ろし

第七章 男の裏切りへの復讐—「和解」（1900）の裏面にあるもの— 書き下ろし

第八章 武家社会にうずまく嫉妬

- ・「描かれた近代以前の女性と嫉妬—『破られた約束』をてがかりとして—」『宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター年報 第 7 号』（宇都宮大学国際学部多文化公共圏センター、2015）

## 付録

### 1. 再話作品英語原文

第一章	「勇子—ひとつの追憶—」『東の国から』（1895）
	<i>Yuko : A REMINISCENCE</i>
	<i>Out of the east : reveries and studies in new Japan</i>
	Hearn, Lafcadio. 1895. <i>Out of the east : reveries and studies in new Japan.</i> Boston : Houghton, Mifflin and Co. ; Cambridge : Riverside Press

#### 原文[1]

Far away in Kanagawa, in the dwelling of a wealthy family, there is a young girl, a serving-maid, named Yuko, a samurai name of other days, signifying “valiant.” [...]

How and why no Western mind could fully know. Her being is ruled by emotions and by impulses of which we can guess the nature only in the vaguest possible way. Something of the soul of a good Japanese girl we can know. [...] Innocence also, unsusceptible of taint-that whose Buddhist symbol is the lotus-flower. Sensitiveness likewise, delicate as the earliest snow of plum-blossoms. Fine scorn of death is there-her samurai inheritance- hidden under a gentleness soft as music.

#### 原文[2]

In the night she thinks; asks herself questions which the dead answer for her. “What can I give that the sorrow of the August may cease?” “Thyself,” respond voices without sound. “But can I?” she queries wonderingly. “Thou hast no living parent,” thy reply; “neither does it belong to thee to make the offerings. Be thou our sacrifice. To give life for the August One is the highest duty, the highest joy.” “And in what place?” she asks. “Saikyō,” answer the silent voices; “in the gateway of those who by ancient custom should have died.” [...]

But first she will greet her kindred, somewhere in shadowy halls awaiting her coming to say to her: “*Thou hast done well, -like a daughter of samurai. Enter, child! because of thee to-night we sup with the Gods!*”

#### 原文[3]

But these, and many other feelings, are supremely dominated by one emotion impossible to express in any Western tongue-something for which the word “loyalty” were an utterly dead rendering, something akin rather to that which we call mystical exaltation: a sense of uttermost reverence and devotion to the Tenshi-Sama. Now this is

much more than any individual feeling. It is the moral power and will undying of a ghostly multitude whose procession stretches back out of her life into the absolute night of forgotten time. She herself is but a spirit-chamber, haunted by a past utterly unlike our own, -a past in which, through centuries uncounted, all lived and felt and thought as one, in ways which never were as our ways.

原文[4]

Then, according to ancient rule, she takes off her long under-girdle of strong soft silk, and with it binds her robes tightly about her, making the know just above her knees. For no matter what might happen in the instant of blind agony, the daughter of a samurai must be found in death with limbs decently composed. And then, with steady precision, she makes in her throat a gash, out of which the blood leaps in a pulsing jet. A samurai girl does not blunder in these matters: she knows the place of the arteries and the veins.

第二章	「赤い婚礼」『東の国から』(1895)
	<i><b>THE RED BRIDAL</b></i>
	<i><b>Out of the east : reveries and studies in new Japan</b></i>
	Hearn, Lafcadio. 1895. <i>Out of the east : reveries and studies in new Japan.</i> Boston : Houghton, Mifflin and Co. ; Cambridge : Riverside Press

原文[5]

Suddenly a hand was laid upon his shoulder; a sweet voice was speaking to him; and turning his head, he found himself looking into the most caressing pair of eyes he had ever seen, -the eyes of a little girl about a year older than he.

“What is it?” she asked him tenderly.

Tarō sobbed and snuffled helplessly for a moment, before he could answer: “I am very unhappy here. I want to go home.”

“Why?” questioned the girl, slipping an arm about his neck.

“They all hate me; they will not speak to me or play with me.”

“Oh no!” said the girl. “Nobody dislikes you at all. It is only because you are a stranger. When I first went to school, last year, it was just the same with me. You must not fret.”

“But all the others are playing; and I must sit in here,” protested Tarō.

“Oh no, you must not. You must come and play with me. I will be your playfellow. Come!”

Tarō at once began to cry out loud. Self-pity and gratitude and the delight of

newfound sympathy filled his little heart so full that really could not help it. It was so nice to be petted for crying.

But the girl only laughed, and led him out of the room quickly, because the little mother soul in her divined the whole situation. "Of course you may cry, if you wish," she said; "but you must play, too!" And oh, what a delightful play they played together!

#### 原文[6]

At Tarō's house the playmates ate the promised cake together; and O-Yoshi mischievously asked, mimicking the master's severity, "Uchida Tarō, do you like cake better than *me*?"

#### 原文[7]

Another minute, and the low roar rushed to their ears, and they knew it was time. They stepped back to the track again, turned, wound their arms about each other, and lay down cheek to cheek, very softly and quickly, straight across the inside rail, already ringing like an anvil to the vibration of the hurrying pressure.

The boy smiled. The girl, tightening her arms about his neck, spoke in his ear:-

"For the time of two lives, and of three, I am your wife; you are my husband, Tarō Sama."

Tarō said nothing, because almost at the same instant, notwithstanding frantic attempts to halt a fast train without airbrakes in a distance of little more than a hundred yards, the wheels passed through both, cutting evenly, like enormous shears.

#### 原文[8]

At first the girl turned white as death. But in another moment she blushed, smiled, bowed down, and agreeably astonished the Miyahara by announcing, in the formal language of filial piety, her readiness to obey the will of her parents in all things. There was no further appearance even of secret dissatisfaction in her manner; and O-Tama was so pleased that she took her into confidence, and told her something of the comedy of the negotiations, and the full extent of the sacrifices which Okazaki had been compelled to make. Furthermore, in addition to such trite consolations as are always offered to a young girl betrothed without her own consent to an old man, Tama gave her some really priceless advice how to manage Okazaki. Tarō's name was not even once mentioned. For the advice O-Yoshi dutifully thanked her step-mother, with graceful prostrations. It was certainly admirable advice. Almost any intelligent peasant girl, fully instructed by such a teacher as O-Tama, might have been able to support existence

with Okazaki.

The light in her eyes completely deceived O-Tama, who detected only a manifestation of satisfied feeling, and imagined the feeling due to a sudden perception of advantages to be gained by a rich marriage.

#### 原文[9]

She had clearly read in O-Yoshi's character all that could be read by one not of a superior caste [...] But there were other qualities in O-Yoshi that she had never clearly perceived, -a profound though well-controlled sensitiveness to moral wrong, an unconquerable self-respect, and a latent reserve of will power that could triumph over any physical pain. [...] her samurai blood told her that;

#### 原文[10]

The first was a shock of horror accompanying the full recognition of the absolute moral insensibility of her step-mother, the utter hopelessness of any protest, the virtual sale of her person to that hideous old man for the sole motive of unnecessary gain, the cruelty and the shame of the transaction. But almost as quickly there rushed to her consciousness an equally complete sense of the need of courage and strength to face the worst, and of subtlety to cope with strong cunning. It was then she smiled. And as she smiled, her young will became steel, of the sort that severs iron without turning edge. She knew at once exactly what to do, -her samurai blood told her that;

#### 原文[11]

She was a strong disbeliever in all the old ideas about character distinctions between samurai and heimin. She considered there had never been any differences between the military and the agricultural classes, except such differences of rank as laws and customs had established; and these had been bad. Laws and customs, she thought, had resulted in making all people of the former samurai class more or less helpless and foolish; and secretly she despised all shizoku. [...] She did not consider it an advantage for O-Yoshi to have had a samurai mother: she attributed the girl's delicacy to that cause, and thought her descent a misfortune.

#### 原文[12]

Her plan of campaign was not complicated, but it was founded upon a deep instinctive knowledge of the uglier side of human nature; and she felt sure of success. Promises were for fools; legal contracts involving conditions were traps for the simple.

### 原文[13]

O-Tama was really a very clever woman. She had never made any serious mistakes. She was ont of those excellently organized beings who succeed in life by the perfect ease with which they exploit inferior natures.

第三章	「きみ子」『心』(1896)
	<i>KIMIKO</i>
	<i>KOKORO</i>
	Hearn, Lafcadio. 1896. <i>Kokoro : hints and echoes of Japanese inner life.</i> Boston : Houghton, Mifflin and Co. ; Cambridge : Riverside Press

### 原文[14]

Before she took a professional name, her name was Ai, which, written with the proper character, means love. Written with another character the same word-sound signifies grief. The story of Ai was a story of both grief and love. [...]

She had been nicely brought up. As a child she had been sent to a private schoolkept by an old samurai [...]

Afterwards she attended an elementary public school. The first “modern”text-books had just been issued, -containing Japanese translations of English, German, and French stories about honor and duty and heroism, excellently chosen, and illustrated with tiny innocent pictures of Western people in costumes never of this world.

### 原文[15]

For it was remembered that the father of Ai’s father had been buried with his sword, the gift of a daimyō; and that the mountings of the weapon were of gold. So the grave was opened, and the grand hilt of curious workmanship exchanged for a common one, and the ornaments of the lacquered sheath removed. But the good blade was not taken, because the warrior might need it. Ai saw his face as he sat erect in the great red-clay urn which served in lieu of coffin to the samurai of high rank when buried by the ancient rite. His features were still recognizable after all those years of sepulture; and he seemed to nod a grim assent to what had been done as his sword was given back to him.

### 原文[16]

But she was not particularly merciful to that class of youth who sing documents with their own blood, and ask a dancing-girl to cut off the extreme end of the little finger of

her left hand as a pledge of eternal affection. She was mischievous enough with them to cure them of their folly. Some rich folks who offered her lands and houses on condition of owing her, body and soul, found her less merciful. One proved generous enough to purchase her freedom unconditionally, at a price which made Kimika a rich woman; and Kimiko was grateful, -but she remained a geisha. She managed her rebuffs with too much tact to excite hate, and knew how to heal despairs in most cases.

#### 原文[17]

She had actually said good-by to Kimika, and had gone away with somebody able to give her all the pretty dresses she could wish for, -somebody eager to give her social position also, and to silence gossip about her naughty past, -somebody willing to die for her ten times over, and already half-dead for love of her. Kimika said that a fool had tried to kill himself because of Kimiko, and that Kimiko had taken pity on him, and nursed him back to foolishness. [...] And she added, with not unselfish tears, that Kimiko would never come back to her: it was a case of love on both sides for the time of several existences.

Nevertheless, Kimika was only half right. She was very shrewd indeed; but she had never been able to see into certain private chambers in the soul of Kimiko. If she could have seen, she would have screamed for astonishment.

#### 原文[18]

But what she had foretold came true: -for time dries all tears and quiets all longing; [...] The lover of Kimiko became wiser; and there was found for him a very sweet person for wife, who gave him a son. And other years passed; and there was happiness in the fairy -home where Kimiko had once been.

There came to that home one morning, as if seeking alms, a traveling nun [...] Then she thanked him, and asked: -“Now will you say again for me the little word which I prayed you to tell your honored father?” And the child lisped: -“Father, one whom you will never see again in this world, says that her heart is glad because she has seen your son.”

The nun laughed softly, and caressed him again, and passed away swiftly [...]

But the father's eyes dimmed as he heard the words, and he wept over his boy. For he, and only he, knew who had been at the gate, -and the sacrificial meaning of all that had been hidden. [...]

He knows that the space between sun and sun is less than the space between himself and the woman who loved him.

第四章	「蠅のはなし」『骨董』（1902）
	<i>Story of a Fly</i>
	<i>Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs</i>
	Hearn, Lafcadio. 1902. <i>Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs.</i> New York : The Macmillan Company ; London : Macmillan & Co., ltd

#### 原文[19]

But she never cared to dress nicely, like other girls; and whenever she had a holiday she would go out in her working-dress, notwithstanding that she had been given several pretty robes. After she had been in the service of Kyūbei for about five years, he one day asked her why she never took any pains to look neat.

Tama blushed at the reproach implied by this question, and answered respectfully; - “When my parents died, I was a very little girl; and, as they had no other child, it became my duty to have the Buddhist services performed on their behalf. At that time I could not obtain the means to do so; but I resolved to have their *ihai* [mortuary tablets] placed in the temple called Jōrakuji, and to have the rites performed, so soon as I could earn the money required. And in order to fulfill this resolve I have tried to be saved of my money and my clothes; - perhaps I have been too saving, as you have found me negligent of my person. But I have already been able to put by about one hundred *momme* of silver for the purpose which I have mentioned; and hereafter I will try to appear before you looking neat. So I beg that you will kindly excuse my past negligence and rudeness.”

Kyūbei was touched by this simple confession; and he spoke to the girl kindly, - assuring her that she might consider herself at liberty thenceforth to dress as she pleased, and commending her filial piety.

#### 原文[20]

Kyūbei’s wife thought this a strange thing. “I wonder,” she said, “if it is Tama.” [For the dead - particularly those who pass to the state of Gaki - sometimes return in the form of insects.] Kyūbei laughed, and made answer, “Perhaps we can find out by making it.” He caught the fly, and slightly nicked the tips of its wings with a pair of scissors, - after which he carried it to a considerable distance from the house and let it go.

#### 原文[21]

The fly annoyed Kyūbeiso persistently that he took the trouble to catch it, and put it out of the house, - being careful the while to injure it in no way; for he was a devout

Buddhist.

#### 原文[22]

“I think it is Tama,” he said. “She wants something; -but what does she want?”

The wife responded:-

“I have still thirty *mommé* of her savings. Perhaps she wants us to pay that money to the temple, for a Buddhist service on behalf of her spirit. Tama was always very anxious about her next birth.”

As she spoke, the fly fell from the paper window on which it had been resting. Kyūbei picked it up, and found that it was dead.

第四章	「雉子のはなし」『骨董』（1902）
	<i>Story of a Pheasant</i>
	<i>Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs</i>
	Hearn, Lafcadio. 1902. <i>Kotto : being Japanese curios, with sundry cobwebs.</i> New York : The Macmillan Company ; London : Macmillan & Co., ltd

#### 原文[23]

In the Tōyama district of the province of Bishū, there formerly lived a young farmer and his wife. Their farm was situated in a lonely place, among the hills.

One night the wife dreamed that her father-in-law, who had died some years before, came to her and said, “*To-morrow I shall be in great danger: try to save me if you can!*” [...]

After breakfast, the husband went to the fields; but the wife remained at her loom. Presently she was startled by a great shouting outside. She went to the door, and saw the Jitō of the district, with a hunting party, approaching the farm. While she stood watching them, a pheasant ran by her into the house; and she suddenly remembered her dream. “Perhaps it is my father-in-law,” she thought to herself: “I must try to save it!” Then, hurrying in after the bird, -a fine male pheasant, -she caught it without any difficulty, put it into the empty rice-pot, and covered the pot with the lid.

A moment later some of the Jitō’s followers entered, and asked her whether she had seen a pheasant. She answered boldly that she had not; but one of the hunters declared that he had seen the bird run into the house. So the party searched for it, peeping into every nook and corner; but nobody thought of looking into the rice-pot. After looking everywhere else to no purpose, the men decided that the bird must have escaped through some hole; and they went away.

#### 原文[24]

When the farmer came home his wife told him about the pheasant, which she had left in the rice-pot, so that he might see it. "When I caught it," she said, "it did not struggle in the least; and it remained very quiet in the pot. I really think that it is father-in-law." The farmer went to the pot, lifted the lid, and took out the bird. It remained still in his hands, as if tame, and looked at him as if accustomed to his presence. One of its eyes was blind. "Father was blind of one eye," the farmer said, "the right eye; and the right eye of this bird is blind. Really, I think it is father. See! it looks at us just as father used to do!...Poor father must have thought to himself, 'Now that I am a bird, better to give my body to my children for food than to let the hunters have it' ..." And that explains your dream of last night," he added, -turning to his wife with an evil smile as he wrung the pheasant's neck.

#### 原文[25]

At the sight of that brutal act, the woman screamed, and cried out:-

"Oh, you wicked man! Oh, you devil! Only a man with the heart of a devil could do what you have done!... And I would rather die than continue to be the wife of such a man!"

And she sprang to the door, without waiting even to put on her sandals. He caught her sleeve as she leaped; but she broke away from him, and ran out, sobbing as she ran. And she ceased not to run, barefooted, till she reached the town, when she hastened directly to the residence of the Jitō. Then, with many tears, she told the Jitō everything: her dream of the night before the hunting, and how she had hidden the pheasant in order to save it, and how her husband had mocked her, and had killed it.

The Jitō spoke to her kindly, and gave orders that she should be well cared for; but he commanded his officers to seize her husband.

Next day the farmer was brought up for judgment; and, after he had been made to confess the truth concerning the killing of the pheasant, sentence was pronounced. The Jitō said to him:-

"Only a person of evil heart could have acted as you have acted; and the presence of so perverse a being is a misfortune to the community in which he happens to reside. The people under Our jurisdiction are people who respect the sentiment of filial piety; and among them you cannot be suffered to live."

So the farmer was banished from the district, and forbidden ever to return to it on pain of death. But to the woman the Jito made a donation of land; and at a later time he caused her to be provided with a good husband.

第五章	「葬られたる秘密」『怪談』（1904）
	<i>A DEAD SECRET</i>
	<i>Kwaidan : stories and studies of strange things</i>
	Hearn, Lafcadio. 1904. <i>Kwaidan : stories and studies of strange things</i> . Boston ; New York : Houghton, Mifflin and Company

原文[26]

A long time ago, in the province of Tamba, there lived a rich merchant named Inamura Gensuke. He had a daughter called O-Sono. As she was very clever and pretty, he thought it would be a pity to let her grow up with only such teaching as the country-teachers could give her: so he sent her, in care of some trusty attendants, to Kyōto, that she might be trained in the polite accomplishments taught to the ladies of the capital. After she had thus been educated, she was married to a friend of her father's family-a merchant named Nagaraya;-and she lived happily with him for nearly four years. They had one child, -a boy.

原文[27]

But O-Sono fell ill and died, in the fourth year after her marriage.

On the night after the funeral of O-Sono, her little son said that his mamma had come back, and was in the room upstairs. She had smiled at him, but would not talk to him: so he became afraid, and ran away. [...] She appeared as if standing in front of a *tansu*, or chest of drawers, that still contained her ornaments and her wearing-apparel. [...]

It was agreed that this should be done as soon as possible. So on the following morning the drawers were emptied; and all of O-Sono's ornaments and dresses were taken to the temple. But she came back the next night, and looked at the *tansu* as before. And she came back also on the night following, and the night after that, and every night; -and the house became a house of fear.

The mother of O-Sono's husband then went to the parish-temple, and told the chief priest all that had happened, and asked for ghostly counsel. [...] "Well," said Daigen Oshō, "to-night I shall go to your house, and keep watch in that room, and see what can be done. You must give orders that no person shall enter the room while I am watching, unless I call." [...]

Then the figure of O-sono suddenly outlined itself in front of the *tansu*. Her face had a wistful look; and she kept her eyes fixed upon the *tansu*. "I have come here in order to help you. Perhaps in that *tansu* there is something about which you have reason to feel anxious. Shall I try to find it for you?" The shadow appeared to give assent by a slight

motion of the head; [...] But under the lining of the lowermost drawer he found a letter. “Is this the thing about which you have been troubled?” he asked. The shadow of the woman turned toward him, her faint gaze fixed upon the letter. “Shall I burn it for you?” he asked. She bowed before him. “It shall be burned in the temple this very morning,” he promised; “and no one shall read it, except myself.” The figure smiled and vanished. [...]

The letter was burned. It was a love-letter written to O-Sono in the time of her studies at Kyōto. But the priest alone knew what was in it; and the secret died with him.

第六章	「お貞のはなし」『怪談』（1904）
	<i>THE STORY OF O-TEI</i>
	<i>Kwaidan : stories and studies of strange things</i>
	Hearn, Lafcadio. 1904. <i>Kwaidan : stories and studies of strange things.</i> Boston ; New York : Houghton, Mifflin and Company

#### 原文[28]

“Nagao-sama, my betrothed, we were promised to each other from the time of our childhood; and we were to have been married at the end of this year. But now I am going to die [...] and I want you to promise that you will not grieve... Besides, I want to tell you that I think we shall meet again.”... [...]

“I meant not the Pure Land. I believe that we are destined to meet again in this world, although I shall be buried to-morrow.”

Nagao looked at her wonderingly, and saw her smile at his wonder. She continued, in her gentle, dreamy voice,--

“Yes, I mean in this world, in your own present life, Nagao-sama... Providing, indeed, that you wish it. Only, for this thing to happen, I must again be born a girl, and grow up to womanhood. So you would have to wait. Fifteen- sixteen years: that is a long time... But, my promised husband, you are now only nineteen years old.”...

Eager to soothe her dying moments, he answered tenderly:-

“To wait for you, my betrothed, were no less a joy than a duty. We are pledged to each other for the time of seven existences.” [...]

“Only the Gods and the Buddhas know how and where we shall meet. But I am sure- very, very sure- that, if you be not unwilling to receive me, I shall be able to come back to you... Remember these words of mine.”...

She ceased to speak; and her eyes closed. She was dead.

### 原文[29]

Nagao had been sincerely attached to O-Tei; and his grief was deep. He had a mortuary tablet made, inscribed with her *zokumyō*, and he placed the tablet in his *butsudan*, and every day set offerings before it. He thought a great deal about the strange things that O-Tei had said to him just before her death; and, in the hope of pleasing her spirit, he wrote a solemn promise to wed her if she could ever return to him in another body. This written promise he sealed with his seal, and placed in the *butsudan* beside the mortuary tablet of O-Tei.

Nevertheless, as Nagao was an only son, it was necessary that he should marry. He soon found himself obliged to yield to the wishes of his family, and to accept a wife of his father's choosing. After his marriage he continued to set offerings before the tablet of O-Tei; and he never failed to remember her with affection. But by degrees her image became dim in his memory, -like a dream that is hard to recall. And the years went by.

### 原文[30]

During those years many misfortunes came upon him. He lost his parents by death, -then his wife and his only child. So that he found himself alone in the world.

### 原文[31]

Immediately, -and in the unforgotten voice of the dead, -she thus made answer:-

“My name is O-Tei; and you are Nagao Chōsei of Echigo, my promised husband. Seventeen years ago, I died in Niigata: then you made in writing a promise to marry me if ever I could come back to this world in the body of a woman; -and you sealed that written promise with your seal, and put it in the *butsudan*, beside the tablet inscribed with my name. And therefore I came back.”...

As she uttered these last words, she fell unconscious.

### 原文[32]

During those years many misfortunes came upon him. He lost his parents by death, -then his wife and his only child. So that he found himself alone in the world. He abandoned his desolate home, and set out upon a long journey in the hope of forgetting his sorrows.

One day, in the course of his travels, he arrived at Ikao, -a mountain-village still famed for its thermal springs, and for the beautiful scenery of its neighbourhood. In the village-inn at which he stopped, a young girl came to wait upon him; and, at the first sight of her face, he felt his heart leap as it had ever leaped before. So strangely did she

resemble O-Tei that he pinched himself to make sure that he was not dreaming.

#### 原文[33]

“I believe that we are destined to meet again in this world, -although I shall be buried to-morrow.”

“Yes, I mean in this world, -in your own present life, Nagao-sama... Providing, indeed, that you wish it. Only, for this thing to happen, I must again be born a girl, and grow up to womanhood. So you would have to wait. Fifteen- sixteen years: that is a long time... But, my promised husband, you are now only nineteen years old.”...

“But I am sure- very, very sure- that, if you be not unwilling to receive me, I shall be able to come back to you... Remember these words of mine.”...

#### 原文[34]

“My name is O-Tei; and you are Nagao Chōsei of Echigo, my promised husband. Seventeen years ago, I died in Niigata: then you made in writing a promise to marry me if ever I could come back to this world in the body of a woman; -and you sealed that written promise with your seal, and put it in the *butsudan*, beside the tablet inscribed with my name. And therefore I came back.”...

第七章	「和解」『影』（1900）
	<i>The Reconciliation</i>
	<i>Shadowings : A Japanese miscellany</i>
	Hearn, Lafcadio. 1900. <i>A Japanese miscellany</i> . Boston: Little, Brown, and company

#### 原文[35]

There was a young samurai of Kyōto who had been reduced to poverty by the ruin of his lord, and found himself obligated to leave his home, and to take service with the Governor of a distant province. Before quitting the capital, this Samurai divorced his wife, -a good and beautiful woman,-under the belief that he could better obtain promotion by another alliance. He then married the daughter of a family of some distinction, and took her with him to the district whither he had been called.

#### 原文[36]

But it was in the time of the thoughtlessness of youth, and the sharp experience of want, that the Samurai could not understand the worth of the affection so lightly cast

away. His second marriage did not prove a happy one; the character of his new wife was hard and selfish; and he soon found every cause to think with regret of Kyōto days. Then he discovered that he still loved his first wife-loved her more than he could ever love the second; and he began to feel how unjust and how thankless he had been. Gradually his repentance deepened into a remorse that left him no peace of mind. Memories of the woman he had wronged-her gentle speech, her smiles, her dainty, pretty ways, her faultless patience- continually haunted him. Sometimes in dreams he saw her at her loom, weaving as when she toiled night and day to help him during the years of their distress: more often he saw her kneeling alone in the desolate little room where he had left her, veiling her tears with her poor worn sleeve. Even in the hours of official duty, his thoughts would wander back to her: then he would ask himself how she was living, what she was doing. Something in his heart assured him that she could not accept another husband, and that she never would refuse to pardon him. And he secretly resolved to seek her out as soon as he could return to Kyōto, -then to beg her forgiveness, to take her back, to do everything that a man could do to make atonement. But the years went by.

At last the Governor's official term expired, and the Samurai was free. "Now I will go back to my dear one," he vowed to himself. "Ah, what a cruelty- what a folly to have divorced her!" He sent his second wife to her own people (she had given him no children); and hurrying to Kyōto, he went at once to seek his former companion, -not allowing himself even the time to change his travelling-garb.

### 原文[37]

The years had not changed her. Still she seemed as fair and young as in his fondest memory of her; -but sweeter than any memory there came to him the music of her voice, with its trembling of pleased wonder.

Then joyfully he took his place beside her, and told her all:-how wretched he had been without her, -how constantly he had regretted her, -how long he had hoped and planned to make amends; -caressing her the while, and asking her forgiveness over and over again. She answered him, with loving gentleness, according to his heart's desire, [...] "But even if there had been a reason for speaking of amends, this honorable visit would be ample amends; -what greater happiness than thus to see him again, though it were only for a moment?" "Only for a moment!" he answered, with a glad laugh, "say, rather, for the time of seven existences! My loved one, unless you forbid, I am coming back to live with you always- always-always! Nothing shall ever separate us again. Now I have means and friends: we need not fear poverty. To-morrow my goods will be brought here;

and we shall make this house beautiful... To-night,” [...]

They chatted far into the night: then she conducted him to a warmer room, facing south, - a room that had been their bridal chamber in former time. “Have you no one in the house to help you?” he asked, as she began to prepare the couch for him. “No,” she answered, laughing cheerfully: “I could not afford a servant; -so I have been living all alone.” “You will have plenty of servants to-morrow,” he said,

#### 原文[38]

When he awoke, the daylight was streaming through the chinks of the sliding-shutters; and he found himself, to his utter amazement, lying upon the naked boards of a moldering floor.,, Had he only dreamed a dream? No: she was there; -she slept... He bent above her, -and looked,- and shrieked; -for the sleeper had no face!.. Before him, wrapped in its grave-sheet only, lay the corpse of a woman, -a corpse so wasted that little remained save the bones, and the long black tangled hair.

.....

Slowly, -as he stood shuddering and sickening in the sun,-the icy horror yielded to a despair so intolerable, a pain so atrocious, that he clutched at the mocking shadow of a doubt. Feigning ignorance of the neighborhood, he ventured to ask his way to the house in which his wife had lived.

“There is no one in that house,” said the person questioned. “It used to belong to the wife of a Samurai who left the city several years ago. He divorced her in order to marry another woman before he went away; and she fretted a great deal, and so became sick. She had no relatives in Kyōto, and nobody to care for her; and she died in the autumn of the same year,-on the tenth day of the ninth month...”

第八章	「破られた約束」『日本雑録』（1901）
	<i>OF A PROMISE BROKEN</i>
	<i>A Japanese Miscellany</i>
	Hearn, Lafcadio. 1901. <i>A Japanese Miscellany</i> . Boston, Little, Brown, and company

#### 原文[39]

“I am not afraid to die,” said the dying wife; -“there is only one thing that troubles me now. I wish that I could know who will take my place in this house.” “My dear one,” answered the sorrowing husband, “nobody shall ever take your place in my home. I will never, never marry again.”

At the time that he said this he was speaking out of his heart; for he loved the woman whom he was about to lose.

“On the faith of a samurai?” she questioned, with a feeble smile.

“On the faith of a samurai,” he responded, -stroking the pale thin face.

“Then, my dear one,” she said, “you will let me be buried in the garden, -will you not?”- Near those plum-trees that we planted at the further end? I wanted long ago to ask this; but I thought, that if you were to marry again, you would not like to have my grave so near you. Now you have promised that no other woman shall take my place; -so I need not hesitate to speak of my wish.... I want so much to be buried in the garden! I think that in the garden I should sometimes hear your voice, and that I should still be able to see the flowers in the spring.” [...]

he said, -“under the shade of the plum-trees that we planted; -and you shall have a beautiful tomb there.”

“And will you give me a little bell?”

“Bell-?”

“Yes: I want you to put a little velle in the coffin, -such a little bell as the Buddhist pilgrims carry. Shall I have it?”

“You shall have the little bell, -and anything else that you wish.”

“I do not wish for anything else,” she said... “My dear one, you have been very good to me always. Now I can die happy.”

Then she closed her eyes and died -as easily as a tired child falls asleep. She looked beautiful when she was dead; and there was a smile upon her face.

She was buried in the garden, under the shade of the trees that she loved; and a small bell was buried with her. Above the grave was erected a handsome monument, decorated with the family crest, and bearing the kamimyō: -“Great Elder Sister, Luminous-Shadow-of-the-Plum-Flower-Chamber, dwelling in the Mansion of the Great Sea of Compassion.”

#### 原文[40]

But, within a twelve-month after the death of his wife, the relatives and friends of the samurai began to insist that he should marry again. “You are still a young man, they said, “and an only son; and you have no children. It is the duty of a samurai to marry. If you die childless, who will there be to make the offerings and to remember the ancestors?”

By many such representations he was at last persuaded to marry again. The bride was only seventeen years old; and he found that he could love her dearly,

notwithstanding the dumb reproach of the tomb in the garden.

#### 原文[41]

NOTHING took place to disturb the happiness of the young wife until the seventh day after the wedding, -when her husband was ordered to undertake certain duties requiring his presence at the castle by night. On the first evening that he was obliged to leave her alone, she felt uneasy in a way that she could not explain, -vaguely afraid without knowing why. [...]

About the Hour of the Ox she heard, outside in the night, the clanging of a bell, -a Buddhist pilgrim's bell; -and she wondered what pilgrim could be passing through the samurai quarter at such a time. Presently, after a pause, the bell sounded much nearer. [...]

-and a fear came upon her like the fear of dreams... [...] Then, lightly as a shadow steals, there glided into the room a Woman, -thought every door stood fast, and every screen unmoved, -a Woman robed in a grave-robe, and carrying a pilgrim's bell. Eyeless she came, - because she had long been dead; -and her loosened hair streamed down about her face; - and she looked without eyes through the tangle of it, and spoke without a tongue; -

*“Not in this house, -not in this house shall you stay! Here I am mistress still. You shall go; and you shall tell to none the reason of your going. If you tell HIM, I will tear your into pieces!”*

So speaking, the haunter vanished. The bride became senseless with fear. Until the dawn she so remained. [...]

On the following night, however, she could not doubt. Again, at the Hour of the Ox, the dogs began to howl and whine; -again the bell resounded, -approaching slowly from the garden; -again the listener vainly strove to rise and call; -again the dead came into the room, and hissed, -

*“You shall go; and you shall tell to no one why you must go! If you even whisper it to HIM, I will tear you in pieces!” ...*

This time the haunter came close to the couch, -and bent and muttered and mowed above it...

#### 原文[42]

Next morning, when the samurai returned from the castle, his young wife prostrated herself before him in supplication:-

“I beseech you,” she said, “to pardon my ingratitude and my great rudeness in thus addressing you: but I want to go home; I want to go away at once.”

“Are you not happy here?” he asked, in sincere surprise. “Has any one dared to be unkind to you during my absence?”

“It is not that-” she answers, sobbing.

“Everybody here has been only too good to me.... But I cannot continue to be your wife;- I must go away...” [...]

“it is very painful to know that you have had any cause for unhappiness in this house. But I cannot even imagine why you should want to go away- unless somebody has been very unkind to you... Surely you do not mean that you wish for a divorce?”

She responded, trembling and weeping,-

“If you do not give me a divorce, I shall die!” [...]

“To send you back now to your people, without any fault on your part, would seem a shameful act. If you will tell me a good reason for your wish, -any reason that will enable me to explain matters honorably,-I can write you a divorce. But unless you give me a reason, a good reason, I will not divorce you, -for the honor of our house must be kept above reproach.”

And then she felt obliged to speak; and she told him everything, -adding, in an agony of terror,-

“Now that I have let you know, she will kill me!-she will kill me!...”

Although a brave man, and little inclined to believe in phantoms, the samurai was more than startled for the moment.

#### 原文[43]

The head was nowhere to be seen;-and the hideous wound showed that it had not been cut off, but *torn off*.

The figure of the ling-buried woman, erect before her tomb,-in one hand clutching a bell, in the other the dripping head.... For a moment the three stood numbed. Then one of the men-at-arms, uttering a Buddhist invocation, drew, and struck at the shape. Instantly it crumbled down upon the soil,-an empty scattering of grave-rags, bones, and hair; -and the bell rolled clanking out of the ruin. But the fleshless right hand, though parted from the wrist, still writhed; -and its fingers still gripped at the bleeding head,- and tore, and mangled,- as the claws of the yellow crab cling fast to a fallen fruit...

原文[44]

“That is a wicked story,” I said to the friend who had related it. “The vengeance of the dead –if taken at all- should have been taken upon the man.”

“Men think so,” he made answer. “But that is not the way that a woman feels...”

He was right.

第八章	「因果話」『靈の日本にて』(1899)
	<i>INGWA-BANASHI</i> <i>In ghostly Japan</i>
	Hearn, Lafcadio. 1899. <i>In Ghostly Japan</i> . Boston: Little, Brown and Co.

原文[45]

The daimyō's wife was dying, and knew that she was dying. She had not been able to leave her bed since the early autumn of the tenth Bunsei. It was now the fourth month of the twelfth Bunsei, -the year 1829 by Western counting; and the cherry-trees were blossoming. She thought of the cherry-trees in her garden, and of the gladness of spring. She thought of her children. She thought of her husband's various concubines, -especially the Lady Yukiko, nineteen years old.

“My dear wife,” said the daimyō, “you have suffered very much for three long years. We have done all that we could to get you well, -watching beside you night and day, praying for you, and often fasting for you sake. But in spite of our loving care, and in spite of the skill of our best physicians, it would now seem that the end of your life is not far off. Probably we shall sorrow more than you will sorrow because of your having to leave what the Buddha so truly termed ‘this burning-house of the world.’ I shall order to be performed -no matter what the cost- every religious rite that can serve you in regard to your next rebirth; and all of us will pray without ceasing for you, that you may not have to wander in the Black Space, but may quickly enter Paradise, and attain to Buddha-hood.”

He spoke with the utmost tenderness, caressing her the while. Then, with eyelids closed, she answered him in a voice thin as the voice of an insect:-

“I am grateful -most grateful- for your kind words... Yes, it is true, as you say, that I have been sick for three long years, and that I have been treated with all possible care and affection... Why, indeed, should I turn away from the one true Path at the very moment of my death?... Perhaps to think of worldly matters at such a time is not right; -but I have one last request to make, -only one... Call here to me the Lady Yukiko; -you know that I love her like a sister. I want to speak to her about the affairs of this

household.”

#### 原文[46]

“You know that in the garden there is a yaé-zakura, which was brought here, the year before last, from Mount Yoshino in Yamato. I have been told that it is now in full bloom; [...] Yes, upon your back, Yukiko; -take me upon your back...”

While thus asking, her voice had gradually become clear and strong, -as if the intensity of the wish had given her new force: [...] but the lord nodded assent.

“It is her last wish in this world,” he said. “She always loved cherry-flowers; and I know that she wanted very much to see that Yamato-tree in blossom. Come, my dear Yukiko, let her have her will.”

As a nurse turns her back to a child, that the child may cling to it, Yukiko offered her shoulders to the wife, and said:-

“Lady, I am ready: please tell me how I best can help you.”

“Why, this way!” -responded the dying woman, lifting herself with an almost superhuman, effort by clinging to Yukiko’s shoulders. But as she stood erect, she quickly slipped her thin hands down over the shoulders, under the robe, and clutched the breasts of the girl, and burst into a wicked laugh.

“I have my wish!” she cried-“I have my wish for the cherry-bloom<sup>1</sup>, -but not the cherry-bloom of the garden!...I could not die before I got my wish. Now I have it!-oh, what a delight!”

And with these words she fell forward upon the crouching girl, and died.

<sup>1</sup> In Japanese poetry and proverbial phraseology, the physical beauty of a woman is compared to the cherry-flower; while feminine moral beauty is compared to the plum-flower.

#### 原文[47]

The daimyō’s wife opened her eyes, and looked at Yukiko, and spoke:-

“Ah, here is Yukiko! ... I am so pleased to see you, Yukiko! ... Come a little closer, - so that you can hear me well: I am not able to speak loud.... Yukiko, I am going to die. I hope that you will be faithful in all things to our dear lord; - for I want you to take my place when I am gone.... I hope that you will always be loved by him,-yes, even a hundred times more than I have been, -and that you will very soon be promoted to a higher rank, and become his honored wife.... And I beg of you always to cherish our dear lord: never allow another woman to rob you of his affection.... This is what I wanted to

say to you, dear Yukiko... Have you been able to understand?"

"Oh, my dear Lady," protested Yukiko, "do not, I entreat you, say such strange things to me! You well know that I am of poor and mean condition:- how could I ever dare to aspire to become the wife of our lord!"

"Nay, nay!" returned the wife, huskily, -"this is not a time for words of ceremony: let us speak only the truth to each other. After my death, you will certainly be promoted to a higher place; and I now assure you again that I wish you to become the wife of our lord- yes, I wish this, Yukiko, even more than I wish to become a Buddha!"

#### 原文[48]

The cold hands had attached themselves in some unaccountable way to the breasts of the girl, -appeared to have grown into the quick flesh. Yukiko became senseless with fear and pain.

Physicians were called. They could not understand what had taken place. By no ordinary methods could the hands of the dead woman be unfastened from the body of her victim; -they so clung that any effort to remove them brought blood. This was not because the fingers held : It was because the flesh of the palms had united itself in some inexplicable manner to the flesh of the breasts!

At that time the most skillful physician in Yedo was a foreigner,-a Dutch surgeon. It was decided to summon him. After a careful examination he said that he could not understand the case, and that for the immediate relief of Yukiko there was nothing to be done except to cut the hands from the corpse. He declared that it would be dangerous to attempt to detach them from the breasts. His advice was accepted; and the hands were amputated at the wrists. But they remained clinging to the breasts; and there they soon darkened and dried up, -like that hands of a person long dead.

Yet this was only the beginning of the horror. Withered and bloodless though they seemed, those hands were not dead. At intervals they would stir- stealthily, like great grey spiders. And nightly thereafter,-beginning always at the Hour of the Ox,- they would clutch and compress and torture. Only at the Hour of the Tiger the pain would cease.

## 2. ラフカディオ・ハーン年譜とジャポニズムの隆盛

		ラフカディオ・ハーン年譜	ジャポニズムの隆盛
1850年	0歳	6月27日、ギリシャのレフカス島で、父アイルランド出身の陸軍軍医チャールズ・ブッシュ・ハーンとギリシャ人の母、ローザ・カシマティとの間に生まれる。パトリキオ・ラフカディオ・ハーンと名付けられる。	
1851年	1歳	父が単身、西インド諸島へ赴任。母ローザと共にサンタ。モウラで暮らす。	
1852年	2歳	父の生家ダブリンに移り住む。ローザは宗教・言語・生活習慣・気候の違うダブリンで暗澹な日々を過ごす。	
1854年	4歳	父がクリミア戦争へ出征。8月、弟ジェームズが生まれる。母はハーンを大叔母ブレナンに預け、単身ギリシャへ帰国。その後ハーンがローザに会うことはない。	日本開国。日米和親条約調印。
1855年	5歳	大叔母サリー・ブレナンのもとで暮らす。	
1856年	6歳		仏の版画家ブラックモンが陶磁器の包装材に使われていた『北斎漫画』を偶然に発見。画家のマネなど友人に広めて「日本熱」が発火。
1857年	7歳	父母が離婚。父チャールズはかねて恋愛関係にあったアリシア・ポシーと再婚しインドへ赴任。	
1861年	11歳		パリの美術工芸品店に作家のゴンクール、ゾラや画家のマネ、ホイッスラーなどが足繁く通い、ジャポニズム揺籃の場となる。
1862年	12歳		第2回ロンドン万国博覧会に日本使節団が初参加。日本の美術工芸品が初めて欧州で大々的に紹介され、英の芸術家に影響を与えた。

1863年	13歳	9月、英国北東部のダラム市郊外にあるカトリック系の学校ウシヨー・カレッジ（聖カスバート校）に入学。	
1865年	15歳		ホイッスラーが着物姿の白人女性を金屏風の前に立たせた『磁器の国の姫君』をパリの官展に出品、「浮世絵のコピー」と評される。
1866年	16歳	ジャイアント・スライドという遊具で左目を強打し、失明。これに加え低身長であることがハーンの生涯のコンプレックスとなった。父がインド熱にかかり、スエズで死亡。	
1867年	17歳	10月、大叔母が破産したため、ウシヨー校を中退。	第2回パリ万国博覧会に江戸幕府、薩摩藩、鍋島藩が参加。日本の出展品は一部の愛好家に熱狂的に迎えらる。
1868年	18歳		フランス海兵11人を殺害した土佐藩士が切腹に処せられた「堺事件」は欧米でも報道され、「ハラキリ」が一躍有名になる。
1869年	19歳	単身アメリカに渡り、職を転々とする。ヘンリー・ワトキンと知り合う。	仏の批評家シュノーが講演で、衰退したフランス装飾美術の復興には日本の工芸品デザインに学ぶことが必要と説く。
1872年	22歳		仏の作曲家サン＝サーンスが日本を題材にしたコミック・オペラ『黄色い皇女』を上演。以後日本を題材にした音楽劇が大流行。
1873年	23歳		ウィーン万国博覧会に日本が国家として初めて公式参加。特に布地や型紙などテキスタイル関連の品々が人気を集める。
1874年	24歳	『シンシナティ・インクワイヤラー』紙の記者となる。	パリで第1回印象派展開催。印象派の画家達は「絵画の日本人」と呼ばれる。
1875年	25歳	黒人との混血女性、マルシア・フォリーとの同棲生活が原因で、インクワイヤラー社を解雇される。	仏の画家モネが白人女性モデルに着物を着せたジャポニズムの典型ともいえる『ラ・ジャポネーズ』を制作。
1876年	26歳	シンシナティ・コマーシャル社へ転職。東洋関係の文献をあさるようになる。ゴーチェの怪談を翻訳する。	仏の実業家ギメが日本各地を旅行。帰国後『日本散策』を著わし、術品を展示するためパリに「ギメ美術館」を創設。

1877年	27歳	シンシナティを去り、ニューオリンズへ。	英の建築家コンドルがジャポニスムに感化され、お雇い外国人として来日。日本建築界の礎を築いた他、日本文化に傾倒。
1878年	28歳	小新聞『デイリー・アイテム』紙の記者になる。	第3回パリ万国博覧会開催でパリの日本熱が最高潮に達する。「もはや流行ではなく、熱狂であり、狂気」と評された。
1880年	30歳		パリの美術商／評論家ビング来日。各地で多様な美術品を買い漁り、翌年帰国。以後欧州における“ジャポニスムの伝道者”となった。
1881年	31歳	『タイムズ・デモクラット』紙に文芸部長として迎えられる。	
1882年	32歳	シンシナティ時代に翻訳したゴーチェの『クレオパトラの一夜その他』を自費出版。エリザベス・ビスラントと知り合う。	
1884年	34歳	処女再話集『異文学遺集』出版。ニューオリンズ百年祭記念博覧会で、日本政府の事務次官・服部一三に、日本についての細かい質問をする。	
1885年	35歳		英サヴォイ劇場で日本趣味のコミック・オペラ『ミカド』が大成功。人気は欧米へ飛び火。仏に留学した高島北海が、ガラス工芸家エミール・ガレなど地元の芸術家と交流し「アール・ヌーボー」運動に影響を与える。
1886年	36歳	ハーバード・スペンサー『倫理学原理』に接し、強い影響を受ける。	オランダの画家ゴッホがパリに移住、ジャポニスムに夢中になる。浮世絵の模写から始め、独自の強烈なスタイルを作り出した。仏の雑誌『パリ・イリュストレ』が日本人美術商・林忠正の全面協力による日本美術特集を組む。
1887年	37歳	第二再話集『中国怪異集』出版。西インド諸島のマルティニーク島に行き、その後二年ほどこの島の町サン・ピエールで過ごす。	パリで作家ピエール・ロティが自身の長崎滞在経験を基にした小説『お菊さん』を出版、各地のジャポニスムを大いに刺激した。

1888年	38歳		ビングが月刊誌『芸術的な日本』をパリで創刊。英・独語版も出版され、広い地域に影響を与えた。 仏のボナールやドニラの画家達が日本美術に影響を受けた「ナビ派」を結成。ボナールは“日本かぶれのナビ”と揶揄された。
1889年	39歳	小説『チタ』出版。弟ジェームズとの文通が始まる。	独ハンブルク美術工芸博物館創設者ブリンクマンが雑誌『日本の美術と工芸』を刊行。日本を範とした工芸・装飾美術の刷新を提唱。
1890年	40歳	小説『ユーマ』出版。三月、ハーパー社の通信記者としてバンクーバーから汽船で横浜に向かい、4月4日、横浜に着く。間もなく契約を破棄し、チェンバレン等を頼り日本で仕事を探す。8月、島根県松江尋常中学校ならびに師範学校の英語教師として赴任する。12月、教頭西田千太郎の媒酌で、小泉セツと結婚。	
1891年	41歳	11月、熊本の第五高等中学校に転任。	
1892年	42歳	アトランティック・マンズリーに『知られぬ日本の面影』を連載。	
1893年	43歳	11月、長男一雄誕生。	米の建築家フランク・L・ライトがシカゴ万博で、平等院鳳凰堂を模したパビリオン「鳳凰殿」に感動し、後の作風に反映したとされる。
1894年	44歳	ハーンの日本に関する最初の著書『知られぬ日本の面影』全2巻を出版。11月、熊本での契約切れを機に『神戸クロニクル』の論説記者となり、神戸に移る。	
1895年	45歳	2月、眼病のためクロニクル社を退社。9月『東の国から』を出版。	
1896年	46歳	2月、帰化が認められ「小泉八雲」と改名。3月『心』を出版。8月、神戸を去って上京。9月、東京帝国大学にて英文科講師となる。	

1897年	47歳	2月、二男の巖誕生。3月、西田千太郎死去。9月『仏の畑の落穂』を出版。	日本美術からの影響を受け、欧州芸術の伝統からの分離を謳うクリムトなどウィーンの芸術家一派が「ウィーン分離派」を結成。
1898年	48歳	12月『異国情緒と回顧』を出版。	
1899年	49歳	9月『霊の日本』を出版。	
1900年	50歳	12月『影』出版。三男清誕生。	第5回パリ万国博覧会で米の女性舞踏家ロイ・フラーの後見を得た川上音二郎一座が公演。女優の貞奴は万博随一のスターとなった。
1901年	51歳	10月『日本雑録』出版。	
1902年	52歳	3月、西大久保の新居へ移る。『日本お伽噺』を東京で出版。10月『骨董』出版。	
1903年	53歳	1月、東京帝国大学文科学長井上哲次郎の名で、解雇通知を受ける。(後任は夏目漱石。) ハーンはこの突然の仕打ちに激怒し、学生たちによる留任運動が起るものの、大学を去る。9月、長女寿々子誕生。	貞奴人気に乗じてパリの「オー・ミカド」とう店が日本風のローブ『キモノ・サダヤッコ』を売り出し、室内着や夜会服として流行。
1904年	54歳	3月、早稲田大学文学部に出講。4月『怪談』を出版。9月26日夜、狭心症のため死去。10月『日本一つの試論』出版。	川上座のミラノ公演を視て刺激された伊の作曲家プッチーニが日本の旋律を多用したオペラ『蝶々夫人』をミラノ・スカラ座で初演。

## 謝辞

本論文執筆にあたり、終始あたたかい激励とご指導、ご鞭撻を下さいました宇都宮大学 丁貴連先生に心より感謝申し上げます。先生には、修士課程在籍中から、6年間の長きにわたりご指導を頂いた他、様々な面でお世話になりました。先生の研究・教育に対する真摯なお姿にも多くのことを学ばせて頂きました。

また、副指導教員である宇都宮大学重田康博先生、同柄木田康之先生、そして博士論文審査において、貴重なご指導、ご助言を下さいました名古屋大学日比嘉高先生、宇都宮大学渡邊直樹先生、同米山正文先生に心より感謝申し上げます。

本研究において、特に島根時代のハーンや小泉セツの調査に関して、島根大学教授長岡真吾先生、島根県立大学教授小泉凡先生、八雲会理事長内田融様の熱心なご協力と数多くのご助言なくしては不可能であったことを記すとともに、深甚の謝意を表します。

また、丁研究室の皆さんの存在が研究を進めていく上で、大きな励みとなったことをここに記すとともに、心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、これまで長い間、遠い島根の地から支え続けてくれた両親へ感謝し、本論文を捧げます。そして自らも勉学に身を削りながらも、寛大な心で常に見守り支え続けてくれた夫にも「ありがとう」の言葉を贈ります。

2016年3月

三成 清香